徳島の剣道

特集：全国中学校剣道大会
全日本高齢者武道大会

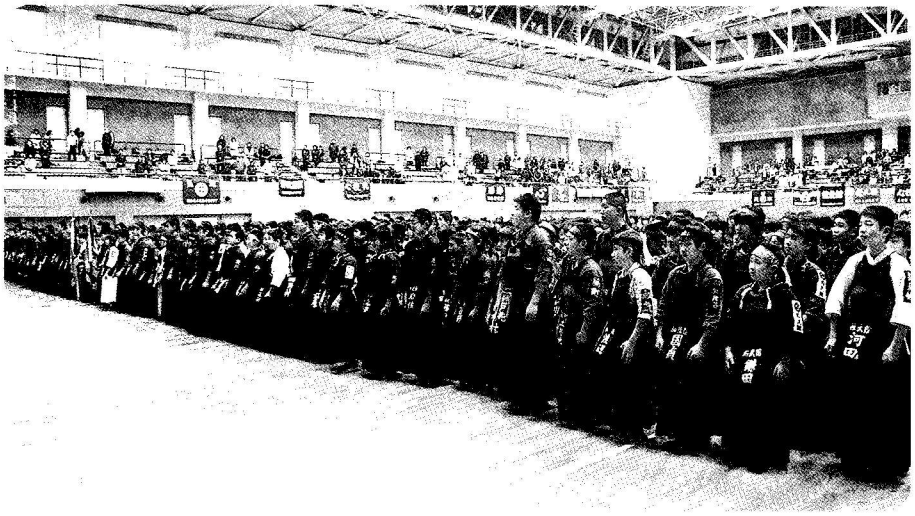
第23号

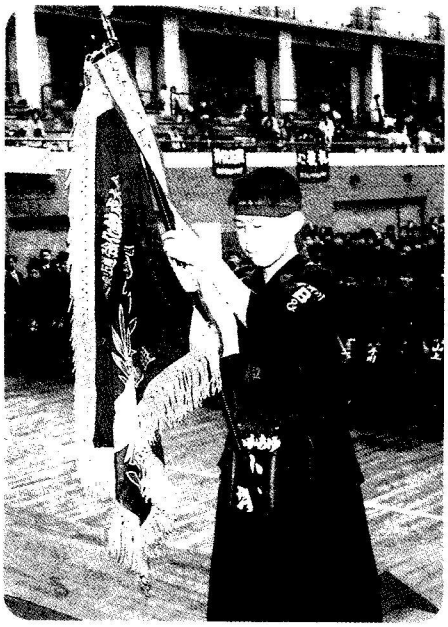
徳島県剣道連盟

第十七回県下小・中学校剣道強化錬成大会

鳴門県民体育館

平成十九年一月二十一日





表紙
題字　堀江幸夫
写真　久保隆司
さし絵　村嶋恒徳

巻頭言

『一燈照隅　万燈照国』の実践を!!

徳島県剣道連盟会長　遠藤一美

平成十八年度における我が徳島県剣道連盟の活動を振り返ると、まず、鳴門での全国中学校剣道大会における成功と男子団体での徳島文理中学校の準優勝、女子団体での阿南第一中学校の敢闘賞が光ります。また、徳島県高齢剣友会における全国大会での活躍がありました。

さらにこの「徳島の剣道二十三号」には、昨年度亡くなられた七名の先生方を偲ぶ手記が掲載されています。今日までの徳島県の剣道を支えていただいた先生方の御尽力と御苦労を思うと御冥福を祈らずにはいられない気持ちになります。

東洋思想の大家である安岡正篤先生の言葉に「一燈照隅　万燈照国」というものがあります。その言葉の原典は、天台宗の開祖最澄が比叡山の延暦寺で、若い修行僧を育てる時に指導された次のような言葉であったそうです。「国の宝とは金銀財宝のことを言うのではない。職業は何であろうと、自分の持ち場を最高に思い、そこに真心を尽くす。そういう人が何人いるかが、国が豊かであるかどうかの指標なのだ。一隅を照らす人こそが国の宝なのだ。」（神渡良平「一隅を照らす人生」ＰＨＰ研究所）徳島県の剣道を支えていただいたこれら先生方は、真に自分に与えられた場所で一隅を照らす剣道を実践されていました。まさに、徳島県剣道の宝であり、国の宝であったと思います。一隅を照らす一燈が、十、百、千、やがて万燈となった時、国をも明るく照らす存在に広がっていける剣道にならなくてはならないと強く念ずるものであります。

まずは、自分の足元の一隅をしっかり照らす剣道修行をして参りましょう!!

『徳島の剣道 第二十三号』目次

巻頭言……遠藤　一美……1

《特集一　全国中学校剣道大会》

学友に支えられた全国大会……佐藤　義則……5

第三十六回全国中学校剣道大会を終えて……中尾　誠……6

全国中学校総体を終えて……白木　洋一……8

全国中学校剣道大会の決勝戦に進出して……中山　繁輝……9

第三十六回全国中学校剣道大会

「心をひとつ」に……村井　正志……11

全国中学校剣道大会（女子第二代表）……齋　浩市……12

初の全国大会に臨んで……竹内佳代子……13

《特集二　全日本高齢者武道大会》

高齢化社会の先導役を……遠藤　一美……15

第二十八回全日本武道大会に参加して……有賀　秀敏……16

全日本高齢者武道大会で

功労者顕彰を受けて……南　充美……18

特別寄稿

第十三回世界剣道選手権大会に出場して……内田さくら……22

顕彰一覧……24

剣道有功賞

初心にかえって……細川　昭典……25

少年剣道教育奨励賞

大野小学校剣道部の歩み

（大野小学校）……西岡　侃……27

少年剣道教育奨励賞を受賞して

（誠武館道場）……大野　義則……30

体育功労賞

少年剣士と二人三脚……中村　稔裕……33

平成十八年度徳島県中学校剣道優秀選手……34

平成十八年度徳島県高等学校剣道優秀選手……35

先生を偲ぶ

寺西慶裕先生を偲んで……平野　誠司……36

亡き夫を偲んで……寺西ひとみ……38

美馬政雄先生を偲ぶ……大西　正範……40

美馬政雄先生を偲ぶ……髙下　正義……41

西山勝喜先生を偲ぶ……滝本　博文……43

兄・西山勝喜を偲んで

「不撓・不屈」……福井　軍二……46

百三才剣道範士竹原常雄先生は世界一……勝浦　守……49

一〇三才四ヶ月の反省……竹原実太郎……50

武道家中西敏治先生道場で大往生……西岡　侃……53

朝稽古の先輩土井司先生を偲んで……中山　啓男……55

大野義則先生を偲ぶ……亀田　秀雄……57

大野義則先生を偲ぶ……田中　理称……59

全国講習会報告

剣道講師要員（試合・審判）研修会に参加して……河田　清実……61
第四十一回剣道中央講習会（西日本）報告……木原　資裕……63
平成十八年度全日本剣道連盟主催
徳島県剣道（審判）講習会記録……手塚十三子……67
剣道八段研修会……米倉　滋……69
居合道中央講習会に参加して……前田　健志……71
第四十四回剣道中堅剣士講習会に参加して……久保　隆司……73
女子審判法研修会……手塚十三子……77
佐藤博信先生講習記録……手塚十三子……81
徳島での剣道（日本剣道形講習会）……次藤　洋……83
第二十三回全日本剣道連盟
社会体育指導員養成講習会……久保　隆司……84

徳島の剣道史

絵馬武道額……坂本　裕二……86

大会所感

第一回全日本都道府県対抗
少年剣道優勝大会に出場して……近藤　陽香……94
韓国社会人剣道大会……松村　和宏……95

各種大会に参加して

全国スポーツ少年団
剣道交流大会に出場して……山本　大介……96
第五十四回全日本都道府県
対抗剣道優勝大会を終えて……平野　誠司……98
全国高校選抜剣道大会に参加して……文理高校　片山　将志……99
全国高校剣道選抜大会に出場して……富岡東高校　河田　紋……100
四国高等学校選手権大会……文理高校　玉田　赳大……102
インターハイに出場して……川島高校　森本　龍毅……103
第五十三回全国高等学校総合体育大会
……富岡東高校　細川　美幸……107
全日本女子剣道選手権大会に出場して……美馬真奈美……109
東西対抗剣道大会……米倉　滋……110
第五十二回全日本東西対抗剣道大会に出場して……平野　誠司……111
第六十一回国民体育大会に参加して……六條　洋二……113
のじぎく兵庫国体に出場して……玉田　晋作……114
のじぎく兵庫国体に出場して……飯田　栄一……116
第四十一回全日本居合道大会の報告……岸田　光博……118
全日本剣道選手権大会に出場して……近藤　正章……121
第四十九回全日本実業団剣道大会に出場して……木里　健一……122
全国警察剣道大会を終えて……山室　雅幹……124
全国青年大会に参加して……横手　裕一……125
徳島県高齢県友会活動報告……高島　稔之……127
高齢剣友会員となって今決意すること……出葉　成一……132
ねんりんピックに参加して……中村　稔裕……134

随　想

亡父の教え……大澤　孝彰……136
躾の大切さ……平尾　勝美……137
自然流に活力を得たリンゴの木……三木　毅……139
生涯剣道の壁……沢井　勝之……141
良師に学ぶ……青木　茂生……143
何のために……藤本　雅史……146
日本武道館での優勝旗……山田　耕司……148

称号・段位合格者

剣道七段に合格して……本田　敦彦……149
七段に合格して……上田　宏司……151
六段に合格して……大石　雅生……153
不失花……佐野　伸治……154
称号・段位合格者一覧……156

がんばろう徳島

部活だより

徳島市立高校……本田　敦彦……161
海部高校……大石　哲生……163
池田高校……辻岡　英司……164
北井上中学校……豊田　佳男……166
阿南第二中学校……福多　博史……167
池田第一中学校……中川　浩幸……168

道場だより

小松島少剣クラブ……藤川　和枝……170
川崎少年剣道クラブ……山下　敏雄……172
少年剣道発表大会
鳴門市光武館道場……斎田　悟志……173
新人紹介
刑務所支部一年生……高橋　伊織……175
刑務所支部一年生……秋山　雄治……176
平成十八年度　大会記録……177
徳島新聞に見る戦いの跡……204
平成十九年度　昇段審査学科試験問題・解答例……233
平成十九年度　徳島県剣道連盟行事予定表……243
平成十九年度　級位・段位審査実施計画表……245
徳島県剣道連盟審査資格・審査料等……246
スポーツ安全保険案内……247
剣道行事の中止、開催などの確認の仕方……248

編集後記

特集一　全国中学校剣道大会

学友に支えられた全国大会

(財)日本中学校体育連盟
剣道競技部長　佐藤義則

平成十八年度、全国中学校体育大会・第三十六回全国中学校剣道大会は、潮流が渦巻く鳴門海峡、歴史や文化、芸術が凝縮された徳島県鳴門総合運動公園体育館で開催されました。

「夢求め！四国で輝く風となれ！」をスローガンに、各都道府県の厳しい予選を勝ち抜いた精鋭が集い熱戦が展開されました。

四国ブロック代表校、男女のかんばりが目につきました。男子団体優勝の高知明徳義塾中、惜しくも二位となった徳島文理中、女子では徳島県代表の阿南第一中・那賀川中の活躍があり大成功の大会となりました。

これもひとえに徳島県剣道連盟会長・遠藤一美様はじめとする徳島剣連のご支援・ご協力、さらには、徳島県中体連剣道部長・中尾誠（阿波中学校長）先生、徳島県中体連剣道専門委員長・白木洋一（山川中学校）先生、徳島県中体連、剣道専門部の方々の努力の積み重ねであると確信いたします。

そして、大会運営のお手伝いをいただいた、生徒役員の皆さんの心を一つにした結果ではないでしょうか。心より厚くお礼申し上げます。

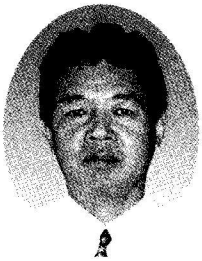
〜二拍子のリズムに魅了された阿波路の夏〜

阿波踊り、鳴門観潮、藍の館など本場の響きや色合いを満喫、いまだ興奮冷めやらず、阿波路の夏。学友が予約してくれていた桟敷席、一瞬のうちにとけ込めました。二拍子の軽快なリズムに乗って老若男女が踊る熱気に圧倒され、特に、女踊りの手さばき、下駄を履いての足さばき実に美しく、心浮き立った夏の日の思い出となりました。

（埼玉県さいたま市立与野東中学校長　剣道教士八段）

第三十六回全国中学校剣道大会を終えて

大会実行委員長　中尾　誠



徳島県中学校体育連盟、白木洋一剣道専門部長を事務局長に県下剣道関係の皆様のご協力により、三年前から準備に取り組んできました第三十六回全国中学校剣道大会徳島大会を八月十九日に成功裏に終了することができました。

「夢求め！　四国で輝く　風となれ！」を大会スローガンに全国各地の中学生剣士が潮流渦巻く鳴門に集い、熱戦を繰り広げて見る者・競技する者にすばらしい感動を与えた三日間でありました。

各都道府県より来徳した男女各四十八チーム六七二名、個人戦一九二名の選手諸君は阿波鳴門の地での健闘や交流を生涯の熱き思い出として全国に持ち帰ってくれたことと思います。

本大会の開催にあたり徳島県剣道連盟はじめ関係各位には準備の段階よりお心こもるご援助ご協力を賜りますとともに、大会運営につきましても誠心誠意ご尽力をいただきまして心より感謝をとお礼を申し上げます。また遠藤一美会長・三木毅理事長様には、お忙しい中を連日ご出席くださり心強い限りでありました。

お陰をもちまして男子団体戦では徳島文理中学校が準優勝、女子団体戦では阿南第一中学校ベスト八が進出、同じく女子団体那賀川中学校がベスト十六進出という好成績を収めました。また男子個人戦の文理中学校、鈴木智也君のベスト八進出や男子団体戦予選での鳴門第一中学校と三股中学校との手に汗握る伯仲戦など、開催県として大いに健闘いたしました。

選手強化にご尽力をいただいた多くの先生方に厚くお礼を申し上げますとともに、監督の中山繁輝先生・村井正志先生・斎浩市先生・竹内佳代子先生のご功績を讃え、その労苦に敬意を表するものです。

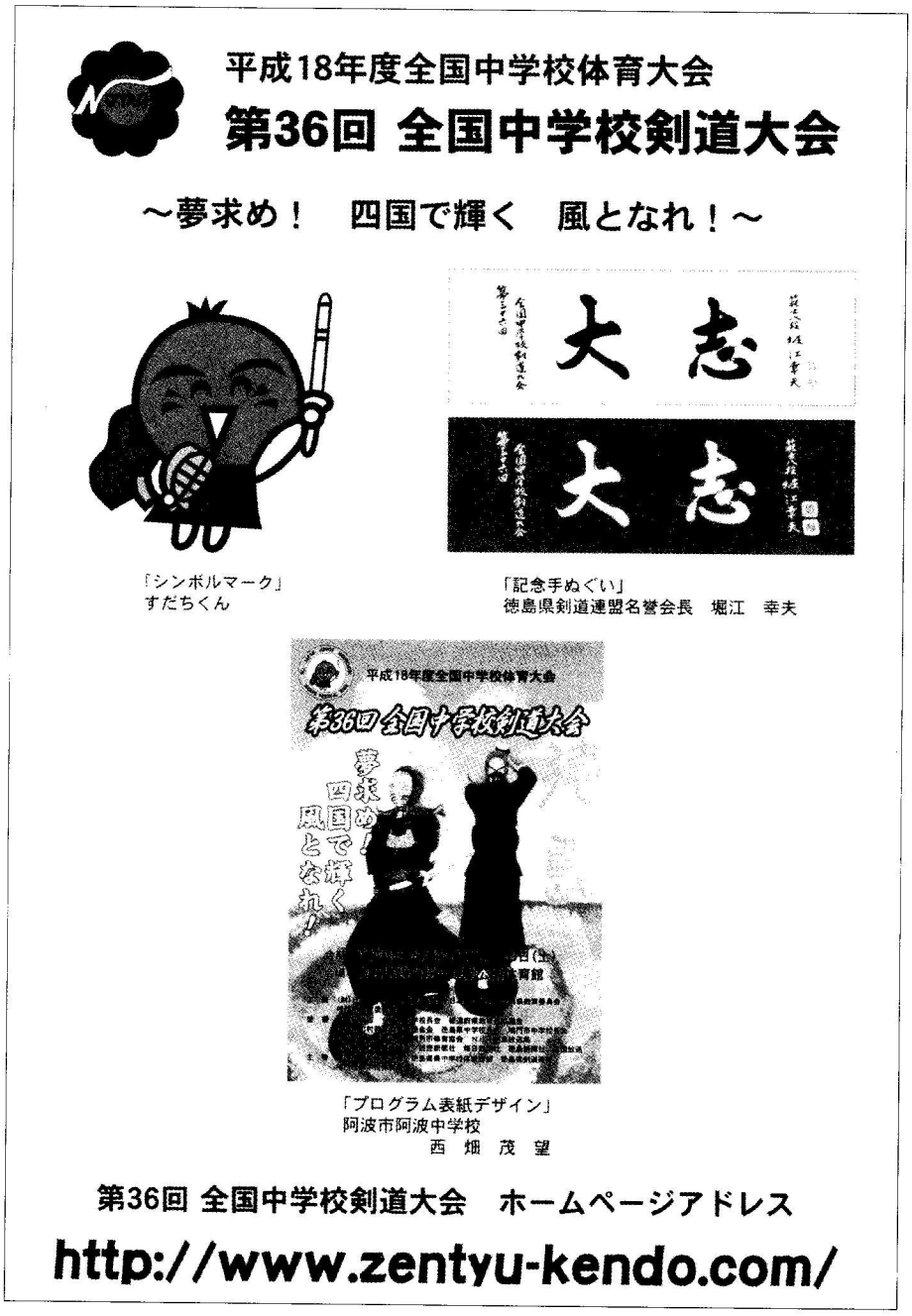
さらに本大会は四国ブロック開催ということもあり、四国ブロック長でありました白木洋一先生を中心に錬成会を徳島で度々開催するなど四国の強化も図ってまいりました。功あって男子団体決勝戦は徳島文理中学校と高知明徳中学校の四国対決となり、ベスト八以上には香川紫雲中学校を含めて三校出場、女子団体戦に至ってはベスト十六に五校出場という快挙を成し遂げました。

これらの成果を単なるイベントとして終わらせることなく、今回のレベルを維持向上できるよう中体連剣道専門部で努めていきたいと思っています。

なお故堀江幸夫先生には、本大会の成功を期して「立志」「大志」のご揮毫を賜り大いに志気を高めてまいりましたが、華々しい成果を見ていただくことなくご逝去され、誠に残念でなりませ

ん。

結びに審判員としてご奉仕頂いた学校剣道連盟・警察支部等剣道連盟関係の先生方、役員として大会運営に携わって頂いた中学校の先生方、OBの先生方、生徒役員並びに協賛・ご後援・ご支援いただいた大勢の方々に対しまして、全中剣道実行委員会を代表して深く感謝申し上げ、大会終了報告ならびにお礼の言葉といたします。



大会プログラム　裏表紙

全国中学校総体を終えて

中体連　白木洋一

「バンザーイ」八月十九日の晴れわたった空に、大会役員をはじめ試合を終えた監督の先生方の声が響いた。次回開催県の山形県に向けての大会用具を積み込んだトラックが出発するときであった。思えば長いようで短かった事務局専従の半年間であり、振り返ると様々なことが思い出される。

大会は、男子団体文理中学校が準優勝・女子団体は阿南第一中学校が敢闘賞・那賀川中学校がベスト十六・予選リーグで敗退はしたが三位になった宮崎県の三股中学校と堂々とした試合を繰り広げた鳴門第一中学校。個人戦では、文理中学校鈴木智也君がベスト八、その他の選手も毎日の稽古で培ったものを力一杯発揮した。徳島県中体連始まって以来の快挙であった。

今回の全国大会を実施するために、本当に多くの方にご協力をいただいた。全国大会の開催地をどうするか話し合っていたときに「逃げることなく受けなあかん」と叱咤激励していただいた先輩。三年前から計画的に様々なことを指導していただいた中尾誠実行委員長。強化費面でご尽力いただいた三木毅理事長。プログラム広告で、自らハンドルを握り、各企業を一緒に訪問していただいた遠藤一美会長。広告面では、各支部長をはじめ、多くの方にご協力をいただき本当に感謝の気持ちでいっぱいであり、人のつながりの大切さを感じた。

四月から九月の事務局の業務でも、開設時には米倉滋先生にお世話になるとともに、専門部の先生方にご協力をいただいた。特に大会前には連日徹夜に近い状態で、くじけそうになる私を若い先生方のエネルギーで支えていただいた。大会期間中は、剣道専門部以外の先生方の活動に、ただただ頭の下がる思いであった。振り返ると、いかに多くの人に支えられてこの大会が行なわれたのかと、あらためて考えさせられる。

中体連専門部としては、全国の中でも人数が少ない本県にあっても、みんなの力を結集させれば素晴らしい大会と成績を残せることが証明されたといえる。

終わりになったが、「審判がよければ試合はよくなる」の言葉通り、公明正大に審判をしていただいた高体連・警察の先生方。審判講習会から大会まで、審判長として四日間フルに大会にご尽力いただいた河田清実先生・副審判長の木原資裕先生・富田正先生に感謝するとともに、地元開催のプレッシャーの中、監督として生徒の指導にあたられた各校の監督の先生方、大会期間中生徒役員として活躍してくれた、各校の剣道部員に心から感謝とお礼の気持ちをあらわし、大会の報告とする。

合掌

全国中学校剣道大会の決勝戦に進出して

徳島文理中学校剣道部監督　中山繁輝

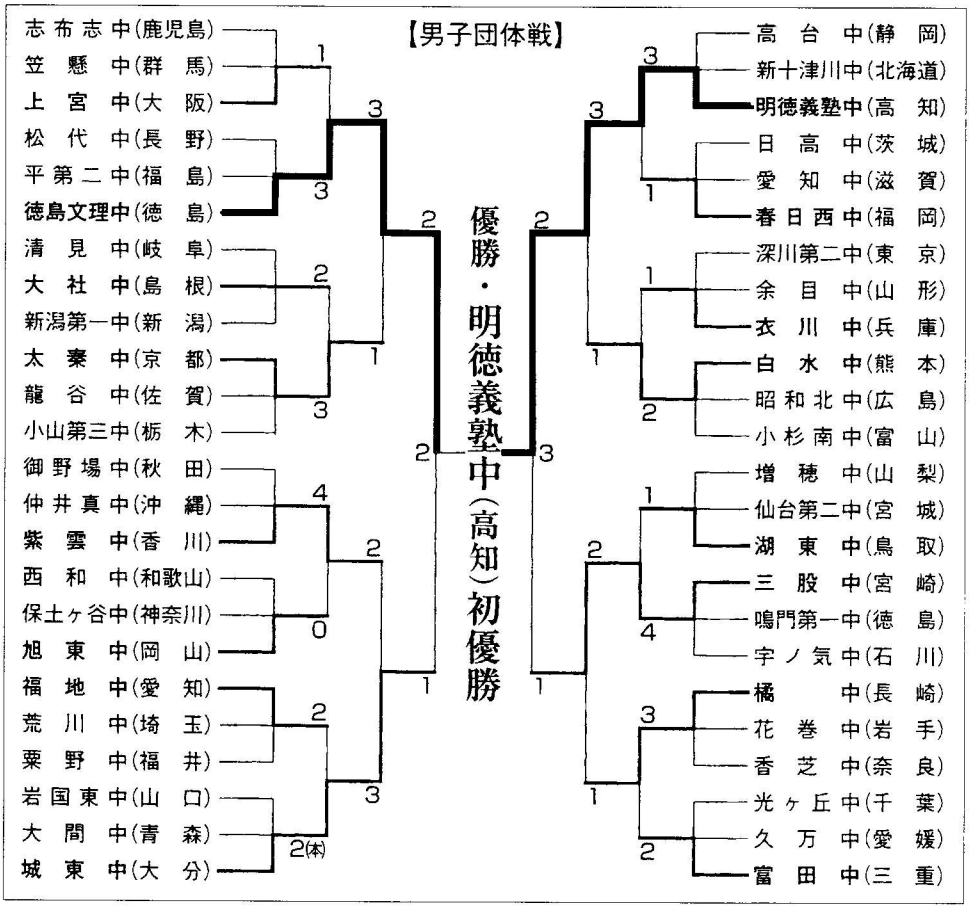
この度、地元鳴門市で開催された第三十六回全国中学校剣道大会男子団体において準優勝を果たすことができた。また、男子個人においても大将の鈴木智也がベスト八に入賞し、敢闘賞を受賞した。

地元開催の強化にあたって、ご指導ご声援頂いた中体連の先生方、ご支援いただいた剣道連盟の先生に心よりお礼を申し上げる次第です。

大旗を逃して悔しさは残るものの、先輩たちが三年前に達成した県勢初の団体三位の記録を上回ることができ、大変満足している。

本大会を目標に粘り強く努力を重ね、見事に成果を収めた選手たち、さらに後輩たちを終始熱心にを指導してくれた高校部の先輩たちに敬意と感謝を表したい。

いつの日か「日本一」に成ることを夢みて、また新たにスタートを切ったところである。



第36回 全国中学校剣道大会
徳島県
島文理中学校
第36回 全国中学校剣道大会
平成16年8月17～19日
徳島県鳴門総合運動公園体育館

第三十六回全国中学校剣道大会「心をひとつ」に

阿南一中監督　村井正志

『夢求め！四国で輝く風となれ！』

地元開催での全国大会、過去に出場した大会とは違い、非常に感慨深い大会。選手、監督は勿論、県中体連剣道専門部にとっても、これ以上大きく重みのある大会は、そうあるものではありません。私自身、このような素晴らしい大会に選手と共に参加できたことを非常にありがたく、また感謝の気持ちでいっぱいになりました。

さて本番までは選手と心をひとつにして県内の強化錬成会や県外遠征などで心と技を磨いてきました。非常にレベルの高い九州のチームとも剣を交え、確実に実力を着けていきました。大会が近づくにつれ選手達は不安から自信、自信から確信へと確かな手応えを感じていきました。本番までは、県の代表である自覚と責任、自分達の力を信じ全力を出し切る、そして、めざすは全国制覇。選手達の気持ちは強い絆で結ばれていきました。しかし結果はベスト八、試合終了後泣き崩れる選手達。でも選手達は徳島県の代表チームとして、阿南一中剣道部員として本当によく頑張ってくれました。「正々堂々」と戦ってくれました。地元開催に恥じることのない立派な戦いぶりでした。女子の那賀川中、男子準優勝の徳島文理中、また九州の強豪、三股中と最後まで競り合った男子鳴門市第一中。第三十六回大会は徳島県のレベルの高さを全国に証明した素晴らしい大会となりました。

「心をひとつ」に

白木中体連剣道専門部長を中心に県中体連剣道専門部がまとまり大きく重みのある大会を無事成功に導くことができました。

大会まで苦楽を共にしてきた選手、監督、大会運営に献身的に携って頂いた各関係者各位、県剣道連盟、高体連剣道専門部、その他たくさんの方に支えられ、第三十六回大会が素晴らしくさわやかな徳島の風となりました。

徳島での全国中学校剣道大会は終わりましたが、これに満足することなく、これからも尚一層精進していきたいと思っています。また本大会が、これからの徳島県の剣道発展のひとつのさわやかな風になってくれればと願っております。

全国中学校剣道大会（女子第二代表）

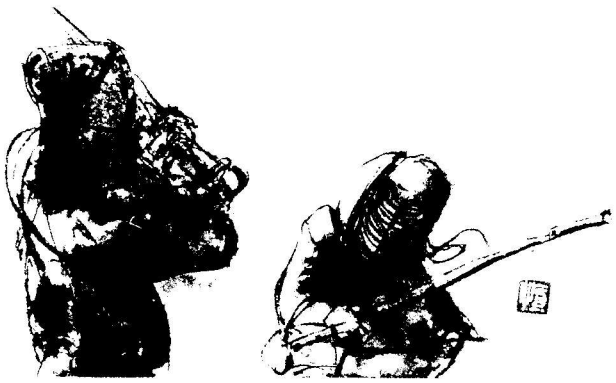
那賀川中監督　齋　浩市

まず、最初に徳島全中でお世話になった全ての方々に心よりお礼を申し上げます。女子の第二代表として、阿南第一中学校とともに出場することができ、生徒達は一生の想い出を得ることができました。できることなら、ともに強化してきた徳島県の仲間全員で試合に臨みたかった（無理とわかっていても）そんな気持ちでいっぱいでした。

地元の皆さんの温かい応援の中、生徒達は精一杯の力を出してくれたと思います。お陰様で予選リーグは勝ち残り、ベスト一六には残りましたが、阿蘇中学校に敗れてしまいました。「もっと自分がこうしていたら…」と監督としての自責の念が沸き上がってくるとともに、未熟な私に全力でついてきてくれた生徒たちや保護者の皆さん、支えて下さった皆さんに対する感謝の気持ちでいっぱいになりました。皆さん方のご期待に添えませんでしたが、生徒たちは鳴門の体育館で自分を輝かし、すばらしい試合をしてくれたと思っています。今はそういう生徒たちを私は誇りに思っています。

いつもお世話になっている村井先生と阿南第一中学校の皆さんがベスト八に入賞し、中山先生と徳島文理中学校が準優勝をしたとき、心から感動しました。会場が一つになって応援したことも最高の想い出になりました。

これからも剣道で何を学ぶかを主眼に置いて、全中出場も一つの目標として生徒達と一緒に毎日汗をかいていきたいと思っています。ただ、将来もしどこかの全中に参加する機会を得たとしたら、以前よりきっと大会を支えてくださる多くの方々の苦労に感謝できるように思います。大会の最後の片づけで次回の山形に向けて荷物を送り出したとき、いやな顔一つせず最後まで荷物を積んでいた北井上の生徒の皆さんの汗が輝いて見えました。そんな徳島の仲間達と切磋琢磨できることに監督として幸せを感じております。



初の全国大会に臨んで

鳴門第一中監督　竹内　佳代子

「念願の全国大会に出場できるのだから、自分たちの力を全て出しきり、悔いの残らない最高の試合をしよう。」その思いだけで、団体としては初出場となる全国大会に臨んだ。

リーグ初戦の相手は、昨年本大会三位の宮崎県三股中学校。試合前のアップの様子を見ていても、さすが今年の優勝候補の一角にあがるだけあり、気迫・技のスピード・パワーどれをとってもすばらしい。このチームを相手にどれだけの試合ができるだろうかと、正直私の中では不安もあった。だがそんな不安をよそに、選手たちは本当によく頑張った。相手のパワーにもの怖じもせず必死に攻撃をかけていく。前へ前へ技を出していく。五人が五人とも精一杯戦う姿に心打たれた。結果は、副将と大将が一本ずつ取られ二―〇で敗れたものの、全員が三分間をフルに使い懸命に勝負に臨めたと思う。

次の相手も、全中出場十四回を誇り名門校と言われている石川県宇ノ気中学校。先鋒、次鋒と相次いで一本ずつ取られ、このまま相手校に勝運が流れていくのかと思われたが、中堅が引き分けに粘り勝負をくいとめる。そして副将が得意のコテメンを決め、さらに大将が出コテを決め、結果的には引き分けまでもちこんだ。先の試合で、自分たちが一本ずつ取られ敗れたことに責任を感じた二人が、一矢報おうと渾身の力を込めて打った思いが「一本」へとつながったのだろう。

残念ながら、初の全国大会で一勝をあげることはできなかったが、目標であった自分たちの力を出しきった最高の試合をすることはできたと思う。だから、試合を終えた後の選手たちの表情はさわやかで、健闘できた充実感をみなぎらせていた。私自身も選手たちの頑張りに感動した。監督という立場で、本大会に出場させてくれた選手たちに心から感謝を表したい。

今回の全国大会出場に関して、私たちは本当に多くの人たちにお世話になった。練習試合の送迎はもちろん、陰になり日向になり様々な心配りをしてくれた保護者の皆さん。練習試合を快く引き受けて下さった県内外の多くのチームの皆さん。選手たちに本当の一生懸命さを教えてくれた城北高校、インターハイ出発直前であるにもかかわらず、鳴門一中のために胸をかしてくれた川島高校の皆さん。全中では招集・誘導部長を担当していた私に予選前から「監督に専念して」と部長を自ら引き受けてくれた西山先生をはじめ、招集・誘導担当の先生方。他にも鳴門一中ＯＢ、光武館、そして鳴門一中剣道部のみんな。たくさんの人たちに支えてもらい、応援してもらい、私たちは思い出に残る体験をさせていただいた。この感謝の気持ちは忘れません。本当にありがとうございました。

今回の体験で私が改めて感じたことは、最後まであきらめないことの大切さである。鳴門一中が、全中出場を獲得するにつながった大事な一勝が、私は県の選手権大会の準決勝だったと思う。大将が残り二秒で決めた逆胴。それにより代表戦に持ち込めた。このことがチームの大きな自信になった。大将が、「逆胴で一本取ったのは初めて、気がついたら打っていた」と言ったが、日頃の練習ではラスト二秒の設定で、逆胴の練習をよくやっていた。普段意識して取り組んだ技が実際の試合で活かされたのだ。最後まであきらめなければ、毎日の練習の一本一本が必ず大事な場面で出てくるのだという実感を味わえたことが、この全中出場へと結びついたのではないだろうか。

私が、剣道の指導をしながらいつも思っているのは、生徒たちに目標を持ち、その目標に向かってひたむきな努力ができる人になってほしいということ。自分の思い通りにいかなくて思い悩んでも、あきらめず最後まで粘れる人になってほしい。それを剣道の時だけでなく、日々の生活の中でもできる人になってほしいと願っている。

今年も全中出場を目指し、毎日の一本一本を大切にしながら生徒たちと共に頑張っていきたい。

08-001

特集二　全日本高齢者武道大会

高齢化社会の先導役を

徳島県剣道連盟会長
徳島県議会議員
遠藤一美

「徳島の剣道」への執筆依頼と同様のものが全剣連よりあり「月刊剣窓」平成十八年九月号に掲載されました。ここに全剣連のお許しを得て転載させていただくことにしました。

平成18年6月5日(月)、「第28回全日本高齢者武道大会」が日本武道館で開催されました。

81歳の私も、徳島から「寿B」(80～84歳)の部へ、選手として参加させて頂きました。

全国から駆けつけた高齢者剣士達は「オウー、元気であったか」などと、お互いに一年のご無沙汰を、三々五々集まって思い思いに言葉を交わし合っていました。

私は28歳で剣道を始めましたが、人生という長い旅の中で、剣道を通して色々な人と巡り逢えました。「剣縁」は素晴らしい宝です。剣友と共に語り、時間の流れに身を委ねるのではなく、自から新しい時代を築き上げる気持ちで、一生懸命に努力を重ねて、常に厳しい稽古に汗を流し、生き生きと交流できます。

今後も、健康管理に努めて生涯剣道の実践を心がけ、最高齢部門となる「寿A」(85歳以上)への参加を果したいと思います。

「高齢者」と掛けて何と解く
一大根の花一と解く
その心は…
「薹(とう)がたっても花が咲く一

「剣道」は、日本が世界に誇る伝統文化です。剣友の皆様に、今一度、この文化を「日本魂」として充分に認識して頂きたいと思います。

我々には、剣道に希望を託し、誇りを持って新しい都市作りや地域スポーツの普及振興に、大きく貢献されました先人達の輝かしい足跡を、後世に伝える極めて大切な責務があります。

21世紀は、情報化・国際化、そして少子・高齢化などが一段と加速する社会となるでしょう。少子化対策は喫緊の課題であり、子育て支援は国を挙げて取り組むべきであります。このような中で、社会情勢は益々混迷を極めていますが、私たちは剣道により、次代を担う青少年の心身の錬磨・発達を促し、彼らが人間性豊かで、大いなる夢と希望に溢れ、健康で文化的な生活を営めるように、健全育成していかねばなりません。

私は現在「新野剣道教室」の室長として週2回程度の稽古に加え、県内各地の中学・高校で若い剣士と稽古をしています。生れ育った時代が違っても、こうして竹刀を交えることで、新たな「剣縁」を結んでいけることに、心から感謝申し上げます。

95、01年に続き、高齢者大会で今年5年ぶりに優勝した筆者

第二十八回全日本武道大会に参加して

徳島県高齢剣友会理事長　有賀秀敏

平成十八年度、第二十八回全日本高齢者武道大会（主催全国老人福祉助成会）が、六月五日、東京日本武道館に於いて開催されました。昭和五十四年に、第一回が開催され、高齢者の出合、親交の場として、今年も全国各地から五五〇余名が参加され盛大に開催されました。徳島県剣友会からは、十名の会員が参加し、一村先生はじめ八名の方が試合に出場されました。

開会式には、功労者顕彰があり、これ迄高齢剣友会の発展にご尽力され、全日本高齢剣友会の発展に出場されている六名の方が、全国老人福祉助成会会長山田正志、全日本高齢剣友会会長長島末吉より感謝状が贈られ、徳島県から勝浦守先生、南充美先生がお受けになりました。勝浦先生は、昭和五十五年（第二回）、南先生は昭和六十二年（第九回）から連続出場されています。

審判長長島末吉先生の説示の後、選手を代表して今大会最高齢の一村喜佐男先生（九十四才）が、心のこもった力強い声で宣誓されました。宣誓の最後に、「選手代表　九十四歳　徳島県　一村喜佐男」と言われた瞬間、会場全体から「オー……」と驚嘆のどよめきが生じました。

開会式終了後、日本剣道形、銃剣道、なぎなた、居合それぞれの演武があり、試合に移りました。

今回は剣道の部は、寿A組十七名、寿B組五十一名、特組七十九名、A組六十四名、B組八十七名、C組九十一名の年齢別によって競われました。又、二十七回大会より、ブロック予選決勝トーナメント方式によって行われています。

午前中は予選リーグが行なわれ、寿B組遠藤、特組中山、A組有賀が決勝トーナメントに進みました。

午後の決勝トーナメントでは、寿B組で遠藤先生が早々優勝を決められ、今回で三回目の堂々たる優勝です。私も予選リーグで二勝一引分、どうにか午後の決勝トーナメントに進む事が出来ました。昨年は決勝戦一回戦敗退。今回、農繁期で稽古も十分出来ておらず、勝負にはあまり意識せず、自分の不断の力が出しきればと臨みました。

「勝には不思議な勝あり。負けには不思議な負けなし。」と言う様に、自分でも不思議に思う程、いつのまにか四回戦まで進んで居りました。(1)ゾーンの決勝は埼玉の山下先生（優勝者）でした。試合中ごろ、自分の竹刀の破損には気付き試合を中断、再度試合に臨みましたが、飛び込み面が不充分となり居付いた所退き面をとられ敗退しました。自分の不注意で試合を中断させ相手に対して誠に申し訳なく、自分の修養の足りなさをつくづく反省して居る次第です。

又、三位に入賞は自分の力以上の成績であったと思います。試合が遅くなり最後までご支援下さいました先生方、本当にありが

とうございました。

今後も高齢剣友会の先生方との出合いを大切に親交を深め自分の修養の糧にして行きたいと思います。

選手宣誓　一村喜佐男先生（徳島）

長島末吉　剣道審判長

剣道Ａ組
優　勝　山下美津男（埼玉）
準優勝　金子　光徳（千葉）
三　位　藤田　守也（愛媛）
　　有賀　秀敏（徳島）

全日本高齢者武道大会で功労者顕彰を受けて

徳島高齢剣友会理事　南　充美

第二十八回全日本高齢者武道大会が、平成十八年六月五日に日本武道館で開催されました。当日九時前武道館に着くと、大会運営委員の支倉先生からお話があり、開会式の中で功労者表彰を受賞者九名の代表として受けるようにとのことでした。長い剣道人生の道のりの中で私を常に磨いて下さった大会への参加であり、感謝こそすれ、この様な光栄を頂いて良いものかと驚いた次第です。

さて、私の剣道修行は県内の先生方の御指導を受けるのと、普段の稽古だけであり、試合の大体仲間同志の立合いに終わります。そこで先輩の先生方が道をつけて下さった。全国大会へ参加することに喜びと感謝をしている次第です。他県の剣士と剣を交えることで普段の稽古の成果を知ることができ、私の剣の修業に大いに力となっています。この事は私の剣道との関わりを述べることにより御理解頂けるものと思います。

功労者顕彰　南充美

私が剣道と関わった最初は昭和十三年麻植中学校（現在の川島高等学校）に入学した時であります。

小学校時代は剣豪・豪傑を書いた小説を読み、広場でチャンバラごっこをしていた撃剣の好きな少年でした。中学校入学当時は戦時下にあって武道は日本男子たる者全てが履修するべきものと考えられて、剣道・柔道両方が正課としてあり、私は躊躇することなく剣道を選びました。なお剣道部にも入部し、夏休みには脇中（現脇町高等学校）で合宿、又現在の徳島中央公園の西堀端にあった武徳殿で合宿をしたこともありました。

そのうち昭和十六年十二月八日大東亜戦争に突入、剣道も次第にできなくなり、友達も海軍予科練習生・陸軍航空少年兵と志願して行く者があり、残りの中学生は農家の手伝い・学徒動員として軍需工場へと兵器の生産に従事することになりました。私も陸軍に入隊、昭和二十年八月十五日敗戦で復員しましたが、占領政策で禁止されていたため剣道をすっかり諦めていました。ところが偶然麻植中で剣道の指導を受けた恩師の久保勇先生とお会いし

今回感謝状を頂いた人達

剣道　加藤　義一（埼玉）
上野　貞親（長野）
勝浦　守（徳島）
南　充美（徳島）
久木田善蔵（神奈川）
鈴木　隆治（静岡）
銃剣道　高橋　止吉（宮城）
茂木　虎雄（群馬）

全日本高齢剣友会
理事長　橋本　保治

「剣道ができるようになり、稽古が始まっている。早く出て来い。」とお誘いを受けましたが、復員後徳島師範学校を出てからは、小学校勤務であったので剣道については空白の時期が続きました。

その後昭和三十七年、徳島市加茂名中学校に赴任したので、剣道部を創設することを決意し、校長の重松重治先生に創部の件をお願いすると、快く承認して下さいました。

創部に力を貸して頂いたのは、加茂名中学校の前の警察駐在所に居られた吉田稔夫先生（現在警察勤務の吉田昌彦教士七段の御尊父）でした。当時徳島県剣道連盟の徳島支部は東と西の二つに分かれてあり、西支部長は西消防署長の高橋道明・事務局長吉田稔夫・会員は高島永吉範士八段・警察関係で魚沢清太郎・学校関係で中川虎雄・徳島農業学校の下村富夫・山田仁・一般では、三木・小倉・西森・横山・中村・薙刀の高木という顔触れで、県でいつも優秀な成績を収めていました。昭和四十年に吉田事務局長が転勤するにあたり後を私が引き継ぐことになりましたが、私も小学校に異動、その後東西の徳島支部は合併することになりました。このような先生との出合いで助任橋のそばにあった武道館で多くの先生方に接し御指導を受けることができました。

その後、私は応神中学校に赴任、そこでも剣道部を創設するも一年で津田中学校に転勤、すぐまた剣道部を創設しました。しかし津田中学校ではサッカー部が強豪であったため、部長を受持つ先生が転任された関係で私がサッカー部長をすることになってしまいました。一年目からサッカー部は市大会・県大会で優勝。以後八年間務めたが、毎年の如く優勝か入賞し、ある年は四国大会で優勝、監督として全国大会に引率することもありました。この間剣道は千葉利一先生にお願いし、サッカーのない日に部活動に参加する程度でした。

しかし、昭和五十五年に六段受験のため親道館に入門、館長の竹原常雄先生に毎回息が止まるかと思うくらい面打ちの指導を受

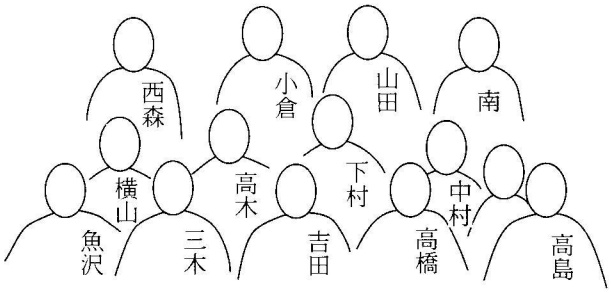
けました。親道館では石井克太郎・熊本淳一・西野四郎・勝浦守先生に指導を受けましたが、これが私の本格的な剣道の始まりでした。この時は勝つ事のみ念頭にあり、なかなか合格しませんでしたが、昭和六十一年八月三十一日ようやく六段合格することができました。

さて全日本高齢者武道大会には徳島高齢剣友会の故清原栄教士七段を中心に先輩の先生方が全国に先駆けて入会されたもので、私は第九回（昭和六十二年）初めて清原先生のお世話で参加させて頂きました。この時の参加者は二十名の多きを数えます。この他、東京大会に備え大会の三日位前には上京し、野間道場・三菱道場・西山道場へと出稽古に参加していましたが、その道を開いて下さったのも先輩の先生方です。私は徳島高齢剣友会の会計理事をしていた為、大会出場のお世話をしていただけでありました。

それから全国高齢者武道大会に出場することで他県の剣士と剣を交える内、だんだんと試合に落ち着きができ、打つべき機会とか先輩の教えが身についたように思います。お陰で平成七年十一年二十八日剣道七段に合格することができました。その他平成元年から全国健康福祉祭（ねんりんピック）に九回出場・毎年五月に開催される京都大会・土佐生涯剣友会との交流試合と毎回参加していますが、どの試合も指導者としていつも指導していることを念頭に置き、教え子に恥じない試合をと心掛けています。

今は八十歳の高齢になったこともあり、全国大会のお世話は後輩にお願いしていますが、私は健康である間は全国大会に参加し、徳島高齢剣友会は勿論、徳島の剣道発展に微力ながら尽くして参りたいと思っています。

徳島県剣道連盟　徳島西支部



昭和40年９月23日　吉田稔夫事務局長転勤送別会

全日本高齢者武道大会（徳島県関係の受賞者）

回	年度	組	組年齢	受賞名	氏名
第五回	昭和五十八年	A	70才以上	第三位	清原　栄
第六回	昭和五十九年	A	70才以上	準優勝	清原　栄
		B	65～69	第三位	熊本淳一
第八回	昭和六十一年	寿	80才以上	第三位	阿部国太郎
第九回	昭和六十二年	A	70才以上	第三位	蝦名久作
第十回	昭和六十三年	A◎	70～74	優勝	勝浦　守
第十二回	平成二年	B	65～69	第三位	遠藤一美
第十四回	平成四年	A◎	70才以上	優勝	平岡竹雄
		B	65～69	準優勝	遠藤一美
第十六回	平成六年	特	75～79	第三位	西野四郎
		特	75～79	敢闘賞	蝦名久作
第十七回	平成七年	A◎	70～74	優勝	遠藤一美
		A	70～74	第三位	早川一也
		A	70～74	敢闘賞	吉田　祖
第十九回	平成九年	寿	80才以上	第三位	平岡竹雄
		A	70～74	準優勝	遠藤一美
第二十回	平成十年	特	75～79	準優勝	早川一也
		A	70～74	準優勝	遠藤一美
第二十一回	平成十一年	A	70～74	第三位	遠藤一美
第二十三回	平成十三年	特◎	75～79	優勝	遠藤一美
第二十四回	平成十四年	寿B	80～84	敢闘賞	早川一也
		A	70～74	敢闘賞	中山啓男
第二十八回	平成十八年	寿B◎	80～84	優勝	遠藤一美
		A	70～74	第三位	有賀秀敏

特別寄稿

第十三回世界剣道選手権大会に出場して

内田　さくら
（旧姓・坪井　富岡東高出身）

今大会は、台湾台北市にある台湾大学で開催されました。世界四十七カ国が参加し、左記の日程で試合が行われました。

八日　女子個人戦・女子団体戦
九日　男子個人戦
十日　男子団体戦

初の世界大会の開会式は意外と和やかなムードが漂い、どの国の選手も笑顔で整列していました。心からこの大会に出場することを楽しみにしているようでした。私自身も、この場に立っていられることを誇りに思いながら開会式に臨みました。

試合は女子個人戦が先に行なわれました。

〈個人戦結果〉

優勝　杉本早恵子　選手（日本・京都）
二位　古室可那子　選手（日本・千葉）
三位　稲垣　恵理　選手（日本・岡山）
三位　下川　美佳　選手（日本・鹿児島）

日本選手がベスト四を独占し、次の団体戦につながるすばらしい結果と試合内容でした。

そして個人戦終了後、すぐ団体戦が開始されました。団体戦は二十七カ国がエントリーし、三カ国のリーグ戦を行い上位二チームが決勝トーナメント進出という形式で試合は進められました。

予選リーグ第一試合の前に、稲垣キャプテン中心に選手十名全員で円陣を組み、気合を入れ直した後、試合場に入りました。日本選手が登場すると会場の視線がそのコートに一気に集中していました。日本の剣道が世界中の剣道家に注目されていることを改めて感じました。

〈団体戦対戦結果〉

予選リーグ

一試合目　日本　5―0　フィンランド（出場：次鋒）
二試合目　日本　4―0　フランス

決勝トーナメント

一回戦　日本　5―0　香港（出場：次鋒）
二回戦　日本　4―0　ブラジル
準決勝　日本　4―0　ドイツ（出場：次鋒）
決　勝　日本　4―1　韓国（出場：次鋒）

私個人の結果は、四試合出場させていただき、四戦全勝でした。この日は、緊張よりも日本一のチームで試合ができる喜びと応援に来てくださっている人たちのために全力をつくそうと思う気持

ちの方が強かったです。よって、初戦から迷うことなく思い切って技が出ました。全試合、納得のいく内容でした。

その中でも最も印象に残った試合は、決勝の韓国戦でした。私は決勝前からこう考えていました。「後ろにつながる試合をする。」

韓国選手は力が強く、前に前に攻めてくる剣風と聞いていましたが、そのとおりでした。私も負けじと前に出ましたがなかなか技が決まらず、時間だけが過ぎていました。私はどうしても一本がほしかったので、一瞬相手の手元が浮きそうな気がした瞬間、一か八かの引きゴテに賭けました。「なんとか一本になって!!」と祈りながら残心をとっていました。そして旗三本上がったのを確認した瞬間は本当にうれしかったです。その後、すぐ終了の笛が鳴り、なんとか考えていたとおりの結果を残せました。

結果的には全試合、大差で日本が勝利しましたが、「楽勝だった」と思った試合はありませんでした。「絶対に勝たなければならない」「強く正しい剣道でなければならない」というプレッシャーは想像以上に重かったです。だから、決勝戦終了後の礼が終わり、応援してくれた先生、コーチ、応援してくれた選手のもとに戻ったときには涙で前が見えなかったです。みんなで優勝できた喜びを分かち合っていました。

この大会に向け強化訓練が始まったのは二〇〇四年二月でした。二六名でスタートし、それから二〇〇六年四月には二〇名に減り、最終的には九月に十名が決定されました。

第一回強化訓練に参加したときは、試合も勝てず、稽古も目立たず、どうしていいのかわからないまま終わりました。その合宿から二年間、正直なところ他の訓練生にくらいついていくことに必死でした。常に強くなることだけを考え、時間があれば少しでも稽古していました。それだけに、勝って泣く自分の試合は初めてでしたし、「優勝できて本当に良かった。」の一言に尽きる大会でした。

最後に、大会全体を通じて感じたことは、世界の剣道にレベルが非常に高かったことです。それは剣道を世界に普及する意味ではたいへん良い傾向である、と多くの日本の先生方がおっしゃられていました。そのお話を聞いた時、私もそうだと思いました。また、剣道を通じて、言葉や文化の違う剣士たちと交流できたこともとてもいい経験となりました。

これからは、今まで以上に強く正しい剣道の追求に精進し、また今回経験したことをもとに、多くの子供たちに剣道のすばらしさを伝えていきたいです。

平成十八年度　顕彰一覧

剣道有功賞（全日本剣道連盟）

○細　川　昭　典（昭和三年十二月一日生れ）

戦後、剣道修練に励み、三十三歳で七段位となり、多忙な幹部教職の中でさらに剣道錬磨に取り組み、教士号も取得している。力強く剣道の普及伝承に取り組み、その間数多くの若き剣士を育み、少年剣道教室の創設や統合などを企画し、現在も誠実に剣道指導に当たっている。また、剣道連盟の監事を務め、その後、審議員となり、二十五年目を迎えており、徳島県剣道連盟の発展に多大なる貢献をしている。

少年剣道教育奨励賞（全日本剣道連盟）

○大野小学校剣道部

昭和四十五年阿南市大野小学校に剣道教室を開設以来、館長の西岡侃氏の基本に忠実で熱心な指導により、卒業生が地元の阿南第一中学校、阿南市内の高等学校へ進学し、全国大会に出場するなど多くの名選手を輩出している。また、卒業生の多くが後輩の指導に携わり、生涯剣道の実践がなされており、剣道の普及、発展に大きく貢献している。

○誠武館道場

昭和四十四年、現在地に剣道場を設立された。東邦レーヨン㈱が撤退後、人口減少が続く中、地道に活動を続け、現在に至っている。代表指導者の大野義則氏の献身的な指導で、礼儀正しく、健全な少年剣士の育成に取り組み、少年剣道発展に大きく寄与している。

体育功労者表彰（徳島県体育協会）

○中　村　稔　裕（昭和十七年八月十八日生れ）

徳島県剣道連盟の理事・常任理事として三十七年間の永きにわたり、つとめている。特に、徳島県剣道連盟審査部長として昇級・昇段審査の指導・運営にあたり、連盟の発展に尽力している。また、矯正職員を退職後、少年剣道教室や中学校の剣道指導にあたり、自らもねんりんピックに出場し、生涯剣道の実践を深めている。

剣道有功賞

初心にかえって

細川昭典

新年互礼会の席上、遠藤会長さんより、平成十八年度の剣道有功賞の伝達を受け、身に余る顕彰状をいただきました。

これは、ひとえに遠藤会長さんをはじめ各役員の先生方並びに会員の皆様方のご指導ご支援のたまものであると、ここに謹んで心から感謝を申し上げます。

私も、この機会に「初心」にかえり、体力の続く限り、真の剣の道に精進したいものだと心を新たにしている所であります。

さて、私が剣道の道に志したのは、小学校四年生の初めであり、その頃の私は、地域のガキ大将でした。学級担任の先生から「昭典、明日から手拭いと竹の棒を持って来なさい」といわれて、私は喜び勇んで持参しました。当時、私達の学校は、運動の大変盛んな学校で、各競技の優勝旗が飾られていました。

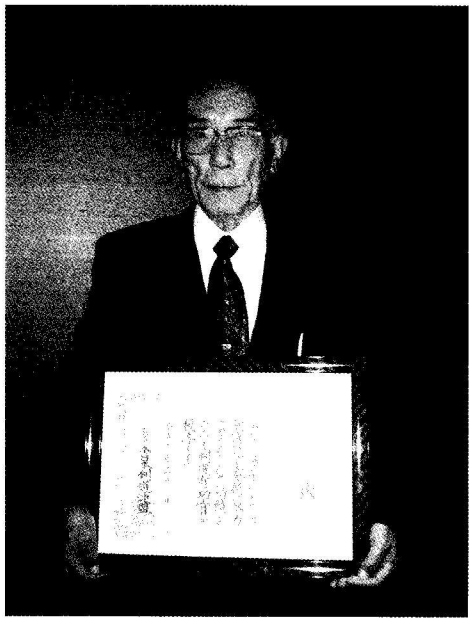
私も、担任の故剣道教士井内仁平先生から、本格的な基本を重視したご指導をいただきました。続いて、五年、六年と故剣道教士田中久夫先生のご指導をいただきました。

紀元二千六百年記念の橿原神宮大会、続いて京都の武徳殿での京都大会に参加し、日本各地の剣友と剣を交える事ができたことで本格的な剣道への取り組みを考えるようになりました。

昭和十六年、県立脇町中学校へ入学し、故剣道範士八段須見善富先生のご指導を受けると共に、先輩の方々の格別のご指導を受け、放課後の練習は、「日暮れて腹は北山目はかすむ」という厳しい状態でした。

また、寒稽古、土用稽古、徳島市の武徳殿、大滝山での合宿等その間、須見先生からは、常に文武両道の視点にたち、基本に徹した指導をいただき、今も私の青少年指導の基本となっております。

一方、先輩の故教士藤川一太郎先生（武専十三回生）、故範士



柴田稔夫、下村富夫の両先輩からの厳しい稽古が思い出されます。

学年が進むにつれて、戦時体制下のため、公式戦は一回のみで、いよいよ卒業進学ということで、私の初志であった、大日本武道専門学校へ、昭和二十年六月に入学しました。

丸家寮に入寮し、半日は勤労動員で岡田金属ＫＫへ、あと半日は、文科、剣道の実科でした。

実技は、武徳殿の大太鼓の合図で、来る日も来る日も基本に徹した、切り返し、打ち込み、体当りのかかり稽古を、故範士津崎兼敬、佐藤忠造、若林信治、箱崎敬武、斉藤正利の各先生より指導されました。

練習後は、剣道衣、防具の日干し、荷車での蔵書の疎開等をしているうちに、八月十五日の終戦となり、それと共に武徳会は解散、剣道は全面禁止となりました。

学校は廃校、一年生は転校、又は故郷での再出発となり、私は、二年後徳大へ進学し、教員の道を選択しました。

その後、剣道復活の気運も高まり、昭和二十五年三月全日本撓競技連盟が創立され、続いて、全日本剣道連盟が結成されました。

剣道復活後、私の剣道は、戦前戦後の「つなぎの剣道」の伝達者としての取り組みでした。

朝に夕に、先輩の先生方のご指導により、昭和三十一年の第十一回国民体育大会を初めとして、各種全国大会、又、四国大会等へ本県代表選手として出場させていただきました。

又、県剣道連盟、県学校剣道連盟の役員を歴任させていただき、大変ありがたく感謝にたえません。

私の剣道への取り組みは、「道半ば、日暮れて道遠し」の感でいっぱいであります。

構えたる剣のにおいや寒稽古　昭典

（剣の理合はと問う私に、師は「君、においだよ、そのにおいだよ」といわれた）

今後共、何かにつけ、一層のご指導とご支援を賜わりますようお願い申し上げます。

富田　正

河田清実

瀬尾十三子（現 手塚）

女子個人三位

故 下村富夫

中山繁輝

中学個人 準優勝

細川昭典

中原敏博

高野公英

少年剣道教育奨励賞

大野小学校剣道部の歩み

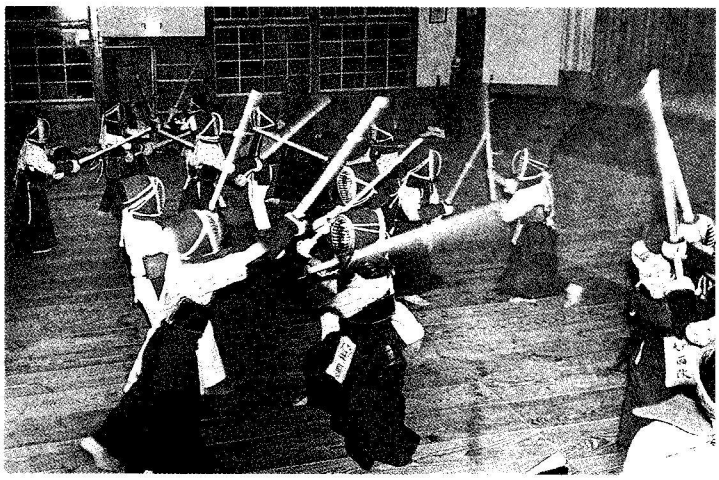
指導者代表　西岡　侃

平成十八年十一月三日（文化の日）全日本剣道連盟より名誉ある、「少年剣道教育奨励賞」が図らずも大野小学校剣道部が賜りましたことは、私達関係者一同恐縮に存じあげると共に、心から感謝申し上げます。これも偏に、徳島県剣道連盟会長・遠藤一美先生をはじめ多くの諸先生方のご推挙とご高配の賜物と、謹んで心から厚くお礼を申しあげます。

また、この度の受賞は大野小学校歴代の校長先生をはじめ、関係職員の先生方、そして剣道部の指導者、歴代の部長さん、保護者の方々、さらに関係者の皆様の物心両面にわたるご支援、ご協力によるものであり、これらの方々に心から厚くお礼申しあげます。

大野は昔から剣道の歴史が深く、良き伝統も多く受け継がれて来ている地域であります。戦後の剣道復興後も、いち早く大野武道同志会の組織の中で青少年に剣道の育成が行われていました。他のスポーツ、野球、バレー、卓球などもそれぞれの組織にて子供達の健全育成を行っていましたが、昭和四十六年に大野小学校体育後援会が結成され、統一された組織の中で運営され活動することになり、剣道も名称を「大野小学校剣道部」とし学校名を看板に力強くスタートしました。

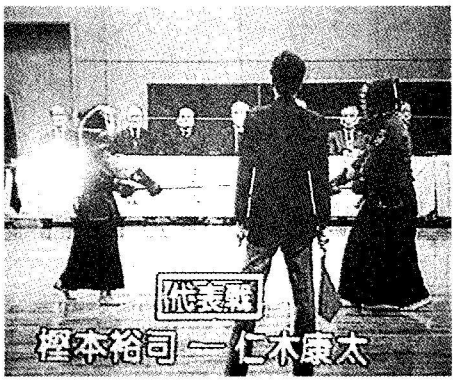
同じ頃、阿南、新野等、阿南支部内に十二の剣道教室が開設せられました。大野の指導は色々な関係上、私と今は亡き、教士五段森口求先生が引き受けることになりました。子供の指導は大変難しく根気が要ります。試合に連れて行っては負け、又負けでも、保護者の方に「子供に剣道を学ばして良かった」と言って貰えるように、礼儀を重んじ、指導しなければと、指導者講習会等で習った事を丸写しで頑張りました。特に小さな小学生は、ほとんどが家



大野小剣道部発足当日の練習
旧大野公民館での練習ぶり〈昭和48年11月〉

族の進言で剣道を学び始めた子供が多く、中にはイヤイヤする子もいるので、「剣道をなぜ学ぶのか」をつまり剣道を学ぶ目的をしっかり理解して貰い、「自分を向上させるための剣道」と理解してくれた子供は、稽古の態度が変わります。つまり、稽古を休まない、時間を守る、目標を持って稽古をする、思念工夫を持って稽古をする、そして剣道を楽しむ様になります。

昭和五十八年には、剣道部員も四十八名と大勢になり、昔の狭い体育館では二回に分けなければ無理となり、保護者の希望で、週二日であったのが三日、四日になりました。その後、部員数が少なくなっても稽古日数が多いと、稽古に欲が出て来て、その上に良き思い出が出来るので現在も週四日が続いています。



第２回県小中大会テレビ放送
代表決定戦で仁木が勝ち優勝する

第２回県小中学校剣道強化錬成大会
（テレビ放映）優勝記念〈平成４年〉

平成に入り、指導者として大野小学校剣道部の初期の卒業生である池田洋一君と私の息子の西岡直彦が来てくれました。二人は高校時代に今は亡き、範士七段清原栄先生に基本をしっかりと仕込まれた剣士であり、剣の運び方等を上手に指導してくれました。一時は良き思い出が続きました。

創部以来団体戦、優勝回数は累計で八十九回（県大会八回、県下大会十八回、地域大会六十三回）その中で特にテレビ放映で緊張する県大会で三回も優勝したこと、昨年亡くなられた、範士八段堀江幸夫先生に「大野小学校、良くがんばるでないで」とお誉めの言葉を戴いた事は忘れることは出来ません。

平成二年夏、森口求先生が急に身体の容態を悪くなされ、お亡くなりになりました事は、大野小学校剣道部としては、大きな悲しみと共に残念でたまりませんでした。森口先生は子供達に良く好かれていました。そして先生は責任感の強い方であり、地域の人々から信頼されていましたし、又お酒を召し上がるとユーモアになりフラダンスを踊り、阿南支部の剣士仲間に人気がありました。又、一昨年に亡くなった、六段阿部三十三先生にも大変お世話になりました。

平成十年頃より大野小学校も少子化の影響が出始め、一年生に入学して来る子供が十五人に届かない年もあり、その子達を野球やバレーなどのクラブが部員の獲得競争をし、又放課後クラブ活動もせずに学習塾に行く子供もあるので、野球、バレー、剣道部

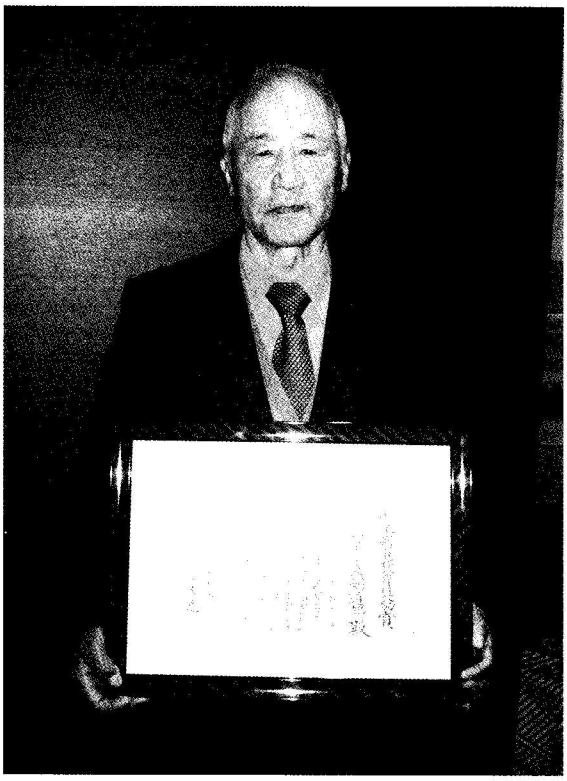
共に入部してくれる子供が減少し困っているのが現状です。一つの学校の体育後援会組織の中での活動ですが、他の学校の子供を入部させることも今後の課題と考えています。よって最近の大野小学校剣道部は部員の関係で団体戦が出場できないときもあり、淋しい限りです。しかし、小学校で基本をしっかり学んだ子供が、中学校へ進み中学校大会で良き成績を上げ、良き思い出を作ってくれると小学校で教えた事が生かされていると感じ、人数が少なくてもやり甲斐もあります。

発足以来三十六年間指導を見守って来た私は、六年前よりも病もちになり最近は隠居身分となりました。安心してお任せしている錬士六段池田先生を中心にして監督の四段西岡直彦等、コーチの五段元木健吉先生、四段中本裕由先生、吉岡輝夫先生、若手の五段西野知成先生が育ち、いつでも参加してくれますので誠に有り難いです。

最後になりましたが、徳島県剣道連盟の益々のご発展と諸先生方のご健勝とご多幸を、心からお祈り致しましてお礼の言葉に代えさせて戴きます。

合掌

平成14年度の第27回大野大会で
日本剣道形錬成をする（6年生8人）



少年剣道教育奨励賞を受賞して

誠武館道場代表指導者　大　野　義　則

この度、誠武館道場が全日本剣道連盟より『平成十八年度少年剣道教育奨励賞』を戴きました。誠に夢の様な大変名誉なことで、指導者及び門下生並びに保護者会の皆様関係者一同心より有り難く感謝致して居ります。これも一重に徳島県剣道連盟の会長様を始め、諸先生方のお蔭と心より御礼申し上げます。

当誠武館道場は、昭和四十四年七月に中谷智好先生が、私設道場として始められるに当り、恩師の尾形郷一先生に相談に行かれました。「それは良い事、青少年の健全育成に頑張って下さい。」と励まされ、道場の開館記念に額を寄贈して頂きました。その額には誠と一文字大書されています。中谷先生は、誠を頭に武道を学ぶところ誠武館道場と銘名された訳です。

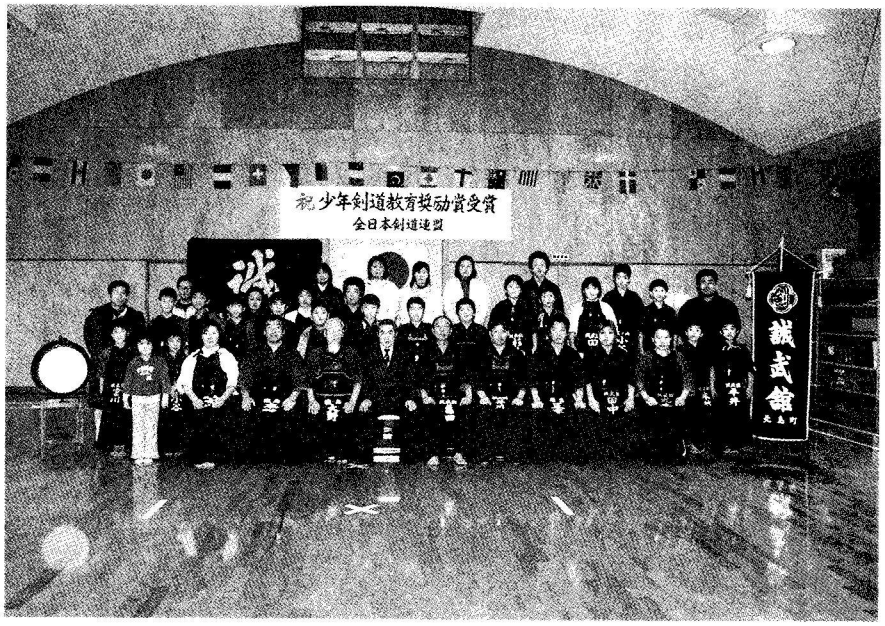
私大野（当時三十八才）も、開館当初より小学生二・三年生と一緒に、送り足から始めました。中谷先生は、姿勢・足の運びには大変厳しく、床を滑る様に前に進み、後に退く、この稽古を週二回、三ヶ月程竹刀を持たずに稽古に励みました。進む時は、「やぁー！」退く時は、「とぅ！」と気合を込めて発声しなさいと、言われてもなかなか子供達は大きな声が出ないので、私が内心恥かしかったのですが、子供達のお手本と思って大声を出して居ました。

もう少し中谷智好先生の事を振りかえって見ます。当時、東邦レーヨンにお勤めの鳴門の坂野清先生や堤茂先生が指導のお手伝いに見えられ、先生同士の稽古を拝見していて、初心者乍びっくり感心したことがありました。それは、中谷先生が打ち込む時や退き技の時に足音が殆ど聞えず、氷の上を滑る様に身体が前後移動していることです。私には、未だに先生のように出来ず悩んでいます。

中谷智好先生は、七十七才で亡くなられる昭和六十三年七月まで十九年間、お元気に、私、共々門下にご指導戴きました。本当に、偉大な指導者、剣道家であったと思います。

ここで持ち上った誠武館の継承問題です。在籍門下生の保護者会から、是非私（大野）に指導を続けてほしいと要望がありました。しかし、道場は私設道場であり、土地は借地、息子さ

誠武館道場に掲げている
尾形郷一先生の書と中谷智好先生の遺影



んは店を継がれていますが、剣道には全然経験がなく私も困惑致しておりました。また、同時に板野東支部の会員の先生方から、中谷先生が支部長なさっておられたので、これも引き継いでくれと持ちこまれました。私も小さいながらも技術を伴う店舗を営んでおりますので悩み、家族に相談し諒解を得て、道場は息子さんの中谷善一郎さんに、二代目館長としてお願いし、私が代表指導者で引き継がせて頂くことに落ちつきました。

それから今年で十九年過ぎました。中谷先生の教えは、「指導者や、先輩には元気一杯体の続くかぎり打ち込んで行きなさい。それが上達の道です。指導者は、子供が打ち込める様に子供以上に動き、時には近間に、また遠間にして自分がどの間合から打てるか考えさせなさい。」と、よく言われていました。現在も実行しています。そして、昇級審査にはあまり重点を置かず、「内容が大切です。」等、昔の真の剣道家でした。

しかし、私が引き継いだ頃から時代が変ったと言うのでしょうか、「誰々は何級になった。」「何々君は、初段を取った。」等々、級に関心を持ち、進級に対する欲が出て来ました。審査を受験させるには、指導者がまず審査に対する知識を深めることに務めました。有効打突、打突の機会、形の効果等、自分で理解出来ていると思っていましたが、小学生に説明し、指導するには難しく行き詰る事もありました。大会での子供達の技も多彩になってきました。

私も一から勉強すべく、春、秋の県連の講習会、中央講習会の伝達会には、出来るだけ参加して、話の内容に出てくる一言一句が、自分の師と思い、また剣窓の記事もよく読み子供に話が出来る様努力しています。これが誠武館道場の、創立から今日迄の歩んで来た姿です。

この度の受賞は、老人の口うるさい小言をよく辛抱し、努力した子供達、そしてご協力戴いた指導者の先生方、子供達を励まし応援して下さった保護者会の皆さんへの賞と思っています。

最後に、これからも徳島県剣道連盟の会長さんを始め、役員理事の先生方、いや県下の高段の先生方、何卒「こんな方法もあるでよ」と、進言ご指導下さる様お願い申し上げます。

ここ十年の間に道場でお世話になっている先生

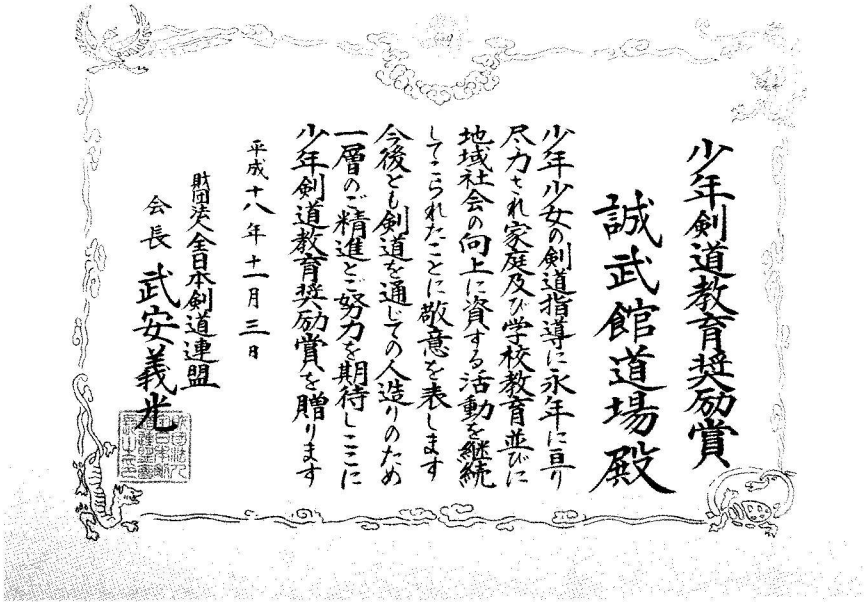
西宇康治（七段）先生　松山刑務所勤務
本村賢二（六段）先生　北島中学校教諭
亀田秀雄（四段）先生　公務員
誠武館道場出身

井川理之（四段）先生　会社員
正木幸弘（四段）先生　会社員
誠武館道場出身

門下生で頑張っておられる方

丸本　薫（三段）　主婦
田中晶子（初段）　主婦
宮川洋美（一級）　主婦

なお、大野義則先生におかれましては、平成十九年一月二日、御逝去されました。ここに謹んで御冥福をお祈りします。



体育功労賞

少年剣士と二人三脚

中村稔裕

この度、体育功労賞を頂けるとの知らせを受け「えー私が」と驚きの気持と、残された人生「もう少し頑張ってみるか。」とまた新たな気持が持上ったところです。

三十四年間の刑務官生活を定年退職し、今は月、水、木曜日の三日間を中学生と、火、土曜日の二日間を小学生との稽古を楽しみにしている。刑務官現役時代は、ただがむしゃらに体力の続く限り激しい稽古に終始したが、今、少年剣士達の前に立ち指導する立場となると又違った緊張感がある。今担当している中学生は、中学生になってクラブ活動として剣道部に入部し、初めて竹刀を握った生徒が大半であり、体力の向上と技術力の向上の二面性をもった部活動として展開している。特に中学生は学業と部活の両立であり、午後三時から午後五時までの二時間が部活動としての稽古となっており、その後、生徒達は学習塾に直行と実にハードな時間消化である。

一方小学生は、午後七時三〇分から午後九時三〇分までの稽古であり、肉体的に発育途上であることから大きな故障を起させないよう注意を払っている。特に低学年の人達は午後八時を過ぎると少し眠くなってくる時間帯であり、もう少しだ頑張れとハッパを掛けているところである。

ところで、人に教える難しさは大人、子供の別なく根気と優しさが一番である。子ども達が自ら進んで道場に来ているか、即ち積極的に稽古に取り組む姿勢があるか否かで上達度に大きな差が出て来る。しかし、指導者は落ちこぼれを作る事は許されない。より多くの時間を掛け短時間に作り上げていかなければならない難しさがある。

子供達の指導には

「やって見せ、言うて聞かせてやらせてみて
ほめてやらねば人は育たず。」

と言う山本五十六の言葉通り、基本はこうだとまずやって見せる事、そして何故それが必要かを細かく言うて聞かせる事、子供達は先生の所作を真似る事から始めるために繰り返して教え、その都度理解度を確認する必要がある。そして最も大切な事は正しく出来た事は即ほめてやる事。これは先生が自分を認めてくれたと言う大きな自信になるものである。

今は、力まかせに叩かれる痛みに耐えながら少年剣士達の日々の上達を楽しみに、少年剣士達と二人三脚の日々であり、少年達が剣道をして良かったと心の中に大きな財産を作ってくれる事を願い、老体にムチ打つ毎日である。

平成18年度　徳島県中学校剣道優秀選手

No.	男子	学校名
1	藤本　稜	相生
2	原　悠介	徳島文理
3	岡田　紘平	徳島文理
4	鈴木　智也	徳島文理
5	曽根　健貴	徳島文理
6	淀谷　瑞木	徳島文理
7	原田　知典	徳島文理
8	元木　涼	鳴門第一
9	平野　将司	鳴門第一
10	小倉　大典	鳴門第一
11	川邉　祐樹	鳴門第一
12	宮浦　昌平	鳴門第一
13	河村　俊平	鴨島第一
14	桑原　大樹	鴨島第一
15	小倉　歩	鴨島第一
16	松本　真生	那賀川
17	谷口　真一	那賀川
18	小西　貴大	那賀川
19	山田　渓太	那賀川
20	臼木　郁登	羽ノ浦
21	酒巻　奈暉	阿波
22	近藤　平	上八幡
23	山ノ井　拓也	阿南第一
24	坂本　圭次	坂野
25	武市　一樹	城ノ内
26	坂東　剛	入田
27	家長　崇裕	城西

No.	女子	学校名
1	仁木　悠美	阿南第一
2	湊　友里	阿南第一
3	湯浅　萌	阿南第一
4	近藤　陽香	阿南第一
5	若江　美香子	阿南第一
6	佐藤　美優	阿南第一
7	市瀬　祐希奈	那賀川
8	芳田　百香	那賀川
9	今川　知美	那賀川
10	森本　志穂	北井上
11	小出　朋代	北井上
12	美馬　香苗	北井上
13	菊岡　星花	北井上
14	加重　汐理	北井上
15	竹内　美貴	北井上
16	福田　あい子	牟岐
17	浦岡　綾音	牟岐
18	柳瀬　美希	牟岐
19	櫻木　舞	坂野
20	藤本　雅代	池田第一
21	生田　圭	城ノ内
22	桑原　麻美	阿波
23	西山　史織	小松島
24	岡本　真実子	土成
25	大久保　紫陽	三好

平成18年度　徳島県高等学校剣道優秀選手

No.	男子	学校名
1	神元育巳	阿南工業
2	美馬健太	阿南工業
3	松本和起	阿南工業
4	櫻木雄一郎	阿南工業
5	大津孝太朗	阿南工業
6	塩田伯大	阿波
7	岡野飛斗史	城北
8	安田明博	城北
9	美馬秀一郎	城北
10	森本龍毅	川島
11	林義真	川島
12	岩雲大樹	川島
13	藤本健太郎	川島
14	大磯元	徳島市立
15	西岡佳祐	徳島市立
16	近藤徹	徳島市立
17	片岡将志	徳島文理
18	西岡敬太	徳島文理
19	玉田赳大	徳島文理
20	松田昂也	徳島文理
21	横手隆介	富岡西
22	市瀬裕樹	富岡西
23	四宮啓登	富岡西
24	菱本慎也	富岡西
25	吉田和也	富岡西
26	岸貴之	富岡西

No.	女子	学校名
1	高島沙也加	城北
2	小西沙弥	城北
3	神戸咲枝	城北
4	佐藤友香	城北
5	井上さゆり	城北
6	清楽真理子	新野
7	柳谷美沙	川島
8	隅田奈美	川島
9	白木彩	川島
10	井上舞子	徳島市立
11	坂本鮎美	富岡西
12	池田佳南	富岡西
13	長地千景	富岡西
14	山崎奈々	富岡西
15	前川亜希子	富岡西
16	河田紋	富岡東
17	細川美幸	富岡東
18	元木綾子	富岡東
19	中野加菜	富岡東
20	北野瑶子	鳴門

先生を偲ぶ

寺西慶裕先生を偲んで

警察支部　平野誠司

昭和四十七年春、私は旧鳴門警察署の東側にあった柔剣道場で行われていた少年剣道クラブの門下生となった。小学二年生も終わりの頃であった。

寺西先生は鳴門警察署刑事課鑑識係で勤務されており、勤務を終えると道場へ直行し、当時四十名近くいた少年剣士の指導を週三回行っていた。

鳴門少年剣道クラブには、常時四～五名の先生が来て熱心に指導していただいていたが、中でも寺西先生の存在を抜きにしては語れないほどで、特に指導するときの気迫は子供心に身の縮こまる思いであった。「なんて恐ろしい先生なんだろう」と入門した当初は縮み上がっていたのを思い出す。先生が稽古に来るか来ないかで道場内の雰囲気も全然違っていたし、「先生、今日休まないかなあ」と真剣に思っていたころが懐かしい。

先生の厳しさは技術指導は勿論、勝負に対する気であったり、礼儀や行儀といった躾的なことや目上の人に対する尊敬の念であったり、まさに道場教育そのものであり、武道を通しての人間教育であった。

先生の人徳を表すのにこんな話が思い出される。小学校を卒業したある少年剣士（私は中学生）、中学で少し道を外れて非行に走った。親御さんも手を焼いていた。その時、先生はその少年に対して、

「おまえが人の道に反する事をするなら、育てた先生の責任。おまえを切って先生も腹を切る。」

一体どんな非行を犯して、どのような機会に言ったのかはよく覚えていないが、『日本刀』とか『腹を切る』という警察官であった先生の言葉に強い衝撃を受けて今でも忘れることができない。そこに先生の少年を育てるということの真剣さと、自称・侍を語っていた先生の意気が伺える。先生が指導する厳しさの所以はこの真剣さにあったのだ。

当時、鳴門警察署の道場には『道場心得』が掲げてあり、稽古の終わりには全員で唱和するのがお決まりであった。

『道場心得』

一、道場の出入には、神前に礼し、師同輩に礼儀を尽くすこと。

二、道場は常に清掃されていること。

三、道場では真剣な心で稽古に励むこと。

四、剣道具の整とんを確実にすること。

五、剣を学ぶ誇りを持って、正しく強く、人の模範となること。

この唱和する声が小さければ、何度でも「もう一回」の檄が飛んだ。

全日本少年剣道錬成大会（中学の部）での入賞報告
中央は寺西先生、右は谷光次鳴門市長

私は高校まで道場に通い部活と両立させたが、昭和五十七年に旧道場は老朽化により取り壊され、現在の鳴門市光武館道場が新築され再スタートをきった。移転した後、私は大学進学のため大阪に身を置いたので道場とは少し遠ざかってしまった。

平成九年の春、いよいよ長女が剣道を始めることとなり、再び道場でお世話になることになった。昨年亡くなられるまでの約九年間、先生はお体を不自由にされていたが毎回道場に顔を出されて少年達の稽古を見守り続けた。

稽古終了の互礼が終わると、少年達は先生を取り囲み静座する。恒例による剣道講話が始まるのだ。剣道修行における心構え等のお話が中心であったが、静かな口調ながらも少年育成にかける熱い思いは変わっていなかった。素直にすごく嬉しかったし、剣道教育で最も大切にしなければならない光景であった。

先生の一貫した教えである

「剣を通して心と身体を鍛え、社会に貢献できる人となれ。」

とは、まさに現代社会に活きる少年育成の精神であり、私も先生の薫陶を受けた一人として微力ながら後押しができる剣道家でありたいと思っている。

これからも鳴門市の剣道発展と少年達の成長を天国から見守っていただけるようにお願い申し上げ、また私を剣の道に導いていただいた恩師に心から感謝申し上げます。

ありがとうございました。

合掌

亡き夫を偲んで

寺西　ひとみ

「何事にも一生懸命になる人だな。」私は主人のことをいつもそう思っていました。仕事も剣道も人のお世話も。晩年になっては、治病もリハビリも、特に少年剣道に関しては生命がけだったと言っても過言ではないと思います。今思っても口惜しいのは、昨年一月の第十八回寺西杯剣道大会に、主人はどうしても出席すると言って聞かず、医師を急き立てて、焦って死を早めたと思うのです。もっとゆったり治療してさえいればまだまだ生きていられたのにと、今更どうにもならない事ながら忘れられず、故人もどんなに残念であったかと、思い出す度に涙が出ます。

昨年一月九日、主人旅立ちの日は、真冬なのに日射しが暖かく無風で穏かな日でした。

翌日が寺西杯大会であった為、参加者全員から黙祷をして頂きました。また遺影を飾って頂き、みんなが亡くなった事を知って下さって葬儀には遠く小豆島や松山からも焼香に来て下さいました。賑やかな事の好きな故人を、本当に大勢の弔問客で式場を埋めつくして下さり、「鳴門玉鳳院始まって以来の弔問客」と言われる程の葬儀でした。

「武士は死に際が大事なんじゃ。」といつも言っていた主人にふさわしい最後を、皆様でお作り頂いたと感謝しております。その上、光武館の子供たちまでが、がんばって第八回大会の優勝旗とカップを主人の枕元に持ち帰ってくれたのです。この優勝旗は主人が、「寺西杯大会を作ろう」と保護者やＯＢの方から話があった時、「旗とカップは私が用意したい。」と言って作ったものだけに枕元へ置いてくれた時、あの人の魂にはズシンと響いたと思います。どんな花や供物や告別の辞よりも子供たちのがんばりが一番嬉しかったのではないでしょうか。

五十余年前、池田署勤務の主人と結婚しましたが、警察大会で優勝したと大喜びする剣道キチガイと、剣道未亡人の妻を二十六年間やって来ましたが、ある年、子供たちと飲み明かした正月二日、四人で初稽古しようと光武館へ行く事になりました。昨夕から私一人蕁麻敷（つんぼさじき）に置かれて、楽しそうに剣道の話ばかりする家族に堪忍袋の緒が切れた私は、「今年から私も剣道するから宜しくお願いします。」と言ってしまっていました。主人は待ってましたとばかり喜んで、「早速道場へ来なさい」と私も引っ張って行きました。

竹刀も握ったことのない私に胴着を着せ、先ず記念写真を撮ったのです。昭和五十八年私五十才のお正月でした。

師匠としての主人は、私にのびのびとした剣道をやらせてくれ、剣道の面白さを味わわせてくれました。その年の夏、県下女子大会段外の部で準優勝し、長女が三段以上の部で優勝したことは、

我家の剣道史の一頁を飾りました。

「お前が剣道しとってくれて本当によかった」

病気になってからの主人がよく口にしていた言葉です。杖をつきながらでも亡くなる半月前まで道場に顔を出し「三分間訓話」といって子供の心育てをしていました。今、私は主人の遺志を受け継いで、光武館の灯を灯し続けて行くことが優しかった主人への恩返しだと思っています。

主人は本当に倖せな人生を生きた人です。三人の子供、六人の孫、おまけに女房まで自分の好きな剣道の世界に引き込んで一つの目標を歩ませたなんて、自分でもきっと「わしは倖せだったな。」と思っているに違いありません。

終りになりましたが、生前主人がお世話になった諸先生、剣道に携わる方々、保護者の皆様、少年剣士の皆さんに紙上を借りて心からお礼を申し上げます。と共に後に続く者をどうか宜しくお引き立て下さいますようお願い申し上げ拙文を終らせていただきます。

「ありがとうございました。」

合掌

昭和58年１月　光武館にて

美馬政雄先生を偲ぶ

名西支部長　大西正範

御逝去を聞いた時、名西支部の一つの歴史が終ったと思った。先生は幼少時、久保利雄先生に長じて麻植中では石井隆介先生、須見誉富先生の下で修業されている。多くの剣友とりわけ同期（麻植中）現連盟副会長高下正義先生と共に名西支部、県剣道界を牽引され、石井剣道教室、石井町体育講師、県剣連役員、支部稽古会にと多大の御尽力を戴いた。又徳島を代表する剣士として、多くの対外試合に出場された。京都大会では、連続して三十二回の出場を誇られている。

これら多くの功績に対して、県体育功労賞、全日本剣道連盟有功賞を受賞されている。尚忘れられないのは、酒豪として、名西にその人有りと報じられていた。今は亡き先生方と剣を愛し酒を愛し交剣知愛されていると思う。

美馬先生！安らかに！

ありし日の美馬先生

美馬政雄先生を偲ぶ

徳島県剣道連盟副会長　髙下正義

美馬君との出合いは、昭和十四年、今から六十七年前のことである。旧制麻植中学校に入学し、同級生で剣道部員であり、当時の横田武文先生の指導で共に稽古に励んだ。県中等学校大会では美馬君は先鋒、小生は中堅で二回優勝した。中学時代は隠れて面白半分に煙草を吸う者が多かったが、美馬君は友達から勧められても絶対に吸わなかった。悪いと思った事は絶対にしない善良な堅い中学生であった。

時あたかも太平洋戦争の最中で、四年生で海軍飛行予科練習生として、滋賀航空隊に入隊した。特攻隊要員として訓練を受けたが、昭和二十年終戦となり復員した。昭和二十年代から三十年代は家業の食員製造販売に多忙な日々でお互いに疎遠であったが、昭和三十八年頃から第一回の神山町武道大会を契機に、剣道愛好者の連係で剣道熱を盛り上げた。名西高校乾先生・鎌田毅先生の努力で名西支部の稽古会が始まり、麻植中卒業生と名西支部による阿北大会の開催、石井少年剣道教室の稽古会等、美馬君が中心となって名西支部の剣道発展に努力した。

又四十年頃から四十三年まで、石井町藍畑の須見善富先生のお宅へ、美馬君と毎週土曜日居合の稽古に通った。その後居合は五段錬士まで進んだが、須見先生、石井隆介先生が他界し指導者を失ったので、居合をやめて、剣道に専念しようと言うことになった。昭和四十九年には永年念願の剣道七段に合格し、お互いに祝福した。又県剣道連盟の常任理事を五十六年から四年、審議員を六十年から平成十八年まで二十一年間務めている。剣道審査および連盟の重要課題に協力してきた。

又毎年五月に行われる全剣連主催の京都大会には三十三年間連続出席したと自分で誇りとしていた。私も共に出席し、朝稽古、試合に汗を流した。彼は仲間との宴会の世話をするのが得意で、京都大会での慰労会は何時も彼の計画で楽しい機会を作ってくれた。名西支部の宴会も彼の主導的役割によるものであった。

重井好高先生との縁で、京都の岳田範士との繋がりができ、美馬君がよくお世話をして、徳島へ京都武道館の少年剣道の少年達を招き、石井町神山町の少年達との剣道交流をはかっていた。又名西支部の一行も京都の岳田先生関係の少年剣道場へ稽古や大会へも参加し、交流した。これも美馬君が大変努力した。久保勇先生の後任として高浦中学校の剣道講師として、永年剣道の指導を続けていた。生徒には愛情を持って指導をされ、生徒からは慕われておったと思う。私が審査に出席した時は必ず生徒の結果を電話で聞いてきた。県中学校の大会に出席出来なかった時は高浦中学校生徒の状況を詳しく聞かれるので注意をして見たものです。

美馬君は一徹者の堅い人物であったが、家族にはやさしく家族

を大切にされ、家族の言うことをよく聞いた。晩年、C型肝炎におかされ体調をくずしたが、高齢剣の大会では、自分で道具が着けれないのに次男の介助で出席し、試合に立ち、最後まで剣道を愛した姿は立派であった。

健康な身体であったが、病気には勝てず八十一才で永眠された。本当に残念。六十有余年の友達としての友情に感謝すると共に安らかなる御冥福を祈る次第です。

尚、永年美馬君に御交誼賜りました皆様に、美馬君に代り厚く御礼を申し上げ、皆様の御多幸をお祈り申し上げ、美馬君を偲ぶ文と致します。

西山勝喜先生を偲ぶ

海部支部長　滝本博文

剣道教士七段西山勝喜先生の訃報に接し、急にどうしたことか目の前が真暗になりました。

西山先生の不動の構えが浮んで来るようです。

先生は、木頭村南宇（現那賀町）で、西岡信太氏（農林業）の三男として生まれ、幼少年期は、山紫水明の地で過されました。昭和十七年十二月一日、歩兵第一四三連隊徳島補充隊に志願兵として入隊されています。先生には次のような戦争体験をよく聞かされました。

中国武昌で帝国軍人として教育を受ける。さらに中国桃林で、下士官候補の教育を四ヶ月受け、終了後、昭和十九年四月より湖桂作戦に参加。同年五月激しい戦いで、右肩部に追撃砲弾を受け、野戦病院に入院する。七月退院し、湖桂作戦に再び参戦追進する。

九月陸軍伍長を任官し、中隊本部付となり、補充兵の軍人としての教育担当となる。同十一月には桂林攻略作戦に参戦し、桂林付近は、石の山、洞窟も多くあり、攻撃が極めて困難な地である。石の山合いから敵方の動きが分かる。敵方との距離は約二〇〇メートル、敵軍との銃撃戦となり、パン、シュン、パチン、とあちらこちらと鳴り響く。我が軍陣地に対して集中射撃が始まった。あたりは弾幕で視界は極めて悪く、敵軍の動きが把握できない状況で、我が軍も必死に応戦し、大激戦となった。夕暮れ近くなり、敵軍も退却しつつ、夜になると少し落ちついて来た。翌朝から再び戦いが始まる。やがて敵軍は退却しはじめ、いつの間にか敵軍の姿が見えなくなった。

我が軍は南下し、江門中山県で警備に着いていたが、戦況は急変し、米軍上陸に備えて豪掘りの毎日であった。昭和二十年八月十七日連隊本部に集合命令が下り、陸軍大佐堀内連隊長より終戦を告げられた。ただちに軍旗を焼却し奉る。采石鎮に移駐し、昭和二十一年の正月を迎える。南京付近の道路工事作業

ありし日の西山先生

を行ない通行が可能となり、五月上海を出港した。昭和二十一年五月二十三日連隊長と共に博多港に上陸して復員式を行う。戦友達もそれぞれ故郷へと帰る。

善行證書

歩兵第二三五連隊、第八中隊

陸軍軍曹　西山勝喜

現役中品行第正、勤務勤勉、学術技法に熟達す、因って

此證を付興す

昭和二〇年五月二十三日

歩兵第二三五連隊長　陸軍大佐

正五位、勲三等、堀内勝身

先の大戦が終り、剣道廃止令により竹刀の音が消えました。戦後時の流れとともに、世の中がだんだん落ち着き、昭和二十五年頃より、剣道愛好の先生方が剣道再開することとなりました。西山先生も、木頭会館で、大沢善二郎先生の指導を受け、週三回剣道に励み汗を流しておられました。

剣道教士七段、西山先生は、すばらしい指導者であり、昭和五十七年に自宅の一角に剣道場を建設計画し、翌年五十八年に当初計画どおり、立派な剣道場が完成しました。同時に門弟子が入門し週二回熱の入った指導を行い、剣士の育成に尽力されました。平成十三年六月、体調不調で治療に専念するため、剣道場を休館とされました。

郡内少年剣道指導は、次の場所で行われました。

・海部川剣道教室（現海陽町）

・牟岐剣道クラブ

・日和佐スポーツ少剣道部（現美波町）

・由岐少年剣道クラブ（現美波町）

西山先生の指導は、挨拶の大切さ、正しい剣道の実践でありました。

一、剣道の基本、作法を正しく身につけること。

一、健康で体力の向上に努めること。

一、技能の向上に努めること。

一、生涯を通じて剣道に親しみを持つこと。

一、剣道を通じて気力を養うこと。

先生は、確固たる信念と情熱さらに誠心誠意をもっていつも指導にあたり、児童・生徒の成長する姿に、喜びをいつも感じておられました。また、海部支部長として地域の剣道の進展、剣道を通しての仲間づくり、住みよい郷土づくりに尽力されておりました。

平成十二年、体の不調を訴え、徳島市民病院に入院し、退院後は、同病院へ通院治療していましたが、再発し、平成十八年七月（享年八十三才）生涯をとじられました。

ご冥福をお祈りいたします。

剣道場の上棟式

西山先生による講演

兄・西山勝喜を偲んで「不撓・不屈」

福井軍二

兄・西山勝喜は、平成一八年七月十日、八十一才九ヶ月、我が国男子の平均寿命を越えたばかりで永眠ました。故人生前中は、徳島県剣道連盟・同高齢剣友会・同海部支部の方々には大変お世話になり有難うございました。ここに、故人に変わって心よりお礼申し上げます。

兄は、大正、昭和、平成、三時代の日本の激動期を前向きで捉え、気迫と努力、大和の精神で全てのことにおいて真剣に取り組み明るく駆け抜けてきた人生ではなかっただろうかと思います。十五歳年上の兄は、私の物心ついたときには志願して軍隊に入隊、中国戦場にいました。軍隊生活五年、昭和二十一年五月、二十二歳で復員し、まもなく、ご縁があり海部西山家にいきましたので、共に生活をしたのは短期間でした。私が三十二歳のとき、水産高校にお世話になってから日和佐町と海部町、生活圏が近くなり交流が深まり、人間の生き方、剣道修業のあり方等、様々な問題を提起し指導してくれました。兄は、自己の体験をよく私に語ってくれました。その中から少し述べますと。その一つは、作戦行動中は、落伍しかけた戦友の荷物を背負ったり、銃を担いでやったりしても、辛いとも思わなかった。あの厳格な軍隊生活をさほど苦もなく切り抜けられたのは、実に「大和塾」での剣道による肉体の鍛錬もさることながら剣道によって教えられた不撓・不屈の精神こそ唯一の賜であったとふかく有難く感謝していること。次は昭和四十五年三月、四十六歳のとき、故大澤善二郎先生はじめ、御子息孝彰先生、木頭錬心館有志の先生方と九州一周の武者修行に参加したこと。また、ある事情により一家倒産の憂き目をみましたが、その再建に腕一つで数年間悪戦苦闘し、一家再建を成し遂げたこと等です。また、私ども兄弟姉妹、親類一同を叱咤激励し続けてくれた人間でもありました。

西山が不撓・不屈の精神を培い「即断即行」忍耐強く明るく生

ありし日の兄・西山勝喜

きることができたのは、外でもなく、故大澤善二郎先生との出会いであったと思います。昭和十五年兄が十六歳のとき、木頭村和無田に善二郎先生が「大和塾」を創設されると入門、先生手ずからのご指導を受けるのがとても楽しかったようです。当時我が家は、椎茸を生産、出荷しており、十二km以上、人里離れた山奥地で山小屋に寝泊まりして、家業に従事、夕方になると一人で提灯を持ち険しい山道の峠を越え三時間近くかけて「大和塾」に通い・剣道で心身の錬磨と「大和」の精神を学んだことが大きな原動力となったのではないかと思います。

故大澤善二郎先生には、兄金若、私も剣道の手ほどきを懇切丁寧に賜り、善二郎先生がご逝去されてから十数年して三兄弟、七段を授与され身に余るしあわせです。

故堀江幸夫先生書による西山錬心館前の石碑

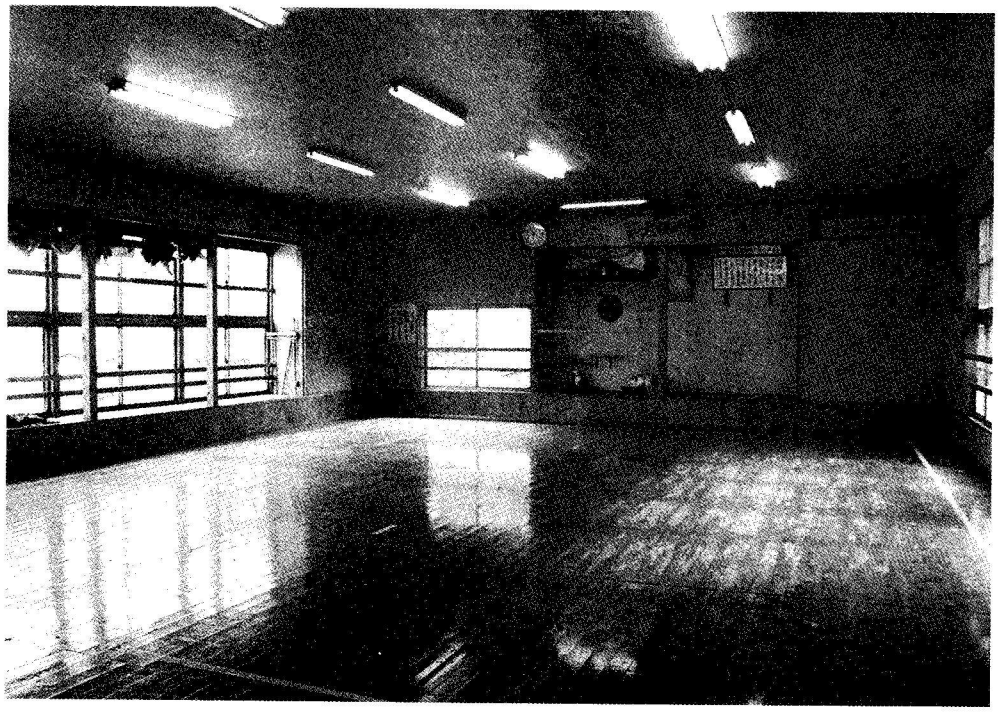
西山は、復員してから四十年後、昭和六十一年五月剣道七段を授与されると、その六月念願の「西山錬心館」を清流海部川近くの自宅に完成させ、道場開きは、故堀江幸夫先生をはじめ、大澤孝彰先生、その他多数の先生方をお迎えして盛大に行われました。その後、私も夏季合宿等で汗を流しました。開館して二〇年、困難に耐え「大和」の精神で築いたこの道場で、兄西山勝喜を送りました。先日、静粛な道場で座禅、黙想しますと、「剣道は行を旨とし、自己判断と反省によって心を練ることが肝要」と、兄の昔の言葉を思い出していました。合掌

おわりに、「西山錬心館」は、現在閉鎖していますが、稽古は可能、皆様方互いの稽古を故人も喜ぶと存じ記します。

記

場所　海部郡海陽町大井字田尻
道場　床面一試合場程度　車十台駐車可
春季・夏季道場宿泊等　三〇名

道場全景



西山錬心館道場内

百三才剣道範士 竹原常雄先生は世界一

勝浦　守

太平洋戦争に敗れ、大日本武徳会は解散させられ、一時は剣道滅亡かと思われたが、真に剣道を愛し、修業を重ねた愛好家の懸命の努力で連合軍の許可も取付け今日の剣道の隆盛を得たのでありました。この事の裏に於いて先輩・先生方の並々ならぬご尽力があったればこそと切に思うのは私だけとは思えません。

その第一人者で私設道場を開設して大勢の剣士を育成し、更に指導者の養成にも尽された竹原範士先生のご功績は、最高に思えました。その上、当時岡山に住んで居られた高島永吉範士先生を本県にお迎えして、本県剣道界を全国レベルに発展させて戴きました。そうして高島流発足面や香川の植田平太郎先生の竹刀、体捌きの極意を自ら身につけられ、之を指導された数々の名場面は忘れられません。先生は常に健康に留意され、その証を次のように申されていました。「何処ちや痛い所も凝る処もなく面を打たせばシャーンとするわ」と。

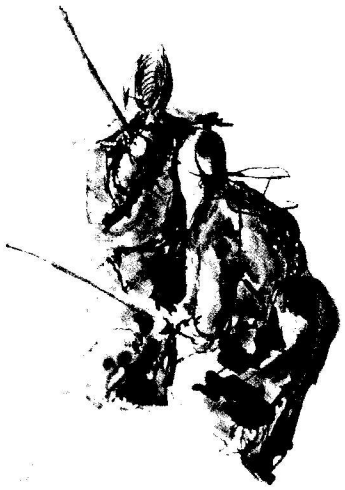
又ご生前最後の誕生日に西野氏と二人でお祝いに参上した折、期せずして「おゝ西野君、勝浦君」と夫々正確に呼んで頂いた時の視聴覚の確さに驚かれました。百拾才までは大丈夫の大笑いでの祝福でありました。その上更に数々の記録に残る試合も拝見させて頂きました。

その後ご容態の急変で百三才のご高齢を全うされた天寿に私達は指導者の鑑として後世にお伝え、心からご冥福をお祈り申し上ぐる次第でございます。

合掌

追記先人の遺訓

生くるも死るも皆間合、剣道も射雲も同じ間で
打間の取り方体で覚え、先手打突、是必勝。



一〇三才四ヶ月の反省

竹原　実太郎

この度は有りがたいことに「父竹原常雄を偲ぶ」というテーマを頂きました。『徳島の剣道第二十号』で「父竹原常雄について」一〇〇才記念に書かせていただきましたが、不遜にもあれは百才を目指す後継の先生方へのご参考になれば望外の幸せという気持ちが何割かありました。ところが今回の突然死によっていくつかの問題点が出てまいりました。従って何はともあれ急いで反省加筆する必要に迫られましたので勝手ながら内容変更をお許し願いたいと存じます。

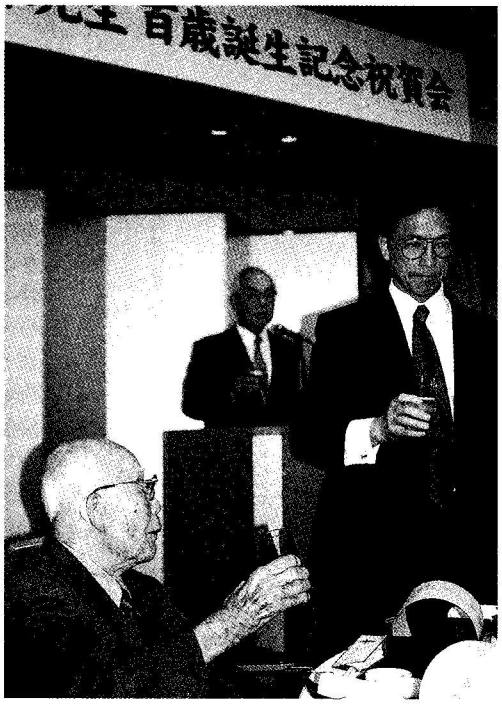
先づ第一に父は一〇〇才になるまで前立腺肥大や白内障など老人病と言われるものには縁がなく元気でしたので「余病が出ずこの侭推移すれば一一五才も夢ではない」と国府町で内科を開業する孫娘のひいき目の見解でした。筆者も昔から調子に乗る悪いクセがあってこの分なら一〇五才まではいけそうだと、ひそかに計算していた、何故かと言うと男性では徳島でトップになれると確信していました。何事によらずトップになるというのは気持の良いもので、私ども当面の願望でした。しかし、父には少し気がかりな弱点がありました。それは永年にわたる喫煙でしす。喫煙指数というのをご存知でしょうか。「一日に吸う本数×喫煙年数」二〇〇以上ならニコチン依存症です。父の祖父で筆者には曽祖父の実蔵（天保十年生）が大正十年に亡くなるまで四六時中キセルをはなしたことがなく、囲碁を好み、当時としては珍しく八十六才まで長寿を楽しんだそうです。父は「おじいさんは八十六才まで煙草を吸い続けて異例の長生きした」これが口グセで自分の喫煙の言訳に使っていました。ところが自身八十六才を越えたトタンもう言わなくなりました。つまり賞味期限が切れたと言うべきでしょう。さて次の言訳は「今まで吸って何ともないんだから、これからも心配ない」訳のわからぬ理屈をつけて喫煙を楽しんでいました。

折から高知の大学で一〇〇才以上の老人五十人についてアンケート調査したところ「たばこ」をのむ人はナントゼロでした。筆者は思わず愕然としました。何故かと言うとこの調査はよく見ると精度が高く五十人でゼロと言うことは確率から言って喫煙する人は百才以上生きられないと思ったからです。たばこの煙は四千種類以上の化学物質を含有し、そのうち二百種類はニコチン、タールなどの有害物質で血管を収縮し血管壁を傷つけて動脈硬化を促進して癌を誘発するそうです。若い人が熟年になって、皆たばこを止めるのは喫煙の恐ろしさを知ったからで、若したばこに害がないのであれば誰もが喫煙を楽しむ筈です。

禁煙の先輩として筆者は、例によって繰り返し父に進言しました。父はいつものとおり庭に面した椅子にもたれて聴いているよ

うな、いないような分の悪い時はおよそこんな様子で沈黙を守っていました。今にしてこの時の情景を想起すると一瞬涙があふれそうになります。父が亡くなって悲しいと思ったことはないのに親子とはこんなものだろうか。「余病が出ずこの侭推移すれば」と彼女は言ったが認識不足でした。既に平成三年暮も押し迫った十二月末に心臓発作のような症状で近くの病院に緊急入院しました。父にとっては人生最初の入院でこれが道場を閉じるキッカケになったと二十回記念号に書きました。さらに平成十六年十二月六日特養老人ホームで夜中二度も倒れ、急遽眉山々麓の病院に入院しました。医者は肺炎のような症状だと言っていました。

越えて平成十七年十一月二十九日、ぶるぶる震え、熱三十八度二分、往診をお願いして点滴、翌日には回復したが、こんなことが繰り返されると油断は出来ないと筆者は日記に書いています。若しこの時点で専門的に集中治療すれば、一〇五才達成は可能だったかも知れません。父はあくまでも元気で介護に来る父の娘たちまでおじいさんは「中々死ねへん」と言っていました。しかし、長年の喫煙で考えてもみなかった「肺がおかされている」と認めざるを得ない状況になりつつありました。平成十八年になると五月に二回、六月と八月に各一回全く同じ症状でその都度点滴を繰り返していました。もうこの頃になると見事な回復力は影をひそめ、以後は熱も出なくなり、一〇三才の誕生日である七月十三日には衰弱が目立ってきました。反発力を失いかけた老体は坂を転がり落ちるようになって周囲の者ももう打つ手がないと思いはじめました。長寿をめざす老人にとって喫煙の弊害はことのほか深刻で対応する手段は皆無にひとしく防戦一方になりました。



百歳誕生記念祝賀会での父・竹原常雄

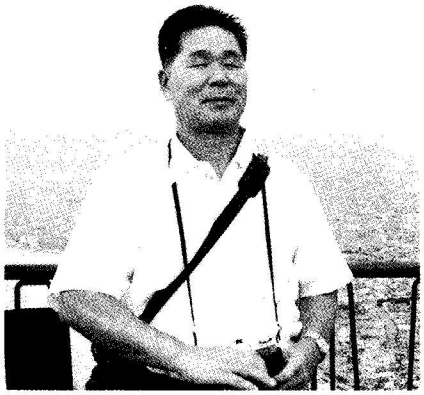
人間は四〇兆とも七〇兆個とも言われる細胞があり活動し生命を維持しているが、すべての細胞に栄養を運ぶのが血液であり、それ自体動かすのはポンプの役目をする心臓であり、浄化するのは肺であります。人間の肺は気が遠くなるような緻密な構造になっていて修復は極めてむつかしく、心臓と共に心肺機能と呼ばれ生命の根幹をなしています。栄養は腸で吸収され血液に託されるが、血液が動かなくなったら打つ手がありません。前の晩まで食べていた食事で生命維持が出来ると勘ちがいしていた筆者は取り返しのつかない過誤をおかしたことになります。つまり御飯を食べている間は心配ないと永い間信じていたのは間ちがいでした。

さて健康寿命とは平均寿命から病気や障害などで入院や要介護の状態になった期間を取り除いた寿命のことです（世界保健機関WHO）。父の健康寿命は家政婦が稼動した二年間を引いても一〇一才四ヶ月になります。御厚誼を賜った皆様のおかげです。十一月十五日早朝父は家族に何も告げず忽然と自ら黄泉の旅に出ました。嗚呼！一〇三才と四ヶ月、一〇五才の奇跡は成りませんでしたが、若し逆説的な表現が許されるなら父に喫煙の習性がなく理想的な人生の伴侶を得たならばおそらく驚異的長命が実現したであろうと思われます。ともあれ筆者は母の没後十八年間父の長寿の手伝いをして数多くの具体的教訓を得ました。折にふれ、いずれ『長寿のすゝめ』について語りたいと思います。

父・竹原常雄（百歳当時）

武道家中西敏治先生 道場で大往生

阿南支部　西岡　侃



ありし日の中西敏治先生

平成十九年一月二十日、早朝稽古を終わり、神殿に、お互いに、礼をし稽古の反省を兼ねての雑談を和やかに行い、「さあ！帰ります」の挨拶をして、私が我が家へ帰ったとたんに電話で、「中西先生が道場で倒れた」、の知らせあり、駆けつけて聞くと、中西先生が袴等をきれいにたたみ、防具を持って立ち上がろうとした時、腰から砕けて倒れ、まだ共に残っていた、平正明先生が、救急車を呼び車が来るまで、前の職場（自衛隊）で修得した人工呼吸法を繰り返し実施致し、阿南共栄病院へ運び込んでくれたが、脳梗塞で意識不明のまま、医師や家族の手厚い願い、看護の甲斐なく一月二十八日、享年八十五歳でお亡くなりになりました。

中西先生は、若き頃は学校の教職に務められ、阿南市立桑野小学校の校長先生等を永く務められ、その功績は多大でありました。その傍ら武道を愛し趣味として学び続けられました。剣道のほかにも色々と資格を持っておいでられます。

剣道教士七段、柔道六段、銃剣道錬士五段、居合道五段、吟道師範八段、指圧師（浪越徳治郎先生門下）、四国霊場会公認・権中先達等、七種類の道を歩んでこられたことは、誠にすごいの一言に尽きると思います。さらに、そのご主人を支えた、奥様の内助の功は、ご立派と言っても過言でないと思います。

中西先生は、平成十四年五月に七段を七十九歳で修得されておりますが、いつも稽古される前に必ず十五分ぐらいは自分流の体操を行い、それから稽古を始められます。特に初太刀を大切にされ、構えを崩さない攻めの剣道で、一人に対し五分ないし長くて十分で切り上げていました。私等が打ち込んで行っても構えを崩す事なく対応します。やはり柔道六段を修得されておられるので下半身がしっかりされているのだと感じました。攻められて構が崩れると隙が出来打たれる事につながります。それと引き技などはいっさい致しません。剣道の教科書どおり、攻め勝って打つを、心掛けていました。

そして何時も礼儀正しく、言葉も控えめで「自分はまだまだ未熟者です」と言ってこつこつとお世話をして下さいました。武道親交会の演武大会でも受付係も嫌がらず朝早くから出て来て黙々とやって下さり、清原杯争奪県下大会の準備会でも毛筆で出場者名を書いて下さりました。

武道を愛し趣味として学ぶ者は、常に道を求め徳を修める事に

専念しなければ、その道の達人になれないことは皆様も良くご存じと思います。人の道を歩む者は、共同生活を大切にしなければならない、自分一人だけの利己主義を考える人は、天をあざむき人の道から踏み誤る事になる、その意味から武道を学ぶ人は常に集団生活を大切にして（組織を）人のお世話をしなければ武道の道に反することになる、此のような事を考えると中西敏治先生は、高齢者でありながらも、こっこっと良くお世話をして下さいました、誠にありがとうございました。

一月二十九日に告別式が行われましたが、ご遺族代表の挨拶で、「好きな剣の道にて道場にて倒れた事は、大往生です」とおっしゃって下さいました。その上香典、花輪等は一切要りませんとのことで、奥様の懐の大きさに一本打たれました。

また、剣道連盟阿南支部に対し金一封が、寄付されました事も謹んでご報告いたします。

最後になりましたが、中西敏治先生のご遺徳を偲び、その一端を記し、心から冥福をお祈り致しますと共に、奥様をはじめご遺族のご健勝とご多幸を心からご祈念致します。

合掌

平成19年１月８日　阿南支部稽古始めの時 居合をされる中西先生

朝稽古の先輩 土井司先生
（剣道教士六段）を偲んで

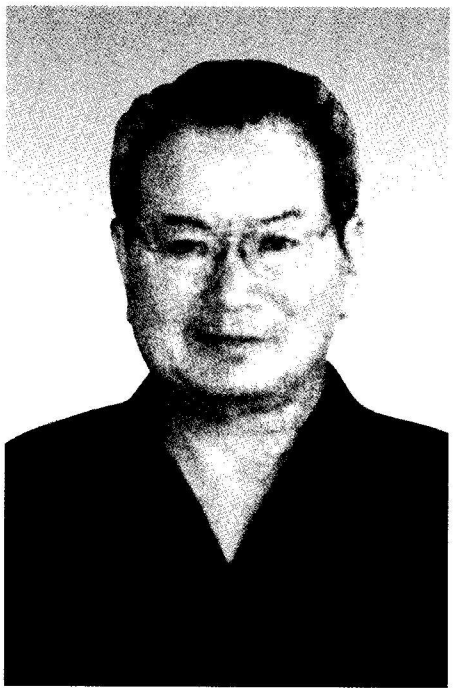
阿南支部　中山啓男

私たち剣道仲間が早朝稽古を始めてから既に二十年以上の歳月を重ねた。土井先生は初日から参加された中の一人であり、特別のことがないかぎり稽古を休むことはなかった。また、稽古が終った後の仲間との剣道談議の中で、喉を潤すために湯茶を持参接待してくれるのも先生でした。

平成十五年五月十七日、土曜日の朝、いざ稽古という時に軽い脳内出血を起こされた。内儀に急を知らせ、仲間数人で阿南共栄病院へ運んだ。医師たちの手厚い治療のおかげで、九月には退院できてリハビリに専念し、回復も近いと期待していた矢先の昨年六月二十六日案じていた肺炎を併発し帰らぬ人となった。

先生は昭和十三年三月上那賀町桜谷小学校を卒業、同年四月旧制海部中学校に進学し、五年間を日和佐で下宿生活を送った。剣道は小学校から始め中学校に進んだときは浅井先生の指導の下にレギュラーとして各種の大会に参加し、海中の貴重な存在であったと、当時の同級生たちが証言している。先生には大きな自信と誇りであったに違いない。

中学卒業後、教職の道を選び、相生町平野小学校の助教として輝かしいスタートを切った。しかし、翌十九年一月徴兵検査を受けて甲種合格となり、一月十五日広島市西部第六部隊に入隊、直ちに中国戦線に野砲隊の一員として参戦した。東洋平和のために戦った日本はその目的を果たすことなく敗戦を迎えた。陸軍少尉の任官も空しく二十年九月に静岡の三島市に失意の復員となった。その後、郷里宮濱村の農協職員となって二十三年一月まで勤務し、ふるさとの発展に尽した。その後県庁及び出先機関の職員として五十七年六月までの三十四年間職務に精励した。退職後は桜谷集会所で郷里の子供達を集めて習字教室を開き、倒れる日までの二十余年間殆ど休講することはなかったそうである。倒れたあの日も習字に行く予定だったとのこと。先生の生真面目さ、一徹さを窺い知ることができる。しかも自宅の春日野からの往復距離が実

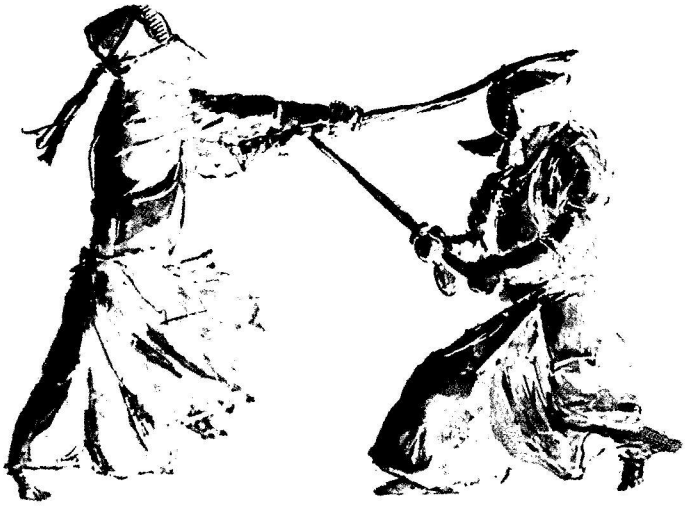


ありし日の土井司先生

に一〇〇キロ余とも。将に郷土愛の鏡といっても過言ではあるまい。一方、特技の剣道では、橘少年剣道教室から師範として迎えられ、同教室が阿南少年剣道教室と合併するまでの約十年間の指導が認められて教育委員会及び体育協会からも感謝状が贈られた。上那賀町からも立志伝の人として又ひたむきな郷土愛に対しての感謝状が贈られている。

土井先生、素晴らしい背中を示して頂いてありがとう。私たちも頑張ります。

慎んでご冥福をお祈りいたします。



大野義則先生を偲ぶ

板野東支部　亀田秀雄

平成十九年一月二日、大野義則先生の訃報を知ったのが、四十二年ぶりの中学校の同窓会が始まって、三十分程した宴会の席でした。先生の娘さんから私の携帯電話に連絡があり、「えー先生が、前日まで元気にしていたのに」と耳を疑い、娘さんに何度も聞き直したように思います。先生は午前九時、救急車で徳島中央病院に運ばれ、意識がないまま帰らぬ人となりました。

誠武館道場の代表指導者として平成十八年度全日本剣道連盟よりの少年剣道教育奨励賞受賞を一月六日に受取る四日前に、お亡くなりになり、残念でなりません。

先生は昭和六年九月十五日、大阪市で出生。昭和十九年戦時下、お母様の里である藍住町に疎開、藍住高等小学校へ編入、その後、板野高等学校を卒業され、板野町近藤時計店で修業し、昭和三十一年北島町高房に、大野宝石時計店を開店されました。先生の剣道との出合いは、昭和四十四年、故中谷智好先生が誠武館道場を私費で開設した頃、職業がら運動不足解消であったと聞いています。三十八才で初心者として入門、中谷先生に師事されました。稽古熱心で、週三回は自宅で素振りを行ない、剣道にのめりこんでいったそうです。昭和六十三年、中谷先生が亡くなられた後、誠武館道場の代表指導者となり、板野東支部長も同時に引き受けていました。

先生は子どもが大好きで、門下生を自分の子供、孫のようにかわいがっておられました。また、やさしい時ときびしい時を、子供の理解の程度を見極めて、指導されていました。先生御自身は娘さん二人に恵まれ、二女が小学二年生の時に「剣道を始める以上は、小中高と続けるように！」と娘さんと、約束をして許可されたようです。娘さんも、父との約束を守り、小中高と剣道を続け活躍をされていました。先生も特に娘さんの中高時代の剣道生活をいつも、思い出深く楽しそうに語っていました。

誠武館道場では、小学校卒業しても中学校に入学して剣道を続けて、初段を取ってほしいとの願いを込めて、門下生名と大野義則先生名を刻んだ木刀を、先生が楽しそうに門下生一人一人に手渡していたのを感慨深く思い出します。

ありし日の大野義則先生

大野先生告別式には、大勢の剣道仲間、門下生、父兄の見送りで最後のお別れをしました。特に門下生一同は先生の教えを守り、これからも一層の修練と絆を深めていくことでしょう。板野東支部の子供大好きの指導者の灯が一つ消えてしまいました。

合掌

大野義則先生を偲ぶ

田中理称

平成十九年一月二日、十四時ごろ誠武館道場の亀田先生より私の父に大野先生が亡くなられたと電話がありました。私はその時、阿南の親戚の家でいとこと遊んでいましたが、父が「大野先生が亡くなられた。すぐに支度をして、北島に帰ろう。」と言ったので私は、慌てて用意をしました。帰りの車の中でも本当のことなのか私の頭の中では混乱していました。「声が小さい」「足を出せ」と道場の中を、動き回っている大野先生が頭の中にうかんできました。そして、夏の錬成大会で私が優勝したとき「おめでとう」と言ってくれた大野先生の目に、涙がうかんでいたのを今でもわすれません。

普段のけい古は、大野先生の発する一言一言が緊張感があり、礼の最初の時から身がひきしまる思いで練習が始まります。その身がひきしまる時間が私は好きでした。

「しっかりかまえろ」、「間合いが近い」、「小手がななめ」など練習が始まると、子供達よりも大きな声で、大野先生の指導が飛びます。すると次は、門下生達が先生に負けないように大きな声を出します。大野先生は、「まだまだもっと」、「あごをひいて」など、気合を入れて下さいました。大野先生が、剣道を初められたのは、三十代後半と聞きましたが、そのころは中谷先生が掛かりげい古を、なかなか終わらせてくれなかったと聞きました。今思えば、私は大野先生が納得できるような動く掛かりげい古ができていただろうか？しっかり打ちこめていただろうか？無我夢中で掛かっていけただろうか？自分で、問い正しています。

『身を捨ててこそ　浮かぶ瀬もあれ
打たれて学べ剣の道
面一本　全てこれにあり』

この言葉は、大野先生が大変気に入っておられた言葉で、誠武館道場の正面のかべに、みんなが見えるように紙に書いて、はってくれていました。やはり大野先生は、思いきった面をとれる剣道をみんなにしてほしかったんだろうなあーと私なりに理解しています。

そして、何より大野先生が喜ばれていたのが、全日本剣道連盟より誠武館道場に少年剣道教育奨励賞を頂いたことです。大野先生は、常日頃から道場の出入りのあいさつや、父や母への感謝の気持ち、そしてまわりの方々への感謝の気持ちなど、あらゆるところに気を配られていたことを思い出します。大野先生は、少年剣道教育奨励賞の表彰を楽しみにしておられましたが、一月二日に亡くなられた大野先生は、一月八日の表彰式に行くことができませんでした。せめて賞状を、あの勇ましい手で受けとってもらい、そしてみんなの前で、あのやさしい笑顔で報告する大野先生先生を見たかったです。

最後になりますが、大野先生がみんなに伝えたかったことは、

「礼儀」「感謝」「努力」だったと私は理解しました。一年生で入門して以来、六年生の今まで火曜日、木曜日、土曜日の練習を一度も休まず、門下生のために指導していただいたことは、本当にありがたいことだったと思います。

これからは、大野先生の教えを心に刻み、誠武館道場の仲間と共に、がんばっていこうと思います。

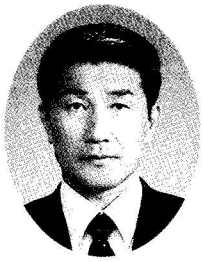
今まで本当に大野先生ありがとうございました。

合掌

全国講習会報告

剣道講師要員（試合・審判）研修会に参加して

教士八段　河田清実



この研修会は全剣連が剣道界の審判能力の向上を図るため、審判実技並びに指導にあたる、講師要員を養成する目的で行われています。平成十八年四月一日付けで二十一名が認定書を交付され、すでに認定されている五十九名と合わせて八十名が指導講師として認定を受けています。

私は平成十七年三月（第十回・東京スポーツ文化館）・十月（第十二回・日本武道館研修センター）・十二月（第十三回・東京スポーツ文化館）平成十八年七月（第十四回・愛知県武道館）と合計四回の研修会に全日本剣道連盟より委嘱されて参加しました。全国各地から五十歳代から六十歳代の八段の先生方（一部範士）二十名余りが選抜されて参加されていました。参加者の中でも私の年齢の代が一番若く毎回緊張して参加していました。それぞれの研修会により講師の先生方や指導方法が少し異なるのですが、十三回・十四回と講師の先生方は奥島快男・田口榮治・林邦夫の先生方で二日間厳しく御指導いただきました。

研修会の内容は、一日目の午前中は奥島範士から「審判員の心得について」・「審判法について」、田口範士から「試合審判規則の要点について」講義を受けました。午後からは審判実技と講師演習を行いました。四人一組を作り一人が講師役になり三人が審判をします。一組の試合は三試合です。組のメンバーを入れ替えて四回行い、講師役一回・主審一回・副審二回は必ず回ってきます。試合をしていただくのは、地元の警察の特錬生の方々です。試合数が多いのと、講師の先生方から、もっと積極的に技を出せと指令が飛び大変です。

一回目（第十回）に参加したときは、要領がわからず戸惑いました。それも講師役が三人目に回ってきて、前の二人が講師の先生から、厳しく指導されているのを聞いて、パニック状態になりました。講習会の講師になったつもりで、指導しなさいとのことなのですが、次回の審判員が待っているときの姿勢から、試合場への入退場の仕方・位置取り・動き・声・審判旗の上げ方・有効打突の判定・反則の有無など細かなところまでチェックして指導しなければ、講師の先生方から指導を受けます。審判員の先生方もすでに講師として指導に行かれている方もおいでになり、三名とも大先輩の方々ばかりなので、指導をすると言っても指摘するポイントが見つからず、また、言いづらくて困りました。自分自身がきっちりとした審判ができ、また規則を十分に理解していな

ければ指導はできません。さらに、自分が審判員になったときには、講師役の先生から指摘を受け、その上に、講師の先生から指導され、講師・審判の技術について採点され評価されるのです。厳しく指導されるとかなり落ち込みました。しかし、夕食時の懇親会で昼間厳しく指導された先生から「審判は動きが遅く全然だめでCだけど、講師役は良かった。Aだよ」と言っていただいて本当にうれしく思いました。あらためて監督や指導者に叱られる生徒の気持ちがよく解り、叱るばかりでなくほめて自信を付けさせることも大事なことだと痛感しました。

二日目の午前中は私を含め四名が講習会の講義の講師役になり、私は「禁止行為について」講義をさせられました。前もって電話で事務局から依頼されていたのですが、準備した資料が趣旨にあっていなかったため、三十分という時間は長く感じました。二回目に参加した研修会からは、全員を対象に、認識度の確認ということで四十分間の筆記試験に変わりました。

二回目の依頼文書が届いたときから緊張感を持って、試合・審判規則や審判法等について勉強して参加しました。三回目が終了したときは、もうこれで来なくていいのだろうなと思っていたら、四回目の依頼が来ました。愛知県の武道館に参加者が集合したときは、新しく参加された先生方がたくさんおいでましたが、私と同じ四回目となる顔なじみの先生方も五名おられて安心するとともに、固い絆で結ばれたような気がしました。四回目となると参加者の中で最古参になり余裕が出てきて、講師役も審判も筆記試験も無事に終えることができました。

四回参加した研修会を通して、全国各地の多くの先生方と交友を深め、講師の先生方と親睦を深めることができたことは、私にとってとても大きな財産になりました。また、主任の田口範士から「日本のすばらしい伝統文化である、剣道を正しく継承させ、さらに発展させるために、あなた方にがんばっていただきたい、そのために厳しい指導になったが、ご容赦願いたい。」という熱い思いを聞かされ、身の引き締まる思いがいたしました。

その後、インターハイでの審判副主任・全国中学校剣道大会の審判長・兵庫国体の審判員と今までの研修会で学んだことを生かして、なんとか役目を果たすことができました。また、私はまだ全剣連から認定書を交付されてはいませんが、十月十四・十五日と和歌山県の教員の研修会に日本武道館から依頼を受け、山口県の古田範士と共に講師として初めて出向き、よい勉強をさせていただきました。

今後も講師の先生方の熱い思いを忘れることなく、講師要員としてさらに研修に励み、剣道発展のためにできる限り尽くしたいと思っています。今後とも御指導のほどよろしくお願いいたします。

第四十一回剣道中央講習会（西日本）報告

鳴門支部　木原資裕

平成十八年四月二日～三日に神戸市中央体育館で行われました第四十一回剣道中央講習会（西日本）に徳島県より県警の近藤亘先生と私が派遣されました。この講習会は、毎年この時期に行われます。交通費等は全剣連より支給され、超一流の講師陣より指導が受けられ、しかも受講生の約半数が教師八段で中身の濃い稽古ができるありがたい講習会です。

今回の講師は熊本正・島野大洋・村上済範士八段であり、受講生は五十四名（教士八段二十一名、教士七段三十三名）でした。講習会の概要は以下の通りであります。

審判法　村上　済　講師

◎審判が良くなれば、試合が良くなる。試合が良くなれば、剣道がよくなる。

平成十八年度事業計画

第一　基本方針

「剣道の理念」に基づき、高い水準の剣道人の育成に心がけ、国内外各層への剣道普及を図り、社会から高く評価される活力ある剣道界の実現を目指す。

第二　重点方策

審判能力の向上ならびに試合・審判規則の厳正な運用を通じ、試合内容の充実を進める。

第三　重点内容

審判能力の向上を図るための研修、講習会の充実に努める。

(1) 審判講師要員研修会を充実させ、指導に当たる上級講師を養成し、審判技術の向上に努める。

(2) 「剣道試合・審判・運営要領の手引き」を再検討し、試合審判規則の適正な運用を通じ、試合内容の充実を図る。

(3) 女子審判能力の向上を図る。

(2)の事例

・「規則」第二十八条　審判員が有効打突などの判定に疑義のある場合は合議の上、その是非を決定する。「手引き」〈事例十一〉相打ちに近い打突に対して、赤旗二本、白旗一本の表示があった。この判定について、主審が確認の意味で合議をかけた。このような合議は適切であるか。〈解説〉不適切である。における矛盾。

・「手引き」七頁有効打突の要素が「規則・細則」には盛り込まれていない。

・「規則」第三十条の五分とは、どこから計測し始めての五分か。

○実技および講話

運営要領四頁「審判の目的、任務、心得」を中心に、規則を熟知し、剣道を善導する。

・旗の操作　審判旗は指示棒ではない。引き分けの表示は、旗の根元で交差させる。有効打突を認めない時には、両旗を前下でしっかり二～三回振る。

・審判の移動　目線が上下にぶれないように。移動後の最後の足の引きつけを確実に。

・三人の審判の位置取り　原則は主審を中心とした二等辺三角形、片側に三人の審判が集まることがないように。

・「止め」　かけるのは原則主審。ただし、主審が気づかない場合は副審がかける。（審判規則第二十四条　③副審は旗を持って有効打突および反則などの表示を行い、運営上主審を補佐する。なお、緊急のときは、試合の中止の表示と宣告をすることができる。）

日本剣道形　熊本　正講師　全講師

○講話及び実技指導

・日本剣道形制定の経緯と剣道形修錬の必要性

制定の目的及び、現代剣道における位置づけと必要性―剣道の基本修錬。「中学校令施行規則」一部改正による正課教材導入。指導の統一の必要性からの制定。解釈統一の必要性その後の加註及び、加註増補。

・剣道形修錬の守・破・離「合わせる・打つ・切る」（段階指導）「守」の段階を脱皮するだけの形の修錬がなされていない。講習会は「守」の指導。

・日本剣道形の修錬を通して剣道の原点の普及発展と伝統文化の継承。

・形稽古で体得したものを竹刀剣道にどう活かすか。――剣技、風格、品位。

・なぜ剣道形を修錬するかどう伝承するか。――礼法・所作・構えの重要性（礼法、太刀・小太刀の持ち替え、小太刀を置く位置等）形の理合の理解が重要。

救急法　日本赤十字社　兵庫県支部　秀島正憲講師

○用語や方法の統一についての講義及び、ダミーを使っての実習。

ＡＥＤなし。

指導法　島野大洋講師

［剣道中央講習会指導法資料］剣道講習会指導法の講義概要

指導法基本概念

指導法とは何か、何をなすべきか、その基本となる総論とも言うべき目標（目的）はどこに設定するのかを指導者が確信をもって策定し、それに基づいて具体的方策を展開し指導の実行にあたる。

○「剣道理念」の説明を十分にする。

○人間形成論

○剣の理法

○理念に基づいて、小学生から老人まで判る一般論として考える

必要がある。技術区分、年齢、老若男女を勘案しながら具体的指導法を作り出す。刀剣の発達の歴史を基として、操法にかなっていなければ刀剣価値を失う。剣の理法＝先達が刀剣の攻防に命をかけ、ぎりぎりの限界が積み重なって法則が生まれ、合理性が培われて剣の理法が存在する。

○剣の持つ法則性

一正しい刃筋　二物打ち　三押し切り・引き切り　四両手の把擦による微妙な掌中の作用であり手の内

○刀剣使用の合理性

○刀の特性と合理性

○教育の基本知育、徳育、体育を根幹とする。

○指導者は基本概念を持ち、方法論を展開し、指導を受ける側の納得と意欲の向上を図る。（教育のノウハウの確立）

○剣道の教育的効果（人間形成論による）

一．身体的効果　育成的側面と機能的側面

(1)育成的側面

①正しい姿勢の育成

②左右対称上下均等の均斉美の錬成

③伸暢性のある姿勢の育成

(2)機能的側面

①気・剣・体一致の瞬発力の養成

②強靭にして耐久力の有る体力の養成

③技の修錬による巧緻性と機敏性

④技の修錬による安全感覚の養成

⑤丹田呼吸の重視による安定性

二．精神的効果

(1)徳性涵養の側面

①武の七徳、剣の五徳、その他伝統的諸徳の涵養

武の七徳　暴を禁じ　兵をやめ（戦いを止め）

大を保ち（全体）　功を定め　民を安んじ

衆を和し　財を豊にする

剣の五徳　正義　廉恥　勇武　礼節　謙譲

②武道訓、諺等による社会的態度の育成

③剣道の実習を通じて実社会に生きるマナーの体得

(2)徳性展開の側面

①日常生活への展開

②社会生活への移行　調和と協同性

③社会教化への実践

剣道指導の心構え

一．（竹刀の本意）剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に務める。

二．（礼法）相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を守る指導に努める。

三．（生涯剣道）ともに剣道を学び、常に健康と安全に留意して生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努める。

終わりに（木原私的まとめ）

剣道が守るべき伝統的文化性は何か。

「剣道の歴史」（全日本剣道連盟二〇〇三）によれば、

一．武の理想と活人剣

広くは「治国平天下」と個人における「気」の沈静化・活性化による修身である。

二．芸道的側面と終生修行

「からだ」から「こころ」へという方向性を忘れてはならない。

三．競技的性格と気・剣・体の一致

日本古来の武道のルールが、他のスポーツと比較され、試合方法の適正化の提言がなされてくる。

「気・剣・体の一致」の一本の判定基準の幅をどのように理解し、対処するかが大切となる。

平成十八年度全日本剣道連盟主催
徳島県剣道（審判）講習会記録

事務局次長　手　塚　十三子

宮川英俊範士八段をお迎えして標記講習会が平成十八年四月九日（日）鳴門武道館にて行われました。以下にその概要を列記します。

質疑応答

質疑①　試合者が上段の場合の副審の位置取りについて

回答　主審を頂点とした二等辺三角形を維持しながら動くことが原則ですが、見る角度や距離を考慮してよく見える位置取りに移動することが重要です。

質疑②　試合者が次の試合者と胴突き等した場合注意は誰が行うのが適切か。

回答　審判細則の第二十二条に審判主任の任務として当該試合場の責任者となっており、規則および細則が適切に実施されているか留意するとあり、審判主任が適切と思います。

◎講習会前日に八段受講者を対象に指導稽古をいただきました。

講習会日程表

内　容	時　間
開講式	9:00～ 9:10
審判法講義	9:10～10:20
審判実技	10:25～12:00
昼　食	12:00～13:00
審判実技	13:00～14:30
質疑応答	14:30～14:35
合同稽古	14:50～15:30
閉講式	15:30～15:40

受講者数　101名

【講評】

皆さん、返し技や後の先は上手です。（返し、抜く、擦り上げる）ということは、「相手が何かしないと動けない」ということです。そういったことは八段になってからすればよいのです。私は擦り上げや返し技をする時は「8」の字を描くつもりでしています。

皆さんは先ず相手を打ち据えることです。返したり、抜いたりするのはまだ早いのです。受審途中では、まだしなくてよいのです。そういった技を出すと、審査員は「うまいなあ、器用だなあ」といった見方をします。そのような技は八段に合格したらいくらでも打てるように（必然的に）なります。

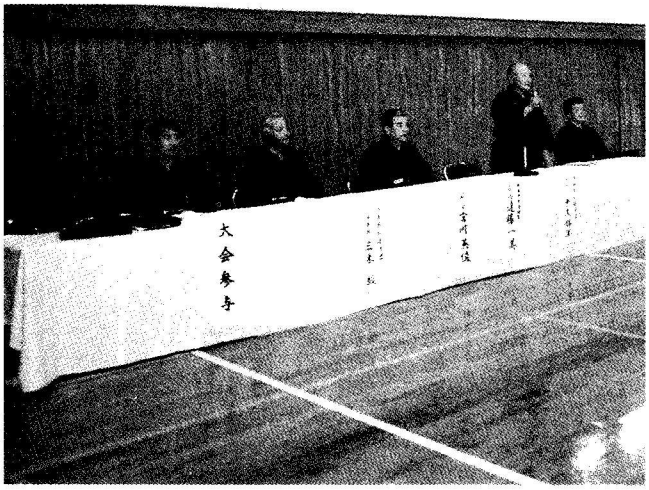
自分から打っていくことにより、「どうだ」といった気迫や姿勢を見せることになります。身を捨てて飛び込んでいく技は評価が高いのです。必要に迫られ、一つの壁を越えた時、そして相手が打って来た時、自分が「パッ」と返す、それで打たれてもよい

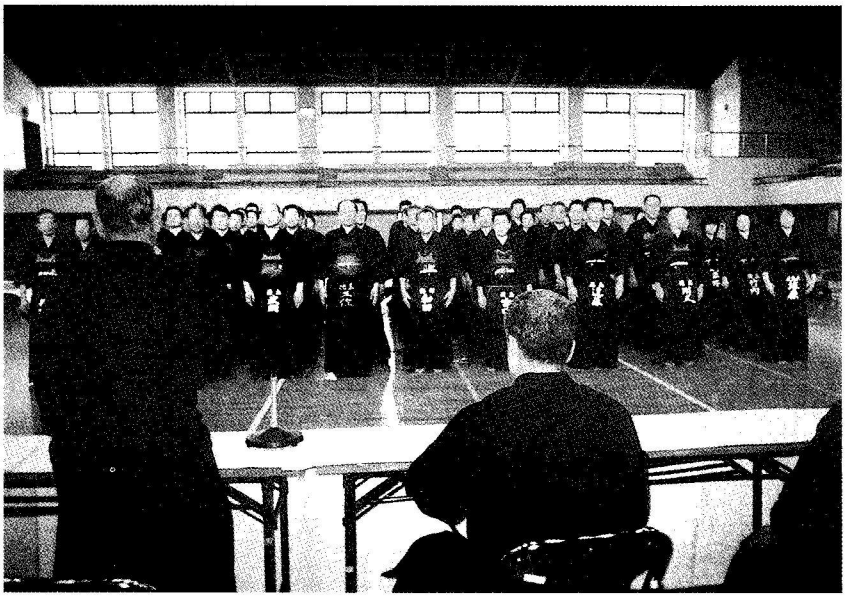
のです。うまく返されたら相手の「胴」を誉めてやればよいのです。そうしなければ、

自分の心にサイドブレーキが掛かります→剣先が鈍ります→捨て切る打ちになりません→相手に当たりません→この技しか私は打たない→スピード以上の迫力が出て来ます→普段からその稽古をしましょう→もう一つ高いところに目標を置くのです（返されてもどうということはない、打ったり打たれたりなのです。）

割り切って稽古をしないさい。捨てて技を出す工夫を。力はほとんど変わりません→どこが違うのか→どこかが、何かが違うのです→そこのところを見つけた人は変わるのです→（合格した人を見て）大したことはないと思う人は、いつまでも越えられません→気付いた人は越えられるのです→そのことが自分で判らないとダメです。

八段は剣道修行の通過点なのです。八段の合格しかないと思うから皆さん苦労されるのです。先ずは合格してから八段の修行をしてください。





剣道八段研修会

米倉　滋

全日本剣道連盟主催による第十五回剣道八段研修会が、平成十八年六月一日から同年月四日迄の四日間、東京都日野市の全日本少年剣道錬成会館において次の日程により実施されました。

六月一日（木）
講　話（武安義光　会長）
審　査　法（奥島快男　講師）
稽　古
六月二日（金）
刀の操法含む居合（上野貞紀　講師）
一般教養（加賀谷誠一　副会長）
指　導　法（松永政美　講師）
稽　古
六月三日（土）
審　判　法（田口栄治　講師）
剣道形実技（田原弘徳　講師）
稽　古
六月四日（日）
スポーツ医学（佐々木健　講師）
補講及び質疑

二日目指導法実習での切返し（中央元立ち筆者）

参加者は、平成十七年十一月合格の十二名と平成十八年五月合格十九名（一名欠席）の計三十名で行われました。

八段研修会だけに、今まで受講した講習会よりレベルの高いものでした。特に武安会長からは、「剣道界・全剣連の動き及びこれからの剣道」と題して

わが国の伝統と文化に培われた剣道の伝承と発展を図るとともに、「剣道理念」に基づき高い水準の剣道人の育成に心がけ、剣道の普及を図り、剣道を通じてわが国社会の健全な発展に貢献することを目指す。

との講話がありました。また、審査法・刀の操作法含む居合・模擬刀を使用しての剣道形実技等、ひと味違った研修会となりました。

そして何よりは、合同稽古です。参加者は、それぞれ心気力が充実し、間合いの取り方、崩し、理合にかなった打突の機会、打ちの強さ、冴え等すばらしく、大変よい稽古ができました。

剣道は奥が深く、未だ剣道の入口にすぎません。本当の剣道修行はこれからです。正しい剣道、美しい剣道、格調高い剣道を心がけ、精進努力してまいりますので、今後ともご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

居合道中央講習会に参加して

居合道部　前田健志

全日本剣道連盟主催の第三十三回居合道中央講習会が平成十八年九月十六日と十七日の両日京都市武道センターで開催されました。この講習会は各都道府県で指導的立場の者を対象に全剣連居合と審判実技の講習を行って技能の向上を図ることを目的としたもので、伝達講習会を実施することが義務付けられています。本県から原田勝先生と私が派遣されました。

第一日目の開講式のあと、居合道委員長上野貞紀先生の講話に続いて、解説書の補足と修正点の説明がありました。

○三本目「受流し」

〈現行の居合〉

刀を胸元近く頭上前方に「**抜き上げる**」。

〈修正の居合〉

頭上前方に**抜き上げる**と同時に立ちあがり

○六本目「諸手突き」

〈現行の居合〉

向き直ると同時に**右足**を踏み込んで

〈修正の居合〉

向き直ると同時に**左足を左に踏みかえ右足を踏み込んで**

○十本目「四方切り」

〈現行の居合〉

右足を軸にして左回りに回り（**一八〇度**）

〈修正の居合〉

後ろ（左斜め前）の敵に振り向きながら

○十一本目「総切り」

〈現行の居合〉

切り下ろした刃先の方向で刀を頭上に

〈修正の居合〉

切り下ろした刀を棟の方向に返して

○十二本目「抜き打ち」

〈現行の居合〉

直立したまますばやく両手を**かける**。

〈修正の居合〉

直立したまますばやく両手を**かけ**、

修正点について説明されたものの中で特に注意のあったものです。

続いては、岸本千尋先生の解説で河口俊彦先生の模範演武でした。作法（礼法）と一本目から十二本目まで、何度も演武をくり返しながら細部にわたり、懇切丁寧な説明のあと質疑応答にうつり午前の部の講習が終わりました。

第一日目の午後の部は、各班に分かれての実技講習で全剣連居

合が正しく伝達できる様にと、各講師の先生から熱心な指導を受け、受講生も真剣に稽古をくり返し行い、第一日目の講習が終わりました。

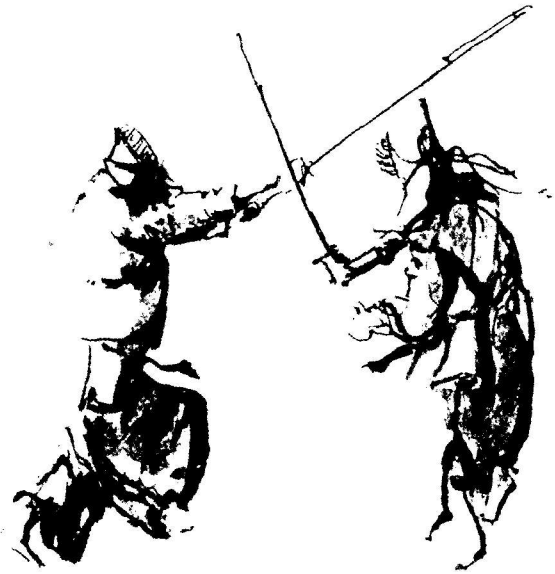
第二日目の午前の部の講習は岸本先生の解説で受講生全員が審判員と演武者にわかれて模擬試合の形式で進められました。審判作法として、姿勢、態度を正しく、審判員の交代も揃って行動すること。試合の開始、判定において発声を大きく、明瞭にし、審判旗の表示も一斉に揃えて行なうこと。などの注意があり質疑応答にうつり、審判実技の講習が終わりました。

第二日目の午後の部は、各流派に分かれての古流の研究の講習が行なわれ、無双直伝英信流は武田清房先生と山崎正博先生の指導で初伝の部から奥居合までの技と理合の解説を受けました。

二日間の講習会が無事に終了し、閉校式のあと散会となりました。

九月二十四日には松茂町第二体育館において原田先生の解説で実技を私が担当して、伝達講習会を実施いたしました。

先生方の熱心なご指導を賜り居合道の奥の深さをあらためて学ぶことができました。派遣していただいた徳島県剣道に感謝を申し上げ、居合道中央講習会の報告と致します。



第四十四回剣道中堅剣士講習会に参加して

名西支部　久保隆司

平成十八年五月二十四～二十八日、四泊五日で奈良市中央武道場で参加者は、全日本剣道連盟役員六名、講師十二名、講習生五十九名（三十六歳～五十歳）で開催されました。五月二十四日午後三時より開講式が行われ、まず全日本剣道連盟副会長奥園國義範士よりご挨拶があり、全国各地から選ばれた剣道中堅指導者として、この講習会で真剣に学び得たことを、各地で伝達指導をしていただくよう五日間を充実した有意義な日程にして欲しいとお話がありました。

まずは、松永政美範士による講話があり「剣道を楽しむこと」について勝利主義に走るのが現代の風潮であるが、真の修行とはいかに取り組み、楽しむためにはどうあるべきか。修行者としても指導者としてもいろいろと考えさせられる内容でありました。

一日目午後四時三十分から一時間、二～四日目は朝夕、五日目は朝と合計八時間の講師先生方への氣の抜けない稽古、二～四日目に行われた指導法においては、合計九時間の太田友康範士、林邦夫範士、西出功範士、島野泰山範士を中心として基本技、切り返し、体当たり、応用技、打ち込み稽古、掛かり稽古、互角稽古など実践的にくり返し指導を受けました。

第二道場にて奥島範士（左）と奥園範士（右）

特に基本技、切り返しの稽古の時に、振りかぶりの動作で肘を使いすぎると竹刀の軌道が大きいが技が小さくなりがちであるから、肩、左手首、右手首と両肘の活用法で竹刀の打ちを大きく、鋭く、剣先を振り、冴えを作る指導を受けました。

また、島野泰山範士による返し技、すりあげ技、打ち落とし技の指導においては手の内、手首、足、体さばきの運用によって重厚な技となることを教わりました。

この経験は自分自身の剣道修行にも、またこれからの剣道指導上においても大変有効で有意義でありました。

朝夕の稽古と指導法の講習で五日間に十七時間の実戦稽古は、受講生全員が氣力と体力の限界、自分との戦いでありました。

特に私達最高齢四十九歳～五十歳組八名は三十～四十歳代に負けないでついて行くのに必死でした。

それを支えてくれたのが、稽古前後に行う林邦夫範士の指導による呼吸法によるストレッチングと、毎回欠かさず体中にマッサージクリームを塗り込んでいたお陰で筋肉痛も和らぎ、身体も柔軟に成り三十～四十歳代に負けない気持ちで通せました。

前列左二人目より太田範士・田口範士・川本範士

第二道場打ち上げ　左端筆者

毎回出来るだけ稽古前にはストレッチングをやっておりますが、残念なことに今回は稽古後に出来ていません。本当は稽古後が特に大切なのですが、今後この経験を生かして稽古の仕方、時間配分を工夫して実行していきたいと思います。

日本剣道形は、奥島快男範士、西出功範士により日本剣道形の由来から効果練習上の心得と注意点、氣、事細かく解説してご指導いただきました。

木刀による剣道基本技稽古法は、西田照夫教士、上垣功教士の見本演技から始まり少年に対して指導のポイント、構え、手の内、刃筋、間合い、打突部位、足さばき、体の運用の重要性そして日本剣道形につながる指導を教わりました。

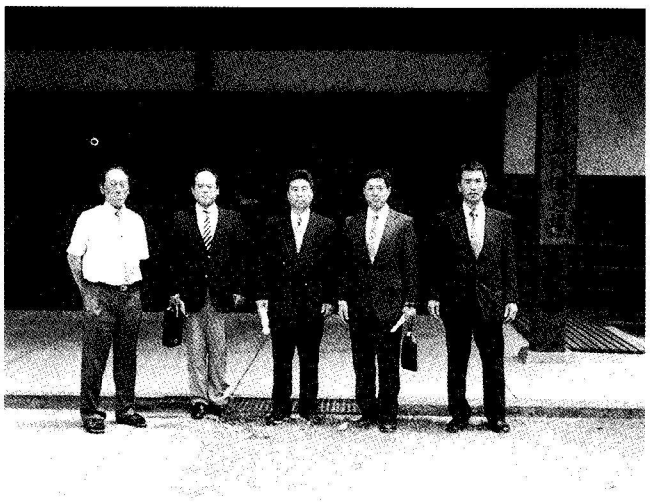
私も三年前より我が道場（徳島清風館道場）の少年剣道指導に取り入れておりますが、基本の中に技があり、その技が進化して応用技、実戦につながることを少年達に伝達し理解を促すことで、工夫研究の基礎にしていきたいと思います。

審判法実技は、田口榮治範士、川本三千弘範士の指導で講習生が試合・審判に交代しながら二時間三十分間寸分の氣を抜かない緊張した中、有効打突を見逃さないように必死で取組、姿勢態度、三者一体の動き、事細かい所作を徹底的にご指導いただきました。

最後にスポーツ医学講師、医学博士柴田和弥先生が講

話の中で、恐懼疑惑の克服ということで、「勝てる人と勝てない人精神面のここがちがう」勝利は一つの結果であり、そこまでの努力の過程が大切だ！「心・技・体一致」の心のあり方を重視しながらも、とかく根性だとか、闘志、やる気といった言葉に置き換える傾向があり、これらが過酷なまでのしごきの中で養われるというような風潮がまだある。

剣道は瞬間で勝負が決まるから精神面に左右されやすい…一流選手でTSMIシステム（心理学テスト）の結果を踏まえ一流選手は決して言い訳をしないというメンタルトレーニングが大切である。



柳生正木坂剣禅道場前にて

腹式呼吸、丹田呼吸法により集中力が増す！心のコントロールに客観性を持たせることで恐懼疑惑を克服できる。

また受けた指導のわずかな違いで…恐懼疑惑の克服、ケガをする選手しない選手、子供の「オールアウト」、腰や踵の故障、熱中症予防を左右する。

欠かせない稽古前後のストレッチングである。剣道には古来から伝統的な稽古法が確立しており、なかなか新しいものは取り入れにくい世界であるが、経験だけに頼った指導だけでなく、新しい流れに目を向け工夫研究した指導が大切であると実感しました。

また、連日第二道場では講師の先生方を交、質疑から講師の秘伝をお聞きしたり、講習生同士で昼間の講習の反省やら各地の剣道の意見交換、交剣知愛から美酒で交盃知愛をして楽しい時間を過ごす事が出来ました。講師の先生方からは私の稽古着下に、貴重な執筆をいただき、思い出深い素晴らしい記念になりました。

そして五月二十八日午前十一時、四泊五日の厳しい有意義な講習会を五十九名全員が怪我脱落者も無く閉講式が行われ、全日本剣道連盟会長武安義光先生から修了証を授与されました。

閉講式後、受講生仲間と柳生の里、正木坂剣禅道場を見学し、芳徳禅寺をお参りしてまいりました。

最後になりましたが、今回素晴らしい伝統ある剣道中堅剣士講習会に参加させて頂き誠にありがとうございました。

徳島県剣道連盟会長、理事長をはじめ各先生方に感謝いたして

おります。

今後この経験を基にして、これからの剣道指導に生涯剣道に生かせて行きたいと思います。

合掌

第44回剣道中堅剣士講習会　平成18年５月24日（水）～28日（日）　於：奈良市中央武道場

女子審判法研修会

女子部　手塚　十三子

期日　五月二十日（土）～二十一日（日）
会場　日本武道館研修センター
（千葉県勝浦市）
主催　㈶全日本剣道連盟

この研修会は、今年度の事業計画の重点事項（審判）にも掲げられている「女子審判の能力・技術の向上を図り、質の高い審判員を養成する」ことを目的として実施されたものです。

女子審判法研修会　日程表

【平成18年5月20日（土）～21日（日）於・日本武道館勝浦研修センター】

財団法人　全日本剣道連盟

5月20日（土）		5月21日（日）	
		7:30	朝食
9:00	受付	9:00	審判としての認識度の確認
9:30	開講式	10:00	
9:45		10:10	審判法実技
9:50	審判員の心得		
10:50			
11:00	試合審判規則の要点		
12:00		12:00	昼食
	昼食		
13:00		13:00	審判法実技
	審判法の理解		
14:00		14:00	閉講式
	審判法実技		
16:00			
16:10	稽古		
17:00			
	入浴		
18:00			
	夕食		
20:00			
22:00	消灯		

これまで行われてきた「剣道講師要員（試合・審判）研修会」のうちの一回をこの研修会に当て、その効果を検討するというもので、その重責を担い、全国から二十四名が研修員として参加しました。

開講式において、奥島講師から次のようなお話がありました。

全国家庭婦人大会、全日本女子選手権大会などにおいて、男性審判は力量が統一できているようだが、女性の審判には、多少温度差があるようだ。この講習会の内容において、今後女性審判に対する判断が大きく左右される。

続いて、田口講師から主旨説明が行われました。

○「剣道講師要員（試合・審判）研修会」を年三回実施しているが、女子審判員の資質の向上を目指して、今回の実施となった点。

○諸々の大会において、審判員の適切な選考を行う点。

○あくまでもこの講習会はテスト（検査）であり、よって「第一回」と明記している。講習会に真摯な態度で臨むべき点。

奥島講師、田口講師のお言葉に一層の責務と身の引き締まる思いを強くしました。

審判員の心得　奥島講師

一般的事項及び留意事項について説明を受ける。さらに、講師のご体験に基づいた、自己の反省を強く促す三点のお話をいただいた。

①自己を頼れ、法を頼れ

②速からず、遅からず
③和して同ぜず

①について

自分の経験が頼りです。これがスタート。しかし、経験（経験談）だけで終わるとだめです。「経験則」、即ち「誰が見ても納得」なのです。自己を高め、普遍的に則ができると人に語れる。相手がどう聞いてくれるか、事実をつかみ、話をつかむ。そこで「自分を鍛えよ」ということになる。（どのような審判であっても）実際の審判で困ったことがあります。主審の自分が試合者に振り回されることがあった。予想外の動きがあるということです。これにも備える心が必要です。慢心が出てくるとだめです。咄嗟の技への対応も大切です。

高めた経験則で以って、自分をしっかり持ってことにあたる。あくまで自分を磨く。

残念ながら剣道をしている自分の姿は自分で見えない。ビデオに撮っても実際のところ『におい』がしない、そこで、「法に頼れ」ということになる。しかし、これは規則だけでない、規則の中に織り込まれていないものもある。事実をどうとらえるか、それは規則でなく、『剣道そのものをどうとらえるか』ということです。

ルールが剣道の規則であるならば、講話は不要となる。ことば（条文）が何かの折に生きてくる。「理合」は規則を超えるものがある。実際にことにあたった時、うまく生かせるのです。

理合に則り、自分の剣道観を収めていることが大切。

②について

主として判定のタイミング。審判員の動き。有効打突ムード（機会）で表示してしまわないこと。（打突部位や残心等の見極めもなく表示）この後、審判実技において必ず指摘されるでしょう。

位置取りについても、講師は遅れたことばかりを言わないで、なぜ遅れたのか、その理由を言うことが大切です。試合者の動きを読むことはある意味で楽しいこと、心も態度も柔らかく対応していく。審判員が目立つとだめです。しかしながら、自分の姿は見えないのです。そこで、自己反省が求められるのです。

③について

論語の中にある。『意見が同じならば、他人と協調するが、おもねて妥協することはしない』審判旗を引っ張られて上げているのはすぐわかる、自分をしっかりと持つこと。しっくりと来ない時は自分が審判員として、自分を作ろうとしている時。しっくりと来た時は試合がよく見え、周囲も安心納得して見てくれる。結果、その試合も良かったといえる。それが、審判員としての役目を果たしたことにつながるのです。

より高い水準を作る、高める役割が生まれると、凄いレベルのものになる。

試合審判規則の要点　田口講師

○「規則」＝一般常識的範囲のものと考える。「規則」の概念となる「試合規則」とは、公平、平等、同一条件のための諸条件。本規則の目的、第一条は全ての規則の基になっているという観点に立ち、各条文に従い詳細な説明がなされ、熟知はもちろん、適切な運用の重要性を説かれた。

審判法実技　村上講師

○始めに審判旗の扱い方、姿勢、旗の表示といった所作ごと、有効打突の判定、位置取り、鍔ぜり合い、棄権等について、要点の説明がなされた。続いて、

○国際武道大学剣道部の皆さんによる試合が展開され、実際の場面を通じての研修。（以下、場面をとらえたご指導のお言葉）

・次回の審判を待つ時、足や腕を組んだりしない。
・位置に着く時小さく礼。（互いの呼吸を合わす意味で）
・開始線の内側を通る（以前は踏んで内回りに定位置に着いた）
・誰も見ていない側（死角）がある。
・選手の動きの先取り。
・三人の審判の連携が悪い。
・技を判定する。（遅すぎず、速すぎず―見極め）
・守備範囲を守る。
・切り込みについて（斜めに切り込んで移動する）
・反則に対して拒否はできない（場外）―「合議」（正しく判断する）
・誤審で表示を一人が交互にしてしまうと、他の二人が判断しかねる。
・勇気を持って瞬時のうちに決断を。
・引き際は案外見逃すケースが多い。
・斜めから見る癖の人がいる。
・主審が早くポジションを決めてやる（真中に立つ）と、副審が動き易い。
・旗を持って移動する時もなるべく手の内の中に入れること。（余さない）
・誰かが上げたら私も上げたのに、という判断はいけない。
・立つ位置の角度によって表示が変わることがある。　など

中でも「有効打突の判定」の基準や微妙な差異は最も難を極め、さらに「審判員の位置取り」の甘さがその大きな要員となることも重なり、その都度詳細な確認と核心に触れる論議が展開されました。また、今回は大学生の積極的な試合展開と、勝敗により左右されるものがなかったため、鍔ぜり合いの問題が全くといえるほど検討されませんでした。より明確な審判を行うためにも大切な課題であろうと認識します。

この後、大道場において稽古が行われました。講師の先生方の前には大勢の研修生が先を競いながら居並び、勢いよく打ち掛かるものの、先生方の自在な剣先に後ずさりせざるを得ませ

ん。また剣友と久しぶりに熱く試し合い、充実した心地よい汗を流した四十分間でありました。

一日のハードな研修を終え、夕食会場は第二道場へと様変わり。今日一日の感謝を込めて、研修生一同、阿吽の呼吸で、講師の先生方に一層近間で名誉挽回とばかりに迫ります。ここでも更なる温かいご指導をいただき、積極的な情報交換も繰り広げられました。折角の機会を有効にと、翌朝の稽古を約束して、今日の反省を活かすべく、明日の研修を期待して眠りにつきました。

二日目においては「審判員としての認識度の確認」と題して、審判員の心得、任務、審判上の重要事項などについて各自の所見を綴った後、再び審判法実技が実施されました。

【総評】　奥島講師

有効打突の判定はその人の剣道そのままが出てきます。やはり、自分で経験して、稽古そのものを積む以外にはありません。そうすれば大概のことは解決します。そのことを今後の課題として、そして楽しみとして一つひとつ研鑽を重ねてください。

【研修に参加して】

未熟な審判の内容にたびたび先生方の叱責ともいうべきご指導を頂戴し、全ての面において力不足を痛感しました。それは審判の技量そのものの不足という点、さらに煎じ詰めれば理合に根ざした稽古の実践に努めていないという一語に尽きるといえます。判定に携わることが、試合者は勿論、私自身にとっても人生の貴重な一打につながっていることをしっかりと胸に刻み、修行に邁進したいと考えています。機会を与えてくださいました先生方、そして研修生の皆さまに深く感謝いたします。

佐藤博信先生講習記録

事務局次長　手塚十三子

平成五年に開催されました東四国国体以来、本県剣道強化アドバイザーコーチとして毎年、佐藤博信先生（東京・範士八段・元警視庁主席師範）をお招きして国体強化のご指導を仰いでいます。以下に今年の概要を報告します。

八月五日（土）県警察学校体育館　十三時～十四時　基本稽古
十四時～　試合稽古

8月5日（土）

成年女子	先鋒	中堅	大将
国体選手	美馬	北村	平野
	㋝ 一本勝	㋕ 一本勝	
徳島選抜	塚原	池添	竹内

成年男子	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将
国体選手	六條	近藤	平野	福多	西谷
	㋝ 延長	㋝ 延長		㋝ 一本勝	㋟㋝㋝
徳島選抜	大石	佐藤	山室	近藤	木原

佐藤先生評

基本稽古から

素振りが悪い、素振りを準備運動と考えている。鍔元をしっかりと持って。面を打つ時の距離をみると、前後に跳んでいない、縄跳びをしている状態になっている。素振りがよいチーム（選手）は稽古が良い。無駄がない。現状を維持するだけでなく、一本一本の素振りをもう少し真剣にするべき。

成年女子

全体に攻めが甘い。

大将　平野……受けがうまい。しかし、その瞬間気を抜いている。剣道は絶対に受けないこと、次の技を出す準備を。そうすると剣道が変わってくる。「受ける」は半分負けている。打たれなかったら、反撃に乗じる。

成年男子

次鋒　近藤……小手を打つ時、腰が曲る。腰を伸ばすこと。すると、身体が入る。剣先が相手の中心に向く。腰を伸ばし、手を伸ばすこと。

中堅　平野……技の決め方、相手に打たせないのは良いが、攻めて決める技の工夫を。もう少し気力充実させる。攻め込んでおいて、相手に技を出させるように。

大将　西谷……双方とも見事な技。
さらに大切なことは、皆の気持ちが『まとまる』ということです。

八月六日（日）松茂町立第二体育館　九時～十時　基本稽古
十時～　試合稽古

成年女子

先鋒　美馬……まだまだ未熟、打ちが甘い。このあたりで行くと当たるかな、という思いであり、「絶対打つ」という自信がない。打つところ、我慢するところが分かっていない。相手は関係ない。どうして打ったのが当たらないのか、やっているうちに分かってくる。三割の自信ではだめ、五割、八割の自信が持てなければ。

次鋒　北村……攻められているのに簡単に行った。

大将　平野……受けになっていた。合気になった時に技を出すこと。相手の気に押されて退かないこと。まだまだ、攻め口が未熟です。基本練習をしっかりと。一番大事なことは、相手が来たら下がらないこと。打たれることを覚悟していくと、攻めができる。下がって「うまいことやろう」はだめ。

成年男子

先鋒　六條……攻め込みの入り身が速い。

次鋒　近藤……打突に信念がない。確実に打つこと。

副将　平野……上段に対しては打ち間（上段の間）にヅカヅカと入ること。上段に対して「どっこいしょ」はだめ。右小手、左小手、突き、胴、どこがよいか見極める。大事なことは、打ち急がないこと。弱気、逃げが一番悪い。「危ない」と感じたら、入ること。打たれまい、打たれまいの気持ちを捨てる。稽古の時、「バタバタ」でなくて、「一殺必中」の技を心掛けること。

8月6日（日）

成年女子	先鋒	中堅	大将
国体選手	美馬	北村	平野
		—メコ	
	平野	山下	山下

成年男子	先鋒	中堅	大将
国体選手	六條	近藤	福多
	メメ—	一本勝 —メ	メ—コメ
	山本	川添	平野

徳島での剣道
―日本剣道形講習会に参加して―

刑務官　次藤　洋

私は、現在徳島刑務所にて新人剣道部員として稽古に励んでおります。一年前までは北海道にて剣道と居合の稽古をしておりました。

来県当初はまず剣道の初段を取得し、ついで居合道を本格的に始めるつもりでおりましたが、慣れない土地である上、勤務の時間帯により一軍部員との合同稽古の機会に恵まれず受審を諦めかけていたところ、先輩部員のすすめにより平成十八年八月五日、六日の二日間にわたり鳴門武道館で行われた日本剣道形の講習会に参加する事が出来ました。中学生や高校生の中に交り少々気恥ずかしい思いもしましたが、稽古を積むにつれ、学生達の真剣な眼差しや取り組みに気迫のようなものを感じ、私自身の中にも日常には無い緊張感が生まれ、この二日間はまたとないとても良い稽古となりました。

北海道では、初段審査は剣道形五本目までなのに対し、徳島県では七本目まで行うと知り少し焦りましたが、刑務所の先輩部員の指導を受け、自分自身に自信をもって審査にのぞめるよう心掛けました。

同年八月二十七日に実施された審査会では、指導を頂いた剣道連盟の先生方、又一緒に稽古を願った学生達のおかげで初段に合格する事が出来ました。徳島県に来て一年がたち、やっと目標の一つがかない嬉しい限りです。

私が現在勤めている矯正の職場は犯罪者の増加に伴う収容人員の増加により、勤務体系の変化、勤務時間の増加等により武道訓練もままならず、武道に取り組む者として苦慮しているところです。

北海道から徳島に来る時

「社会人になってからの剣道が本当の剣道だ。」

と北海道の先生に言われた言葉を思い出します。鳴門武道館で一緒に稽古をした学生達が大人になった後も、あの真剣な眼差しを忘れずに剣道を続けて欲しいと思います。私も先生の言葉をかみ締め、日々精進し剣道を続けていきたいと思っております。

私の様に仕事の都合で十分な稽古をする機会の少ない社会人の方、指導者に恵まれない学生の人達も多くいると聞きましたが、剣道連盟主催の日本剣道形講習は夏休中であり、休日に開催されることから願ってもない稽古の場だと思います。二日間と短い期日ですが最高の稽古となりました。皆さん本当にありがとうございました。

第二十三回全日本剣道連盟 社会体育指導員養成講習会（中級）

名西支部　久保隆司

日時　平成十八年十月二十日～二十二日
場所　愛媛県伊予市厚生年金休暇センター

平成十四年九月に徳島県那賀郡鷲敷町B&G海洋センターで、三日間開催された全日本剣道連盟社会体育指導員養成講習会（初級）から早いもので、四年が過ぎました。十八年の春、全日本剣道連盟より中級受講もしくは、初級更新の受講の申込書類が自宅に送られてきました。

四年前初級コースに徳島県で参加された先生は二十五～六人いたのですが、今回中級に受講された先生はわずか四人と大変寂しい限りでした。今回参加されたのは、米倉滋教士八段、美馬和義錬士七段、谷口順二五段と私の徳島四人を含む受講生三十三名で少数精鋭でありました。

十月二十日午前九時五十分より開講式が始まりました。

まず、岡村忠典先生による「剣道の特性と価値」というテーマで講話がありました。「不易流行　変えてはいけない守る伝統、文化、変えなければいけない時代の流れと進化すること。」「有効打突を求めること」「体力と競技年齢」「これからの剣道と指導者のあり方」「個人・集団指導法」「生涯剣道」「代表的な問題点」「上達する必要要件」といった内容でした。また各講師より次のような指導がありました。

。角正武範士からは剣道指導論として剣道の理念は昭和五十二年につくられたが、剣道の理念を教えられているか？習っているか？教えているか？

。網代忠宏先生による剣道の歴史

。杉江正敏先生による剣道の技術構造論

講師・山神先生（中央）と私（左）

徳島より参加した
美馬七段（左）、谷口五段（中央）、米倉八段（右）

。山神眞一先生による体力トレーニング論
。通信教育テスト論文審査
。応急処置法山田救急救命士
。村上済範士による試合審判規則の意義役割
。喜多岡健二先生による剣道における障害疾病の理解
。村上済範士、豊村東盛先生による剣道形実習・指導法
。岡村忠典先生による剣道応用技術指導法
。角正武範士、網代忠宏先生、氏家道男先生による木刀による剣道基本技稽古法の実技指導

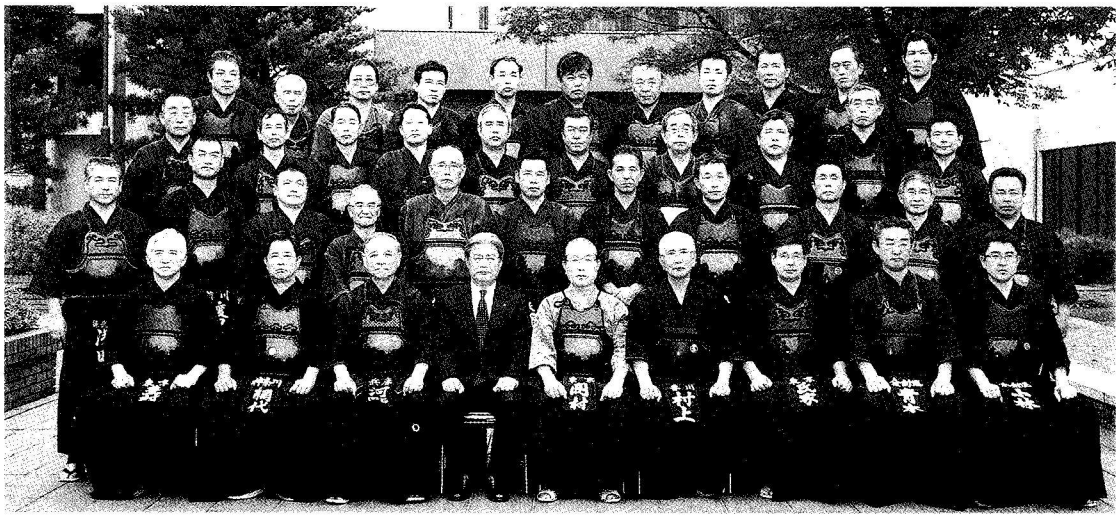
さらに、審判技術テスト、技術・剣道形演技テスト・理論テストがありました。

三日間で四時間のトレーニング実技指導は全講師元立ちによる掛かり稽古と前後に山神眞一先生によるストレッチをご指導いただきました。十月二十二日午後二時頃閉講式が行われテストの結果発表があり参加者三十三名全員が合格したそうです。今までの講習会の中でも今回は特に優秀な成績だったそうです。

私自身指導法は勿論剣道形、審判法、基本稽古法等久々のテストで緊張し真剣に剣道の勉強に取り組むことができ、大変有意義な時間を体験することができました。また素晴らしい講師の先生方や多くの講習生と共に汗を流し剣道談議をできたことは、剣道人生に大きな財産となりました。

今回参加されなかった徳島の先生方道友の皆さんも、今後おおいに参加されたらきっと勉強になり素晴らしい出会いがあると思います。そして共に徳島県剣道連盟や後進のために剣道人口を増加させ生涯剣道を目指そうではありませんか！

合掌



第23回全剣連社会体育指導員剣道（中級）講習会　平成18年10月20日(金)～22日(日)

徳島の剣道史

絵馬武道額

武道史担当　坂本裕二

はじめに

絵馬武道額（以後武道額）は、世が太平になって、武術は益々盛んになり、多くの流派が生まれ、その技を競う風が強くなり、更に時代が下がるに従って、町人百姓たちも武術を学ぶようになった。これは身分的に束縛された百姓町人は、武術が一人前になることによって士分として、身を立てようとしたものである。そこで彼等は武術の上達を祈願したり、試合に勝った際の記念に、自派の強さを誇示するため、人々の多く集まる神社や仏閣武道額をに奉納する風が流行した。

一、武道額の形式

武道額の形式は一様でないが、概ね枠をつけた方形が主流である。之に武術の流名・流派の来歴、道場師範、道場主の姓名、門弟の姓名、道場で使用した武器や模型を添えて、奉納年月日等を墨書する場合が一般的である。

この武道額により、武術の内容、この地方の武術の概要が知れる貴重な資料であると言える。

二、阿波の武道額

阿波には神社・仏閣に奉納された絵馬は平成七年、郷土文化会館の調査では、五八五ケあり、そのうち武道額は八ケが確認された。武道額が外の絵馬に比べて僅少なのは、風化や老朽化により破損した為に撤去したものもあるが、終戦時米軍ＧＨＱ司令部の軍国主義一掃する為の廃棄通達により消滅した武道額も多いと言う。

㋑ 現存する県内の武道額

1. 吉野川市鴨島町西麻植檀の原一五五（**写真　イ―1**）

旧村社　八幡神社　宮司　松本歌子

新影相心流　一天藤本流　一天宗心流

願主　仁木島昇平　門弟四七七名

明治十三年（一八八〇）九月十五日奉献

場所　拝殿　寸法　横二七〇×縦一四七ｃｍ

2. 吉野川市鴨島町森籐三谷の下（**写真　イ―2**）

旧村社　八幡神社　宮司　松本歌子

相心流　第十三嗣井上恰　門人五四〇名　後見人古谷常太

明治十八年（一八八五）一月吉祥日奉納

場所　拝殿　寸法　横三六四×縦一五〇ｃｍ

3. 阿波市市場町切幡（**写真　イ―3**）
切幡寺　住職　大平正大
二、の森籐、八幡神社と全く同じであるので説明を略す
場所　切幡寺　本堂内　寸法　横三六×縦一五〇ｃｍ
明治十八年一月吉祥日奉納

4. 吉野川市児島字前池四九（**写真　イ―4**）
旧村社　八幡神社　宮司　鎌田成之
天神真揚流柔術　工藤九平　矢田一心斉　金子円五郎以下門人五〇九名
明治三十九年（一九〇六）九月吉祥日奉納
場所　拝殿　寸法　横二二七×縦一六七ｃｍ

5. 吉野川市美郷栗木一〇〇（**写真　イ―5**）
広幡八幡神社　宮司　松田豊
南波流棒、柔術　北地常太郎門人五四名
明治三四（一九〇一）辛丑年三月十五日奉納
場所　拝殿（現在は北地家で保管）
寸法　横一五二×縦八〇ｃｍ

6. 名西郡神山町下分上山字西寺七七（**写真　イ―6**）
旧郷社　宇佐八幡神社　宮司　豊島祥司
南波流棒、柔術　北地常太郎正頼　門人四七名
明治三七年（一九〇四）拾弐月拾三日改之奉納
寸法　横一一〇×縦八〇ｃｍ

7. 三好郡三加茂町中庄一一八七（**写真　イ―7**）
旧村社　八幡神社　宮司　柏木友之
直指流　浅野辰太郎門人、井口長次兵衛、以下門人十八名
嘉永二（一八四九）歳二月吉日奉納
場所　当神社拝殿　寸法　横一八〇×縦八〇ｃｍ
※願主は池田士　井口長次兵衛

8. 阿波市市場町八幡（**写真　イ―8**）
旧村社　八幡神社　宮司　種盛聡
文武館創開　昭和三十年十月吉祥日記念
館主　森本義男の居合道錬士、剣道錬士
称号拝受記念に奉納
場所　拝殿　寸法　横一九五×縦一〇〇ｃｍ

㋺ 県外の武道額

1. 香川県仲多度郡琴平八九二ノ一（**写真　ロ―1**）
金刀比羅宮　宮司　琴陵容也
剣術　神道無念流　柔術天神真揚流
阿波国美馬郡岩倉村磯村進　門人二四〇名
明治十六（一八八三）年三月奉納
場所　同宮絵馬堂　寸法　横三〇〇×縦二五〇ｃｍ

2. 右、一、と同じ絵馬堂（**写真　ロ―2**）
讃州象頭山絵馬縮図
司箭流長刀　貫心流剣術
宍戸司箭外孫河野大蔵道昭八代之裔
芸州築山嘉平通欽直伝弟子　細六郎義知

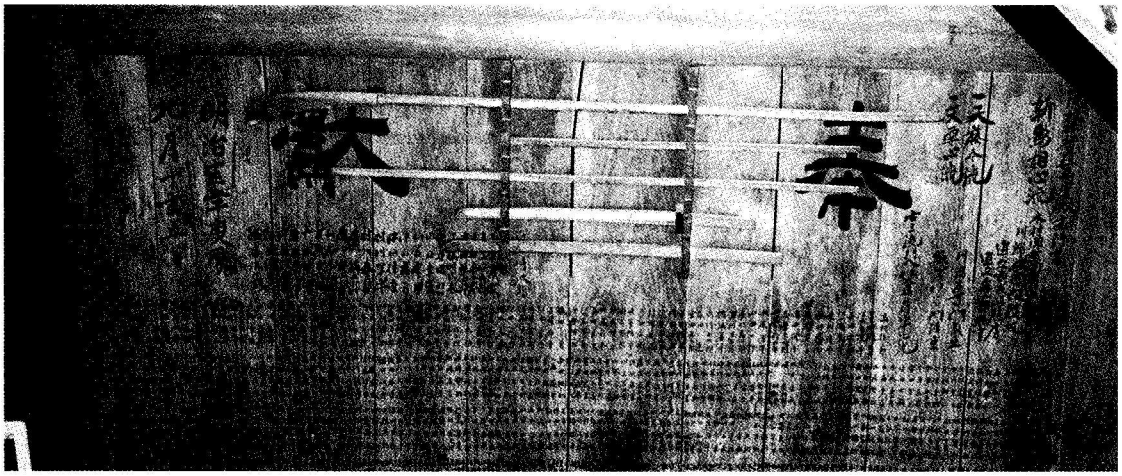
細友之助義為
文化六（一八〇九）己巳春三月奉納
同門弟　頼久太郎襄識

3.
広島県宮嶋厳島神社千畳閣　宮司□□（写真　ロ－3）
司箭流薙刀術　貫心流剣術
宍戸司箭外孫河野大蔵道昭八代裔
本藩築山斉嘉平通欽皆伝
阿州産広島住　細義知
細六郎義為
文政四（一八二一）六月吉　奉納
門弟　本藩頼余一　協識
※細六郎＝阿州那賀郡櫛淵村郷高取格糸田川籐助従弟
※頼余一＝陽山陽の息
※頼久太郎襄＝頼山陽

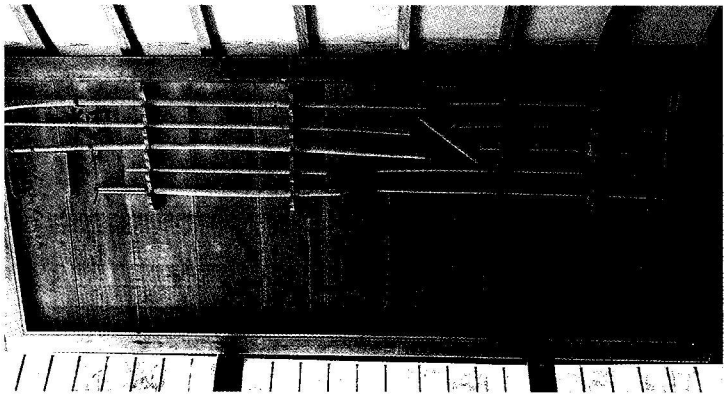
4.
奈良県高野山（写真　ロ－4）
四所明神前の山王院准眠堂軒
貫心流剣術
郡兵之進信直門人三十六名
願主　名倉敬白印印
安政二（一八五五）歳四月上旬奉献
寸法　横一六五×縦九八ｃｍ
※郡兵之進＝阿州田宮の生　貫心流山根武五郎満尊の門弟

5.
香川県東かがわ市白鳥町（写真　ロ－5）
白鳥神社　絵馬堂　宮司　猪熊兼平
相心流棒　阿波国　澤良平道知花押門人
神道無念流　讃岐国　鎌田吉平儀久　花押門人
門人鎌田□□以下二八五名
世話人　鎌田茂三郎以下十五名
明治十八（一八八五）年四月八日奉献
寸法　横一八五×縦一三三ｃｍ

6.
香川県東かがわ市白鳥町（写真　ロ－6）
白鳥神社絵馬堂　宮司　猪熊兼平
日下
開山　竹内流　森熊之助久明
免状　犬伏英二久安昭　以下五名
目録　木内久平　以下十六名
一級　大川甚三郎　以下二〇名
二級　植田豊蔵　以下二〇名
三級　山本□□　以下十八名
四級　□□□　以下二〇名
五級　□□□　以下三〇名
計一二九名
世話人　武市悟蔵　以下六名
本額制作人　杉西順一謹工
明治四十四（一九一一）年春参月吉日奉納
寸法　横二七五×縦一七八ｃｍ



↑ イー1　鴨島町西麻植　八幡神社　仁木島昇平奉納



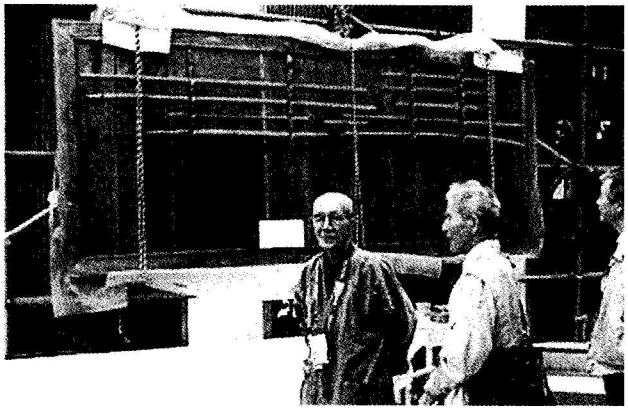
← イー2
鴨島町森籐　八幡神社
井上恰後見人古谷常太奉納

おわりに

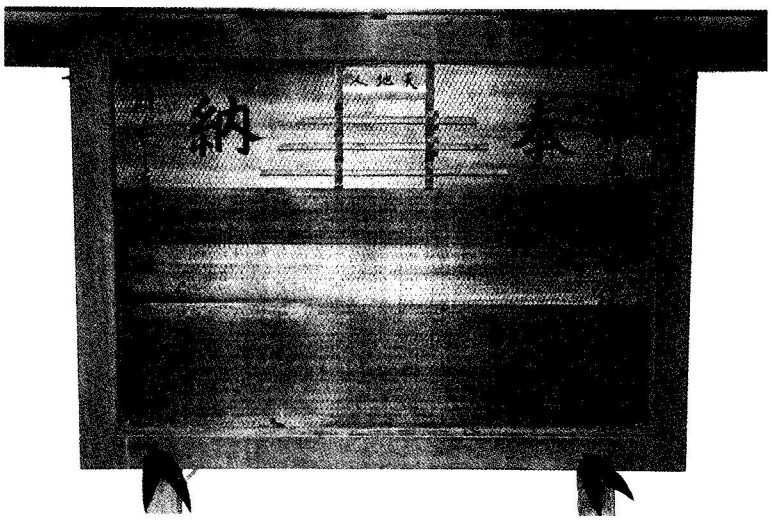
今般調査した県内外の武道額をみると、藩制時代は直指流剣術を池田士井口長次兵衛が願主となり奉納し、また金刀比羅宮に文化六年、文政四年に阿波産細六郎父子が奉納した。

此等武士階級が奉納したが明治以後になると庶民が主体となり、庶民の武術、即ち柔、棒、鎌、杖、縄を主体とする相心流や南波流の武術が盛んに行なわれた。

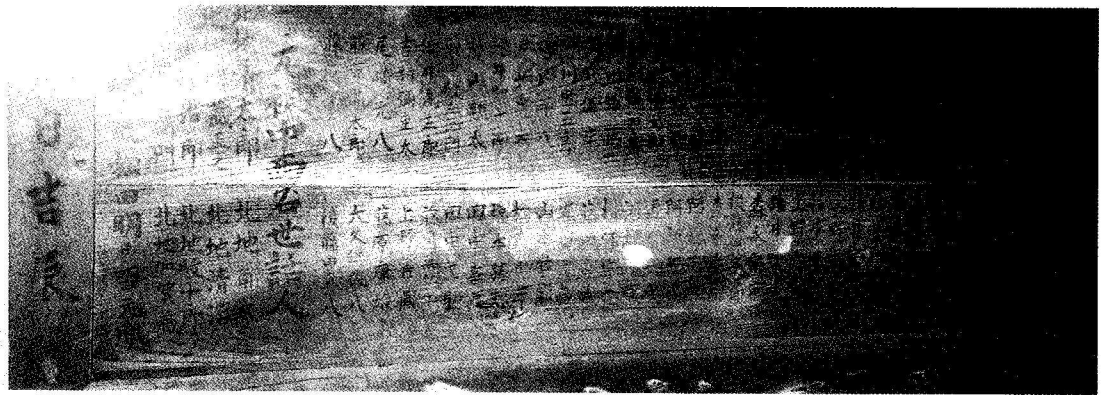
今後武道額を発見して調査を進めれば更に武術の流れを究明することが出来るのではなかろうか。



↑ イー3　阿波市市場町切幡　切幡寺
（大塔修復の為降下す）



↑ イー4　　吉野川市児島　八幡神社　工藤九平奉納

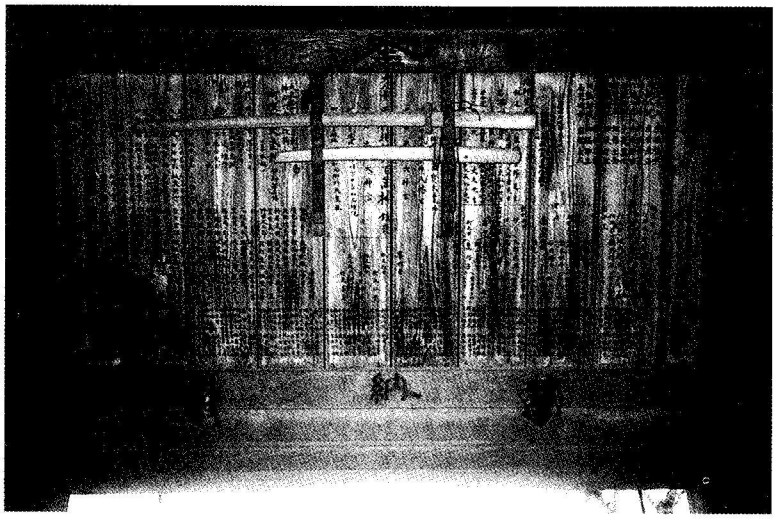


↑ イー5　　吉野川市美郷広幡　八幡神社　北地常太郎奉納

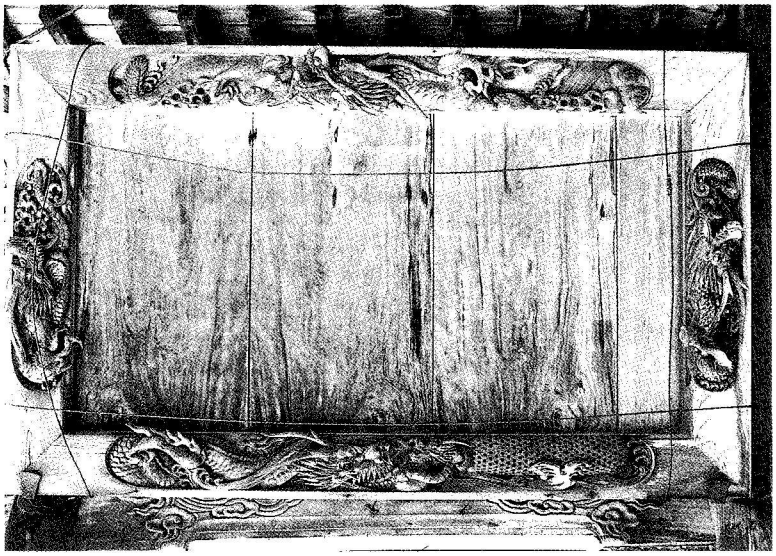
↑ イー6　　神山町下分　宇佐八幡神社　北地常太郎奉納

↑ イー7　三好郡三加茂町中庄　八幡神社
浅野辰太郎 門人 井口長次兵衛奉納

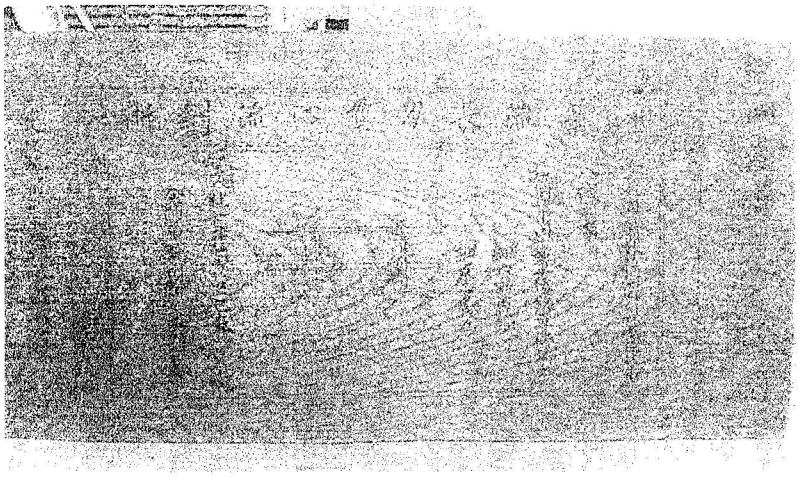
← イー8　八幡神社　森本義男奉納



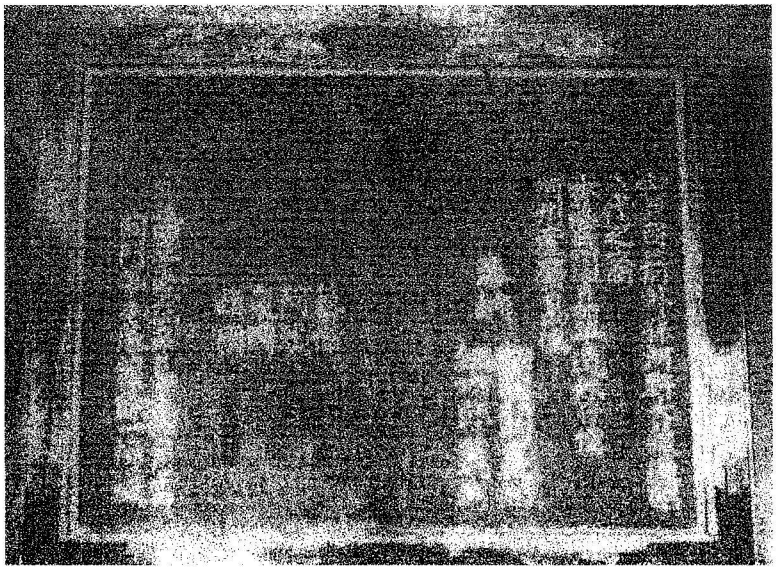
→ イー8　阿波市市場町八幡　八幡神社
森本義男奉納



← ロ－1
金刀比羅宮絵馬堂
岩角村磯村進奉納



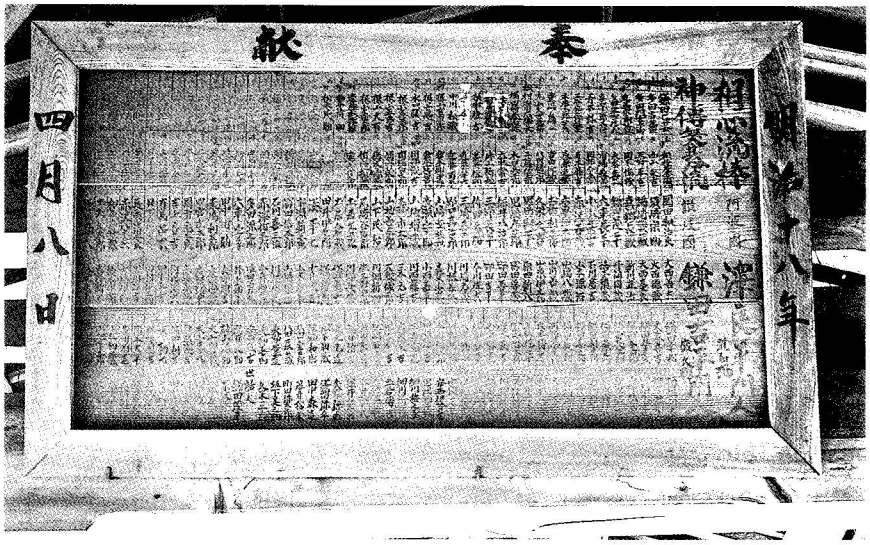
→ ロ－2　讃州象頭山絵馬縮図



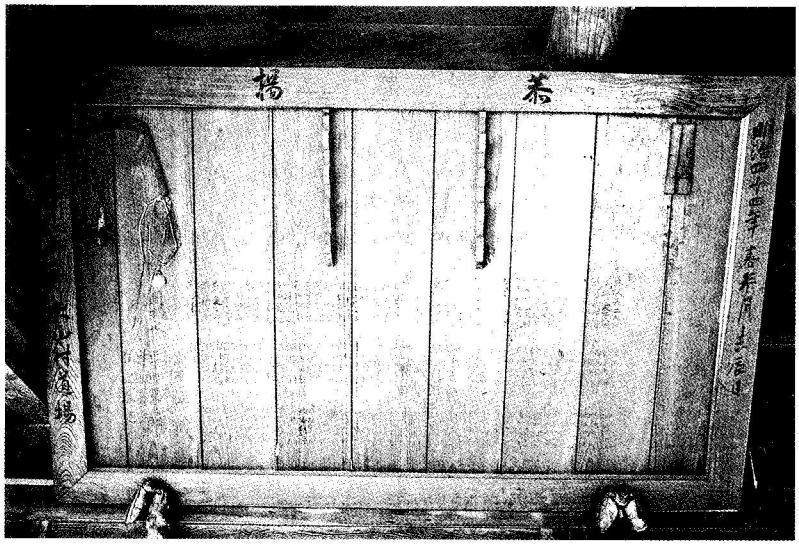
← ロ－3
宮島千畳閣への奉納額
細宗関（六郎義和）と
細義為による

※ロ－2・ロ－3は
広島県立廿日市西高校
森本邦生の調査による

←口—4　奈良高野山　山王院准眠堂
郡兵之進奉納



→口—5　香川県白鳥神社絵馬堂
澤良平・鎌田吉平奉納

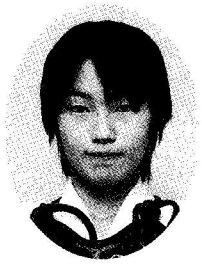


←口—6　香川県白鳥神社絵馬堂
森熊之助奉納

大会所感

第一回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会に出場して

阿南第一中学校　近藤陽香



平成十八年九月十七日、大阪府舞洲アリーナにおいて、第一回全日本都道府県対抗少年剣道優勝大会が行われました。この大会は各都道府県の代表者が団体を組んで試合を行うレベルの高い大会でもありました。

選手構成は先鋒・次鋒が女子、中堅・副将・大将が男子です。私は徳島県代表の先鋒として大会に出場しました。

前日、私達は大会に向けて試合会場で練習を行いました。出場する五人のメンバーでの初めての練習でした。最初はみんな緊張していて、一人ひとりの気持ちはバラバラでした。このメンバーでうまくやっていけるのか、チームの気持ちは一つになるのだろうか、私は先鋒という役割を果たすことができるのだろうかと不安でいっぱいでした。しかし、みんなと一緒に汗を流して練習をしているうちに今までの不安だった気持ちはどこにもなく、五人で代表として頑張ろうという気持ちに変わっていました。

練習が終わり、ホテルに戻った私達は一休みした後、明日の大会に向けてのミーティングを行いました。監督である村井正志先生は、私達にまず礼儀の大切さについてのお話をしてくださいました。そして最後に「徳島県代表として一戦一戦を一生懸命戦って、行けるところまで行こう」と言って下さったことを覚えています。

そして大会当日、予選リーグの相手は静岡県代表と宮城県代表です。試合がはじまり、最初は緊張と不安もありましたが先生のお話と昨日の練習を思い出し試合に望みました。静岡県代表との試合結果は二―〇で、私達が勝利をおさめました。次の相手は宮城県です。このチームに勝てば決勝トーナメントへ進むことができると、みんながそう思い頑張りましたが、〇―二で私達は宮城県代表に敗れてしまいました。

試合が終わった後、監督の村井正志先生は「一本取れるところで取りきれていない」と私達にお話をして下さいました。確かにそうだと思いました。実際、私も取れるところで一本取りきれていなかったからです。一本の大切さを改めて感じました。

試合で負けたことは非常に悔しかったですが、私はこの大会に出場することができ、この大会の関係者や監督の先生、保護者の方々、チームメイト、応援してくれた仲間達のおかげで自分がまた一つ大きく成長できたと思っています。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

この大会で学んだことをこれからの生活や剣道に十分生かしていきたいです。

韓国社会人剣道大会

松村和宏

韓国内外から四五チーム、約二二〇〇人が出場した韓国最大規模の剣道大会、韓国社会人剣道大会が七月一日から同二日までの二日間にわたり、ソウル市内のオリンピック室内競技場において開催されました。

大会のフィナーレを飾ったのは、五〇歳以上の部男子団体戦（出場二七チーム・三人制）の決勝戦、約二二〇〇人の観客がかたずをのんで見守る中、日本から参加したNPO法人国際社会人剣道クラブAチーム（監督・米倉滋、先鋒・松村和宏（徳島）、中堅・椎名士朗（茨城）、大将・山田義雄（新潟））と地元韓国の制剣館チームが対戦、韓国内での試合、しかも審判員はすべて韓国の先生という不利な条件のもと、日本チームは、先鋒が積極的に相手を攻め二本勝ちを納めると、続く中堅・大将も二本勝ちし三対〇のスコアで二年ぶり二度目の優勝を飾りました。

試合結果

一回戦

NPO法人国際社会人剣道クラブA　3(6)—0(0)　大田（韓国）

二回戦

NPO法人国際社会人剣道クラブA　1(4)—0(2)　誠心館（韓国）

準々決勝

NPO法人国際社会人剣道クラブA　3(6)—0(1)　福岡選抜（日本）

準決勝

NPO法人国際社会人剣道クラブA　2(4)—0(1)　重剣会（韓国）

決勝

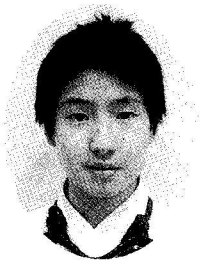
NPO法人国際社会人剣道クラブA　3(6)—0(0)　制剣館（韓国）

松村㊋㊋—韓
椎名㊐㊋—金
山田㊋㊋—韓

各種大会に参加して

全国スポーツ少年団剣道交流大会に出場して

鳴門市光武館五年
山本大介



「メーン。」
「コテ、メン、ドーッ。」
宮城県総合運動公園の真新しい、大きな体育館じゅうに声がひびきます。

ぼくは、得意なとびこみ面でせめます。相手は、竹刀でふせぎ、ぬきどうを打ってきます。そこをすばやく間合いをつめてふせぎ、つばぜり合いから、引きどうを打ちます。

試合を見ていた母が、
「さすが、全国から各県の代表で来ている子達だね。迫力があって、すごいなあ。」
と言っていましたが、試合をしていたぼくはきん張して、心ぞうがドキドキして、必死でした。でも、試合が始まると、不思議な事に、
「うわーっ。この子強いな。でも、同じ学年なんだから、いける。これまで、このチームで、みんなとがんばってきたんだから。」
と、ドキドキした感じが、ワクワクした感じに変わってきました。

ぼくにとって、スポーツ少年団の剣道全国大会参加は、夢でした。それは、徳島県予選の前日に、大好きだったおじいさんが死んでしまったからです。ちょうど予選大会当日はおそう式でした。ぼくが試合で、
「勝ったよ。おじいちゃん。」
と報告するたびに、
「ほうかっ。ようがんばったんじゃなあ。」
と、自分の事のように喜んでくれたおじいちゃんでした。だからぼくは、病院に入院しているおじいちゃんに喜んでもらえるよう、予選大会のある一ヶ月前から、家の近くを走ったり、すぶりをしたりしました。

そんな事があったので、予選当日は、おそう式に参加せず、お兄ちゃんに付きそってもらって、試合をしました。途中の試合で、延長が長くなり、「しんどいなあ。」と思った事もありましたが、お兄ちゃんが、
「おじいちゃんのそう式に出ずにがんばっとるんじゃけん、ゆう勝せえよ。」
と言ったことを思い出して、思いっきり「メン。」に、とびこみました。予選大会では、決勝戦まで、一つも気がぬける試合はありませんでした。今でも、思い出すと、つらい試合でしたが、おじいちゃんの事を考えてがんばりました。後で、
「おじいちゃんがついていて、応えんしてくれたんじゃ。」
と、みんなに言われますが、そのとおりだと思います。
「おじいちゃんありがとう。試合に勝てたよ。」

試合が終わると、生まれて初めて人の前で、声を出して泣いてしまいました。道場の先生やお世話になった先生にあいさつをした時も、まだなみだが止まりませんでした。

ぼくにとっては、そんな思いがつまったスポーツ少年団剣道全国大会だったので、参加する事ができ、言葉で言えない喜びでした。チームの結果は、富山県代表と一勝一引き分けで本数もいっしょでした。そして、千葉県代表との試合結果で、惜しくも本数差となり、予選を上がることはできませんでした。しかし、岡田紘平さんが中学校男子の部で、敢闘賞をもらいました。

スポーツ少年剣道全国大会の後、その時チームだった六年生は、中学校へ進学しました。それでも、試合で会うと、なぜだか、会うたびに話をし、試合会場では、おたがいを応えんしあってしまいます。

今、ぼくは、六年生になった時のスポーツ少年団剣道全国大会にも絶対参加できるよう、しっかり練習し、力いっぱいがんばろうと思っています。

ぼくは、剣道が大好きです。今回の大会で、違う道場の友達や先ぱいが増え、思い出だけでなく、何ものにもかえられない財産ができました。「ありがとう。」と言いたいです。これからもずっと剣道をつづけていきたいと思います。

第二十八回全国スポーツ少年団剣道交流大会

一、出場選手

監督　寺西　明弘　鳴門市光武館
先鋒　山本　大介　鳴門市光武館
次鋒　福田有香梨　蔵本少年剣道クラブ
中堅　小藪　京蔵　木頭練心館
副将　西　柚衣　鴨島少年剣道教室
大将　小野　竜弥　木頭練心館
中学校男子
　岡田　紘平　徳島清風館
中学校女子
　櫻木　舞　坂野少年剣道クラブ

二、試合結果

〈団体戦予選リーグ戦〉
徳島県　三―二　千葉県
徳島県　二―二　富山県　引き分け
富山県　四―一　千葉県
徳島、富山とも一勝一分、勝数差により、富山県が決勝トーナメントへ

〈個人戦〉
中学校男子
岡田　㊋㊐―　古田（岐阜）
岡田　㊋㊐―　遠藤（福島）
決勝トーナメント一回戦
岡田　㊋　温井（和歌山）
〈中学校女子〉
櫻木　㊋㊋　柏木（北海道）
岡田選手が敢闘賞

第五十四回全日本都道府県対抗剣道優勝大会を終えて

警察支部　平野誠司

平成十八年四月二十九日、大阪市中央体育館において全日本都道府県対抗剣道優勝大会が開催されました。この大会は年齢・性別・職種で区分された女子二名、男子五名の計七名の選手によって対戦する言わば各県の総力戦とも言うべき大会であります。

しかしながら、本県はここ数年初戦敗退となる不本意な結果が続いており、強化担当である私も大将として出場することになっていましたので、二月の選手選考から大会までの間に団結力と粘りで勝負できるチームづくりを進めてまいりました。

本大会、初戦の相手は強豪・熊本県です。何といっても、剣道王国たる地盤は揺るぎなく、選手層の厚さは格段上です。何とかして先手を取り優位に展開したいと考えておりました。

試合は先鋒戦から積極果敢に攻め続けますが、伊藤選手は有効打なく惜しくも引き分け。次鋒・原選手は初出場で期待がかかりますが、相手の九州学院高出身・諏訪元選手に小手と面を連取されてしまいます。続く五将・平野（悦）選手も粘りのある展開を見せましたが、後半に引き胴を取られて一本負け。逆に相手方に二ポイントのリードを許してしまいます。

ここから反撃とばかり中堅・磯部は期待に答え、狙いすましての小手を中心に攻め立てますが、なかなか有効打には繋がらず敢え無く引き分け。残り三枚勝負。

続く三将・佐野選手は、大会前にふくらはぎを損傷しておりましたが、熊本県警・有働選手に対し互角に渡り合いこれまた引き分け。

もう後がありません、差は二ポイント。二年連続出場の副将・山本選手はこの場において気合いは充分。ここでポイントを取れなければその時点で勝敗がついてしまいます。立ち上がると凄まじい気迫で勇猛果敢に攻め立てますが、相手の自衛隊・九谷選手もなかなか打たせてくれません。惜しい技が続きますが、無情にも時間は刻々と過ぎていきます。いつしか先の気は焦りの気に変わっていき、飛び込んだ面を胴に抜かれて万事休す。

大将戦は互いに一本一本の引き分けに終わり、結局三対〇で初戦敗退となってしまいました。

大会を終え、何がたらなかったのかと自問自答、自省の日々が続きますが、殊にこの大会は年齢や職種によって区分されていますので、一部の選手強化だけでは通用せず、各職域や各年齢層に対する意識高揚を図っていかなければなりません。

日常様々な形で剣道に接し、その情熱や取り組みを競技場面、特に結果だけで評価することはできませんが、剣道の良さがあらゆる場面で評価され発展していくためには、やはり結果を形として発信していくことも必要なのかもしれません。

勿論、競技結果だけに固執してしまうことは、勝利至上の様相が色濃くなり、勝利するための方法論だけが一人歩きしてしまう虞があります。逆に競技することを自己

の剣行から取り除いてしまうことは、勝負することで養われる格闘性の厳しさを破棄してしまうことにも成りかねません。そこのところは行ったり来たりで、競技（勝負）を方便としながらお互いの剣道を高めていきたいものです。

この荒んだ時代、少子高齢化の時代にこそ、自己開拓としての剣道に真正面から向かい合って、師弟同行、三世代同行、そして生涯剣道の活動を社会に示していくことが、競技・運動文化としての価値観を伝承していくことではないかと思うのです。

どうか、強化イコール発展であることにご理解をいただき、先生方の益々のご協力をよろしくお願いいたします。

全国高等学校選抜剣道大会に参加して

徳島文理高校　片山将志

平成十八年三月二十七日～二十八日、愛知県春日井市で全国高等学校選抜剣道大会が開催されました。この大会には昨年に続き二年連続で出場することができました。

県予選では、昨年同様、苦しい試合展開ばかりでしたが、何とかチームで繋ぎ、混戦を制して全国大会の切符を手にすることができました。

私たちは、二年連続出場というプレッシャーに負けないように、昨年よりも高い目標を持って、大会の日まで一生懸命練習に取り組みました。

そして、大会当日を迎えました。今年のメンバーのほとんどが昨年の大会を経験しているので、戸惑うことはありませんでしたが、やはり全国大会は独特の雰囲気があり、県大会とは別の世界の様な空間があります。やはり、昨年と同じ緊張を感じました。

そんな中、ついに出番がやってきました。これまで、この大会に向けてメンタル面のトレーニング、長期遠征、強豪校との練習試合等。私たちは「出来ることは全てやった。」という自信を持って試合に臨みました。

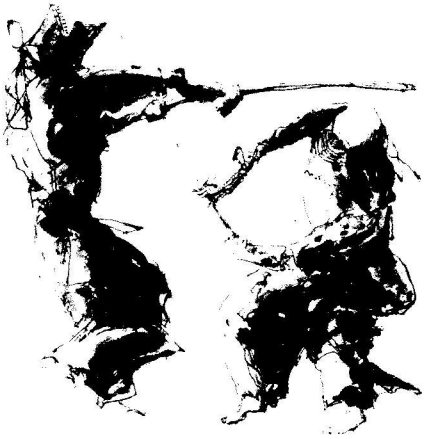
予選リーグ第一試合は新潟県代表の新潟商業高校でした。このチームは、この選抜大会前に行われた全国規模の大会で優勝するなど、北信越地区の優勝校で強豪校であることは知っていましたが、「今年こそ予選リーグを突破する。」というチームの目標を持ち、個々がそれぞれの役割を全うしました。その結果、二対〇で相手の一勝も与えることなく、快勝することができました。初戦はいつも堅くなることが多く、思うような試合ができないことがあるので不安もありましたが、「何としても、勝たなければいけない。」という強い気持ちが後

押ししてくれたので、次に繋がる試合を展開することができました。

つづく、第二試合目は、北海道代表の東海大第四高校でした。この学校は全国大会の常連校であり、個人戦でも上位を狙える様な選手が揃っている強豪です。それ以外にチームのデータが全くない状態での対戦で、私たちは格上相手に緊張するだけでした。そして、終わってみれば。〇対二で負けてしまいました。相手の中堅と大将が強いと分かっていながらも、他のポジションで一本も取れなかったのが敗因だと思っています。

そして、東海大第四高校は新潟商業にも勝ち、決勝トーナメントに進出が決定され、同時に私たちの予選リーグ敗退が決まりました。

今回、予選リーグで敗退してしまったのは、主に精神面の弱さが原因だと思います。全国で勝っていくためには、中途半端な気持ちではダメだと身をもって感じました。試合はやり直しがききません。その一回の試合のためにかける「強い気持ち」の大切さを学びました。それを教えてくれたのは、剣道をしている仲間だと思います。そして、このような貴重な体験ができたのも、中学・高校と指導してくださった、中山先生、玉田先生を始め、練習に来てくださった多くの先生方や先輩方、そして、私たちをいつも陰ながら支えてくださったり、温かく応援してくださった保護者の方々のお陰であると思います。心から感謝しています。ありがとうございました。この全国大会での貴重な経験は、これから社会に出る私たちにとって、新たな挑戦をバックアップしてくれるような、心強い存在になることと思います。



全国高校剣道選抜 大会に出場して

富岡東高校　河田　紋

三月二十七日から二十八日に愛知県春日井市総合体育館で第十五回全国高等学校剣道選抜大会が開催された。

対戦校は、広島県の沼田高校、佐賀県の白石高校だった。お互いに力がよく似た相手だと聞かされていたので、厳しい試合になるだろうけど、みんなの気持ちを一つにしてリーグ戦を突破し、全国の舞台で一試合でも多く試合をする事を目標としていた。

一試合目は沼田高校と対戦だった。試合前のミーティングで、初戦が肝心なので一本を集中して攻めていこうと話をしていた。

先鋒。良い所を狙うもなかなか一本に決まらず引き分け。私はここで一本でも取り、後ろに繋げたいと思い試合に臨んだが、私

がメンを打っていった所を相手が後ろにさばいて引きゴテを取られた。しかし、一本を返す事に集中し、相メンで取り返す事ができた。続く中堅は引き分け、副将戦で二本取られ、大将戦で取り返したい所だが、相手も県のトップチームの大将なのでそう簡単には取る事はできず一本負け。結果は二―〇で敗れた。

私たちが白石高校とする前に、白石高校と沼田高校の試合があり、沼田高校が三―〇で勝ち、決勝トーナメント進出を決めた。

二試合目の白石高校戦は一試合目の後だいぶ間があった。しっかり足を使って動いて、もう決勝トーナメントには上がれないけど、最後は絶対に勝とうとみんなでミーティングをし試合に臨んだ。

先鋒戦は良いタイミングで出ゴテを取り、先制しチームの流れを作った。私もこの流れに乗って次に繋がる試合をしようと思った。しかし、一試合目と間があったせいか体が重く感じ、また勝つぞという気持ちとが噛み合っていなくて、モタモタした試合をしてしまい引き分けになり、良い流れで繋ぐ事ができなかった。中堅戦は、先に一本取ったものの、取り返されて引き分け。副将は河井が元木と交代し、得意の相引きメンを決めるが逆転負け。大将も先にメンを取るが、その後引き胴を決められて引き分け。結果は一―一の引き分けに終わった。

この大会で、再度、全国の壁はまだまだ厚いと感じ、とても悔しさが残る大会であったが、全国の強豪校の試合を見て自分達に足りない所や課題をたくさん得られた大会でもあった。

このように、私たちが全国大会に出場できたのは、熱心に指導して下さる先生方、いつも応援して下さる保護者の方々やOB・OGの先輩方のお陰である。また、日々の厳しい稽古や楽しかった事、嬉しかった事を共にしてきた仲間にもとても感謝している。この高校三年間、剣道を通して礼儀作法を始め忍耐力や感謝の気持ちを学び、多くの仲間や友達も得る事ができた。これらは私にとって大きな財産であり、この財産を無駄にしないよう大切にし、これからの人生に活かしていきたいと思う。

全国選抜大会試合結果（女子団体戦）

▼E組

市立沼田　二―〇　富岡東

森園　×　横山
井村　㊁×メ　河田
名越　×　中野由

○動道　㊁コ―　元木
○土井　㊋―　細川

白石　一―一　富岡東

奥川　―㊁　横山○
木原　×　河田
中島　メ×㊁　中野由
○百崎　コメ―㊋　河合
三根　ド―㊋　細川

四国高等学校選手権大会

徳島文理高校　玉田赳大

平成十八年六月十七日、十八日に香川県琴平高校で四国高等学校選手権大会が行われた。私たち文理高校は県高校総体で敗れた悔しさをこの四国大会にぶつけようと優勝を目標に大会に臨んだ。

予選リーグ一試合目は香川県高松中央高校であった。初戦であったためチーム全体の動きは良くなかったが二対〇で勝利した。

二試合目は愛媛県松山北高校であった。愛媛県の優勝校であったので、チームも集中して攻めることができ、良い試合ができた。終わってみれば四対一で快勝した。

三試合目は高知県小津高校であった。先鋒、次鋒と共に一本を奪われる苦しい展開であったが、そのいやな流れを止めたのが副将の片山であった。冷静に二本勝ちし、私に繋いでくれた。私もこの流れに乗って二本を奪い、二対二ながら本数差で逆転した。予選リーグを三連勝することができ、準決勝へ駒を進めることができた。

準決勝の相手は高知県明徳義塾高校。試合が始まる前に声を掛け合って気持ちを高めた。明徳とは、四国新人大会の決勝で負けていただけにチーム全員が闘志を燃やしていた。先鋒、次鋒と一対一で勝負は互角の展開であった。中堅戦で松田が引き小手を決め一本勝ち。二対一とリードした。続く副将の片山が引き面で一本勝ちをして勝負を決めた。次に私の出番となった。相手は西村選手、今大会の個人戦の優勝者である。初太刀に狙っていた相小手面が決まり先取した。このまま逃げ切ろうと思った瞬間に引き面を取られ引き分けに終わったが、チームは三対一の快勝であった。

ついに決勝戦までたどり着いた。相手は愛媛県帝京第五高校である。前年の全国高等学校選抜大会の優勝チームであり、その時のメンバーも残っている強豪校である。練習試合で何度も対戦したことがあり、緊張よりもワクワクした気持ちの方が強かった。決勝戦では全力を出し切って悔いが残らない試合をしようと全員で決めた。

決勝戦は互いの意地のぶつかり合いだった。先生は先鋒に三年生の西岡を起用した。西岡はその期待に応え、チームに勢いをつけた。何度も惜しい技を何本も打ったが結果は引き分け。次鋒の鎌田も気迫十分で相手に向かったが引き分けに終わった。続く中堅戦で松田はこの大会で一番の動きだった。休まず攻めて相手が退いたところを面を打ち切り一本勝ち。副将の片山に繋いだ。片山は積極的に攻めて、見事な面を先取した。これで勝負有りと思ったが、そうは甘くなかった。相手も執念で一本を取り返し、引き分けとなった。一本リードという展開で私にまわってきたが、相手の木谷選手との相性は良くなかった。しかし、ここまで来れば腹を決め、守ることよりも一本を取ることに集中した。この思いが通じたか、一瞬の隙を捉え小手を先取した。このとき、勝利の二文字が頭を過ぎった。いけると前に出た瞬間に強烈な面を打たれてしまった。

その後、集中力が切れて、小手を打たれ勝負有り。代表戦に持ち込まれてしまった。

代表戦は、私が指名された。みんなの思いを竹刀に込めて、思い切って竹刀を振り切ることだけを考えて代表戦に臨んだ。試合開始後、しばらくして思い切って振り上げ、振り下ろした面が木谷選手の頭上をとえた。一本になった時の感覚は今でも忘れられない。代表戦を制して、目標であった四国優勝をすることができた。これもチーム一丸となって戦った結果であり、今まで努力してきた結果である。今大会を通して、改めて、目標を持って日々努力することの大切さを感じた。思いが強ければ強いほど達成した時の喜びは大きいと感じた。

私たちが四国大会で優勝できたのも、ご指導して下さった先生方や協力して下さった保護者の方々、先輩の方々のお陰だと思います。ありがとうございました。

インターハイに出場して

川島高校三年　森本龍毅

平成十八年度全国高等学校総合体育大会『君がひかり近畿の空は青くそまる』を合言葉に、八月二日～四日の日程で第五十三回全国高等学校剣道大会が京都府立体育館で開催されました。厳しい県予選を勝ち抜く事ができ、私達が高校生として始めて手にした全国切符でした。そして大会は、これまでみんなが経験した事のない程の緊張感と県代表のプレッシャーの中で挑みました。

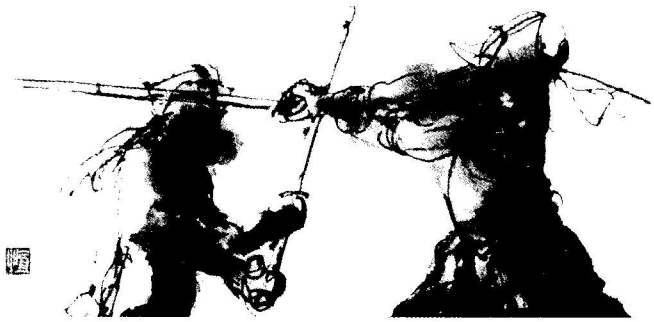
予選リーグの相手は、千葉県の東海大浦安と、鳥取西でした。東海大浦安は遠征でも何度か対戦しており、また鳥取勢とも何度か竹刀を交え、それ程力の差はないと、むしろ自分達の力を出し切り、川高の剣道が出来れば勝つ事ができると皆が感じていました。東海大浦安との試合は、先鋒戦でなんとか勝って勢いをつけたいと思っていましたが、その期待に鈴木が答えてくれた延長で粘って一本勝ち。その流れに次鋒の岩雲も一本勝ちで早くもチームは二勝しました。中堅峰本が引き分け、副将林が一本負けで大将の私があせらず一本取る事ができ、なんとかチームで一勝を収める事ができました。

二戦目の鳥取西との試合では、前の試合の勢いに乗る事ができ、先鋒の鈴木は引き分けましたが、次鋒の岩雲、中堅の峰本が連取し、副将の林が引き分けて、この瞬間決勝トーナメント進出が決まりました。県勢としては九年ぶりに予選リーグを突破する事ができ、決勝トーナメント一回戦は地元京都代表の久御山高校と対戦する事になりました。久御山高校とも過去何度か対戦していて相手の力も分かっており、自信がありました。全員がまとまって試合に集中していけば、必ず勝てると思っていました。迎えた先鋒戦、鈴木は勝負をあせってしまい一本負け。次鋒の岩雲は引き分けましたが、中堅の峰本が幸運にも反則勝でふりだしに戻しました。続く副将林、大将森本が引き分け、代表戦になり、大将の私が出場

しましたが、地元京都代表の壁は厚く、ベスト十六という結果に終わりました。勝敗の結果には悔いは残りますが、試合の内容は負けていなかったと感じています。そして、今大会三試合を通して今まで稽古をして来た事、川島の剣道を出せたと思います。

このような結果を残せたのも、稽古量の多さと豊富な遠征、錬成会、合宿と熱心に指導して下さる監督の長井先生、他校の監督でありながら親身になってアドバイスをして下さった、各校の先生方、学校生活、部活動といつも気にかけて下さる部長の福田先生、良き環境を作って下さる保護者会の方々、母校に帰って来て優しく、時に厳しく後輩のために指導して下さる川島高校OB・OGの先輩方等、皆様のおかげだと思っています。

私は三年間、川島高校で剣道ができて本当に良かったと思います。そして、林、藤本、岩雲という仲間とめぐり会え、楽しく剣道が出来ました。お世話になった全ての人に感謝します。大学へ進学しても川高剣道部で学んだ事を忘れる事なく、剣道に精進したいと思います。



2006年（平成18年）8月5日　土曜日　スポーツ　（24）

【剣道】

【男子】団体決勝トーナメント1回戦

久御山（京都）1―1（代表勝ち）川島（徳島）

○木村㊤メ―鈴木㊤
○中島㊤―岩雲大㊤
池田㊤―反峰本㊤○
井崎㊤―林㊤
鈴木㊤―森本㊤

代表戦

○鈴木㊤ドー森本㊤

▽決勝　水戸葵陵（茨城）3―1桐蔭学園（神奈川）

水戸葵陵は初優勝。

▽個人決勝　石田雄二㊤（東京・高輪）コメ―成田辰訓㊤（神奈川・桐蔭学園）

【女子】団体決勝　筑紫台（福岡）2―0沼田（広島）

筑紫台は初優勝。

▽個人決勝　原口理恵子㊤（長崎・西陵）メメ―山本真理子㊤（大阪・PL学園）

川島ベスト8ならず

男子団体

代表戦に持ち込むも

1―1で、代表戦にもつれ込んだ決勝トーナメント1回戦。本戦で引き分けた川島の大将・森本は「今度こそ、絶対勝つ」と試合に臨んだ。

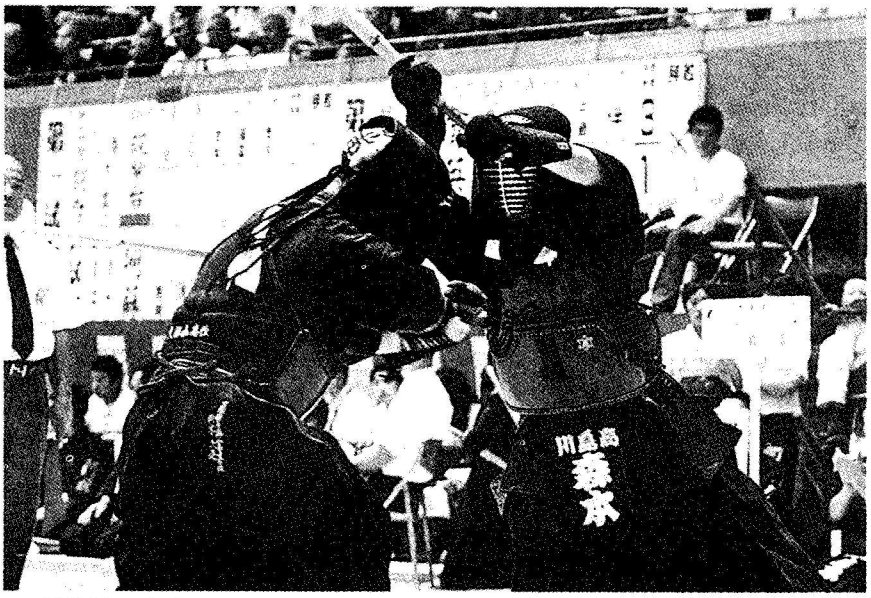
つばぜり合いが続いた。終盤、森本がメンを取りにいこうと振りかぶった瞬間、飛び込んできた久御山の大将・鈴木にドウを先に決められた。川島の夏は終わったが、森本は「最後まで攻め切れた。悔いはない」。

地元（京都）開催で、久御山に大声援が送られる中、先ぼう・鈴木がメンを取られ先制された。しかし、中堅・峰本が反則勝ちし追いついた。貴重な白星を挙げた峰本は「ドウが相打ちになり、相手が竹刀を落とした。ラッキーだった」と振り返った。

攻めた瞬間 相手のドウ

森本以外は全員が初めての全国大会。試合前は緊張のあまり、吐き気に襲われた選手もいたという。そんな中で終始、練習通り「攻めの剣道」を見せた選手たち。長井監督は「森本で負ければ仕方ない。よくやった」と健闘をたたえた。

岩雲大、林、森本ら3年生は、同校初の16強入りを土産に引退する。森本は「これまで支えてくれた保護者や先生方に感謝します」。森本とともにチームを引っ張ってきた岩雲大も「このチームで剣道ができてよかった」と、さわやかな笑顔で締めくくった。（中野）



男子団体決勝トーナメント1回戦・川島対久御山　代表戦で川島の森本㊨は攻め続けたもののドウを取られ、8強入りを逃す＝京都府立体育館

徳島新聞より

第53回全国高等学校剣道大会

＜男子団体予選リーグ＞

チーム名	東海大浦安	川島	鳥取西	勝点	勝者数	取得本数	順位
東海大浦安（千葉）		△ 1/1	○ 4/3	1	4	5	2
川島（徳島）	○ 3/3		○ 4/3	2	6	7	1
鳥取西（鳥取）	△ 2/2	△ 0/0		0	2	2	3

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数／勝者数	勝敗
東海大浦安（千葉）	木村 ▲	尾崎	松木 ×	加藤 ㊐ 一本勝	直井	1/1	×
川島（徳島）	一本勝 ㊍ ▲	一本勝 ㊍	×		一本勝 ㊍	3/3	○
	鈴木	岩雲大	峰本	林	森本		
試合時間	5分14秒	4分00秒	6分00秒	4分00秒	4分00秒		

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数／勝者数	勝敗
川島（徳島）	鈴木 ×	岩雲大 ㊍ 一本勝	峰本 ㊦ド	林 ×	森本 ㊍ 一本勝	4/3	○
鳥取西（鳥取）	×			× ▲		0/0	×
	影井	出雲	川口	岸	広岩		
試合時間	6分00秒	4分00秒	3分29秒	6分00秒	4分00秒		

＜決勝トーナメント１回戦＞

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	代表者戦	取得本数／勝者数	勝敗
川島（徳島）	鈴木 ×	岩雲大 × ▲	峰本 ㊒ 一本勝 ▲	林 × ▲	森本 ×	森本	1/1	×
久御山（京都）	一本勝 ㊍	×		×	×	㊦	1/1	○
	木村	中島	池田	井嵜	鈴木	鈴木		
試合時間	4分01秒	6分00秒	4分02秒	6分00秒	6分00秒	6分01秒		

第五十三回全国高等学校総合体育大会

富岡東高校　細川美幸

平成十八年八月二日から四日までの三日間「君がひかり近畿の空は青くそまる」のスローガンのもと京都府京都市で第五十三回全国高等学校総合体育大会剣道大会が開催されました。

今年のチームは、昨年のチームのレギュラーが四人残っており、今年こそは絶対に予選リーグを突破し、ベスト十六以内に入ることを目標に部員一丸となって日々の稽古に励んできました。

予選リーグの対戦チームは、埼玉県代表淑徳与野と岩手県代表盛岡南でした。最初に淑徳与野と盛岡南が対戦しており、淑徳与野が勝っていました。私たちの一試合目は淑徳与野との対戦で、なんとしても勝ちたいところでした。力の差はあまりなく、自分たちの力を出し切ることができれば必ず勝てると全員が思っていました。そして、試合が始まり、まず先鋒が二本勝ちでチームに勢いをつけてくれました。続く次鋒・中堅もこの流れに乗ろうと果敢に攻めましたが一本負け、ここで焦らず冷静に試合をしなければならないことは分かっていましたが、副将引き分け、大将二本負けでチームは負けてしまいました。この時点で私たちの予選敗退が決定しました。試合後、全員が落胆の色を隠しきれない様子でした。

しかし、まだ予選リーグ二試合目が残っていました。この試合はこのメンバーで戦う最後の試合であり、また私たち三年生にとっては富岡東校生としての最後の大会でもありました。だから、試合前のミーティングで後悔しないように思い切った試合をしようと話し合いました。そして、全員が前の試合での負けを引きずることなく必死に試合をし、二対〇で勝ちました。

試合を振り返っても決して悔いの残らなかった試合ができた訳ではありませんでし

たが、敗戦から得たこともたくさんありました。そして、その学んだことをこれからどのように活かしていくかが大切だと思います。

最後になりましたが、これまで熱心にご指導くださった先生方、OB・OGの先輩方、いつも陰ながら支えてくださった保護者の方々、そして苦しさも楽しさも共に分かち合った仲間に深く感謝したいと思います。試合に勝った喜びも負けた悔しさもたくさんの人の支えがあったからこそ経験することができたと思います。本当にありがとうございました。

第53回全国高等学校剣道大会

＜女子団体予選リーグ＞

チーム名	盛岡南	淑徳与野	富岡東	勝点	勝者数	取得本数	順位
盛岡南（岩手）		0/0	0/0	0	0	0	3
淑徳与野（埼玉）	3/3		4/3	2	6	7	1
富岡東（徳島）	2/2	2/1		1	3	4	2

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数／勝者数	勝敗
淑徳与野（埼玉）	早川	曽根	村岡	牛田	木村		
		㊋ 一本勝	㊐ 一本勝		㊋メ	4/3	○
富岡東（徳島）	㊋メ		▲			2/1	×
	横山	河田	中野	河井	細川		
試合時間	2分23秒	4分00秒	4分00秒	6分00秒	3分33秒		

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	取得本数／勝者数	勝敗
盛岡南（岩手）	横濱	湊	南舘	中嶋	北島		
						0/0	×
富岡東（徳島）	一本勝 ㊋			一本勝 ㊋		2/2	○
	横山	河田	中野	河井	細川		
試合時間	4分00秒	6分00秒	6分00秒	4分00秒	6分00秒		

全日本女子剣道選手権大会に出場して

美馬　真奈美

平成十八年九月三日、第四十五回全日本女子剣道選手権大会が静岡県武道館で行われました。この大会は県予選で勝たないと出場できず、私は二度目の挑戦で全日本大会への出場権を手に入れることができました。初出場ということもあり、不安や緊張もありましたが、自分らしく思い切った試合ができるよう試合までの稽古に取り組みました。

大会当日、入場行進、開会式と進み試合が始まりました。一回戦の相手は、山口県代表の高橋選手です。高橋選手は全日本大会に四回も出場しており、経験のある選手です。試合直前、緊張し竹刀を振ったり、体を動かしたりと落ち着かず動いてばかりでした。前の試合が終わり私の番です。緊張しながらコートに入りました。試合が始まると不思議と緊張がとれ体の動きもよく試合をしていました。途中、相手に旗が一本あがるなど危ない場面もありましたが、四分間が終わり延長戦に入りました。お互い有効打突が決まらないまま時間が過ぎていきました。攻め合いをし、私が小手に出た所を払い面を打たれ、試合は終わってしまいました。前から注意している悪い所が出てしまったと思います。

試合を終え振り返ってみると、今回の試合内容は、自分らしく思い切った試合ができたと思います。しかし、結果は一回戦敗退と満足できるものではありませんでした。自分らしく思い切った試合をする中でも相手の得意な所、不得意な所を短時間で見極め、今まで以上に勝負強くなれるようにしたいと思いました。社会人になり稽古量は学生時代に比べると半分以下に減ってしまいました。その少ない稽古時間の中でも今まで以上に成長できるよう、考えながら稽古に取り組み、また全日本大会へ出場したいと思います。

これまでご指導して頂いた先生、先輩方ありがとうございました。今後もご指導の程よろしくお願い致します。

東西対抗剣道大会

米倉　滋

全日本剣道選手権大会が、各種剣道大会の中でも最も権威ある大会であるのに対し、高段者が雌雄を決する格調高い選抜試合としての内容を有する全日本東西対抗剣道大会が、平成十八年九月二十四日、新潟県柏崎市総合体育館で開催されました。

本大会は、日本を東西に分けて選抜された女子十名、男子七十名の剣士が対抗試合の形式で対戦するもので、各選手は、一回だけの試合を全力を出して戦います。それゆえ、剣道本来の三本勝負がなされることを期待して、試合時間は十分で実施されました。

本県からは、男子の部に西軍の二十二将として平野誠司選手と、同十六将として私が出場しました。

試合は序盤から一進一退の攻防を繰り返し、いよいよ山場の中盤戦にさしかかり、是が非にも勝たなければならない展開となりました。

私の対戦相手は、秋田県警察剣道師範の田口昇選手、立ち上がり触刀の間合いで持ち合い、剣先を相手の中心から外さないようにし、手の内を柔らかくしてためる。初太刀は三十秒を過ぎたころ、交刃の間から相手の打とうとする兆し、動こうとする刹那に先々の面を放つ、相手が退いた為面には届かなかったが、初太刀を捨て身で打てたことで気持ちが吹っ切れ、その後の試合展開は、相手の出頭、相手のくずれを迷いなく打つというように、伸びやかに試合を進めることができました。

田口選手の面に対して返し胴を決める

試合開始後約三分、つば競り合いから分れ際、竹刀を捲かれてかつぎ小手を打たれ先行されましたが、臆することなく自然体で攻め、中盤に面返し胴、延長に入ってから手元の上がったところ、小手を決め勝ちを納め、大会中盤両軍持ち合の中、流れを西軍に引き寄せることに貢献することができました。

その後、西軍が東軍を突き放し、結果二一対一四で西軍が勝利しました。

本大会は、試合時間が十分と長い為各選手は終始全力を出しきった迫力ある試合を展開しました。男子の部の三十五試合のうち、延長戦を含めた一本勝ちが六試合、その他の二十九試合が二本取っての三本勝負となりました。特に、八段の対戦十七試合は全て三本勝負で決着し、緊張感のある立派な試合が行われました。また、三十五試合全ての試合において、反則が一度もなかったことなど、格調の高い大会でした。

最後になりましたが、このような立派な大会に出場させて頂き大変光栄に感ずると共に、今後益々精進努力を重ね、再び大会の桧舞台に立てるよう練習に励みたいと思いますので、ご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い致します。

第五十二回全日本東西対抗剣道大会に出場して

警察支部　平野誠司

昭和十五年から始まったこの伝統ある全日本東西対抗剣道大会も五十二回を数え、今年は新潟県は柏崎市総合体育館にて行われました。私は平成十六年の第五十回大会に続き、五度目の出場になりますが、今年も西軍代表として出場させていただくことに深い感銘を受け感謝の気持ち一杯で出場しました。

この大会は、先鋒から三十三将までの三名を六段、三十二将から十八将までの十五名を七段、十七将から三将までの十五名を八段、そして副将、大将は範士がつとめ、東西それぞれ三十五名の選手が選考されて対抗試合が行われます。

私は西軍二十二将として、神奈川県の宮崎正裕選手と対戦しました。相手が宮崎正裕選手だからといって特に拘りはありませんでしたが、平成十四年にこの大会で対戦

して二本負けを喫していたので、今回もあの舞台で勝負することの意味を考えながら、何かを得たい気持ちで対戦しました。

試合は、立ち上がりに先をとられないように間詰めをして、例の如く「すすーっ、すっすっ」と打ち間に入ってくる出頭を捉えようと考えていました。前回はこの攻めを見てしまっていたので後になるケースが頻繁にあり、そこを逆に乗らないとだめだと感じておりました。しかし、詰めすぎてしまっていたせいで窮屈にもなっていたのでしょう。今度は宮崎選手の面に対する反応が早すぎて手元が浮いてしまったところを狙われました。溜められて裏に回され、担ぎ気味の小手を決められました。

二本目。相手の攻め云々ではなく、今度はこちらからの打ち出しによって崩しにかかりました。小手面、諸手突き、担ぎ小手と展開した攻めは、相手コートを角まで追い込んで受け身の状態にすることができたように思います。特に最後の担ぎ小手は自分でも捉えたかなと思ったのですが、旗は一本。有効打突にはなりません。更に展開して六分少々の攻防後、再び竹刀を表から押さえながら裏に回しての小手を決められました。

出場して毎回思うことは、東西対抗の大一番に試合ができるという感激をどのように表現するかということであり、勝負は勝負としてしゃにむに勝ちに走るか、また互いが自分のあるべき剣道を表現し合う場面として自己規制をすべきであるか、競技者自らの思いに懸かっているのです。結局、真剣勝負の中に見るべきものの存在、すなわち真理が伴っていることが自他共に求める理想的な競技場面なのですが…。

私は常に自分の剣道をいかに出し切って勝負するか、意識の集中を高めながら合気となり相対的な機会を探ります。自己の技を最高の形として如何にぶつけていくかを考えるのです。勝ちへの執着や拘りは剣に迷いや崩れを生じてしまいますので、大事な試合になればなるほど自分の中に自分のすべき理想の剣を思い浮かべ、無心の中に求めていくことになります。

「敵は相手でなく自己にあり。」相手を方便として今の自分に不足するものを求めての修行。太刀の一振り一振りは自己表現であり、全てを自分に省みる。その領域で剣道を創造しなければ真理も見えてこないと思っています。

東西対抗という大舞台で宮崎正裕選手と二度対戦させていただき、四十路の剣行の難しさを改めて自得できたように思います。自分のする剣道、あるべき剣道に対して思いを募らせながら、日々稽古に工夫を重ねていきたいと考えていますので、今後ともご指導をよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

第六十一回国民体育大会に参加して

六條洋二

平成十八年十月一日（日）から4日（水）までの三日間、兵庫県赤穂市（赤穂市民総合体育館）において、第六十一回国民体育大会（のじぎく兵庫国体）剣道競技が開催されました。

本県は、

監督兼大将　北條　憲治（中條建設）

副将　福多雅英（徳島県立城北高等学校）

中堅　平野誠司（徳島県警察本部機動隊）

次鋒　近藤正章（徳島県警察本部機動隊）

先鋒　六條洋二（徳島西警察署）

の布陣で臨みました。私は先鋒として出場させていただきました。

私は、徳島県代表として国民体育大会に参加するのは初めてのことで、この様な先生方と同じチーム、また徳島県代表として出場できる喜びと少しの不安で大会に臨ませていただきました。

大会一回戦は、埼玉県との試合でした。埼玉県は、次鋒の米屋選手、中堅井口選手、副将加治屋選手がチームの軸である優勝候補の一角です。試合の前日の朝、宿舎の風呂場において、千葉県代表の監督兼大将の蒔田実先生（私の国際武道大学時代の恩師）とたまたまお会いし、お話出来る機会がありました。蒔田先生に徳島県と埼玉県が一回戦で対戦することを話したところ、「確かに埼玉県は強いけど、練習試合で千葉県は埼玉県に勝ったぞ。徳島県も頑張れ。」とのお言葉を頂き、自信を付けて頂きました。

いよいよ試合です。試合では、先鋒の私が勝ってチームに勢いを付けたかったのですが、気持ちばかりが先走ってなかなか自分の剣道が出来ないままに飛び込み面を取られてしまい、その後は、無理に一本を取り返しに行った所に面を取られての二本負けでした。チームとしては、次鋒の近藤選手が突き等惜しい技を出すが二本負け。中堅戦、副将戦、大将戦と目を離せない試合となりましたが、副将の福多選手が引き分けたのみで、四対〇で惜しくも負けてしまいました。

この試合では、負ける怖さが先に出てしまいなかなか技が出せず消極的になり、自分の試合、持ち味が出せなかった。という所が反省点であり、これからの課題であると実感しました。

今回の国民体育大会は以上のような結果に終わりましたが、私としては、己の心の弱さ、技の未熟さを痛感出来ただけでも大きな収穫であり、また貴重な経験をさせて頂いたと思っております。これを機に再度初心にかえり、また新しい目標に向かい一層精進したいと思います。

最後になりましたが、今までご指導、ご支援を頂きました県剣道連盟の先生方に心からお礼を申し上げ第六十一回国民体育大会（のじぎく兵庫国体）の報告とさせて頂きます。

（試合結果）

一回戦　徳島県　〇対四　埼玉県

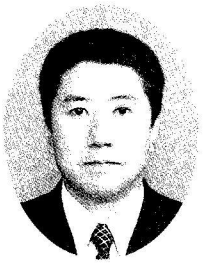
先鋒　六　條　—メメ

桂　木（伊田テクノス㈱）

次鋒　近藤　―メコ　米屋（埼玉県警察）
中堅　平野　―ココ　井口（埼玉県警察）
副将　福多　コ―コ　加治屋（埼玉県警察学校）
大将　北條　―メ　向田（埼玉栄東高等学校）

のじぎく兵庫　国体に出場して

少年男子監督　玉田晋作



平成十八年十月一日より兵庫県赤穂市で開催された、のじぎく兵庫国体少年男子の部に徳島県が出場した。平成元年の国体改革で四国ブロック予選の上位二県のみに出場権が与えられる現在の方式になってからは四年ぶり四度目の出場となる。

本年度の徳島県の高校男子は近年にない戦績を残した。六月の四国高校総体では、徳島文理高校が県勢としては十年ぶりに優勝を飾った。七月の玉竜旗では阿南工業高校が五回戦まで駒を進め大いに健闘した。また、八月のインターハイでは川島高校が予選リーグを突破しベスト十六に進出した。国体選手の選考においてもこの三校の中心選手が順当に勝ち残り、期待十分のチームを結成することができた。四国ブロック大会までの約二か月間に、できる限りの強化を行った。特に、八月十二日～十四日までの京都遠征で全国の国体チームと錬成会を行い、勝率も予想以上に高く手応えを十分に感じた。

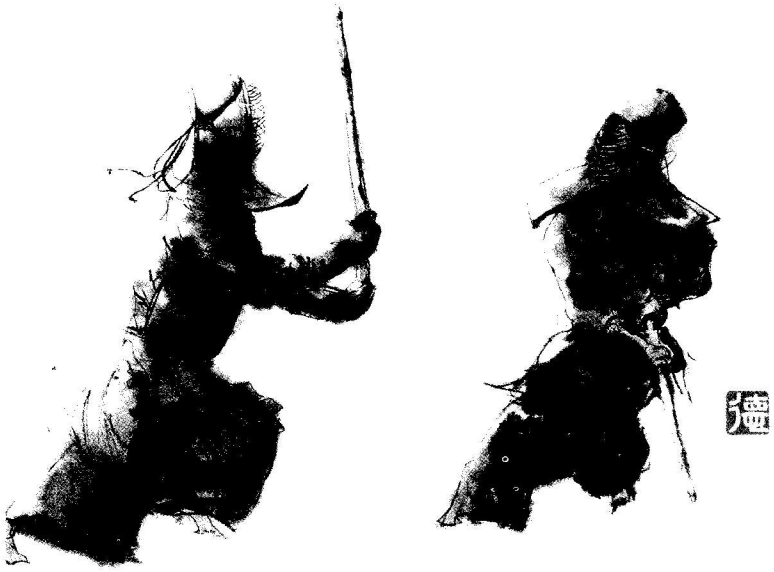
そして、迎えた四国ブロック大会が八月二十日、高知県立武道館で行われた。徳島県は、第一戦の愛媛戦で二対二と競り勝ち、国体出場をグイッと引き寄せた。続く第二戦は高知戦であったが、惜しい技を何本も繰り出したが、一歩及ばず、二対三で競り負けてしまった。しかし、続く香川戦を確実に勝てば、上位二位以上に入る可能性が非常に高くなるので、気持ちを十分に引き締めて最終戦の香川戦に臨んだ。先鋒戦から中堅戦までに一気に勝負を決め四対一で快勝。その結果、二勝一敗となり高知県とともに国体出場を決めた。

本年度の国体より夏季大会と秋季大会が合同で行われ、日程が昨年までより二十日程早く実施されることになり、ブロック大会から約一か月で、のじぎく兵庫国体を迎

えた。初戦の相手は北海道である。北海道は大将にインターハイ個人三位入賞の亀田選手を擁し、強豪の東海大四校を中心に前評判の非常に高いチームである。相手にとって不足は無く、思い切って戦うように指示して選手を送り出した。試合は先鋒から副将まで一進一退の息詰まる展開で二勝二敗の大将決戦までもつれる接戦となった。亀田選手に対するのは玉田（文理）である。『始め』の主審の合図で、初太刀に打った玉田の小手が部位を捉えたかに見えたが一本にはならず、その後はめまぐるしい攻防となった。中盤、亀田選手の放った豪快な面が一本となる。取り返そうと玉田の必死の反撃もわずかに届かず、そのまま一本負け、二対三で惜しくも勝利を逃した。敗れたものの徳島の健闘に会場から拍手が起こる程のすばらしい試合であった。

こうして四年ぶりに出場した国体は初戦敗退に終わった。上位進出は次回以降に託したい。今後の展望として平成二十年大分国体より四国ブロックで一県のみの出場権となることが決定している。今まで以上に国体本戦出場が困難になる状況が予想される。また、高校生の剣道人口の減少も気になるところである。何らかの強化策や普及策が必要と思われる。

先鋒　森本龍毅（川島）
次鋒　松本和起（阿南工）
中堅　岩雲大樹（川島）
副将　片山将志（文理）
大将　玉田赳大（文理）



のじぎく兵庫国体に出場して

少年女子監督　飯田栄一
（富岡東高校監督）

平成十八年十月一日より兵庫県赤穂市で開催された国体に二年連続の出場を果たす事ができました。これもひとえに徳島県剣道連盟・徳島県体育協会の皆様のご支援、高体連の先生方の全面的なバックアップなしには考えられません。この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

灼熱の高知武道館での四国ブロック予選を久々に「少年男女アベック出場」という喜ばしい結果で通過し、海を越えた隣県兵庫県での国体に向けて、スタッフ・選手ともども俄然燃えていきました。チーム構成は・・・

先鋒　坂本鮎美（富岡西高校三年）
次鋒　河田　紋（富岡東高校三年）
中堅　隅田奈美（川島高校　三年）
副将　細川美幸（富岡東高校三年）
大将　平野千尋（鳴門高校　二年）

と昨年出場した選手を中心に各高校の中心メンバーが揃ったドリームチームとなりました。

八月からのおもな県外チームとの強化日程は

八月九から十一日　京都遠征
八月十六日　奈良国体チーム来県
八月二十日　四国ブロック大会
九月九から十日　広島遠征
九月二十三から二十四日　岡山遠征

合同練習会は夏休みを中心に行いました。選抜チーム故にまとまった練習はできませんでしたがチームワークも良く、監督としても本大会での活躍が大いに期待できました。

一回戦福島県との対戦。遠征の度に調子を上げていった先鋒坂本選手が勝利し、チームに勢いをつけてくれたのですが……その勢いに乗り切れず、福島県の逆襲にあい、目標であった二回戦地元兵庫県との対戦をする前に敗れてしまいました。残念でなりません。

敗因には色々な事が上げられるのですが、監督の力不足を痛感した一戦でした。うまく勢いづかせてあげる事ができませんでした。私が追い越したいとその後ろ姿を常に追いかけている高校時代の恩師にも、その事をグサリと指摘されました。へこみました。

選手諸君は力を発揮し、それぞれの最高の試合ではなかったかもしれませんが、最後まで勝利を目指してベストを尽くしてくれました。今、振り返ってみても胸の奥が熱くなります。男子も含めたあの闘いぶりは、徳島からかけつけてくれた多くの下級生達に「自分達も！」という勇気を与えてくれたと信じています。素晴らしい選手達と過ごせた時間はお金では買えない私の財産となりました。選手諸君、本当にありがとう！

さて、今大会には県体協からチームドクターが派遣され、ブロック予選・本大会ともに帯同してもらえました。選手・監督にはとてもありがたい援助です。特に選手にとっては物凄い安心感を得る事ができたの

第61回 国民体育大会剣道競技結果

（少年女子）

平成18年10月１日（日）
主審：久保木文夫　副審：中山紀男・脇本幸彦

府　県	先　鋒	次　鋒	中　堅	副　将	大　将	勝者数	勝　敗
徳　島	坂　本	河　田	隅　田	細　川	平　野	1	×
	㊀ 一本勝						
福　島		延長 ㊍	一本勝 ㊍	㊀㊍	一本勝 ㊍	4	○
	浅　沼	松　川	岡　田	湯　田	斎　藤		
時　間	4分00秒	5分31秒	4分00秒	3分48秒	4分00秒		

ではないかと思います。是非今後も続けていただきたいサポートです。

コーチの河野先生、自分のチームを置き去りにしてのコーチ業、ありがとうございました。お互いにチャンスがあえば次回、今度はもっと上位を目指したチーム作りを早い時期から一緒にチャレンジしましょう。

そして県外強化遠征に帯同してくださりご指導賜った高体連専門委員長の本田先生、本当にお世話になりました。先生が来て下さる事で、選手はヤル気を奮い立たせていました。私自身も大変心強く、心の支えでした。

それまでライバルとして鎬を削っていた選手達と笑いながら、泣きながら遠征を繰り返し…監督として成長させてもらえた国体でした。結果が出せるよう頑張らなければなりません。

第四十一回全日本居合道大会の報告

徳島県監督　岸田光博

日時　平成十八年十月二十日(土)

場所　北海道札幌市

北海道立総合体育センター（きたえーる）

前日十月二十日、北海道立総合体育センター会議室において審判会議（十五時～十六時）および監督会議が（十六時～十七時）有り、出席しました。大会の試合運営の説明と選手の確認、質疑応答でした。質問に兵庫県の選手が前日手首を痛め、「サポーターをしてもよいですか？」応答は「見苦しくない様、肌色のサポーターでお願いします。」でした。（細部な質問に、又、即答に感心しました。）

徳島県は居合道春期講習会五月十三日、十四日の時、選手を選考し、五段・四宮博、六段・福井勝、七段・坂本憲一の三選手と決定しました。全国大会に向けて、各道場での練習はもとより、全員集まり、平尾先生と原田先生立会いの合同強化練習を数回行いました。又九月二十四日伝達講習会、十月一日徳島の脇町で四国四県稽古会の時などにも、特別強化練習をし、他県の選手と各段別に合同演武を行いました。我県の選手も、他県の選手も、練習を十分行っているなと感じました。

十月八日に高知居合道大会に参加して、四宮、福井選手も手ごたえを感じましたが、坂本選手欠席（同居の坂本選手のお母様が約一週間前に亡くなられ）心配でしたが、大会は出席しますとの事でした。各道場で自主練習して、前日に個人演武者と一緒に松茂より空路北海道へ行きました。

大会当日早めに会場へ八時開門前に到着しました。やはり北海道は寒く、会場内も冷たく、場内放送で「只今暖房を入れました」とのアナウンスがあり、四国とのちがいを感じました。開会式が始まり、指定技の発表（全日本剣道連盟居合二、六、十本目）が有り、都道府県対抗優勝試合が始まりました。

徳島県の出場は一回戦は六段の福井選手が十試合目で一番早く出番となり、島根県岡田選手と対戦し結果二対一で勝ちましたが、緊張で堅くなっていて、監督席で後より見ていて、いつもと違う思いながら、しかし気力十分な居合であり、勝利したときは、ただただホットしました。

十二試合目の七段の坂本選手の相手は強豪山口県（団体過去十六回三位内で優勝五回）瀧川選手で十四歳も若い新鋭でしたが、坂本選手は前年の大会（千葉県のベスト八の実力者）でしたが、いつになく緊張し堅く成っていて、いつもと違う居合で、結果は三対〇の敗戦と成りました。試合中に家事都合（母の死亡）による稽古の調整不足等を感じましたが、徳島の代表として恥かしく無い良い試合でした。いかに名選手でも居合をする体制が不十分で有れば、本来の実力が発揮出来ないことを痛感しました。師匠の平尾先生がよく言っている「居合が出来る事は、幸せなことですよ」の言葉を

思い出し、居合が出来る状態に有る自分に対し、反省の気持で一杯でした。

二十六試合目、六段二回戦は福井選手の相手は、埼玉の林選手と対戦しました。結果は三対〇の敗戦となりました。ほぼ互角の試合で気力十分な福井選手の勝ちではないか。しかし、緊張し、手のうちと動きが、堅いため結果敗因になったかと思いました。後で福井選手と反省し、緊張を超える稽古しかない、後は場数を多くし経験を積む以外緊張を解す良い薬は無いとの結論に成りました。

二十八試合目、五段の二回戦に四宮選手の試合となり、相手は兵庫県の盆子原選手で一回戦三対〇で島根県の福永選手に勝ち対戦と成りました。居合人口の多い兵庫県の新鋭の選手で三十五歳、四宮選手は五十八歳の初出場、試合前に六、七段の試合を見て緊張しない様、練習通りの居合を心掛ける様話し合い試合に成りました。一本目良し、二本目良し、三、四、五本目と段々緊張し堅くなり、審判は年齢差を判断して、頂けるかなと思っていましたが、結果三対〇の敗退と成りました。緊張はあまりしなかったとの本人の話しですが、選手になり、練習を重ねてきた四宮選手の成長が著しく、これからも今まで以上の稽古に取組んで下さい。

準決勝戦の後、個人演五・六・錬士・教士の一部後、決勝戦が行われ、教士の一部と範士の個人演武が行われました。徳島県は教士の私と吉岡修一先生、教師八段原田勝先生、範士八段の平尾勝美先生の演武が行われました。

監督として私の所見は過去全国大会には十数回出て行き、他府県の知り合いによる情報では、上位府県の全国大会に対しての取組みは徳島県の数倍か十数倍の、費用と時間を掛け練習稽古を行っているし、選手も頑張って居るとの事です。敗因は稽古不足です。前年の開催千葉県の選手は非常なる稽古を行って、前回優勝し、今回も同じメンバーで出場し、優勝しています。稽古を積めば積むほど、身に付くものだと、痛切に感じ、稽古量が居合に表れ、結果となっています。

結果全国で四十七都道府県中三十七位となり、前年十四位より後退した結果でした。優勝は千葉県、二位は北海道、三位は神奈川県となりました。次回岡山県で行われる、第四十二回大会には、今回以上そして上位の成績に成る様に頑張らねばと思います。

大会終了後会場外部で
左より　岸田光博、四宮博、坂本憲一、平尾勝美、福井勝、原田勝、吉岡修一

第41回全日本居合道大会都道府県別得点表

番号	都道府県	五段の部			六段の部			七段の部			合計	順位	団体戦
		選手名	得点	順位	選手名	得点	順位	選手名	得点	順位			
1	北海道	古野耕一	5.11	2	田村紀雄	4.12	3	松橋貞雄	3.09	5	12.32	2	2位
2	青森	大浦明子	2.05	15	若松通	1.04	17	岩本博人	0.00	39	3.09	27	
3	秋田	伊藤祝男	0.00	40	内田幹夫	1.03	20	千田信治	0.00	39	1.03	40	
4	山形	小野敬吉	1.03	24	中川佳洋	1.03	20	鈴木清和	1.03	22	3.09	27	
5	岩手	岡田泰章	1.03	24	小野順	1.03	20	佐藤信一	0.01	33	2.07	31	
6	宮城	古川昭夫	1.04	17	赤塔徹	1.03	20	佐々木幹彦	2.05	12	4.12	17	
7	福島	山下剛	1.04	17	井上貴宏	2.05	14	澁川譲	2.07	9	5.16	12	
8	茨城	柴野義仁	1.04	17	関展秀	6.16	1	上田忠夫	2.05	12	9.25	4	
9	栃木	荒川知子	2.05	15	福田和雄	3.08	7	松村司朗	1.04	17	6.17	11	
10	群馬	相澤秀夫	1.03	24	植田陽一郎	1.03	20	中島高久	0.00	39	2.06	36	
11	埼玉	永井恒夫	2.06	11	林憲一	2.06	10	鴨志田修	4.11	3	8.23	7	
12	東京	細貝知弘	0.01	33	橋本政美	0.01	33	吉村謙一	2.05	12	2.07	31	
13	千葉	川瀬毅	6.16	1	秋葉広行	3.09	5	與島宏	6.17	1	15.42	1	1位
14	神奈川	寶積泰一	3.07	8	折原靖幸	2.06	10	森島一機	5.14	2	10.27	3	3位
15	山梨	萩原康	3.09	6	萩原健	4.10	4	相川宗敬	1.03	22	8.22	8	
16	新潟	駒形健一	2.07	9	品田賢一郎	2.05	14	田川正幸	0.01	33	4.13	16	
17	石川	作田剛也	2.06	11	松原剛	0.01	33	河西洋治	0.00	39	2.07	31	
18	富山	耳浦隆彦	0.00	40	布目大剛	1.03	20	黒田豊	0.00	39	1.03	40	
19	福井	酒田雅人	0.00	40	西出和男	0.00	41	中嶋多希雄	1.03	22	1.03	40	
20	長野	宮原浩義	1.02	31	滝沢恒徳	0.00	41	藤森秀茂	0.01	33	1.03	40	
21	静岡	佐野文博	4.08	4	山﨑卓司	5.14	2	齋藤公英	0.01	33	9.23	5	
22	愛知	一柳広治	0.01	33	三宅紀芳	0.01	33	木ノ本みゆき	1.03	22	1.05	38	
23	岐阜	伊藤彰	0.01	33	岡田廣志	1.03	20	香村茂	1.04	17	2.08	29	
24	三重	服部浩也	0.00	40	早川雅章	0.00	41	伊藤泰	1.03	22	1.03	40	
25	滋賀	藤原優一	1.03	24	尾前二男	1.03	20	門前正二	2.05	12	4.11	19	
26	京都	岸本卓	2.06	11	下元健	0.01	33	木村幸比古	3.07	8	5.14	14	
27	大阪	松向寺通孝	0.01	33	水野武	1.03	20	東弘一	1.03	22	2.07	31	
28	奈良	清水洋	0.00	40	久米田豊彦	0.00	41	黒松定男	0.00	39	0.00	47	
29	和歌山	池田祐人	1.03	24	磯﨑誠治	1.03	20	熊本博	1.04	17	3.10	24	
30	兵庫	盆子原稔博	4.12	3	藤原孝樹	3.09	5	白井慶子	0.01	33	7.22	9	
31	岡山	岡安誠	3.10	5	菊元富貴	2.06	10	山渋数則	3.08	6	8.24	6	
32	広島	栗原富雄	2.07	9	谷本昌人	0.01	33	高橋忠則	1.04	17	3.12	21	
33	山口	福田啓介	0.01	33	古谷雅美	0.00	41	瀧川朝敬	2.07	9	2.08	29	
34	鳥取	福永正博	0.00	40	森本進一	3.07	8	高岡英明	1.03	22	4.10	20	
35	島根	和田哲美	2.06	11	岡田一男	0.01	33	高野一郎	1.03	22	3.10	24	
36	香川	六車和頼	0.00	40	中井康夫	0.00	41	柳瀬正清	1.03	22	1.03	40	
37	愛媛	横山幸子	0.00	40	乗松道夫	2.06	10	白砂善太郎	3.08	6	5.14	14	
38	高知	西村卓男	1.03	24	中井直喜	0.01	33	谷田文男	2.07	9	3.11	22	
39	徳島	四宮博	1.03	24	福井勝	1.02	32	坂本憲一	0.00	39	2.05	37	
40	福岡	世利慎吾	3.08	7	馬場清治	1.04	17	國方孝之	1.03	22	5.15	13	
41	佐賀	平山好一	1.04	17	山口秀夫	1.03	20	吉原賢一	0.00	39	2.07	31	
42	長崎	平禮道	1.04	17	高木志伸	1.04	17	宮崎友彦	1.03	22	3.11	22	
43	大分	徳光正和	1.02	31	西野孝	2.07	9	小坂隆一郎	4.10	4	7.19	10	
44	熊本	水本健次	0.01	33	高野道明	0.01	33	緒方憲司	0.00	39	0.02	46	
45	宮崎	三宅喬	0.01	33	中村高達	2.05	14	片貝知明	1.04	17	3.10	24	
46	鹿児島	西田忠正	1.04	17	久保好江	1.03	20	林悟	2.05	12	4.12	17	
47	沖縄	崎原毅	1.04	17	仲井間憲亮	0.00	41	竹田忠司	0.01	33	1.05	38	

大会結果（上位入賞者）

団体の部　　個人の部

			五段の部	六段の部	七段の部
1位	千葉県	1位	川瀬毅	関展秀	與島宏
2位	北海道	2位	古野耕一	山﨑卓司	森島一機
3位	神奈川県				

全日本剣道選手権大会に出場して

警察支部　近藤正章

平成十八年十一月三日、私は夢の舞台に立っていた。

県警に入り、「強くなりたい」という一心で稽古をしてきたがなかなか芽は出ず、一度も県大会で優勝することができなかった。五年、長い道のりだった。冷静でマイペースと見られがちな私であるが、胸の中ではもがき苦しんでいた。そんな私に妻は「やったらできる人なんやけん頑張れ」といつも励ましてくれた。「今年は原点に帰って、無心で剣道を楽しもう」と考え、毎日の稽古もこれまでより少し肩の力を抜いて取り組んでみた。次第に体も動くようになり、稽古が楽しくなってきた。課題もいろいろ見えてくる。毎日が充実しているのを感じていた。そして少しずつそれが自信となり、形となって現われてきた。そして国体、選手権。私が今年、やっと手にした切符である。

それから私の生活は一変、照準は選手権に合わされ、剣道一色の生活になった。休日も妊娠中の妻と八ヶ月の息子を家に残し稽古場を求めて家を空けた。そんな私を陰で支えてくれた家族に恩返しがしたい。それには、自分の全てを出し切った試合を見てもらうより他になかった。そこで試合には妻と息子そして両方の両親を招待した。簡単に負けるわけにはいかなかった。胸が熱くなった。

試合の二日前に東京入りし、母校の法政大学で他県の選手と稽古をする機会があり、本番のつもりで地稽古をお願いした。仕上がりはまずまずであったが、何本も打たれてしまった。宿舎に帰り、付添いの佐藤君（県警）に「あかん、やっぱり強いわ」と半ば弱音を吐くと、「いや、結構いけよったでよ」と意外な返事が返ってきた。彼とは高校からの付き合いで、はっきりモノを言う性格。「ええ、ほうで？」その一言で自然と肩の力は抜け、いっぺんに頭の霧が晴れていったのが分かった。彼は良き理解者である。そんな良い状態で私は試合当日を迎える事ができた。

私の一回戦の相手は秋田県代表の土田選手。彼は前評判も高く将来の日本代表候補であるヤングジャパンにも選ばれている強豪である。

試合が始まり最初の鍔迫り合いに入ると、何やら相手の様子がおかしい。開始数秒にもかかわらず既に肩で息をしていた。私は「これはチャンスやな、相手緊張しとる。一気にこっちのペースに持っていこう」と考え、相手の竹刀を上から押さえながら積極的に攻めたてた。試合は延長戦に入りそれまでの上からの攻めから相手の竹刀の下をくぐらせて面を誘い、一瞬相手の手元が浮いた所へ思い切りコテを打ち込んだ。その瞬間旗三本。私の選手権初勝利が確定した。

二回戦は、静岡代表で上段の高坂選手。一回戦で優勝候補である警視庁の小関選手を下し絶好調である。試合が始まり、私は

とにかく自分のペースに引き込もうと積極的に前に攻め、相手に構えさせないよう心掛けた。終盤でコテに出ようかどうしようかと一瞬迷った所へ上段から面を打たれた。私は「取り返さないと」と焦り、二本目の合図と共に突きに行ったところ再び面を取られてしまい負けが確定した。

試合が終わり、二階席まで上がって行くと恩師である大西正範先生から「上段に対する稽古不足」と有難い御指導を頂き、次に向けてまた新たな気持ちで稽古がしたくなった。

私がこの大舞台を経験できたのも、まわりで支えて下さった方々のお陰であり、感謝の気持ちでいっぱいである。夢の舞台で今持てるすべての力を出し切れた喜びと同時に、自分の弱さ、未熟さを痛感した大会であった。今回の経験から学んだことをあらゆる面で生かし、悔しい気持ちを持ち続け、自分の土台をしっかりとしたものにしていきたい。

そしてもう一度あの舞台に、ひとまわり大きくなった自分の足で立ってみたい。

第四十九回全日本実業団剣道大会に出場して

日亜化学工業　木里健一

平成十八年九月十七日、第四十九回全日本実業団剣道大会が日本武道館で開催されました。この大会は全国の実業団約三百チームが集まる実業団の大会の中で、一番大きな大会です。私たち日亜化学工業剣道部は、この大会でベスト八に入ることを活動目標に掲げて、週一回の稽古を行っています。三交替勤務をしている部員もいて、部員全員が揃うことはほとんどありませんが、この大会前には強化練習を行っています。三年前の大会ではベスト一六、昨年はベスト三二の実績を残しています。

二回戦からの出場だった今大会、私たちは対戦相手となるデンソーと富士ゼロックス（新宿）の試合を観客席から見ていました。試合は富士ゼロックス（新宿）が勝ち、対戦相手となりました。試合を見終わった後、みんなの緊張は高まっていきました。試合前に軽めのアップを行い、全員の気持ちをひとつにして試合に臨みました。

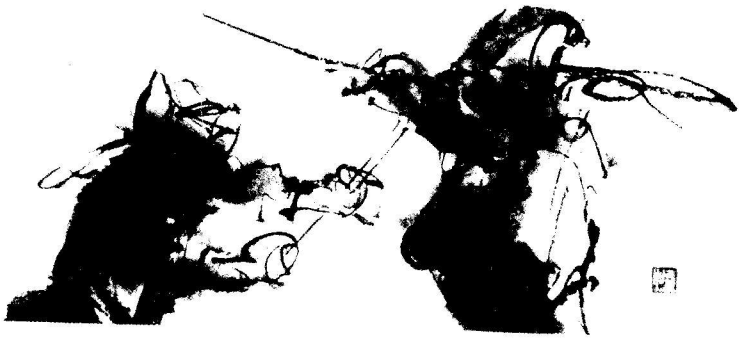
先鋒・次鋒は初戦であった為の硬さと緊張が抜けずに、いつもの調子が発揮できず共に一本負け。二対〇の状態で中堅の私に出番がまわってきました。ここは何が何でも勝たなければならないという気持ちでいっぱいでした。開始早々相手が間合いを詰めてきた時に少し手元が上がったので、小手・面の連続技に出ました。タイミングはよかったと思うのですが、一本にはなりませんでした。その後何度か技を出して攻めていきましたが、つばぜり合いの別れる途中から面を打たれてしまい、一本目を先取されてしまいました。私は完全に別れるつもりでいて、気持ちが緩んでいたところを打たれてしまいました。一本先取された後はパニック状態になってしまい、小手を連取されてしまって、チームの負けを決定させる結果になってしまいました。その後、副将は面

二本を取り一勝をあげましたが、大将は一本負けで試合は終了しました。結局、日亜化学工業　一（二）－（六）四　富士ゼロックス（新宿）でした。過去六回の出場で、初戦で敗退したことは一度もなかったので、過去最低の結果に終わりました。（追い討ちをかけるかのように帰りの飛行機の便は台風により欠航。空港での宿泊となり、何もかもがさんざんでした。）私を含めメンバー全員、初戦であった為硬さが抜けなかったところもありましたが、それは言い訳にしかなりません。振り返ってみると少し気を抜いた一瞬、いつも稽古時に注意されている点を相手に打たれていたと思います。またおしい打ちを一本にできていないことも敗因の一つでした。

本大会を通じて得た今後の課題は、一本になる打ちをできるようにすること、気を緩ませないようにすることです。二点ともこれまでの稽古時に取り組んできたことですが、今大会を通じて、改めてその重要性を感じました。『一本になる打ちをする為には左手で竹刀を振り、右手のスナップをきかせて両手で竹刀の先を振る』高校時代の恩師である河田清実先生の教えを、基本稽古の時にしっかり考えながらやっていきたいと思っています。また気をはった時間を、長くできるように心掛けて稽古に励んでいきたいです。

日亜化学工業剣道部では、毎年個人目標を部員全員が掲げて達成できるように、レベルアップを図っています。私たちのチームワークは、上位の実業団に引けを取らないと思っています。今後、さらに個々のレベルアップを図っていけば、必ず活動目標を達成することができると確信しています。

終わりになりましたが、いつもご支援、ご激励いただいております遠藤一美先生、河田清実先生、山田浩司先生、多くの諸先生方に感謝申し上げるとともに、今後より一層のご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。以上で報告に代えさせていただきます。



全国警察剣道大会を終えて

機動隊　剣道特練員主将
山室雅幹

九月十五日、日本武道館において平成十八年度全国警察剣道大会が開催されました。この大会は三部制で行われます。第一部は一二チーム（七人制）、第二部は一八チーム（六人制）、第三部は一八チーム（五人制）で試合を行います。徳島県警は第二部での出場となります。我々剣道特練員は今まで成し得なかった一部昇格を目指し、一丸となってこの大会に臨みました。

第二部の試合は、三チームが予選リーグを戦い、一位のチームが第二次リーグに進むこととなります。予選リーグで徳島は、大分県警、岐阜県警の強豪と対戦することとなり、初戦大分県警の試合から幕を開けることになりました。

先鋒・六條は全国大会初出場とは思えない、小気味良い足さばき、そして素早い竹刀さばきで惜しい技を出していたのですが、後半にメンを奪われ一本負けとなりました。続く次鋒・佐藤はなんとか取り返そうと積極的に技を出し相手を追い詰めていったのですが、反対にコテを奪われてしまいました。四将・山名は二刀で果敢に攻めたて、相手の場外反則二回を誘い、一本勝ちし、一矢を報いました。一勝二敗で三将・近藤の試合が始まりました。しばらく膠着状態が続きました。そして近藤の足が一瞬止まったところメンに乗られてしまいました。もう時間がなく、万事休すかと思った瞬間、嫌なムードを一新する近藤の切れの良い面すりあげメンが炸裂しました。そして、延長戦の末、相手のメンを引き出し、返しドウを奪って二勝二敗の対にしました。副将・川添も全力で相手に立ち向かい、惜しい技を何本も繰り出しましたが、旗は上がらず惜しくも引き分けとなりました。こうして、大将として私の戦いが始まりました。二勝二敗というかたちで全員が大将戦まで繋げてくれたことを胸に、とにかく集中し一本に賭けていました。しかし、勝負は決せず引き分けとなりました。代表戦には山名が出場することとなりました。試合は、一進一退の攻防が続くなか、特練員全員の気持が乗り移ったかのような豪快なメンが決まり、大分県警から劇的な勝利を得ることができました。強敵の大分県警に勝利した幸先の良い状況で、岐阜県警戦を迎えることになりました。しかし、過去にも予選リーグ突破を目前で痛い目にあっている苦い経験から、もう一度、私達は気持ちを引き締めて岐阜県警戦に臨みました。

先鋒・六條は第二戦ということもあり緊張もほぐれ、本来の動きからの素早いメンが見事に決まりました。先鋒戦の勝利により次鋒・佐藤もその勢いで積極的に技を仕掛け、豪快なメンを奪いました。このまま佐藤のペースで試合は進み、得意の合いメンになり勝利かと思った瞬間、相手側の旗が上がりこの試合、残念ながら引き分けとなりました。四将・山名の試合が始まりました。山名自身もなんとかここで勝利し次に繋げようという積極的な試合を展開していきました。しかし、相手もかなり二刀流を研究しているのか動きもよく、延長戦の

末コテを奪われ、チームにとって非常に痛い一本負けを喫しました。三将・近藤の試合が始まり、大分県警戦の動きと同様、巧みな剣さばきにより相手を翻弄するものの、有効打なく引き分けとなりました。副将・川添は、果敢に攻め、旗が一本上がる場面もあり、終始攻勢に試合を進めたのですが、反対にメンを奪われてしまいました。必死に取り返そうと全力で一本を取りにいったのですが、またもやメンを連取されてしまいました。一勝二敗二分けという状況で大将戦となりました。私が二本勝ちすれば、代表戦になるということを念頭に試合に臨みました。とにかく一本という気持ちで攻めていったのですが試合中盤に合いメンとなり、相手のメンに旗が上がりました。その後、懸命に攻めるものの、取り返すことができず無念の敗退となりました。大将としての務めを果たすべく勝利したかったのですが、この一番大事な場面でチームに貢献できなかったのが自分自身、本当に悔しかったです。

これら試合の結果、三チームが一勝一敗の三つ巴となり、勝者数で岐阜県警、大分県警、徳島県警という順番となってしまいました。

私達が一年の中で最も重要視しているこの大会が終わり、振り返ってみると、日々の稽古、そして試合までの雰囲気、全員の体調等直前まで最高のかたちで全国大会に臨むことができたし、今まで取り組んできたことは間違ってはいなかったと確信しています。来年は三部で優勝し、二部に昇格できるように、剣道特練員一丸となって日々努力し、精進していく所存であります。

最後になりましたが、今大会に向けご支援並びにご指導いただきました剣道連盟会長はじめ諸先生方に厚く御礼を申し上げ、ご報告と致します。

全国青年大会に参加して

阿南支部　横手裕一

平成十八年十一月十日～十三日、東京武道館に於いて、第五十五回全国青年大会が開催されました。大会のテーマは、「友愛と共励」です。大会を通じて相互の友好親善を深め、二十種目が各会場に分かれ、熱戦が繰り広げられました。そして、剣道男子の部で、阿南支部が本県の代表として出場させていただきました。私達阿南支部は、二十三歳から二十六歳で構成され、その中の三人は、今年阿南支部に入り、社会人になったばかりの若さあふれるパワーと元気が武器のチームです。しかし、仕事の都合により、選手全員が揃って練習するということはほとんどありませんでしたが、年代が近いという事もあり、チームワークは抜群でした。

初日目は、団体戦が行われました。一回戦は長崎県チームと対戦しました。各選手、最初は緊張していましたが、だんだんと自分のペースで試合に臨む事ができ、勝利する事ができました。二回戦は、愛知県チームとの対戦でした。愛知県チームは、県内十六チームの中から勝ち上がっており、とても勢いがあり、まとまりのあるチームでした。先鋒は流れをつかむ事ができず負けてしまいましたが、次鋒が勝ち星をあげ、流れをつかみ、それをつないでいき、勝利する事ができました。

準決勝は、開催地の東京チームでした。各選手が自分の力を出し切り、精一杯戦いましたが、惜しくも負けてしまいました。しかし、三位という輝かしい成績をおさめる事ができ、選手、監督とも感無量でした。翌日行われた個人戦では、大前選手と横手がベスト十六まで勝ち進む事ができました。一人一人自分の力を十分発揮し、最後まであきらめず戦った事がこのような結果につながっていったと思います。

十一月十一日（土）

〈団体戦〉

一回戦　徳島　三×一　長崎

二回戦　徳島　三×一　愛知

準優勝　徳島　〇×三　東京

※第三位

十一月十二日（日）

〈個人戦〉

大前智仁、横手裕一　ベスト一六

この大会を振り返り、一番大きな成果は、高校時代の先輩方、後輩達、又共に戦った者達が、同じチームになり一つの目標に向かって日々練習してきた事です。初日の団体戦終了後の交流稽古で他県選手と竹刀を交えた事も大きな成果の一つです。自分達の力がどこまで通用するのか、その中で稽古させていただきましたが、気剣体どれを取っても自分達以上のものがあり、勉強させられる事ばかりで、今後の練習の励みになりました。さらに、稽古会、試合を通じて、他県の選手方とも親睦を深められ、私にとって得る事が沢山あり、有意義な大会であったと実感しています。この大会で様々な全国の強豪選手の試合を見ることができ、また自分もそのような中で試合ができたことは、とても良い勉強になり、今後の稽古に対する意欲も湧いてくるなどして、もっともっと技術面も精神面も磨いていきたいと思う絶好の機会となりました。このような素晴らしい経験ができたのも、熱心に御指導をしていただいた稲生監督、阿南支部の先生方や、諸先輩方の御指導、御支援のおかげだと感謝しております。この誌面をお借りしまして厚くお礼申し上げます。これからもご指導のほど、よろしくお願いします。

先鋒　横手　裕一

次鋒　前川　剛志

中堅　住友　直城

副将　大前　智仁

大将　前田　悟志

徳島県高齢剣友会活動報告

徳島県高齢剣友会事務局長
高島稔之

徳島県高齢剣友会は、遠藤一美会長のもと、八十六名の会員（平成十八年四月二十三日現在）で活動を進めてきた。

平成十八年度は、主な行事として次の活動を実施した。

（四月）・徳島県高齢剣友会剣道講習会
・第二十一回徳島県高齢者剣道交流大会開催

（五月）・第十八回土佐生涯剣友会交流大会参加

（六月）・第二十八回全日本高齢者武道大会参加

（十月）・第十二回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇〇六とくしまねんりんピック）開催

（十月）・第十九回全国健康福祉祭しずおか大会（ねんりんピック静岡二〇〇六）参加

（毎月）・原則として、第二土曜日の午後二時から、県立中央武道館他で定例の稽古会を開催

以上の行事の内で、「徳島県高齢剣友会剣道講習会」、「第二十一回徳島県高齢剣友会剣道交流大会」、「第十八回土佐生涯剣友会交流大会」、「第十二回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇〇六とくしまねんりんピック）」、「高齢剣友会稽古会」については、私の方から報告することとし、「第二十八回全日本高齢者武道大会」、「第十八回全国健康福祉祭しずおか大会（ねんりんピック静岡二〇〇六）」及び高齢剣友会の他の記事については、それぞれ直接関係する会員の先生方から御報告いただくことにした。

◎徳島県高齢剣友会剣道講習会

平成十八年四月二十二日（土）、午後二時～四時、県立中央武道館で実施。

〈講　師〉範士九段　長島末吉先生
教士八段　高崎慶男先生

〈参加者〉徳島県高齢剣友会・県剣道連盟会員、全日本高齢剣友会員・新潟県高齢剣友会員、土佐生涯剣友会員（五十三名）

〈講習内容〉生涯剣道の在り方、生涯剣道としての応じ技、実技（指導稽古、互角稽古）

全日本高齢剣友会会長の長島末吉先生、副会長の高崎慶男先生をお迎えしての大変有意義な講習会を実施することができた。両先生は、翌二十三日の大会にも御臨席・御指導くださった。

◎第二十一回徳島県高齢者剣道交流大会

平成十八年四月二十三日（日）、午前九時から県立中央武道館で実施。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀教士七段松村克隆先生、仕太刀教士七段中村稔裕先生により行われ、続いて、居合の演武が、無双直伝英信流教士七段吉岡修一先生により披露された。

その後、会員選手二十四名による交流試合が、団体戦・個人戦の順に展開された。

団体戦は、八チームによりトーナメント

戦が行われた。

・優勝…阿南A　(先)北條憲治　(中)有賀秀敏　(大)遠藤一美)

・二位…徳島A　(先)中村稔裕　(中)東内勉　(大)南　充美)

・三位…徳島B　(先)中尾正輝　(中)松村克隆　(大)西岡金若)

・三位…阿南B　(先)出葉成一　(中)西岡侃　(大)中山啓男)

個人戦は、二十七名の選手が年齢別の四グループに分かれてトーナメント戦を行った。

[特　組]

優勝（一村喜佐男）、二位（岡島茂雄）

[A　組]

優勝（遠藤一美）、二位（高田　豊）

三位（南　充美、糸谷文雄）

[B　組]

優勝（川田武史）、二位（中山啓男）

三位（有賀秀敏、松村克隆）

[C　組]

優勝（北條憲治）、二位（中村稔裕）

三位（谷　博、出葉成一）

午後からは、全日本高齢剣友会（橋本保治、小川末吉、支倉眞人）及び、新潟県高齢剣友会（樋口耕作、藤田惣松、高橋守、田中茂、山田義雄、小杉耐三）の合同チーム

と、土佐生涯剣友会（三谷義守、横山大道、篠崎俊雄、友永隆雄、戸田七夫、吉本貢、松岡弘城、岩井数猪、嶋村俊彦、中野金夫）との親善交流試合を実施した。

結果は次の通りである。

全日本・新潟合同――徳島県高齢剣友会
（4（7）　2（5））

土佐生涯剣友会――徳島県高齢剣友会
（4（7）　2（5））

全日本・新潟合同――土佐生涯剣友会
（3（6）　2（3））

大会後、全日本高齢剣友会会員・新潟高齢剣友会員、土佐生涯剣友会員・徳島県高齢剣友会員による合同稽古を行った。

本県会員による試合だけでなく、全日本・新潟・土佐の各選手との親善交流試合・合同稽古も行うことができ、大変実りの多い一日となった。

◎第十八回土佐生涯剣友会交流大会

平成十八年五月十三日（土）、午前九時から高知県県立武道館で実施。午前中は、土佐生涯剣友会員の大会。午後から本県チームも参加しての交流試合。夜は、高知共済

会館で懇親会、宿泊。

本県からは、一村喜佐男、遠藤一美、糸谷文雄、南充美、福井軍二、西岡金若、東内勉、川田武志、端村武、高島稔之、中村稔裕の十一名の選手が参加した。一村喜佐男先生（九十四歳）は、高知の高田浅七先生（八十九歳）と、特別立合いを行い、見事な面（写真右）を決めた。

十名の選手による団体戦の結果は

徳島　0（2）――2（5）　高知

◎第十二回徳島県健康福祉祭剣道交流大会（二〇〇六とくしまねんりんピック）

平成十八年十月十四日（土）、午前十時から県立中央武道館で実施。

開会式の後、日本剣道形が、打太刀教士七段松村克隆先生、仕太刀教士七段高島稔之により行われた。

準備運動の後、会員選手二十四名による交流試合が、団体戦・個人戦の順に展開された。

団体戦は、十一チームによりトーナメント戦が行われた。

・優勝…麻植　(先)出葉成一　(中)三木毅　(大)植田一夫）

・二位…吉野川　(先)松浦政昭　(中)笠井勝　(大)川井豊吉）

・三位…徳島B　(先)中村稔裕　(中)端村武　(大)西岡金若）

・三位…鳴門　(先)谷博　(中)伊賀上仙市　(大)菱田晋）

＜特別立合い＞

一村喜佐男――岡島茂雄

個人戦は、二十九名の選手が年齢別の四グループに分かれてトーナメント戦を行った。

［特組］

優勝（遠藤一美）、二位（高田豊）

二位（菱田　晋、糸谷文雄）

［A　組］

優勝（有賀秀敏）、二位（中山啓男）

三位（西岡　侃、川井豊吉）

［B　組］

優勝（沢井勝之）、二位（三木　毅）

三位（松村克隆、中村稔裕）

［C　組］

優勝（出葉成一）、二位（北條憲治）

三位（伊賀上仙市、中尾正輝）

◎徳島県高齢剣友会稽古会

本会の稽古会は、先述したように、原則としては県立中央武道館で実施しているが、年二回だけは、県南部と県西部で実施している。今年度は次の通りである。

○県南部地区稽古会

＊平成十八年七月八日（土）

十四時～十五時半

＊日和佐総合体育館

＊参加者…高齢県友会員、県剣連海部支部員有志、少年剣士（約八十名）

＊懇親・祝賀会（ホテル千羽）

高齢剣友会南部稽古会（日和佐総合体育館）

高齢剣友会西部稽古会（山城中）

◦勝浦守先生・南充美先生の受賞
◦遠藤一美先生・有賀秀敏先生の入賞

○県西部地区稽古会
＊平成十八年十二月九日（土）
十四時半～十六時
＊山城中学校武道館
＊参加者…高齢剣友会員、県剣連三好支部員有志、少年剣士（約九十名）
＊懇親・忘年会（サンリバー大歩危）
高齢剣会員、県剣連三好支部員有志

高齢剣友会員となって今決意すること

麻植支部　出　葉　成　一

本紙面を拝借し、まずもって徳島県剣道連盟並びに徳島県高齢剣友会の諸先生方はじめ先輩各位・剣友の皆様に謹んで新春のお慶びを申し上げます。

この度、私如き者が、何故に本誌に投稿させて頂くことになったのかと申しますと、実は徳島県高齢剣友会事務局長の高島稔之先生から、「高齢剣友会々員として『徳島の剣道』へ何か投稿して貰いたい。」との強いご依頼があったことによります。

私としては、常日頃、何かとお世話になっている他ならぬ高島先生からのご依頼であるうえに、高齢剣友会内では、私が最も若輩者で新入りということ等から、これを断る術もなく、己の浅学非方をも顧みず、恥を忍んで敢えて筆を執らせて頂いた次第であります。

内容的には至って稚拙ではありますが、本題に入らせて頂きます。

今振り返ってみると、月日が経つのは本当に早いもので、私が高齢剣友会に仲間入りさせて頂いたのは、平成十八年四月のことであり、早くも一年が経過しようとしております。

私は平成十八年三月末日をもって、それまで警察官として四十一年間の長きに渡り奉職させて頂きました徳島県警察を無事退職し、退職すると同時に、何の迷いもなく、この名誉ある本県高齢剣友会の一員として加えて頂き、その後、合同稽古や各種大会にも参加させて頂くとともに、諸先生、先輩各位から、折りにふれ貴重なご指導を賜り、深く感謝しているところであります。

私が本会員となって、まず最初に感じましたことの一つは、遠藤一美会長はじめ、会員の諸先生方は全員、剣道をこよなく愛され、稽古熱心な方達ばかりで、しかも年齢を全く感じさせず、元気溌剌としておられ、なお且つ仲間を大切にされるという、すばらしい人達の集団であるということを感じました。更にもう一点付け加えるならば、剣道もさることながら、何をしても、若い私が反対に諸先輩各位から旺盛な気を頂いているといった有様で、実に良いグループに加入させて頂き、本当に良かったと感謝致しております。

また、入会後、特に印象深く、感動したことの一つとして、昨年十月十四日、県立中央武道館において開催されました第十二回徳島県健康福祉祭スポーツ交流大会剣道大会における特別試合で、御年九十四歳の一村喜佐雄先生と御年八十四歳の岡島茂雄先生との立会であります。この立会は、両先生とも終始充実した気で攻め合う中で、一本目は、一村先生の気魄のこもった飛込み面が見事に決まり、二本目は、岡島先生の冴えた手の裡による絶妙な出小手が決まり、勝負は引き分けとなりましたが、私は、この両先生の立会を拝見させて頂いて、これこそ高齢者剣道の真髄ではないだろうかと感動するとともに、自分も将来年老いて

も、両先生のような立派な剣道ができるようになりたいと、強く肝に銘じたところです。

ところで、剣道をなさる方を大別すると、

「剣道を楽しむ人、剣道を広める人、剣道を高める人」

の三つに分類されるそうでありますが、私としては、どの部類に属する剣道をなされようと、どの部類の剣道を求められようと、各人各様でいいのではないかと考えております。と言いますのは、人それぞれに剣道との出会いや、その後の生活環境、或いはその人の剣道に対する考え方等々によって様々となることは、致し方のないことであり、それこそ選択の自由であると考えております。

しかし、私はただそこで、前述のどの部類の剣道を目指すにしても、ただ単に当たった・当てられたとか、打った・打たれたということのみにとらわれずに、真の一本、一本の重みといったことを求めていく剣道をする方が、自分の剣道の質や価値を高めると共に、本当の剣道の良さを楽しめるのではないかと考えております。

現在の私は、現職警察官当時に比べると、若干時間的にゆとりができたことから、もう一度、自分の剣道を矯め直す為に次のことをじっくりと真剣に行じたいと考えております。それは、「剣道における大切な三つのき」ということであります。

その一つは、「基本の基」であります。この基本とは、技の基本のみでなく、礼法はじめ所作も含めたものであり、これができていないと、剣道の本質が良くならないと考えるからです。

その二つは、「機会の機」ということです。つまり、打突すべき機会に技を発し、必ずこれを一本にしなければならない。換言すれば、「理合の剣道」をするということであり、これができないと駄目だということです。

三つ目のきは、「気勢の気」ということで、「気剣体一致」の気であります。文字の配列を見ると、一番先に「気」という文字がきており、一番大切なものから言葉として現れていると思います。気とは、気勢であり、相手よりも上回る気勢が必要不可欠であり、この気勢によって、自分の持てる技や力を自然に一〇〇パーセント発揮できるようにしたいと考えております。

前述しましたことは、どなたもご存知のことで、当り前のことではないかと思われるかもしれませんが、私にとっては、非常に難しいことです。私は、この「三つのき」を今後における自分の剣道修業の課題として真剣に取り組んでいこうと決意を新たにしております。

還暦を迎えた今も、目を閉じて静かにしていますと、私の脳裏には、故三木只雄先生の教えである「稽古する暇は、自分でつくらないかんでよ。」とか、故堀江幸夫先生からの教えの一つであります「芸事は何でも一緒で、行ずることが大事であるが、特に剣道においては、兎にも角にも、まず行ずることが大切である。」等々、数々の貴重且つ有り難い教えが、先生お二人方のお顔とともに鮮明に蘇ってきます。

私如き若輩者が、生意気なことを縷々申し上げ、大変失礼致しましたが、何卒ご容

赦の程お願いします。

結びになりましたが、私はこれからも、高齢剣友会員の一人として、恥かしくない剣道を心掛けたいと考えておりますので、今後とも諸先生方はじめ、先輩各位・剣友の皆様のご指導を宜しくお願い申し上げます。

以上

ねんりんピックに参加して

中村稔裕

平成十八年十月二十八日から三十一日まで「かなでようふじのくにから健康賛」のスローガンのもと、静岡県において第十九回全国健康福祉祭静岡大会（ねんりんピック静岡二〇〇六）が開催され、私も剣道競技に参加する機会を得た。

十月二十八日静岡県袋井市にある「静岡スタジアムエコバ」において総合開会式が行われ、徳島県一六五名の選手団の一員として入場行進をしたが、今回はねんりんピックでは初めての試みとなる約三千人の小学生応援団が選手を温かくもてなす「一校一県交流運動」が展開され、各県の特徴を書いた横断幕を持ち選手団と一緒に入場行進する者、スタンドから各県の色分けしたハンカチを振って応援する生徒達の姿は孫達と共に参加している姿そのものであり、一万余の大観衆から盛大な拍手をもって迎えられ、時間のたつのも忘れる程の楽しい開会式であった。

翌二十九日から三十一日まで静岡県全域において二十三種目の競技が展開された。剣道競技は藤枝市にある静岡県立武道館で行われ、都道府県代表四十六チーム、政令指定都市代表十六チームの計六十二チームにより試合が行われた。

一ブロック三～四チーム編成による予選リーグ戦が行われ、徳島県は第五ブロック（徳島県、山形県、埼玉県、名古屋市）において予選を戦った。今回の対戦相手は過去の大会において優秀な成績を残している強敵ばかりであり、相手にとって不足なしと言ったところ。徳島県チームは

先鋒　北條憲治
次鋒　中尾正輝
中堅　中村稔裕
副将　川田武志
大将　遠藤一美

の布陣であった。

第一試合山形戦は二対〇で勝利、第二試合の埼玉県戦においても気負けする事なく二対〇で勝利。名古屋市チームの成績次第で決勝トーナメント進出が決定するという手に汗握る試合となった。名古屋市チームも健闘し、山形、埼玉を破り二勝となり、徳島県と並び最終的に勝本数で名古屋が八本、徳島七本となり、一本差で徳島県は予選敗退となった。一本の重み、一勝の難しさを十分に味わった結果であった。決勝戦は静岡県が五対〇で福岡県を破り優勝となった。

今回、徳島県は、開会式直後の第一試合であったが、試合場も第一試合場となり、常陸宮殿下御夫妻入場直後の御前試合となり、最高の思い出になった大会であた。

次回は茨城県での開催であるが、我が国の六十五歳以上の人口比率は既に二十一％となっており、急速な高齢化の中、内にこもることなく生涯剣道を求め、皆さん積極的に参加しようではありませんか。

ねんりんピック静岡2006 剣道交流大会
平成18年10月28日～30日　静岡県武道館

随想

亡父の教え

副会長　大澤孝彰

我田引水ですが、亡くなった父から教えと云うよりは小言の様に云われた事を思い出すままに書いてみます。

剣道は何のためにするのか。全剣連が示している剣道の理念が大原則である。ごく一部の人は剣道だけで生計を立てているが、大多数の人は趣味としてやっている。色々趣味はあるが男の趣味としては一番だと思う。趣味だから楽しくやりたい、楽しいものであるべきだと思うのは当然だ。それには教える者（指導者）が工夫して楽しいものにしなければいけない。

趣味として一番目的の健康を維持するためにやっている剣道の稽古で足腰（体）等を痛める或いは過労になって病気するなどは全く話にならない。人生では生計をたてている仕事がほんとうに多忙で剣道などやる時間が全然取れない時期がある人が多いと思うが、仕事が落ちついて剣道が出来る時期には何もかも忘れて剣道に打ち込めば良い。この出来る時期に前述した事とうらはらになるかも知れないが、手足が少し痛いから風邪気味だから休む等していたら、やる時が無い。右手が痛ければ左手で、左足が悪くなれば右足を軸にと頑張って稽古すれば、いつのまにか痛さも具合の悪さも消えて行くはずだ。

剣道をやる者は武士なのだ。武士は質素であり乍ら品格を重んずべきだ。公務員・会社員・商業・農業等どのような職業に従事する場合にでも、質素でいいから清潔で端正な服装で言動すべきである。その事が必ず剣道稽古の気品としてあらわれる。細かい事になるが、稽古が終って汗を拭く時「手ぬぐい」をくしゃくしゃにしてこする様に拭くのは最も下品。「手ぬぐい」をたたんで押さえる様に拭けばいかにも上品である。又顔を洗うときはブルブルと音を立てないで洗うようにする。いつ後から襲われるか分らない。これがいつも油断のない武士の行動だ。

剣道の稽古で自分は上段は得意でなくとも上段で稽古をやって見ると上段の長所と短所が実感出来る。銃剣道・短剣術・薙刀等も経験してみると対応出来る所迄行かなくとも何かをつかむ事が出来る筈だ。詩吟・剣舞・絵・書も出来る限り嗜めば、心の落ち着きがはぐくまれると思う。

道場での教えの中で剣の神様、自分を鍛えてくれる道場、先輩等への礼。同僚、仲間等との挨拶。正座・たちいふるまい・道場の清潔・整頓等とりたてて教えなくても先生が実践していれば自然に出来る様になる。これが本物だ。

まだまだ云われた事がたくさんあるのですが、次の機会に書きたいと思います。亡父の云っていた事はそんなに難しい事ではなく剣道人として努力すべき普通の事ですが、私は半分も出来ていない様な気がして

います。三十才代半ばから八十才近くになるまで剣道ばかりやって来たのだから、亡父の教えの殆んどが出来ていなければ眞の意味の剣道家でないと深く反省しています。

躾の大切さ

平尾勝美

私が徳農に入学し、剣道を学んでから七十年の月日が流れました。また、剣道の源である居合道を学び、剣道上達の一助としては、との御教示を頂き、須見善富先生に師事して無双直伝英信流の居合を教わりました。更に平行して心の修業の一環として禅寺にて座禅も三年程経験させて頂きました。

思えば何時の間にか過ぎ去った七十年ですが、短くもあり、また永い苦楽の年月であったとも思います。其の間に私の思う所は剣道は何を以って「目標達成」と云うべきかと云う事であります。技量と体位の向上を図ると共に、立派な成績を残すことが一つの目標であることには違いありませんが、修業を通じて自己の人間形成を図る事が終局の目的である事を忘れてはなりません。

剣道は個人の条件によって器用、不器用の差がありますが、如何に不得手と思われる人でも、「人としてなすべきこと」「してはならないこと」のけじめがあり、そして明るく、辛抱強く、思いやりといたわりの心が身につけば白点と何時も子供達に話し、人間形成の大切さを説いて参りました。各

地の剣道大会で声を揃えて「おはようございます！」と明るい挨拶の出来るチームに出逢います。私は必ず此のチームをそれとなく確認し、其のチームの戦い振りを拝見し勉強させて頂いております。大きい声で挨拶の出来るチームは気迫あふれる懸声と共に剣道の中味も立派であることに気がつきました。

場内混雑の中をくぐり抜ける様に移動中腕や身体にぶつかる子供達もたくさんいます。そんな時「すみません」の一言が言える子よりも何も言わず足早に通り過ぎて行く子の方がはるかに多いように思います。剣道は礼に始まり礼に終わると言われていますが、その教えに照らして見てもどうすべきかは明白であります。熱心な稽古と併行して剣道人らしい挨拶と振舞を指導するのも指導の一環と存じます。

此の頃の世相を眺めますと国民全体のモラルが地に落ちた感があります。青少年の精神教育の重要性に鑑み、古来から伝わる伝統文化である剣道を通じ、道の教えを伝え礼儀作法はもとより、究極の人間形成の道を説くべきであります。日本民族の誇りを植え付け、世界に恥じない躾のきいた子供達を育成すべきです。武道を愛好する私達は一人でも多くの此の道に青少年を誘導し、我が国の後継者の育成に皆様方と共に力を合せて精進して参りたいと念じて居ります。

自然流に活力を得た リンゴの木

剣道連盟 理事長 三木 毅

会社人として勤務をはじめて早くも四年を迎えようとしており、多くの社員と会話を交わすうちに、この人に教わらなくてはという共通点を見出した人がいます。その人は兼業農家の方で休日には農家の長男という役割を見事に果たしていることが話の随所に表れありありと伝わってくるのです。私は親から引き継いだ若干の農地があるものの高校を卒業して四十二年間、地力ある農地を作り、作付けをした経験は無に等しい状態であったため少しでも良い作物を育てみようという願望があり、この人から農業知識を獲得しようという魂胆が湧いてきたのです。

その人が言うには、我が国が終戦から立ち上がるための先ず最初の取り組みは、農作物の大量生産であった。それを可能にするために欧米流のいわゆる金肥肥料栽培が主流となり日本の食糧難を克服してきた。戦後六十年を経た現在の全国的な農地の地力は痩せ衰える一方でそれを補うために大量の金肥や大量の農薬の力によって生産量を維持しており金の掛かる農業になってしまっている。だから、地質の改良が当面の課題であるという高度な農業談義をするのです。また一方では消費者からは『有機栽培ものとか無農薬もの』を求める声が日増しに強くなっている現状があります。

このような話は各メディアの報道に接している私にも十分理解し得る話です。そこで経費を最小限度にしてどのように地質改良をするかということになり、こうだ、ああだのことを言い合うのですが、現実の農地のことに思いをよせると、農地は一反単位のことですから即刻改良するのはたやすいことではありません。

最近有機栽培の本があふれるばかりに出版されている中で、最も親切なのは『農山漁村文化協会』の出版書籍であることに到達し、各種の本を購入して読みこなしていきました。これらの書物によって得られた現在の感覚を端的に集約するならば『農業の基本は微生物の活動・微生物の恩恵がいかに大切か』ということになりました。

そこで私は梢のチップや木肌のチップを入手する手はずに取り掛かり、多くの方面に足を運び模索を重ねながら漸く多量に入手することが可能になり、また微生物の活動を利用した発酵肥料作りも大量に作ることができるようになりました。この春から新たな作付け時にはこれらチップとか発酵肥料を元肥として用いようと考えているところです。

ところで十二月七日のテレビを見ていますと岩手のリンゴ農家の人のリンゴ作りの苦悩と成功が放映されました。それはリンゴ作りに何十年も携わった人がここ十年ほど前から立派なリンゴが収穫できなくなり、リンゴの木は害虫に犯され枝が枯れ、みじめな木になってしまい生計維持も難しいという苦悩が押し寄せ、リンゴ畑を放棄し死

まで考えたという。ふと山中をさまよっていると茅や雑草のなかで凛として生き生きした木を見て「これはどうしてだ」いうことに我を目覚めさせ、その後懸命に知恵をめぐらせた結果、『植物は自然流（じねんりゅう）だ』というひらめきとなったのです。

その人はリンゴ畑に雑草が生えるがままにし、時をみて雑草を刈り、雑草が自然のうちに枯れ、微生物の活躍で雑草が見事に朽ちて土に変化しこれが極上の肥やしとなる。そこで時には微生物が生み出した発酵肥料を撒き、リンゴの木が自然の中で生き延びる手法を八年間続けたという。

八年が経ち、枯渇寸前のリンゴの木が自然のうちに元気を取り戻し、一昨年あたりから、金肥栽培では成し得なかったこれまでにない多くの蜜を含んだ極上の立派なリンゴが再生されたというのです。

この人は今では有名になり、自然流のリンゴ栽培で消費者が飛びつくやら、多くの地域に講師として招かれ、それこそ多忙な日々であるという。そんな噂からテレビ取材があり全国に放映されたのです。

私は、目下微生物の活動や恩恵というものに凝りかけている最中にこの放映を眼にしたことで、でっかくて太い支えが現れたと自信が湧いてきたのを覚えました。私流の成果が出るのは半年以上先のことですが大きな期待をしています。

ところで、自然界の営みは『自然流』と読ますものですが、剣道の世界でも同義語が存在します。それは申すまでもなく、極めて大切な教えである『自然体』であります。

そこで、植物栽培の自然流と剣道の自然体がどうも重なり合うのでないかという気がしてきました。その内容について静かにそして深く思いを馳せると、それは『基本の大切さ』であることに帰着するのです。剣道での基本は自然体であり、気の構え・竹刀の構え・足運び・打突・姿など剣道全体を指して表される言葉であることはいうまでもありません。

多くの先生方から『剣道は何時も自然体だ』と幾度となく指導を受けているのでそれこそ一生懸命に自然体について考え、それを自分に言い聞かせ、そしてまた言い聞かせの繰り返しをしてきたものの、いつの間にかこの齢になっている自分が現に存在していることに恥ずかしささえ覚えている。

リンゴの木はいま存在する環境の中で、生き延びる活力に目覚め、着実にそれを本来の使命のために必要なものを全て吸収して類のない結実を実現したのです。

剣道修練もそれこそいまある環境の中であくまでも基本に徹し、自然体での竹刀さばきができるよう日々を振り返り次回の錬磨に意を繋ぎ、こつこつと着実に自己のものにしてゆくべきことすなわち『自然流（自然体）に勝るものなし』をリンゴの木からじっくりと学ぶことができた年末であった。

生涯剣道の壁

沢井勝之

県下高齢者剣道大会で九十歳を越える先生の立ち会いを拝見し、理にかなった動きの中に気迫を感じ感動した。また、某剣道雑誌に「百歳からの剣道」という特集があり、百歳で剣道が出来るのかとびっくりした。さらに、ある剣道の先輩からは「五十・六十は鼻たれ小僧、男盛りは百から百から」という言葉も聞いたことがある。このような素晴らしい大先輩たちを目の前にして、自分に当てはめて生涯剣道を考えてみたい。

私もいつのまにか六十五歳になっている。剣道界ではまだまだ鼻たれ小僧である。自分はとても九十まで剣道をやることは出来ないが、せめてあと十年は生涯スポーツとして剣道を続けたいと思っている。しかし、この年になって、やっと生涯剣道という裾野に足を踏み入れただけで、生涯剣道という頂は遙か雲のかなたにあるように感じ出した。それまで生涯剣道というのは、剣道を続けてさえいれば誰でも出来るものと思っていた。ところが六十五歳になって初めて、それを目指すのは簡単にはいかないと思い始めた。これも剣道の先輩から聞いた言葉だが「剣道を続けていて六十五歳が大きな節目になる。ここからは一年一年が勝負になるぞ」と言われた言葉を今になって重く噛みしめている。

もちろん人によってその年齢は異なるが、生涯剣道にとって壁になるのが、六十五歳前後と言われている。剣道を続けるには、「体力」「気力」の両方が必要だが、この両者が一気に衰退し始めるのがこの頃からである。

体力の衰えは「目、歯、足、耳、〇〇」の順でくると言われる。私の場合、六十歳まではどこも悪いところが無く、極めて健康で元気であった。それが定年を堺に急に衰えだした。まず目に来た。相手の竹刀がぼやけて二重になったり。お月さんが数個に見えたり、夜の高速道路の運転中に対向車のライトが散乱し極めて危険な状態になった。あわてて目医者に行くと、かなり重い白内障と診断され、手術で人工のレンズを挿入してもらった。それ以後は相手の目や竹刀もよく見えるようになった。次は歯の衰えである。歯がぼろぼろになった。剣道で歯の衰えはあまり関係がないと思っていたが、人は踏み込み時に、歯をぐっと噛みしめるもので、歯がぼろぼろになると強い打ちが出来なくなることが分かり、歯医者に行き人工の歯インプラントを入れてもらったら調子良くなった。足も極端に衰えだした。若い人と稽古する時に同じ間合いでは竹刀がとどかなくなった。今は自分の間合いが分からず試行錯誤である。耳も徐々に衰えだした。相手の言うことがよく聞こえなくて、何度も問い直し恥ずかしい思いをしている。極めつけは、〇〇の衰えである。小便の出が悪いので、医者に診てもらったら、前立腺癌であった。癌と言う病気を人ごとのように思っており、まさか自分の身に降りかかるとは想像もしていなかっただ

けに少しショックであった。でも近代医学は素晴らしい。前立腺に放射線カプセルを百個も挿入し癌細胞を死滅させてくれた。お陰で剣道が出来るようになった。このように私の場合は体力の衰えと言っても大したこともないが、想像を絶する病気や障害を乗り越えて剣道を続けている多くの剣道家がいることは絶賛に値する。

生涯剣道のもう一つの壁に、気力の衰えがある。これは体力の衰え以上にやっかいである。私の場合もこれが急激にやってきた。以前は何事に対しても燃えるような情熱があったが、この歳になり、急激に全てのことに意欲がなくなりだした。朝、仕事に行くのが億劫になったり、稽古に行くのが消極的になり出した。稽古着に着替える前に拒否反応が出て、何らかの理由を付けてサボり出した。一回サボると次もサボり情けないと思っている。

このままでは自分が駄目になる。生涯剣道は生やさしいものではない。これからは一年一年が勝負である。初心に返り一から出直したいと思っている。生涯剣道を続ける上で、気力と体力の衰えの壁を乗り越えなければならない。そのために、高齢者の体力に応じた剣道をと思ったが、剣道界はそんな甘いものではない。剣道に年齢の壁はない。全力で激しい稽古をしなければ、相手に失礼だし、生涯剣道の道は開けないと自分に言い聞かせているところである。

良師に学ぶ

春風館館長　青木茂生

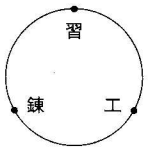
私と剣道のめぐりあわせは、今から三十八年前、高校一年の折、親友の県剣道連盟審査部理事大石雅生先生と一緒にクラブ活動として剣道部へ入部したのが始まりです。あの当時の先輩の厳しかった稽古が今も心の中に残っております。

高校を卒業してからは剣道を辞めていたのですが、大阪から徳島へ帰ってきた時に、再び大石先生と出会い教士七段滝下勝先生をご紹介して頂いたことが機会で、本格的に剣道の稽古をし始めました。

滝下勝先生には毎回打ち込み、かかり稽古と、へとへとになるまで稽古をつけて頂き、稽古が終わって帰る時には首に二、三本青痣ができているほど非常に酷しい稽古でありました。そしてその思い出が今も脳裏に浮かんできます。また、先生はあの小柄な体形にもかかわらず非常に勝負強かったことを思い出します。そんな滝下先生は昔徳島県高体連剣道専門部長をされていた時がありその時、他の先生方から「君の剣道指導の秘訣は」とよく聞かれたそうであります。それに対し先生は「より工夫と努力これ以外に成功の秘訣はない」とおっしゃったそうです。以下に私が滝下先生の数多くの教えの中から学んだ事の二点を書き述べさせて頂きます。

一、「三磨の位」

柳生流では極意に達する手段として「三磨の位」を秘密として伝えてきた。丸の中に三つの点を書いてある。これが極意、他流の者には判らない。解説すると上の点は習うということ、いい師匠に就くということである。自己流ではいけない。道元禅師は「正師を得ざれば学ばざるにしかず」と教えている。でたらめな師匠に就くと邪道に入ってしまう。だから正師を選べ。選んだならば、教えを自分でよく工夫してこうだと思ったら鍛錬する。この三つの一つでも欠けては本当の道に入れない。剣道修業のための手段である。



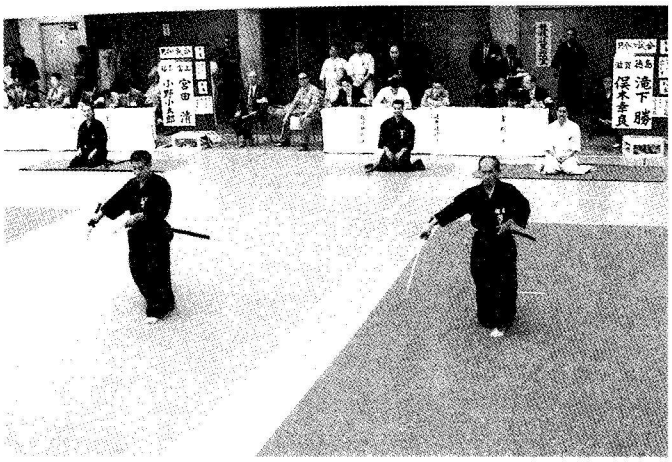
二、「鉾（はばき）の心」

世の中には兎角く自分の功績を表面に押し出し誇大に顕現する。悪い事は反対に隠すことが常である。日本刀の鉾は常に表面に顔を出さず鞘の内側にかくれ鯉口をしっかりと締めくくり刀身の錆びないよう地味ながら重要な役割をもっている。人間と自覚する限り鉾のような心で世のため人のためになる様心掛けるべきである。

このようなことを滝下先生は私に指導してくださいました。それから後、滝下先生が亡くなられ、私が六段の昇段に苦労していた時、香川県の森川竜一先生に出会えることができました。その時の数ある教えの中の二点を書かせて頂きます。

一、「正念相続」

「正念」とは「気・剣・体の一致」と説明されている。それが続いていけば、「正念相続」であると云う。ところが、相手の間合いに入ると、打とうという気が出る。そこで正念が切れてしまう。切れた所が、妄念であると云う。正念は一念である。一念・一念の連続が正念相続と云うのであって、一念は、捨身になることである。分かり易く説明すると、「オレが」と云う「我」を無くすことである。構えの中で右手に力が入ると、正念が妄念に変化する。正念を水と考えたなら、妄念は氷である。氷と水は一体のものである。その変化は心のなせる業で、原因は「我」が元であると云われる。



居合演武される滝下勝先生(右)

二、「露の位」

露は夏秋の夜に草木の葉などに凝りつき珠をなす空中の水蒸気である。草葉の露は僅かなものに触れると忽ち地に落ちる。剣道に於いて気合が充分に満ちて少しの油断もなく相手に対しておれば、即ち草葉が何かにふれてハラリと露が地に落ちる如く相手の動きに従って忽ち隙を見つけ瞬間に技が出る、結局は敵に従う（応ずる）て勝つと云うことであり、位とは其の格を云うのである。その心の事を懸中待とも云って待つ中に懸るありと、懸る心情に大切な事は先の気位である。判り易く云うと相手の動くところ、起る頭、出る頭、そのところを遁がさず打ち突く事の意である。

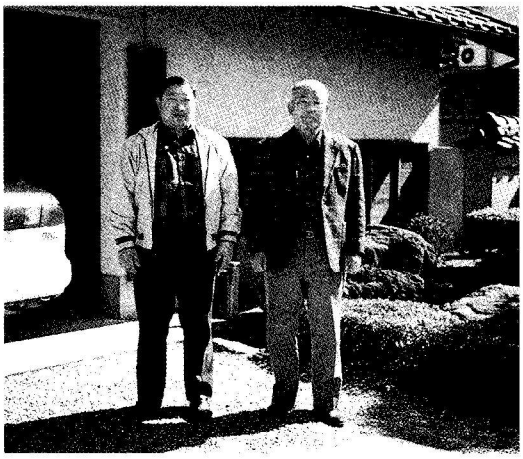
このように森川先生から指導をいただきました。

私も剣道の修業をしてやがて三十年がきます。どんなことでも一つの道で大成するには、十年はかかると言われています。イエローハットの創業者である鍵山秀三郎氏はこんなことを言っておられる。「十年偉大なり。」「二十年恐るべし。」「三十年にして歴史になる。」と言われている。どんな小さいことでも、十年続けることは偉大なことである。さらに十年加えて、二十年続けると、それは恐るべき力となる。そして、さらに十年続けて三十年になれば、歴史になる力だとおっしゃっている。

「継続は力なり」という言葉があるように、続けること。しかもひたすらやり続けると、やがて偉大な力を持ってくる。私も

このことは、少年剣士の皆さんには特に「継続は力なり」と言うことをよく指導しております。

これについては、すぐに成果を得られなくてもいつかきっと何らかの形で自分に返ってくる。ですので早く結果を出すことよりも過程を大事にすることが大切であるということです。成果主義と言うことが最近よく言われてすぐ結果を求められますが、確かにこのことも大事ですが、もっと大事なことは「プロセス」を経て、この結果になったかと言うことであります。また、その時にどのくらい「熱意」を持って取り組んでいるかどうかと言うことが重要であります。この「熱意」が物事を成し遂げる力となると考えております。



森川竜一先生（右）と筆者

最後に、剣道の教えの中には「守・破・離」と言う言葉をよく耳にします。この「守・破・離」の教えは、剣道だけでなく人生における生き方においても同じことが云えるのであります。

先ず最初に物事を教わる時は謙虚な気持ちで、先生や先輩等から「学ぶ」と言う姿勢を忘れてはならないと言うことです。自分以外は全部「先生」だと言う気持ちが大切であります。

〝まなぶ〟と言う語は、〝まねぶ〟から転じたと言われています。最初は、〝まねる〟こと。先生・先輩等の〝まねをする〟ことから出発します。そこから自分なりのものを会得していくこととなります。

子供たちが、勉強に剣道に全身で打ち込み社会に役立つ立派な人になっていかれるよう期待・夢を持って今後も青少年育成に日々励んでいきたいと思います。

何のために……

事務局長　藤本雅史

平成十八年十二月私が勤務する学校で講演会が開かれた。「皆さんは何のためにこの学校に通ってきているのですか？いい会社に入るため？、甲子園に出たいから？それとも、みんなが高校に行っているから俺も何となく……。私も高校時代は目的もなく、何となく高校に行って、非行に走り、どうにか卒業して、東京に出てアルバイト的な仕事をしていました。そんな時、人生を変える人に出会った。その人はよく『何のために』と聞いてきた。『おまえは将来何になるんだ。何のために働いているんだ』そりゃ……お金を儲けて、いい車や服や時計でも買って、ちょっとは人並みにいい暮らしもしたいし、……できたら新しい家でも建てれたらいいかな……。『それも全部叶えれたら何をしたい』う～ん……『あのな、おまえの言うこと聞いていると、みんなが持っているからとか、みんながしているとか、全部物を買うことばかりで、他人や世間との比較、他人の基準で物事を考えている。それは自分に自信、目標が無いからじゃないか。金は入り口があって出口もある。みんな東大や一流の会社に入ることばかり考えて、出口、何のために入るのか、入ってから何をするかを考えていない。人間は死ぬ時、人生の最期にその人が生きてきた価値が解る。会社の部長、課長が現役で死んだ時は大勢の人が見送ってくれるが、定年退職して十年も経てば寂しいもんや。それは、その人の肩書きに義理があるからや。何年経ってもその人自身に徳があると大勢の人たちに惜しまれながら見送られるもんや。人のために仕事や金を使えるようにならないかん』……その人の親父さんはすごかった、資産・財産は無かったけれど大勢の人に見送られて……」後続く。

講師は出会ったその人を師と仰いで、一緒に野菜の行商の仕事を始めて、東京に店を六店出店し、今は独立を許され、クロフネカンパニーの社長として、また全国の講演活動に、執筆活動に、また、北海道・沖縄で自閉症や不登校生を集めて農業を始めるなど大活躍されている。そして、成功の秘訣と自分が今までやってきたことを話してくれたのだが、よく聞いていると剣道の教えとよく似ているなと思った。

それは、良き師を選ぶことである。十年掛かっても良師を探せといわれる教えである。そして、柳生の兵法の「三磨の位」である。

一、習う

良き師に付いたら素直な心で修行をしなさい。守・破・離の守である。（返事は○、二秒と言っていた。人に言われたら、恥ずかしい、格好悪いとか、損か得とか、自分の体裁とか色々なことを考えてしまう。人間開き直ったら、何でも出来る。）

二、創意工夫

（頼まれごとは試されごとである。同じするなら人の予測以上のことをやれ。印象に残る、出会いを大切にする）

三、稽古

（言い訳をしない、理由を列挙して言

い訳の天才にならない。理由を云う前に今できることから始める。一人が出来ない理由をしゃべると俺もそう思うと賛同する人が出てくるのが弱い集団、それを戒める人が出てくるのが強い集団）等々云々。

普段だと頭を下げて聞く耳を持たない生徒が真剣に前を向いて聞き入っていた。

それでは我々は「何のために」剣道をしているのだろう……。試合に勝ちたい、昇段したいから、健康のため、稽古後のお酒が美味しいから……。では、全日本選手権で優勝をした人、剣道界最高の八段に昇段した人、七十・八十才になってもまだまだ健康で稽古を続けている人、みんな目標を達成したにもかかわらず、その後も稽古を続けているのは何のため……。老若男女、暑い日も寒い日も休まずに稽古を頑張っているのは何のために……。

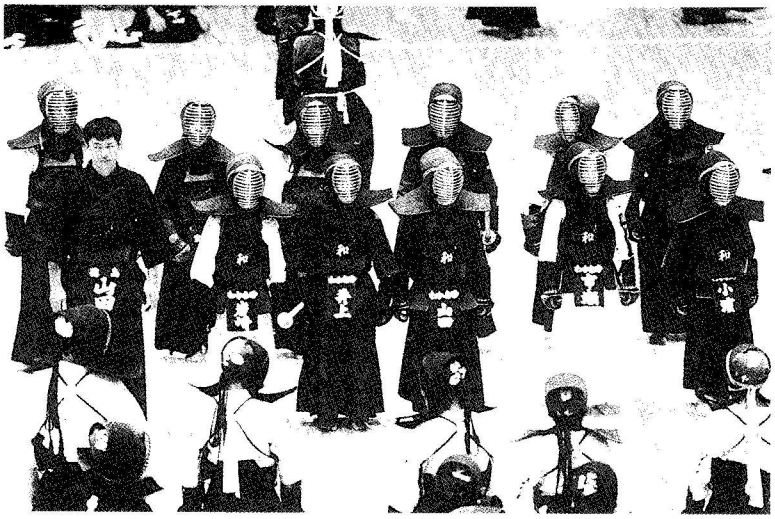
色々思考してみるに、剣道のどこにか魅力があるのだろう、武道のどこかに修行の魅力があるのだろう。

只、打った打たれただけでは無い、もっと奥の深い、もっと先の出口とは……。思うに、剣の道を追求してきた先人、厳しい修行をしている人には何かしら、人間的な魅力がある。県剣道連盟事務局長として、講師として来県された県外の著名な先生と接する機会があり、その時によく思うことは、礼儀正しく謙虚である、気配りがすごい、包容力豊かで誠実、そして剣道に取り組む姿勢が純粋、素直であり、一本筋が通っている。いわゆる義・勇・仁・礼・誠の剣道の徳が備わったサムライである、ということである。剣道の出口はサムライかと考えたとき、あることばが浮かんだ。そう、「剣の理法の修練による人間形成の道である」剣道界の先人はすごい、全日本剣道連盟の剣道修練の目標に掲げている。今更ながら、恥ずかしく再認識をした。ま、私にはそんなに大上段に振りかぶらず、今できる身近な一歩から、素直な心で、言い訳の天才にならないで、今日の稽古に頑張ろうと思った次第である。

日本武道館での優勝旗

わかあゆ会　山田耕司

私は少年剣道の指導を始めて早いもので十年の歳月が過ぎました。その中で一番心に印象的な試合は、平成十七年度の全日本少年武道錬成大会で優勝旗を獲得した事です。平成十二年度より挑戦しはじめ六年目での快挙でした。それまでに平成十四年に銅メダル、平成十六年に銀メダルとおしいところまでいき悔し涙を流してきました。優勝旗を手にした時は本当に感動でした。これも今までの悔しい思いがあったからこそ、この優勝旗につながったと思います。この「徳島の剣道」を通して頑張った子供らの勇姿を紹介します!!



平成十四年　銅メダル

平成十六年　銀メダル

平成十七年　金メダル

称号・段位合格者

剣道七段に合格して

本田敦彦

今から十九年前の十一月に東京で六段に昇段して、七段の昇段にこれだけの年月がかかることは想像していませんでした。もとより昇段に対する強い気持ちが不足していたこともありますが、やはり怪我との戦いの日々であったように思います。

左アキレス腱周囲炎・腰痛と二十年近くつきあっている怪我もありますが、ここ数年では膝の半月板損傷でしょう。転勤後の道場の床の堅さと間違ったストレッチにより何度か膝を痛めた結果、割れた半月板のパキッという音を今でも記憶しています。右膝は五年前の体育祭の途中で、左膝は三年前の面を打つ瞬間で、東京審査の一週間前でした。怪我をした瞬間はあまり痛みがないので、（翌朝は激痛でしたが）病院に行かずに自己診断したのが長引く原因でした。二年前に再び右膝の半月板を痛めたときは、さすがに病院に行きました。スポーツ傷害で評判のいい整形外科病院だったのか、一週間で痛みがとれたのにはびっくりして、前の時も行けば良かったと後悔しました。この時のＭＲＩ検査で、自分の怪我が初めて両膝内側半月板損傷であると知りました。

稽古していても、あのときの記憶がよみがえるのか、思い切って飛び込むことができません。どうしても躊躇して腰が残るのです。今までの経験では、ここで跳べば自分の竹刀が先に当たるはずなのに、躊躇して受けに回ってしまうのです。この違和感は、稽古への意欲を奪い昇段へのモチベーションを下げるには充分でした。

ひとつの答えを導いてくれたのは、ある剣道雑誌の特集でした。記事の取材で「左足の役割は、蹴ることと体を支えることである」と先生が説明されていました。さらに「支えることを主に意識する」とありました。他の先生は、「一本になる打ちは振りかぶったときに、左手を少し前に出しているときに多い」ともありました。これだと直感しました。学校で生徒相手に実践してみると、体が崩れないし打ちが強いので好感触を得ました。それで、警察学校での練習会で実践してみようと、河田清実八段にかかりましたが面抜き胴の見本市のようでした。シュンとして河田先生へ挨拶に行くと、一歩前に入ってから打つのでは合格しない、打てる間合いに入るときはジリジリと入ったほうがよいと教わりました。左膝を痛める前の間合いで構え、痛くて跳べそうにないから一歩中へ入って打つのでは通用しないということを実感しました。勉強は大脳（新皮質）で記憶しますが、運動は小脳で記憶するそうです。自分の剣道の特徴であった左足の跳躍力と瞬発力が無くなった今、思い切って今までの感覚を捨て小脳に始めからインプットし直そうと決意しました。

五月一日は天気も良く今まで肌寒かった気温も一気に上昇し、膝やアキレス腱には非常によい日でした。しかし、体は非常に重く十日前のぎっくり腰も新しい袴の腰板で何とか押さえているという状態でした。審査前の練習でも応じ技に切れがなく冴えがないので、ジリジリ入って面の練習だけを二十分ほど続けました。私は十四組目のDでしたので、最初はCの人に相手をさせていただきました。立ち会い直後、姿勢が良かったのか大きな声が出ました。そこからジリジリと間合いを詰め、無意識に相手の出鼻を面に乗ることができました。いつもはここで、引き出して胴を打ってやろうと欲がでるのですが、今日は体の切れが無いので面しかないとジリジリと間合いを詰め相手の出鼻を面に出ると、相手に引き出されていて見事な胴を頂戴しました。それでも、もう一度間合いを詰めると相手は胴は二回打ってはいけないと思ったのか面に出て、その出鼻を面に乗ることができました。二人目はAの方でした。最初と同じように大きな声を出すことができました。そこから同じようにジリジリと間合いを詰めて、出鼻を面に乗りました。Aの方はまずいと思ったのか、担ぎ小手や攻めの無い面を打ち始め、私もそれに手元を上げるなど反応をしてしまいました。また不合格だなという思いが頭をよぎりましたが、最後に相手が止まったので、間合いを詰めようとすると、いやがって遠間から面にのびてきました。自然に面返し胴を打つことができました。手打ちで良い胴とは言えませんがいい音はしました。

合格する自信はありませんでした。完璧な胴を打たれていたし、出鼻面は膝の影響で打ち抜けていませんでした。また、打った打たれたで判断すると今回のようなことは何度もありました。違うところは、打たれたときに体が崩れていなかったこと、竹刀の先が振れていたことと、勢いに任せて打た（て）なかったことでしょうか。

最後になりましたが、毎回のように稽古をうけていただいた河田先生をはじめ、警察学校での稽古会でお世話になった先生方、高体連の朝稽古で鍛えていただいた先生方と昇段おめでとうの言葉をいただいたすべての方々に感謝いたします。ありがとうございました。

七段に合格して

阿南支部　上田宏司

昨年、平成十七年の暮れに木原先生より徳島の剣道の原稿依頼（随想）が来ました。その時点で七段審査に三度（京都、高松、名古屋）挑戦していました。結果は不合格でしたが、いずれももう一歩の判定でした。七段昇段の難しさを痛感していた時期でしたので、いっそ原稿題を「剣道七段審査に落ちて」ぐらいにしようと思いましたが、いい加減な気持ちで審査に臨んでいるように思われるのは困るのと、急に忙しい仕事ができたので木原先生に「原稿は来年に絶対書きます」とお断りしました。まさかその時は合格の原稿が書けるとは夢にも思いませんでした。何という幸運か五回目の十一月の名古屋審査で合格させていただきました。紙面をお借りしまして指導をしていただいた先生方に心よりお礼申し上げます。

審査を通じてよき先生方や心暖かき仲間に囲まれている恵まれた自分に改めて気づかされました。至誠館道場では中山先生や高木先生、臼木先生から常に「上田、合格はもう近いぞ頑張れ」と激励をいただいた。審査の数日前も稽古でぼこぼこに打ってくれた玉田先生は「充実している人は違いますね。怖くて打っていけませんでしたよ」とほざいてくれた。阿南工業高校の稽古会では佐々木・曽根先生をはじめ、たくさんの先生方や生徒に励まされた。一緒に審査を受けに行った先生方は自分のことのように喜んでくださり気を遣っていただいた。本当にありがとうございました。

私は、高校教員をしており小松島西高校からこの春の異動で盲学校へ勤務するようになりました。今まで四校の高校勤務を経験しましたが、今度こそ本当に剣道部がないんだなと少々焦りました。稽古場は次男がお世話になっている至誠館と長男が通っている羽ノ浦中学校と阿南工業高校の火曜の稽古会が主になり、週二・三回と減りました。基本稽古は減り、生徒や道場生との地稽古中心になりました。勤務校では休み時間に空間打突や鏡を使って素振りや姿勢の確認、簡単な筋力トレーニングなど工夫をしなければと思いました。

さて、今回の審査ですが、稽古十分とは言い切れず、審査前も先生方のみならず生徒にもよく打たれていましたし、合格は難しいと感じていました。ただ反面、どこか気楽な気分にもなれたし、これまでは審査が近づくにつれて稽古に集中したためか、膝、肘、肩、腰などどこかに故障を持ちながらの審査でしたが、今回は気になるほどではありませんでした。また、阿南工業の稽古では河田先生より「面なんかそうバックリ打てるもんではない、それならばしっかり攻めて受けられてもいいから打ち抜けなさい。一分三〇秒の中で自分から二本、相手に来させて二本、計四・五本でいいよ。」と言われ、それをイメージして取り組んできました。審査の前日より名古屋入りしましたが、その夜は一睡もできずなぜか胸が高鳴りついにウトリさえしませんでした。

けれど、朝食時に同行の先生より「上田さん、それはもしかして受かるかもしれませんよ。自分の弟もそうでしたよ。」とプラスのマインドコントロールをいただき審査に臨みました。立ち合いは三コートの午前中最後の組でお昼前でしたが、眠気を感じるどころかだんだん集中していく自分を感じたほどでした。一人目の立ち合いは夢中で余り覚えていませんが、二人目はイメージ通りいったのをよく覚えています。初太刀の面すりあげ面がきまり、その後、打ち抜けた面、返し胴、面を懸けてからの小手・面、出小手などすべてがうまいことといきました。発表の時も先ほどの先生に助けられました。間違えて四コートの発表を見てガックリしているところへ「上田さん、それは隣の発表ですよ、受かってますよ。おめでとう。」と教えてくれた。あぶないところでした。

自分の番号を確認した時に感激とともに、過去の五段審査、六段審査のことがよみがえってきました。五段審査の時は水産高校のたった二名の部員と一緒に取り組んだこと、六段審査の時は新野高校で五名の部員と頑張ったこと。小松島西高校では四名の部員が七段審査に協力してくれたこと。指導していただいた先生方のお陰はもちろんですが、私にとっては今まで出会った生徒たちとの稽古なしでは合格はとうてい出来なかったと思います。本当に感謝しています。

剣道を始めて三十数年経ちました。剣道を通じて多くの先生方や仲間に恵まれたことに深く感謝をするとともに、少しでもお返しが出来るように頑張っていきたいと思います。今後ともご指導・ご鞭撻いただけますようにお願いいたします。

六段に合格して

美馬支部　大石雅生

平成十八年五月十四日、名古屋の審査会において六段に合格することができました。日頃何かとご指導頂きました美馬支部の先生方をはじめ、県剣道連盟の先生方にこの場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

さて、私は十年くらい前に何度か六段に挑戦しましたが技量不足のため不合格でした。その後、諸事情によりしばらく剣道から気持ちが離れておりましたが、友人・知人からの温かい励ましを受け、少しづつ練習に顔を出すようになり、また穴吹少年剣道教室のこども達の笑顔に支えられながら、こども達と一緒に練習に参加するようになりました。それから数年間、美馬支部の稽古会、剣道連盟の地方審査会（西部地区）、連盟主催の講習会等に参加させて頂き、その都度、多数の先生方から温かいご指導並びにお声をかけて頂きました。本当に、有り難かったです。そして、段々（もう一度、六段に挑戦してみよう）という気持ちになり、それからは、その時その時にご指導頂いた各先生方の一言ひとことのお教えを練習で必ずやってみることにしました。また、できる限り先生方の稽古を拝見させていただく事を心掛けました。特に心掛けたことは、先生方の構えを拝見することです。剣道は、相手があることであり、なかなか自分の思うようには打たせてくれません。ならば、打つ前に何かヒントがあるのかも知れないと思ったのです。構えの大切さは、師・滝下勝先生（故人）から、いつも言われていたことでした。「剣道は、構えが大事ぞ。構えができなければうまくなれない。」と。しかし、「はい」と答えつつどこかで師のことばをおろそかにしていたように思ったのです。しかしながら、なかなか先生方のようにうまくいきません。そんな折、ある先生からそろそろ挑戦してみたらどうかと誘われました。「ううん。」と思いつつ、平成十七年十一月に久しぶりに挑戦してみましたが見事に失敗。この時は、実技審査が終わったとたん「こりゃ、ダメだ。」と思いました。あまりにも、バタバタしすぎだったのです。久しぶりの審査ということもあり、また十月の社会人大会に向けてということでかなり意気込んで練習していました。それが、返って裏目に出たように思います（後で思い返せば、それが良かったのですが……）。年が明けて、平成十八年一月の県連主催の稽古始めで河田清実先生から「懸待一致の構えが大事」とご指導頂きました。その時、ふと滝下先生のことばが重なったのです。やっぱり、もう一度「構え」からやってみよう。それからの練習では、打たれることを気にせず（構え、構え……）とそればかりを意識しながら練習していました。とは言っても、仕事の関係で次の審査まではあまり練習を詰めることもできませんでしたが、穴吹の剣道教室にだけはできる限り顔を出していました。そして、こども達、剣道教室の先生方に練習をお願いし、それまでご指導頂いた数多

くの先生方のお言葉を心で反復しながら練習を続けました。そんな折、ある先生から六段審査のお誘いを受けました。本当は、練習もあまり詰めておらず、どうしようかと思ったのですがせっかくのお誘いでもあり受けてみることにしたのです。しかしながら、当日は正直受けに来るのではなかったと思いました。気持ちが今ひとつ盛り上がらず、体が思うように動く気がしなかったのです。でも折角来たのだからと気を取り直し、気持ちを集中することに徹しました。そして、審査。今回は、前回と違い意外な程落ち着いて実技が受けれたと思います。構えを意識していたせいか、腰にしっかり重心が乗っているのを感じました。体の方も、秋の練習の貯金があったのかうまく動いてくれました。そして、どうにか六段を頂くことができました。これ一重に、今までご指導いただきました数多くの先生方のお陰と感謝しております。でも、六段を頂いたとはいえ、まだまだ五段に近い六段です。これから益々精進し、本当の六段になっていくよう努力したいと思っています。今後とも、諸先生方のご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。本当に有り難うございました。

不失花

警察支部　佐野伸治

平成一八年十一月に名古屋で行われました六段審査に合格することができました。これもひとえに日々御指導いただきました先生方並びに諸先輩方のおかげと心から感謝致しております。ありがとうございました。

六段審査に望むにあたり、六段に求められる事理一致の剣道も頭では理解しているつもりではありました。しかし、未だ半人前の私らしく雑慮に捕らわれ、身体はまさに機械仕掛けの人形そのものでありました。事理一致、攻防の「理」を意識すればするほど、四戒「驚・懼・疑・惑」が前面に出てしまい、苦渋を味わう結果となっていました。

しかし、今回の名古屋審査は、これまでとは違う格別の感に包まれていました。今

回は審査に望む環境としては決して良いとは言い難い環境でしたが、それがかえって、私自身に心地よい緊張感と、貪欲からの脱却をもたらし、私なりの無欲界を体感していることに気づいたのです。審査では、対峙する相手を正面から自然に受け入れ、相手の攻防に対し、自分の技を素直に出すことができました。また、私の繰り出す一本一本の技に、今の私の剣道を端的に表現することができたのです。

結果は合格。嬉しい気持ちと、分岐点での迷いが取れた様な安心感に浸りました。名古屋からの帰省中、剣道を習い始めてからようやく、世阿弥が謳う「序」、川上不白の「守」からの脱却に近づきつつあるのかなと自分なりに満足感を覚えたりもしました。

しかし、夢想は一瞬、その後の稽古では私の未熟さを思い知らされるかの如く厳しい指導の連続です。先日までの満足感など一瞬で消し飛ぶ有様です。

やはり、こうして長々と文章を連ねてみたものの先生方から観ると所詮、まだまだ半人前に変わりなく、先達の言う事理相忘の剣道には程遠く、未だ自身が五里霧中、暗中模索であるのが現状です。

しかし、この度の昇段によって、私の剣道とは何か、また、私の剣道は何処に進むべきなのかを改めて考える機会ともなりました。

剣の道を歩む一人として、蘊奥を極めんと欲するのは、至極当然の想いでありますが、華々しい活躍の花は一瞬で散ります。今後は、自己の剣道と正面から向き合い、これまで駆け足で過ごしてきた期間の回顧自省を行いながら、国家武道たる剣道の礎隅に不失花一片を咲かせられるように精進を重ねていきたいと思います。

平成十八年度

称号・段位合格者一覧

―剣道―

【教士】

四月八日
高木壽史
樫本英夫
立川信彦

十一月三十日
吉田茂生
生田浩章
吉田博文
山田浩史
井村雅人
山室雅幹
近藤敏晴
伊賀雅人

【七段】

五月一日
本田敦彦

十一月十八日
上田宏司

【六段】

四月三十日
前田秀一

五月十四日
大石雅生

十一月十九日
佐野伸治

【五段】

五月二十八日
金野卓司
田上裕之
豊田史子

九月十七日
日和田慈海
濵田　剛

十一月二十六日
谷　博

平成十九年
二月十八日
湯岑昭彦
大場博史
日野利之

【四段】

五月二十八日
小野敦生
有松伸也
櫻井一志
住友邦昭
池添葉月

九月十七日
宮本靖之
明口　豊
美馬一城
川人政利

十一月二十六日
仁科文宏
村上嘉浩
井上匡則
正木幸弘
田岡哲二
美馬真奈美

平成十九年
二月十八日
富山貴史
中井幹晴
松葉諸勝
白井佳織
久保雅美
住友香織
塚原裕美

【三段】

五月二十八日
土手涼輔
梅山浩史
川原　崇
津田耕治
平野千尋
田村菜津季
元木綾子
神戸咲枝
河田　紋
小西沙弥
細川美幸
中野加菜

九月十七日
鎌田憲資
那佐翔太
山本敬太
谷口真央
西本浩章
岡田直樹

松本明真
高松朋輝
林明史
伊勢忠浩
久保宏和
久米洋佑
濱航介
小松祐樹
岩雲大樹
林義真
西川達哉
近藤正和
瀬尾友二
中川浩幸
大西保裕
市瀬綾香
星野知世
隅田奈美
白木彩
柳谷美沙
山﨑奈々

十一月二十六日

峰本直季
山邨俊英
鈴木達也
西田義玄
櫻井春矢
岡田泰造
藤本健太郎
奥田三津俊
大野和則
深津まゆみ
溝辺真帆
折部知子

平成十九年

二月十八日

山川宰
松浦一真
奥村隼
西前清高
大西里沙
宮内理恵
国貞奈津美

井上さゆり

【二段】

植田直人
小倉大典
定作康平
神戸一希
山田友一郎
森本真浩
松永隆志
海野雄一郎
竹内美貴
菊岡星花
山西彩輝
櫻木舞
加重汐理
大久保紫陽
生田圭
湊友里
西山史織
美馬香苗
湯浅萌
小出朋代
藤本雅代
近藤陽香

五月二十八日

臼木郁登
山下基
平野将司
家長崇裕
山ノ井拓也
山口智弘
大泉京志郎
長崎恭平
坂本圭次
立川拓也
佐々木健人
河野大輝
山田泰平
藤本稜
高島啓介
奥村誠人
武市一樹
佐藤勝哉
川邉祐樹
河野卓也

末永佳奈
井本梨奈
白石けい子
森本志穂
仁木悠美
安田淳美
三木みどり
梶真理奈
北浦かおり
喜多あゆみ
原田知典
小澤裕貴
坂本光
米澤宏記
谷口真一
熊野裕太
陶久清隆
小西貴大
岡田紘平
久米利典
山田渓太
安宅誠

九月十七日

近藤平
淀谷瑞木
松本真生
津田利明
曽根健貴
原悠介
冨浦節
高橋将也
高島健
杉谷玄矢
藤田雄也
山口拓也
佐藤謙太
竹岡大樹
村島雄也
吉田健太
大池慎也
山下達彦
重田松弘
森友香
山邨恵美
岡本真実子
高田真帆

柳瀬美季　スターマリン　梅本有紀子
市瀬祐季奈　正木義浩　佐藤美香
今川知美　久保満男
井東愛実　藤田幸希
横手茉結子　片山由貴
鶴岡明美

十一月二十六日

長瀬一人　西野奈保
高橋郁絵

平成十九年

二月十八日

松野秀昭　岩佐貴仁
鈴木智也　阿部航太郎
湯浅翔平　城尾康太
長瀬豪佑　岸本宗紀
岡田佑介　森大貴
河野勇二　田中裕也
高橋大介　梯哲也
岩雲祥吾　森正志
森崎勝人　満村雄也
酒巻依輝　友竹真吾
平井秀和　若江美香子
折野貴規　篠原ひろみ
髙瀬雅大　寺西珠里

【初段】

四月二十九日

板東武志　東川宏樹　寺井将民　福田純大　吉田昂平　篠原寛弥　田中湧大　高瀬悟志　松田直樹　青木大将　田中宏明　白石騎士　木下裕貴　清水洋佑　福居壮太　石井稜祐　入江健太　福島優也　浜田拓弥
平尾優樹　岸田一希　村島智也　岸野賢太　中岡豊紀　土井翔吾　近藤祐希　中村光希　上田義弘　元木涼　松本裕佑　森下慶祐　西村光司　皆谷翔太　安倍晃太朗　上田勇輝　小濱紘通　小栗明彦　金久貴幸　上野恭生　青江匡剛　高石大暉
吉岡秀徳　山井啓太　大森和夫　トロフィモフ　ヴィクトル　エルショヴ　ユーリ　渡辺真也　大西将文　宮越健太　笠井栄一　中西生尭　田村周平　井上彩　木村奈々美　市瀬薫子　栗野文那　岩原紗也香　原麻由香　藤井瑛万　谷澤茜　福﨑友菜　森崎祐希　森崎祐香　天野泰輝　盛浩典　喜多桃子　福井美咲　大西佐季　中川笑美　中山美紀　南信博　小林泰三　黒部剛史　岩田泰典

高橋麻美　藤本貴史　東内綾菜　竹田昂平　藤本智美　柴田大輔　岸弘典
石川晴菜　宗本和也　松原加奈　伊藤拓生　福井彩乃　尾花佳彦　黒川武士
谷脇湧水　坂本雅敏　藤岡奈津実　土井篤　井本葉子　立石啓悟　岩本慎也
佐々木梨絵　船川浩希　村上遥香　角永拓真　近藤くるみ　松本好史　木村茂輝
江川真穂　松下誠　角元朱音　桒原浩一　清水由希子　佐々木開成　酒巻志穂
松寄智佳　山上達也　冨浦育　武田典弘　出幹子　岡知寛　田中瑠璃
山内望　山川賢　石田沙織　次藤洋　唐谷俊輝　上田知恵
芳田百香　辺見康太　大村猛夫　熊澤奈美　西田将史　尾形みなみ　新保優子
大西広恵　吉田貴音　三馬梨紗子　島崎順平　三木亮
秀島千晴　瀧本雅志　福多貴大　片岡宙輝　居内勇翔
古川圭　新居順平　小川翼　井内希　谷拓郎　山本和希
蔭山智美　稲井奨太　小蔭紗耶未　四宮佳奈　呉羽雅俊　梶友嘉
鈴木真理子　近久寛樹　岡田恭平　細井百合子　中原崇道　有川翔　保木良太
武田寛子　遊亀聖悟　藤﨑利樹　迎美榛　大澤誠守良　庄野陽介　原田大義
森田晃代　幸木隼斗　中西遼　井上愛理　児島翔太　小笠直孝　徳永壮馬
六月二十五日　賀川雄司　瀬尾諒　富士亜由未　工藤魁　笠井洋一　河野智紀
関口諒　濵川咲希　鎌田空志　湯浅環　新宅真士　笠井健嗣　岩崎洋介
河野将大　北彩奈　久米貴士　矢三杏奈　佐古哲宏　中島孝仁　手川洋次朗
和田晃朋　岩本あかね　前津貴大　大田紗耶加　岩崎洋介　大浦聰　東條慎仁
中暁彦　永尾香乃　喜島英知　市原睦美　木内康介　近藤宏明　久米紫穏
大久保有真　山川華奈　長尾証二　九鬼理恵　瀬川大樹　吉田将教　武田将也
記本達也　平岡里那　武田正樹　岡崎楓　湊大輝　住友貴志　大塩博資
谷澤真紀　岩谷恒治　兼中円　藤本智寺　西瞳真　鮎川晃一　上佐貴志

八月二十七日
十月二十九日
平成十九年
一月二十八日

中村彰吾
福田寛也
川口順平
正木潤
管惣義典
時谷一郎
藤原昌広
山内新
木本充洋
原田佳久
西岡昭人
小畑彰洋
橘浩司
篠原彩美
樫原静香
山口裕加
佐藤友美
樋口すずか
長尾早江子
竹内美紀

―居合道―

【六段】

十一月十一日
高野康寛

【四段】

五月十三日
川人政利
平瀬進也

十一月十一日
小野和敏
武田修典

【三段】

十一月十一日
逢坂昭夫

【二段】

五月十三日
三木恭子
松原美和

十一月十一日
近藤智公
三木拓人
増井利治
藤井萌如

【初段】

五月十三日
片岡宙輝
川田真誠
笠井佑太郎

十一月十一日
新田元

がんばろう徳島 部活だより

市高剣道部活動報告

徳島市立高等学校　剣道部顧問
本田敦彦

徳島市立高校は、今年三月に四十三回目の卒業生を出した歴史の新しい高校です。校訓はあえてつくらず、自由な校風の創造を目指しています。二〇〇九年度中には新校舎の完成を予定していて、着々と準備が進められています。

剣道部は、県剣道連盟副会長の大澤孝彰先生や事務局次長の手塚十三子先生がご指導されている頃に、全国大会や四国大会に多く出場していました。最近では、平成十六年に女子団体で四国新人大会に出場した程度ですが、人数は昨年三十三名・一昨年四十二名の部員を抱えた大所帯となり、現在の武道場ではかなり手狭な状態で、部員一同全国四国大会出場を目指し日々努力をしています。

剣道部のモットーとしては「文武一貫」で、次のような内容で部活動と学習の一貫をはかり、剣道を学ぶのではなく剣道を通して（社会人として必要なことを）学ぶことを目標として活動しています。また、生活時間記録と剣道日誌をあわせることによって、生徒一人一人が時間の使い方を把握できるようになりました。成果として昨年卒業の十三名のうち五名が国立大学に合格するなど、部活動と学習の効率的な融合をはかることができるようになったと思います。

基本稽古の内容は、年間を通して計画を立てていたのですが、最近は生徒のレベルや試合・練習試合で生じた課題により流動的に変化するようになりました。

最近の取り組みを紹介させていただくと、「体にやさしい剣道」です。生徒の三名が、中学時代から腰痛防止のコルセットをしていて、私自身も両膝の半月板損傷や腰痛・アキレス腱周囲炎などの怪我と後遺症に悩んでいました。準備体操・整理体操・ストレッチ・トレーニングだけが怪我予防の解決策にならず、健康を増進させるはずの運動が怪我につながることに違和感を感じていました。

きっかけは大学時代の後輩が出版した本との出会いでした。そこには、著者が稽古中にアキレス腱を切った後、常足（なみあ

し）と名付けられた二軸動作と出会ったころから始まっていました。宮本武蔵の五輪の書にもある、「きびすを踏む」という踵を強く踏む動きを例にとり、左足の踵をつけることで素早く足さばきができることや、侍の動きが現代のトップスプリンターと同じ歩み足のすり足であることなどが書かれていました。その足の使い方で、アキレス腱や膝に負担をかけず素早く踏み込むことが可能になりました。また、骨盤を前傾にすることが、先ほどの足の動きを可能にし、腰痛防止につながりました。先ほどの三名の生徒は、整体や病院に継続的には通っていますが、コルセット無しで練習ができるようになっています。私自身も正しく腰を入れることが可能になり、さらに丹田に力を入れることが実感できるようになりました。体にやさしい剣道は、正しい体の使い方であり、古を稽えることでした。

参考文献『剣士なら知っておきたい「からだ」のこと』大修館書店
著者　木寺英史　小田伸午

一、部活動を通して自己管理能力を育成する

練習時間を守ること
開始時間を守る
終了時間を守る
終了したら寄り道しないで帰る
自分で計画し実行すること
工夫し努力する
現状に合わせて修正する

一、部活動の中で学力を養う

集中して取り組むこと
授業に集中
部活動に集中
家庭学習に集中
生活時間記録をつけること
目標を文章化する
一週間の反省を文章化する

一、部活動引退後に効果を実感する

部活動をきちんとすることが引退後にスムーズに学習に移行できる

海部高校剣道部紹介

海部高校　剣道部顧問
大石哲生

海部高等学校は、海南高等学校があった海部郡海陽町（旧海南町）にあり、現在一年生一七五名、二年生一六六名、三年生一八二名の計五二三名が学んでいます。

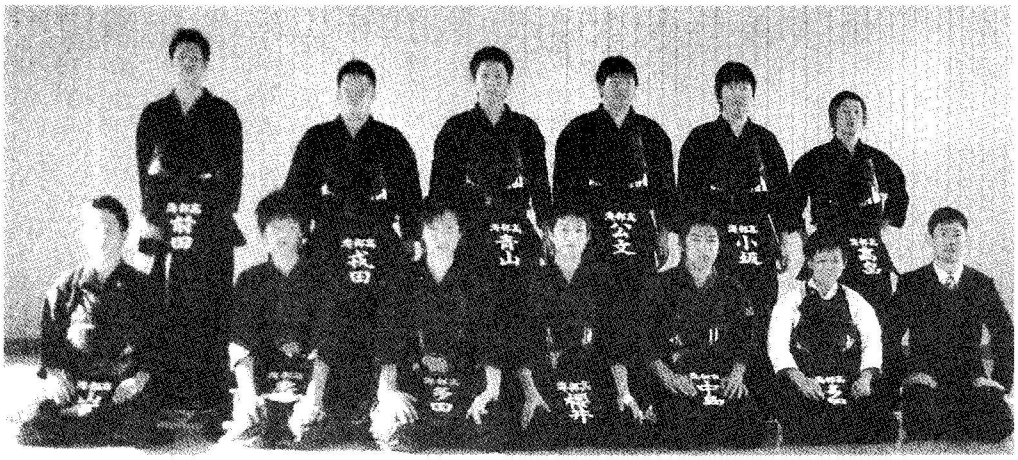
本校は、日和佐高等学校、海南高等学校、宍喰商業高等学校の三校が合併し、新設された学校です。今年（平成十八年度）の三年生が海部高校第一期生であり、初めての卒業生になります。学科は普通科、商業系の資格を取得し進学・就職を目指す情報ビジネス科、国公立大学進学を主な目標とする数理科学科の計三学科から成り、日々さまざまな授業が展開されています。

そのような状況の中、海部高校剣道部は二年生三名、一年生九名で活動しています（平成十八年度現在）。計十二名のうち八名は高校進学後に剣道をはじめた初心者です。海部郡や高知県東洋町の中学校には現在剣道部のない学校が多く、初心者の生徒は高校に入ってから剣道に興味を持ち、入部してきます。経験者よりも初心者の数が多いため、練習内容はほとんどが切り返しや基本練習です。部員同士は大変仲が良く、稽古中は一生懸命であり、稽古以外の場では楽しく活動しています。

試合で勝つことは大きな目標の一つですが、高校を卒業した後も地元や進学先、就職先で剣道を続けていってくれる生徒を育てていきたいとも思います。高校三年間で剣道を学ぶことで、人間として大きく成長してくれたらと思います。

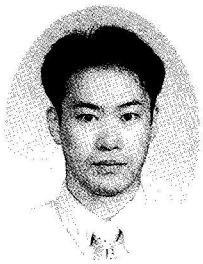
新設校のためまだ先輩はいませんが、現在鹿屋体育大学で学んでいる海南高校卒業生の山崎真司先輩が長期休暇に帰省し、稽古をつけてくれています。部員たちにとっては専門的に剣道を学ぶ先輩の姿が非常によい刺激になっています。

現在のチームでまだ勝ったことはありませんが、まずは一勝を目標に努力しています。日和佐高等学校、海南高等学校、宍喰商業高等学校の先輩方が築いた剣道部の伝統を受け継いで頑張っていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。



生徒の姿から学ぶこと

池田高校　剣道部顧問
辻　岡　英　司



池田高校は、徳島県西部の三好市に位置する、全校生徒六六四名の全日制普通科高校である。大正十一年四月、徳島県立池田中学校として創設され、本年度で創立八十四年目を迎え、卒業生は二二、〇〇〇名を越え、郷土はもちろん、全国に雄飛して、各界で活躍されている。山紫水明の上野が丘で「質実剛健」の校訓のもと文武両道を目指し、進学面はもとより、現在では部活動加入率が九十％を越え、各部活動とも大変熱心に活動している。どの部活動も前向きに取り組んでいることが、互いのよい刺激となっており、良い校風を生み出していると考えられる。

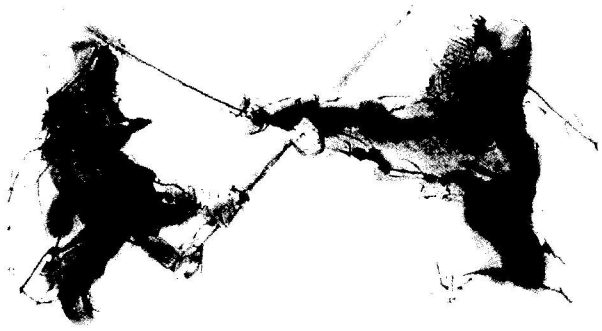
剣道部は現在男子九名、女子四名の計十三名で活動している。平成十六年度は二十七名の部員がおり、練習するには人数のわりに道場が狭すぎて、地稽古では待つ時間が多く、なかなか効率の良い練習ができなかった。その状況を何とかしたくて日曜日の午後、体育館のフロアが空いているとき全面を使って地稽古や掛り稽古、試合練習を何度か行ったこともあった。また、人数が多いことで何チームも組めたため、チーム戦も数多くこなすことができた。今では人数が多かった頃が懐かしく、平成十七年度に二十五名、平成十八年度に二十一名と減少の一途をたどり、三年生が引退し現在に至っている。地元の中学校の剣道人口も年々減っていると伺っており、新入部員の勧誘もはかばかしくない状況である。しかし少人数の中、生徒たちはみんな剣道が好きで、毎日熱心に取り組んでいる。私自身剣道の経験がなく、外部講師の増田先生、湯岑先生に頼らざるを得ない状態である。中学校で熱心な指導者のもとで練習してきた生徒にとって、高校の教師に指導者がいないということは大きなハンデであり、部員たちにはいつも本当に申し訳なく思っている。せめて経験者の教員が赴任してくれればありがたいのだが、ここ四年間は皆無である。外部講師の先生方も当然のことながら仕事を抱えておられ、忙しい時間をぬって来校してくださり、稽古をつけてくださる。県西部の剣道界の発展のためにと熱い思いで指導して下さる姿には、本当に頭が

下がる。部員たちも増田先生や湯岑先生が来てくれたときは、いつも以上に気合いも増し、積極的にアドバイスをいただいている。「勝ちたい」「うまくなりたい」という思いは誰もがもっているものと思うが、先生が来て下さった時の貪欲なまでの指導を

請うている姿は大変すがすがしく、いただいたアドバイスをもとに日々精進している。先生が来られない日にも手を抜くことなく、自身の課題に気をつけて、次回来られたときに少しでも上達している姿を見せようと必死である。

このように前向きな真面目な生徒たちに恵まれていることは大変ありがたい。今年のチームは昨年に比べて人数も少なく、技術的にも見劣りがするのは否めないが、キャプテンを中心として一番まとまっており、一番練習熱心である。体力をつけようと練習前に走り込みを行ったり、週何回かは筋トレも行っている。掛り稽古の時間も以前より長くなった。これらは先生に指示されたことではなく、自分たちで発案し実行していることである。これら以外にも練習内容で自分たちで工夫をし、より密度の濃いものにしようと常に画策している。練習中は上級生から積極的に声出しを行い、キャプテンの檄が頻繁に飛び交っている。上級生が必死にやっている姿は下級生のお手本となり、様々な面で今まで以上に向上し、いい雰囲気になっている。

部活動を通してケジメをつけることや、相手への気配り、自分自身に負けない精神力、挨拶など、本当に多くのことを学び吸収してくれていっていることがとても嬉しく顧問冥利につきる。部員たちの姿から私自身が学ばせてもらっていることは多い。これからも先生方とともに彼らの成長を見守っていきたいと考えている。



今日も笑顔で

北井上中学校　剣道部顧問
豊田佳男

本校は、徳島市の北西部に位置する、全校生徒一五五名の比較的小規模な学校である。赴任以来、部員不足に悩まされてきたが、生徒たちはとても素直で、二名や三名でも努力を惜しまず、三年間でたくさんのことを身につけて巣立っていく。女子においては、赴任八年目にして初めて五人のチームを組むことができ、部員たちとともに喜び合ったことを昨日のことのように思い出す。現在も男子二名、女子四名（一・二年生）の少人数で毎日の稽古に励んでいる。

本校剣道部では、毎年四月新入部員にまず徹底させることがある。「当たり前のことを当たり前にできる」ようになることである。当たり前のことでも割合できていないものである。私自身も反省の毎日であるが、生徒とともにできるように心がけている。これがきちんとできて初めて、中学剣道に打ち込めるスタートラインに立てると考えている。

生徒たちは、小さな夢のかけらを胸に抱き、入学してくる。この出会いを大切にし、それぞれがかけらを懸命に磨いていくと、その一つひとつが合わさって、大きな夢の形が見えてくる。その過程の手伝いを少しでもできたらと指導に励んでいる。指導上最も大切にしていることは、「何事にも謙虚であること」「いつも感謝の気持ちを忘れないこと」「笑顔を大切にすること」である。これらのことを部員全員が心から理解し、行動できたとき、きっと大輪の花を咲かせることができると信じている。

微力な私は、これまで中体連の先生方をはじめとして、多くの先生方にご指導を頂きながら生徒とともに歩んできた。素直で一途で、最後の一秒まで決して夢をあきらめない、すばらしい生徒たちにも支えられてきた。そして、物心両面にわたり、いつも温かくご支援くださる保護者の方々にも頭が下がる。本当に毎日が、感謝の連続である。

今日もたった一人の二年生、井上愛理主将が、先輩たちの意志を受け継ぎ、笑顔で一年生とともに懸命な努力を続ける姿に教えられる。勇気と元気と、そして、夢を与えてくれる。「よし、今日もがんばろう。」これからも生徒たちとともに歩みつづけていこうと思う。

部活だより

阿南市立阿南第二中学校
顧問　福多博史

剣道部の毎日の活動は朝のランニング、そして学校玄関の掃き掃除からスタートする。二年前より生徒の自主的な活動としてはじまった。学校のために、人のために全校生徒の模範となる活動をしようと引退した三年生をはじめ、各自が朝早くからがんばっている。

阿南二中剣道部は平成十二年度に全国中学校剣道大会に団体出場するなど輝かしい成績を残している。また、平成十三年に武道館が完成し稽古を行う環境が整ってきた。しかし、近年は部員不足により、なかなかチーム五名がそろって大会に出場することができないのが現状である。現在は男子三名、女子三名の少人数で毎日稽古に励んでいる。

「剣道部に入部しませんか。」

新入生のうち、剣道経験者が一・二名という中、初心者の勧誘に力が入る。四月の新入生部活動見学、部員は見学者が来ることを期待し、いつもより気合いの入った稽古がはじまる。武道館に向かって数名のグループがやってきた。今年こそはと思った瞬間、武道館の前を通り、テニスコートへ。毎年、同じような光景が続いている。

部員の確保、これが本校剣道部の大きな課題である。

「高校へ行っても剣道を続けます。」

なかなか試合では結果が出ないが、剣道の魅力を感じ、剣道を通して一人一人が心身ともに成長することができる部活動にするため、以下のことを大切にしていきたいと考えている。

○基礎・基本を大切にした稽古を心掛ける。

○目標や課題を持った稽古への取り組みをする。

○出会いを大切に、仲間を大切に。

まだまだ、剣道の技術も稽古への意識もこれからではあるが、日々成長できるようにがんばっていきたい。

今春、卒業する部員は一名である。高校へ行っても剣道を続けていこうとしている。指導者としてたいへんうれしく思う。私自身剣道を続けてきて良かったと思う。一つのことに集中し、やり遂げることの大切さを生徒にも感じてほしい。生徒達は剣道を選び、毎日稽古を続けている。一人でも多くの生徒が剣道に魅力を感じ、卒業後も剣道を続けてほしいと願う。

剣志鍛錬

池田第一中学校　剣道部顧問
中川浩幸

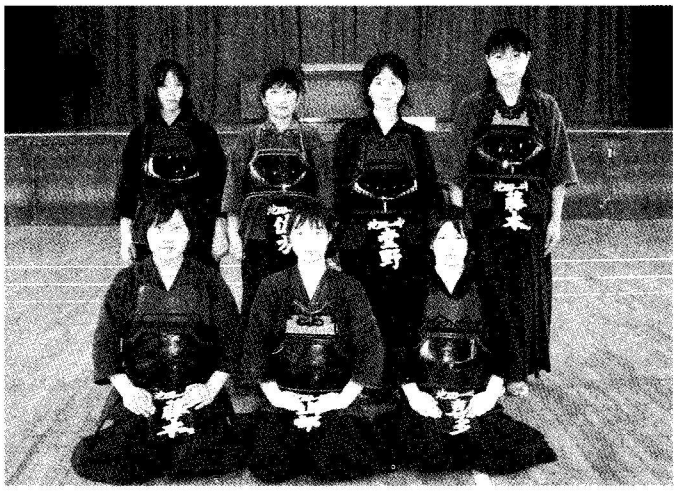
私は、異動により学校現場を二年間離れていた。そして、昨年四月に本校へ戻ることができ、再び剣道部の顧問を任されることとなった。私自身の剣道歴は中学校時代に剣道部に所属していたということだけであるが、今まで赴任した学校で、剣道部の顧問を何度かさせていただき、三好支部の先生方をはじめ、多くの指導者の方に育てていただいた。そして現在も、多くの方々にお世話になりながら、生徒達とともに学び続ける毎日である。

日々の活動で、私がよく口にすることは、「剣道も剣道以外のこともがんばろう」ということである。剣道の練習、試合の経験を通して得ることのできる礼儀、人を大切にする心、体力、集中力などを普段の生活の中で生かすことができてこそ、剣道をする意味があると思っている。また、逆にそれができる者が本当に強くなれると思うのである。

「剣志鍛錬」これは、本校の武道館にある旗に書かれた言葉である。卒業生が手作りでつくったこの旗は、武道館の一番目立つところに今も掲げられている。この言葉にこめられた卒業生達の思いをかみしめながら、そして、この旗に見守られながら、日々練習に励んでいる。

本校の剣道部は、三年生が引退してからは男子三名、女子四名という少人数である。生徒数が減少し、少ない子どもたちを九つの部活動で取り合っているような状態である。しかしながら、先輩達が築いてきた伝統を引き継いで、部員一人ひとりが一丸となって努力を続けている。

昨年度は、団体戦では女子が県大会ベスト八、男子もよく健闘した。個人戦では、ここ数年、四国大会へも出場する選手が出てきている。そこには多くの対外試合や、練習試合をこなし、夏の暑さや冬の寒さにも負けず、積極的に練習に参加して、たゆまぬ努力を続けてきた生徒達の姿があった。また、それを支える地域の力も大きいと感じる。校区内には川崎・佐馬地の各剣道教室があり、小学校時代にそこで学び基本を培ってきた部員が約半数いる。剣道教室の指導者の方からは中学校に入ってからも多くの指導、支援をいただいている。そして、



試合や練習会における心温まる指導、熱い声援、励ましの言葉をかけていただいた保護者の方々、三好支部の先生方など、多くの方々に大切にされて本校剣道部は活躍することができた。これからも期待に応えられるよう、生徒たちとともに精一杯の努力を重ねていきたい。

本校は二年後に池田中学校との統合を予定しており、池田第一中学校という名前は消えることとなる。本校剣道部の卒業生がその後も、剣道を志し、学んだ精神を大切にしながら、常に自分自身を磨き、鍛錬を続けてくれることを願っている。

道場・教室だより

「小松島少剣クラブ」だより

指導者代表　藤川和秋

剣友の皆様に、今回小松島少剣クラブの活動状況をご紹介する機会を得ましたことは、本当に喜しく思います。活動状況をご紹介する前に少しばかり、小松島少剣クラブの歩みにふれてみたいと思います。

小松島少剣クラブは、昭和四十九年十二月一日に橋本正吉先生（故人・小松島町）が主となり、市内の青少年の剣道愛好家一〇名前後が集い剣道愛好会として発足しました。この当時、九歳であった西山伸二氏（現石井中学校教員・剣道六段）が最初の少年剣士として稽古に参加していました。その後昭和五十年四月に初めて少年剣道部員による北小松島剣道スポーツ少年団が結成され、続いて同年十月、小松島小学校にも剣道スポーツ少年団が結成され、後援会会長に長池武一郎氏（現県議）が就任しました。その後昭和五十二年七月五日、小松島高等学校で県下剣道大会が開催されたのを機会に、二つの剣道スポーツ少年団を一本化し、小松島少剣クラブの名称で再出発するに至ったのです。

昭和五十六年四月一日に警察を退職された堀金實先生（前少剣クラブ代表・故人）と中川正先生（故人）の両氏が、当時小松島少剣クラブの指導者の一人であった三木毅先生（現徳島県剣道連盟理事長）の口添えで同クラブの指導者として参加することになりました。その後昭和五十八年に堀金實先生が代表指導者となり、道場を月曜日と金曜日は北小松島小学校、水曜日は小松島小学校の体育館と指定し、練習の一本化を図り現在も続いています。

堀金實先生は、小松島少剣クラブの代表指導者として、また徳島県剣道連盟の少年部の指導者として十八年間、基本を大切に剣道の指導に当たられました。この間、私も小松島少剣クラブの指導者の一人として加わり、先生の厳しい指導方法を身近に勉強させていただきました。

先生は晩年体調を悪くし、入院治療を行っていましたが、残念ながら平成十四年三月十六日、この世を去られました。その年の四月、諸先生等からのご推薦もあり、私は堀金實先生のご意志を引き継ぎ、小松島少剣クラブの代表指導者に就任致しました。早いもので、今年で五年の月日が経過し、この間子供達への指導方法について、毎日が自問自答の繰り返しで、いまだに満足のいく指導法の確立ができていないのが本音です。五十歳半ばという年齢になり、最近やっと堀金實先生が取り組んでこられた「生涯剣道」の必要性が痛感できるようになりました。

それでは、小松島少剣クラブの活動状況についてご報告させて頂きます。現在小松島少剣クラブは、小学生三十一名の会員で、私のほか、梅山寧史先生、青木博志先生、女性の有松京子先生など指導者総員九名の

体制で指導に当たっています。特に最近は、女性の会員が多くなっている現状から、有松京子先生には、女性の観点に立ち子供達への細やかな指導のほか、私にも数々の適確な助言を頂いており深く感謝しているところであります。

稽古日は、毎週月・水・金曜日の午後七時から午後九時までの二時間実施しています。保護者も熱心な方ばかりで、小松島少剣クラブ会則に基づき後援会を結成し、各役員を中心に子供達や指導者をバックアップしてくれています。

稽古開始時には、

○気迫を持って大きな声をだすこと

など「稽古の心得」三項目を、また稽古終了時には

○私たちは礼儀を正しくします

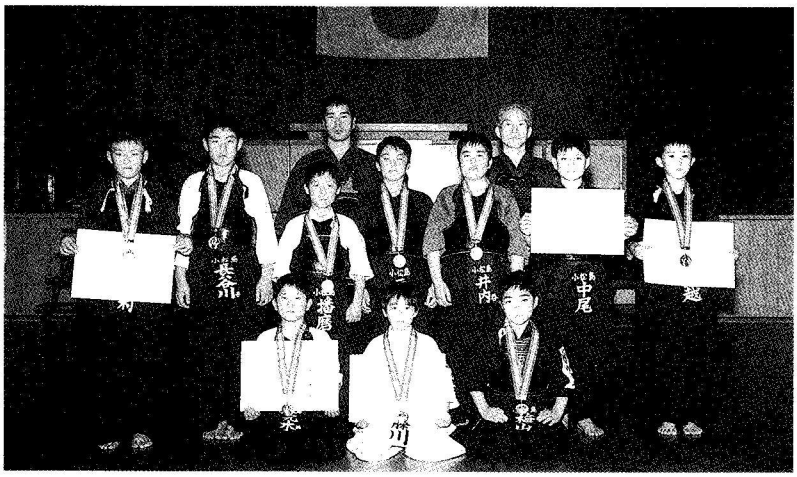
など「小松島少剣訓」五項目をキャプテンの号令で全員に唱和させ、指導者がその都度わかりやすく子供達に訓話を行っています。これは、剣道を通じて子供達に技術だけでなく、自立心を養うことで何事にも責任感を持って行動ができるよう実践しているものです。

稽古は基本稽古が中心で、熱が入れば二時間、基本稽古だけで終わる時もあります。しかし、二時間の稽古が終わっても子供達から特訓の申し出があり、中学生も含めて指導者との過激な稽古が約一時間続きます。

試合稽古は毎月一回、小・中・高学年の三部門に分けクラブ内のグランプリ大会を開催し、優勝者にはトロフィーを授与しているほか、香川県の光龍館稽古会にも可能な限り参加し、実戦的な試合稽古を体験させています。

また最近は、チームの団結心や行動力が身につくよう県外への大会にも積極的に参加しています。しかし、小松島少剣クラブの最終の目的は、試合で結果を残すことだけではなく、堀金實先生が唱えてきた「生涯剣道」を子供達が実践できるよう指導者がしっかり導いていくことだと思っています。そのためには、子供達と密接な信頼関係を作り、保護者、指導者とが一体となって取り組みができるよう一生懸命努力していきたいと思っています。

最後になりましたが、剣友の皆様には今後とも小松島少剣クラブへの変わらぬご理解とご指導をお願い致しまして、小松島少剣クラブの活動のご紹介を終らせて頂きます。



創立17周年剣道大会　平成３年６月２日

川崎少年剣道クラブについて

山下　敏雄

三好市池田町にあります。川崎少年剣道クラブの紹介をさせていただきます。

昭和五十七年、川崎小学校保護者会において、児童数の少ない学校で何か子供たちにスポーツをさせ体力、精神力をつけさせたいとの思いで、希望者を募集、二十名の児童が集り、平田照男（六段）先生を指導者にむかえ、週二回、水・土、川崎小学校体育館を使用、剣道を通し、礼儀作法を守り、強い精神力、人に対する思いやりを持つことを目的に、川崎小学校スポーツ振興会剣道クラブが始りました。

剣道教室では、一年生から六年生まで、個人差に考慮し、基本稽古を中心に子供たちがやる気をながくもてるよう、昇級審査合格を目標に稽古に励んできました。

しかし、平成三年、川崎小学校の児童数の減少により、剣道クラブの生徒数も減少、五名になり、指導者、保護者で剣道クラブ存続について話し合い、周辺小学校へ呼び掛け、生徒募集を行ないました。その結果、生徒数二十名になり教室にも活気が戻り、川崎少年剣道クラブ心機一転平田先生の指導のもと稽古に励みました。

平田先生の勧めで、保護者のお父さんお母さん方も始められ、子供たちと一緒に汗を流し一層活気にあふれ、お父さん方熱心に稽古をされ、喜多一幸、藤本常巳、堀川修さんが五段に昇段され指導にあたられています。

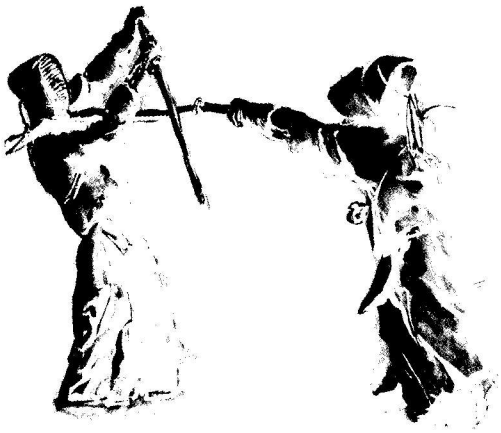
生徒たちも、お父さん方に刺激を受け、昇段審査合格を目標に中学、高校と剣道を続ける生徒たちが多くなり、稽古時間を小学生、中学生以上にわかれ、時間も延長、現在では三好支部の先生方も参加いただき稽古に励んでいるところです。

私も、平田先生にご指導いただき生徒たちに指導してまいりました。五年前、平田先生が体調を崩され私に任されました。

私が指導する立場となり大変な責任を感じましたが、教室の先生方また保護者会のみなさまのご指導を得て、生徒たちと共に汗を流しています。

しかし、私たちの住む県西部は、少子化、学校統合などの話もあり心配していますが、三好支部の方々と協力し長く続けていきたいと思います。

最後に、今後とも、県剣道連盟のご指導よろしくお願い致します。



少年剣道発表大会

平成十八年二月二十六日、東京都新宿の日本青年館において、全日本剣道道場連盟主催による剣道少年による体験・実践発表会が開催されました。

小学生の部の最優秀賞に四国代表の鳴門市光武館道場の斎田悟志君が選ばれました。次に、発表内容を掲載します。

『剣道はぼくの宝物』

鳴門市光武館道場
小学六年生　斎田悟志

六歳の時、光武館道場に入門したぼくは、その頃から大きな声で号令をかける先輩キャプテンに憧れていました。ぼくも六年生になったらあんなキャプテンになりたいと思うようになりました。でもよく見ているとキャプテンは、「声が大きい」「休まない」「みんなのめんどうをよく見る」「剣道が強い」そんな人がキャプテンになっていることが分かりました。どうしようかと迷ったけれど剣道を続けていくのならキャプテンになりたい、そのために一生けん命努力したいと思いました。そしてがんばって来てキャプテンになることができました。

けれどもそれは長い道のりでした。暑い日寒い日、学校行事で疲れた時、つい練習をさぼりたくなって、「一日くらい休んだって次がんばればいいんだ」そんな気持ちで休んだ時もありました。試合に勝てない事が重なると、気合いもなくだらけた練習をすることもありました。

そんなぼくがあらためて剣道が好きなんだと感じたことがありました。昨年夏、ぼくは首のリンパ腺が腫れる病気になり、医師から「暫く運動は止めなさい」と言われ、毎週血液検査に行っていました。が、なかなか良くならず剣道もできない、竹刀も振れない日々が続き、ぼくがぼくでないような、みんなに置いて行かれそうな焦りを感じ、「早く剣道がしたい。竹刀を思いっきり振りたい」と思いました。五十日くらい経った頃、医師が「もう大丈夫」と言ってくれた時は天にも昇るような気持ちでした。「絶対剣道を続けていくぞ」と改めて思いました。

高学年になり、試合や遠征の回数が増えました。ぼくと母が試合に出かける時は父が、父も仕事の時は祖父母が妹の面倒も見てくれます。朝はまだ暗いうちから出かけることも多く、妹も起こされ眠い目をこすりながら祖父の家へ行きます。妹には障害があって言葉を話すことができません。だから、「淋しい」とは言わないけれど淋しい思いをしているのだろうな。今までぼくは一人で剣道をがんばっているように思っていたが、家族のみん

なが協力してぼくを応援してくれていることに気がつきました。

ぼくはある時、館長先生のお家へ行って先生と将棋をさしていました。その時先生が、「斎田、お前なァ妹とよく話をしているか」と聞かれたので「あんまり」と答えました。「お前の妹の病気はな、人とのコミュニケーションがうまくとれない病気だけど、家族の人がやさしくいろいろ話しかけてあげると、きっと伝わると思うよ。学校のこと、剣道のこと一ぱい話しかけてあげたらきっと喜ぶよ」と教えて下さいました。

それからぼくは妹が聞いていてもいなくても話しかけるようにしました。特に剣道のことを一生けん命話してあげました。

ある時、試合で優勝したことを、身振り手振りでおもしろく話していると、いつも無表情な妹がニッコリ笑ってくれたのです。ぼくも嬉しくなってつい長話しをしてしまい妹は眠ってしまいました。でもあの笑顔はぼくに勇気をくれました。そしてその時「剣道をしていて本当によかった」と心から思いました。

道場では剣道ばかりでなく、人としての生き方や日常生活の常識も教えて下さいます。だから剣道と出会えたことはぼくの人生にとってすばらしいことだったのです。剣道はぼくの宝物です。

母は介護の仕事をしながら、ぼく達を育ててくれていますが、光武館の保ご者会会長としても道場のお世話をしてくれます。そんな母に少しでも恩返しがしたいなとこのごろ思います。それは、先生や友達や家族へ感謝の気持ちを忘れず、剣道という宝物を大切にしながらせい一杯妹を守ってあげられる人間になることだと思っています。

発表会の模様

新人紹介

刑務所支部一年生

徳島刑務所　高橋伊織

平成十八年四月に徳島刑務所に拝命し、早一年がこようとしています。

私自身の出身は香川県です。同じ四国内の徳島ですが、見知らぬ土地での生活、勤務をしながらの稽古、四月当初は不安であり、また、あっという間に月日が流れていくといった感じでした。

初めて刑務所の道場の門をくぐった時は、緊張で足がすくむ程でした。

私は六才の頃から剣道を始めて十九年が経ちます。その間たくさんの経験をしてきました。なので刑務所での剣道もある程度がんばれば、先輩方についていけると思っていましたが、やはり刑務所の剣道のレベルは高く、大変驚きました。改めて剣道の奥深さ、難しさを実感させられました。先輩方に少しでも近づく為には、大変難しいとは思います。まったく経験のした事のない仕事をした後での稽古。次から次へと仕事を覚えていかなければならず拝命当時は、大変しんどく稽古も苦労したのを覚えています。

又、夜間勤務につきだしてからは、防具をつけての稽古をする時間が減ってきました。限られた時間での稽古は、大変苦労しました。今では、もう慣れてき、きちんと稽古はできるようになってきました。防具をつけてする稽古だけ剣道の稽古ではないと思っています。なので素振りなど、できる時には必ずやっていきたいと思います。

徳島の剣道についてですが、初めて徳島で試合にでた時に、地域ごとに支部があるという事には驚き、剣道に対する情熱を感じました。このような環境の中で剣道をしていける事を幸せと思い、一生懸命がんばっていかなければいけないなと思いました。

これまで徳島で試合をさせていただきましたが、悔しい結果が多かったような気がします。結果だけがすべてだとは思いませんが、やはり剣道の試合をやっている以上良い結果を残したいと思います。次回からは良い結果が残せるよう努力していきたいです。

試合に負けても、

「あー負けた。」

で、終わってしまうのではなく、これからの課題や目標を見つけていかなければいけないと思います。その繰り返しが、何事においても良い結果が生まれてくるのではないでしょうか。

社会人になってからは、学生時代に比べると、稽古のできる機会は少なくなりましたが、刑務所支部で稽古ができ、剣道を続けてよかったと思っております。また先輩に少しでも近づけるよう一生懸命努力していくつもりです。

又、このすばらしい剣道を一人でも多くの人に伝えていけるよう、微力ではありますが、徳島の剣道に貢献していきたいです。

刑務所支部一年生

秋山雄治

私は、平成十七年十二月十六日に徳島刑務所に拝命しました。私は、六歳から剣道を始め、阿波少年剣道教室・阿波中学校・川島高等学校・香川大学を経て現在に至ります。まだまだ全くの未熟者であり、ここ徳島刑務所で仕事と共に、剣道に励んでいく所存であります。

拝命して四ヶ月後の平成十八年四月下旬に四国四県の施設対抗の大会があり、私は早くも選手として出場させていただきました。一月から三月末までの二ヶ月半は初等科研修のためほとんど稽古ができませんでしたが、研修から戻ってからは、先輩方と日々の稽古を積み、優勝チームのみが出場できる全国大会を目指して大会へ臨みました。大会数日前から試合当日のアップまで調子をあげてきた私でしたが、いざ試合が始まると、この大会の独特の空気に飲み込まれてしまい、私はこれまでの稽古の成果を出せませんでした。しかも、四チームでの総あたり戦だったのですが、私は三試合とも全て負けてしまいました。初出場でプレッシャーに飲み込まれたというのは言い訳にすぎませんが、とにかく自分の力を発揮することができず、まだまだ自分は甘く、足りない部分が多いことに気づかされました。この大会に向けて頑張ってきた先輩方の頑張りも無駄にしてしまいました。この大会の負けの責任は私にあると強く感じ、つらい思いをしました。そして、来年こそは必ずリベンジをしてやるぞと強く感じました。

その後は、社会人大会や国体予選、段別選手権に刑務所支部の選手として出場してきました。支部と素晴らしい先輩方に恥じない剣道を常に心がけて出場しますが、内容も成績もまだまだです。新年を迎え、より一層自分の剣道を高めていこうと心新たにしています。刑務所支部に入り、これまでの学生剣道から社会人の剣道へと確立していかなくてはいけませんが、これから先輩方との稽古から学び、また、県内の先生方、先輩方とも稽古できる機会には多くのことを学びとっていきたいです。高校のときに培った基本が、大学時代に少し崩れてしまっているように思うので、もう一度基本にかえり、しっかりと剣道を練り直していきたいと考えています。

昨年の苦い経験からはや一年が近づいてきました。今年こそは先輩方とさらに一致団結し、優勝を目指します。後悔しない、全て出しきった試合ができるよう、今から意識を高めて稽古に励んでいきます。

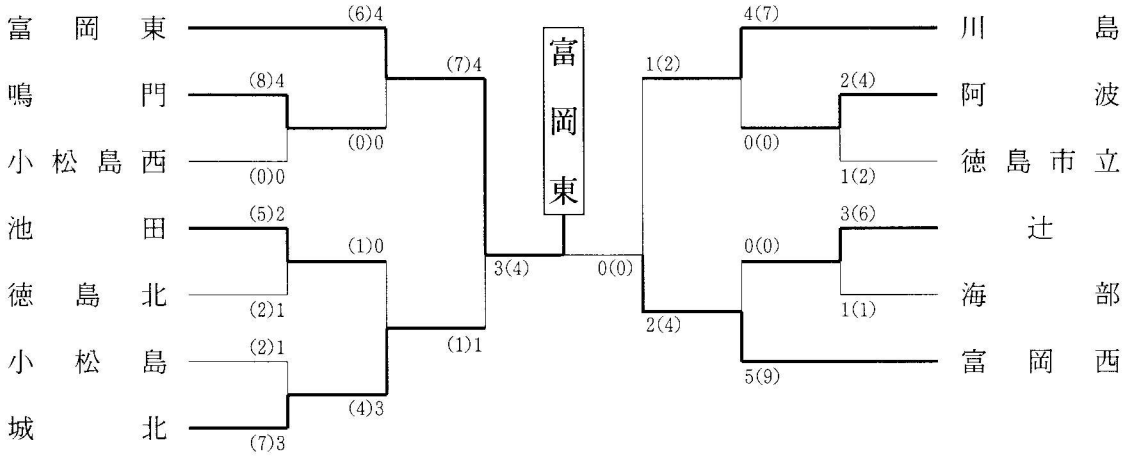
最後になりましたが、県内の先生方、先輩方にこれから稽古をつけていただく機会にはよろしくお願いします。勤務等でなかなか稽古会等参加できていませんが、徳島県で自分の剣道を磨いていきたいと思っていますので、今後とも御指導の程、宜しくお願い致します。

平成18年度　大　会　記　録

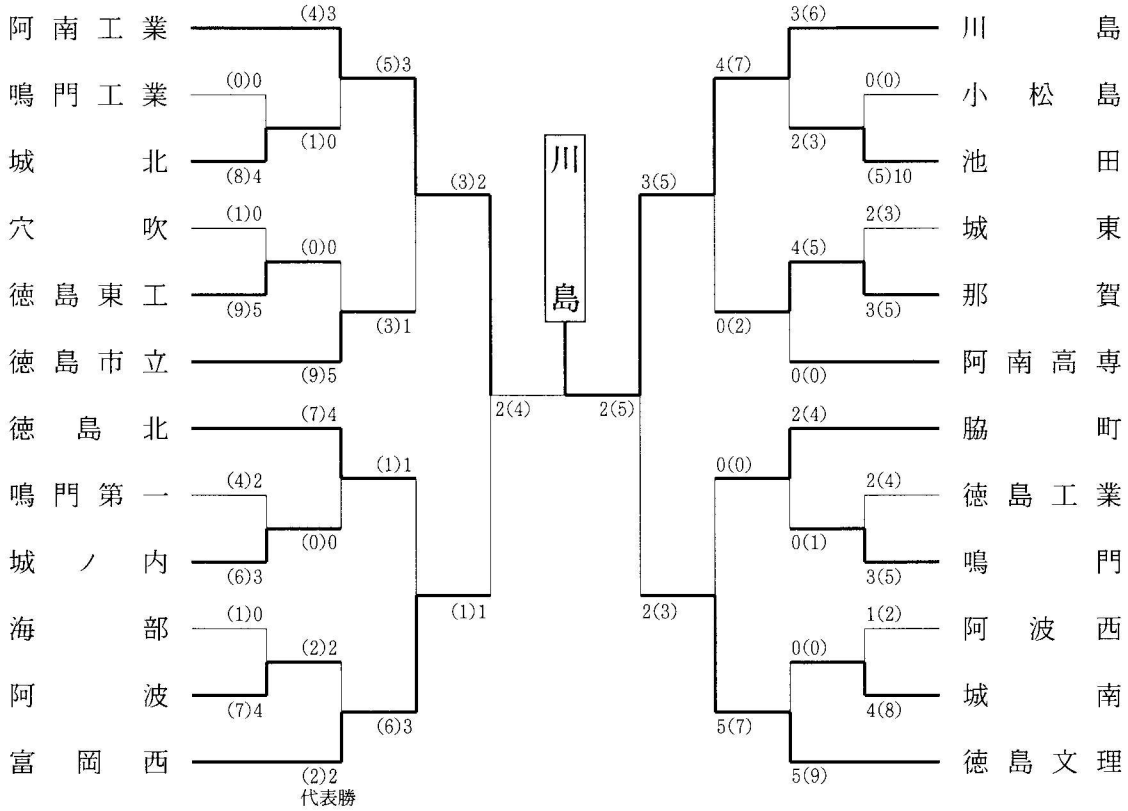
平成18年度　徳島県高等学校総合体育大会　剣道競技

日　時　平成18年6月3日(土)～6月5日(月)
会　場　徳島県立城西高等学校体育館

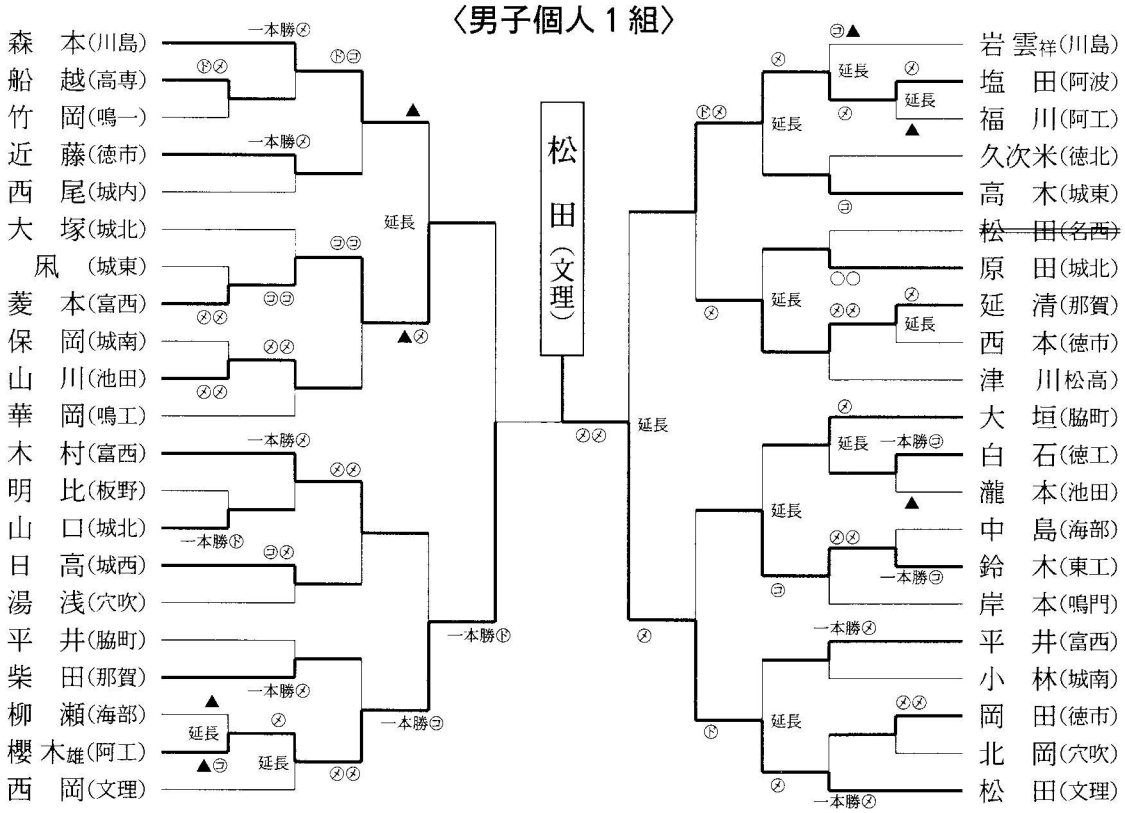
〈女子団体戦〉



〈男子団体戦〉

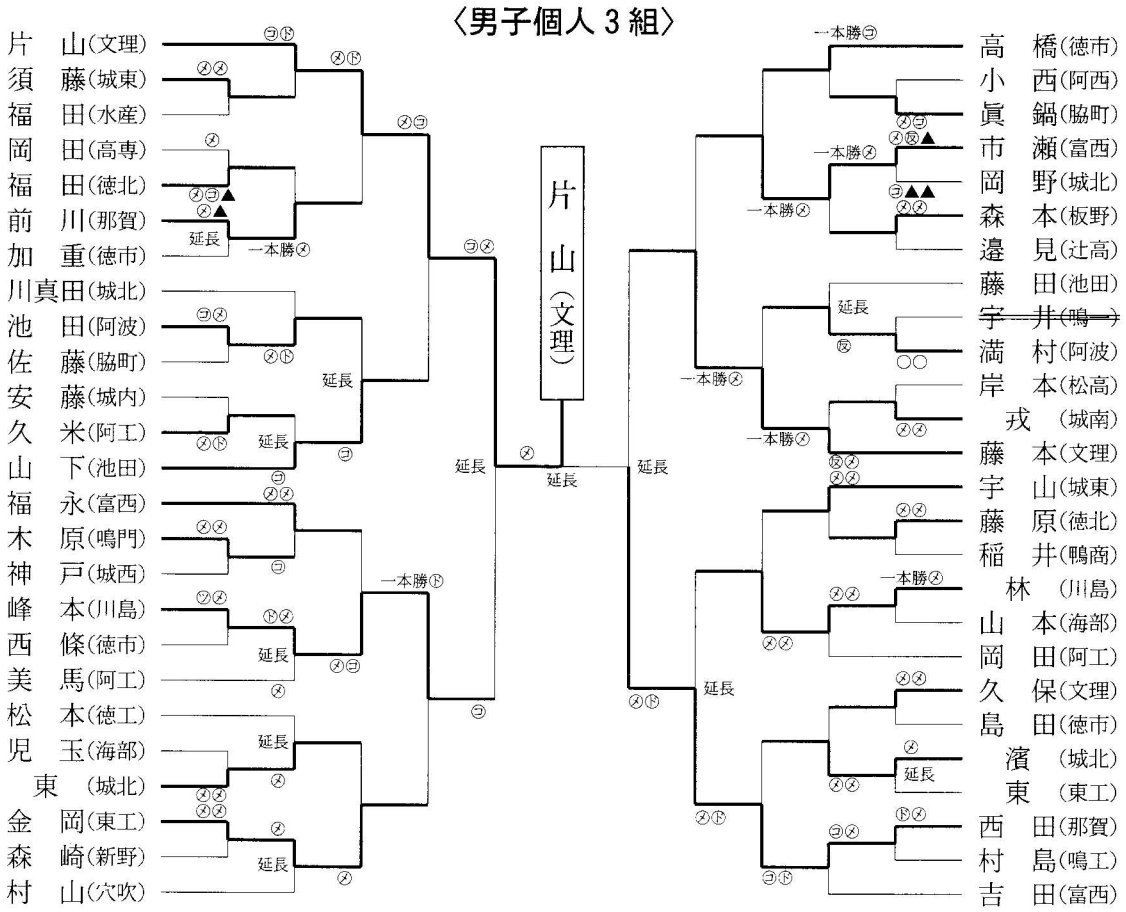


〈男子個人１組〉

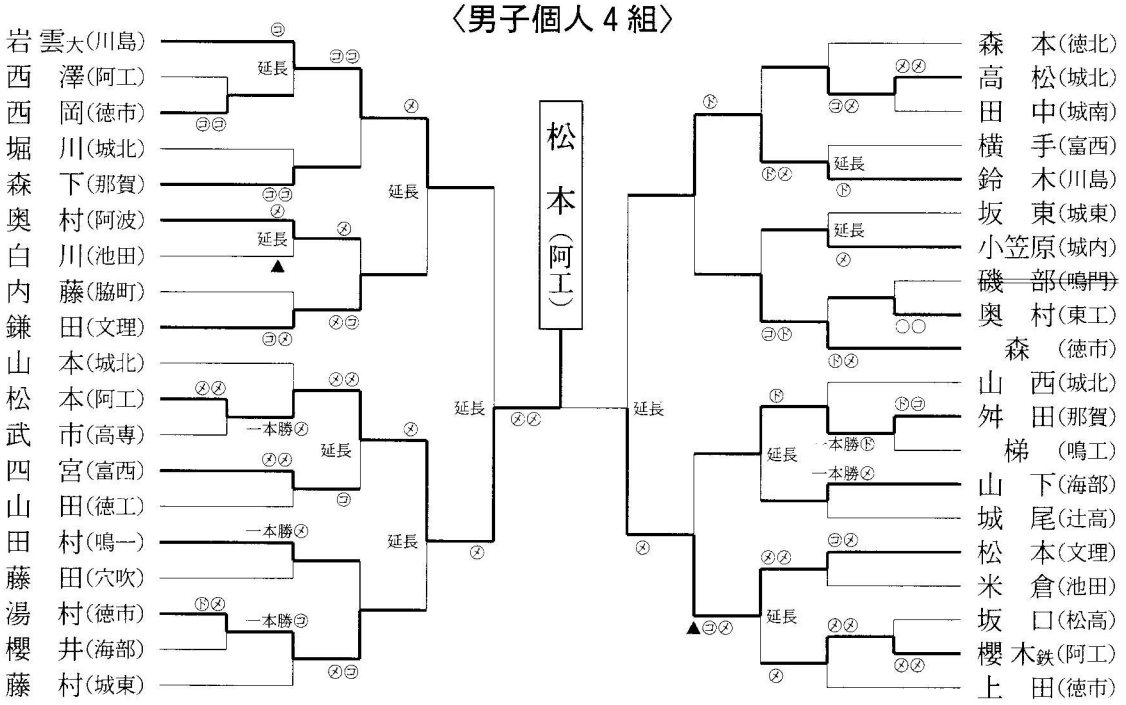


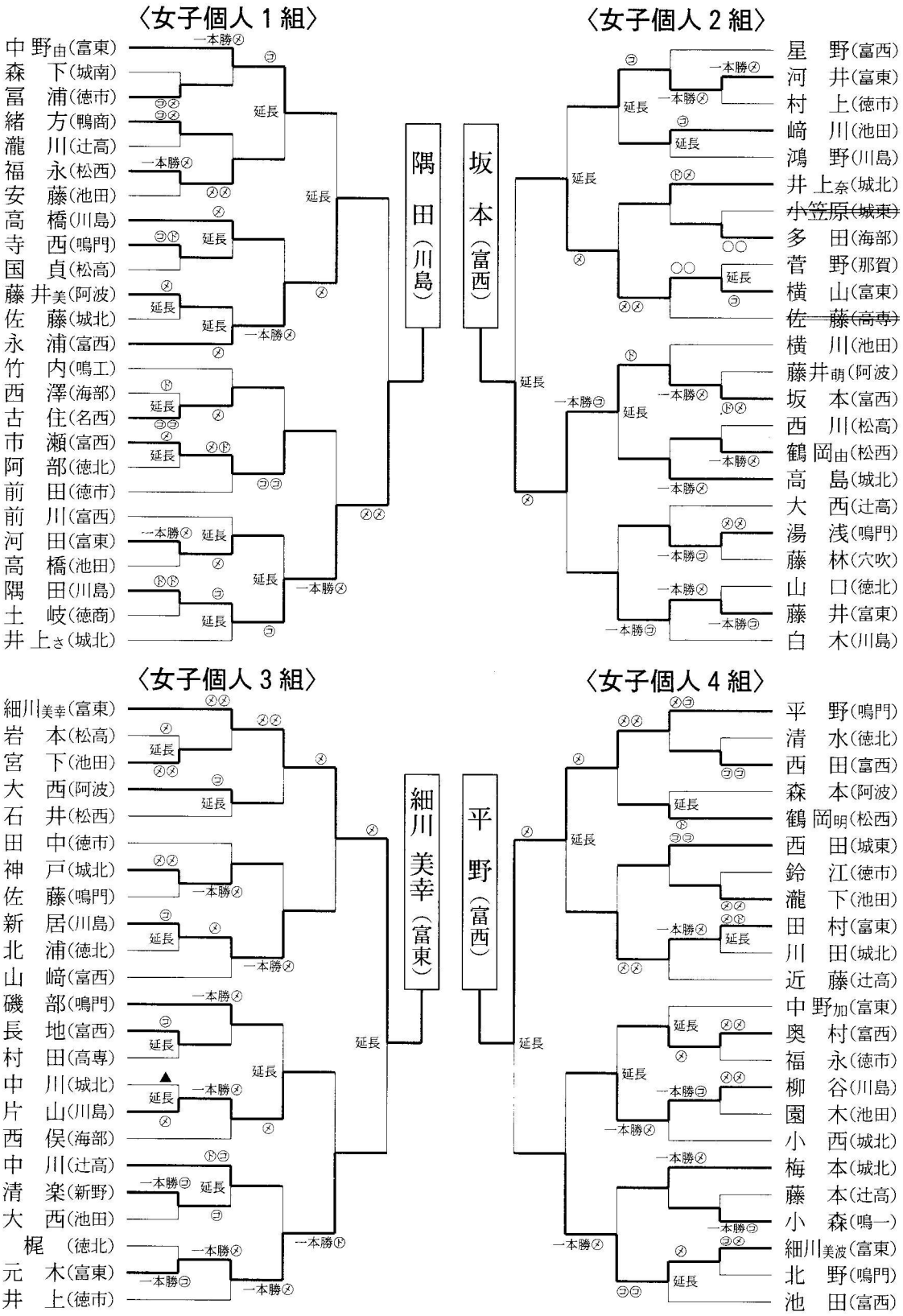
〈男子個人２組〉

〈男子個人３組〉



〈男子個人４組〉




〈女子個人１組〉
中野由(富東)
森下(城南)
冨浦(徳市)
緒方(鴨商)
瀧川(辻高)
福永(松西)
安藤(池田)
高橋(川島)
寺西(鳴門)
国貞(松高)
藤井美(阿波)
佐藤(城北)
永浦(富西)
竹内(鳴工)
西澤(海部)
古住(名西)
市瀬(富西)
阿部(徳北)
前田(徳市)
前川(富西)
河田(富東)
高橋(池田)
隅田(川島)
土岐(徳商)
井上さ(城北)
〈女子個人２組〉
星野(富西)
河井(富東)
村上(徳市)
﨑川(池田)
鴻野(川島)
井上奈(城北)
~~小笠原(城東)~~
多田(海部)
菅野(那賀)
横山(富東)
~~佐藤(高専)~~
横川(池田)
藤井萌(阿波)
坂本(富西)
西川(松高)
鶴岡由(松西)
高島(城北)
大西(辻高)
湯浅(鳴門)
藤林(穴吹)
山口(徳北)
藤井(富東)
白木(川島)
隅田(川島)
坂本(富西)
〈女子個人３組〉
細川美幸(富東)
岩本(松高)
宮下(池田)
大西(阿波)
石井(松西)
田中(徳市)
神戸(城北)
佐藤(鳴門)
新居(川島)
北浦(徳北)
山﨑(富西)
磯部(鳴門)
長地(富西)
村田(高専)
中川(城北)
片山(川島)
西俣(海部)
中川(辻高)
清楽(新野)
大西(池田)
梶(徳北)
元木(富東)
井上(徳市)
〈女子個人４組〉
平野(鳴門)
清水(徳北)
西田(富西)
森本(阿波)
鶴岡明(松西)
西田(城東)
鈴江(徳市)
瀧下(池田)
田村(富東)
川田(城北)
近藤(辻高)
中野加(富東)
奥村(富西)
福永(徳市)
柳谷(川島)
園木(池田)
小西(城北)
梅本(城北)
藤本(辻高)
小森(鳴一)
細川美波(富東)
北野(鳴門)
池田(富西)
細川美幸(富東)
平野(富西)

〈女子団体戦〉

準　決　勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
富岡東	横山	河田	中野	河井	細川	4	7	
	延長 ㊍	延長 ㊍	㊍㊍	㊍㊍	㊍㊍			
城北	井上さ	中川	井上奈	小西	神戸	1	1	

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
川島	新居	隅田	柳谷	白木	片山	1	2	
	延	㊍㊐	延長	延長				
富岡西	長 ㊍	㊍			㊍㊐			
	山崎	星野	池田	長地	坂本	2	4	

3位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
城北	井上さ	中川	佐藤	小西	神戸	2	2	
	延		延	㊍一本勝	㊐一本勝			
川島	長 ㊍	一本勝 ㊍	長					
	新居	隅田	柳谷	白木	片山	1	1	

決　　勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
富岡東	横山	河田	中野	河井	細川	3	4	
	㊍ 延	㊍㊐	延	㊍ 延				
富岡西	長		長	長				
	山崎	星野	池田	長地	坂本	0	0	

〈男子団体戦〉

準　決　勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
阿南工	櫻木	福川	神元	松本	美馬	2	3	
	延長	㊐㊐	㊍ 延長					
富岡西				一本勝 ㊍				
	横手	吉田	元木	市瀬	菱本	1	1	

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
川島	鈴木	岩雲	峰本	林	森本	3	5	
	㊍一本勝	延	㊍㊍	㊍一本勝	㊍			
文理		長 ㊍			㊍㊍			
	松本	鎌田	西岡	片山	玉田	2	3	

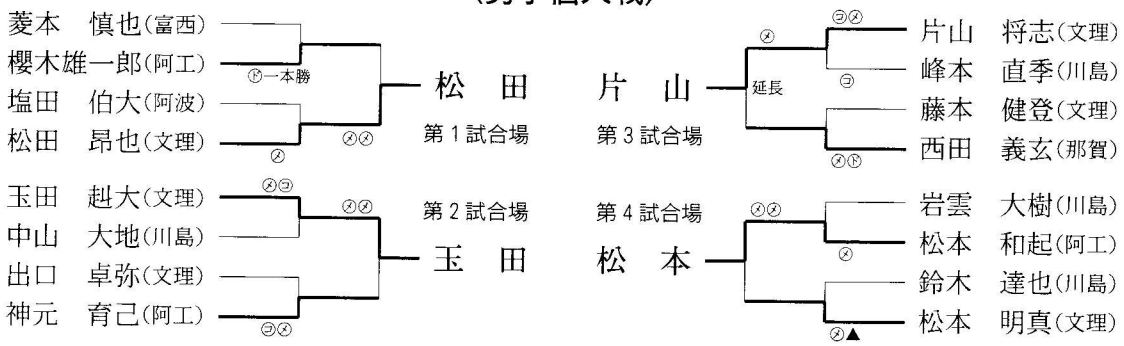
3位決定戦

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
文理	松本	鎌田	松田	片山	玉田	3	5	
	延	延	㊍一本勝	㊐㊍	㊍㊐			
富岡西	長	長						
	横手	吉田	元木	市瀬	菱本	0	0	

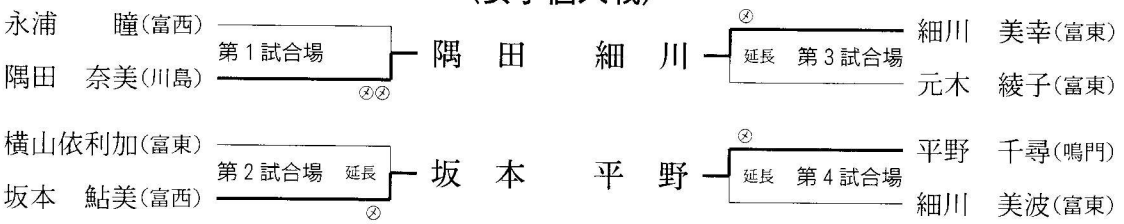
決　　勝

校名	先	次	中	副	大	勝敗	本	代
阿南工	櫻木	福川	神元	松本	美馬	2	4	
		㊍ 延		㊍ 延	㊍㊍			
川島	㊐㊍	長 ㊍	一本勝 ㊐	長	㊍			
	鈴木	岩雲	峰本	林	森本	2	5	

〈男子個人戦〉



〈女子個人戦〉



決　勝　リ　ー　グ

〈男子個人戦〉

	松　田	玉　田	片　山	松　本	勝　数	勝本数	得失点	順　位
松　田		△ ㊧ 延長	△	△ ㊧ 延長	0	2	−3	4
玉　田	㊨㊨ 延長		△	㊧㊦	2	4	+1	2
片　山	㊦ 一本勝	㊧ 一本勝		㊨㊦	3	4	+4	1
松　本	㊧㊧ 延長	△ ㊧	△		1	3	−2	3

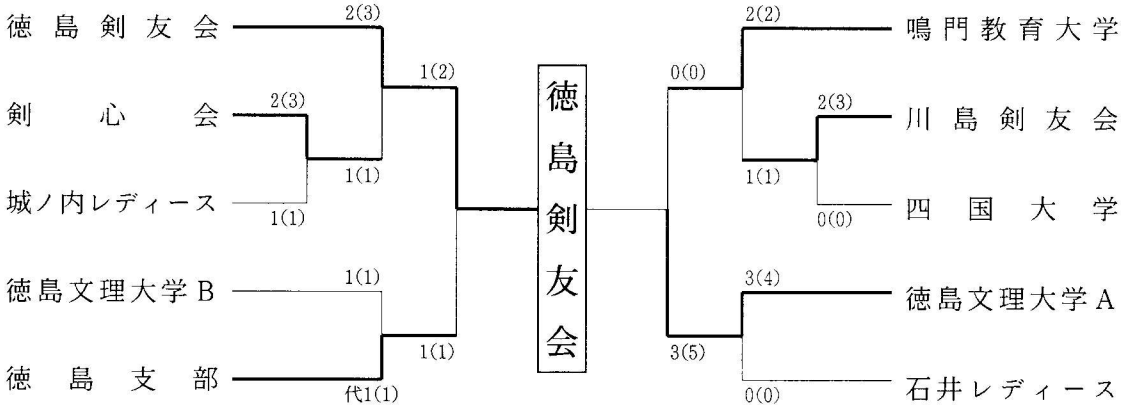
〈女子個人戦〉

	隅　田	坂　本	細　川	平　野	勝　数	勝本数	得失点	順　位
隅　田		△	△	△	0	0	−4	4
坂　本	㊧㊧		△	△	1	2	−2	3
細　川	㊧ 一本勝	㊧㊨		㊨㊧	3	5	+4	1
平　野	㊨ 一本勝	㊧㊨	△ ㊧		2	4	+2	2

第27回 徳島県女子剣道大会
第23回 全国家庭婦人剣道大会県予選会

団体戦

日　時　平成18年5月9日(日) 午前9時30分
場　所　徳島県立中央武道館



決勝戦

	先鋒	中堅	大将		
徳島剣友会	美馬真	北村	平野		4/3
	㊐㊙	㊐一本勝	㊙延長		
徳島文理大A					0/0
	酒井	村田	住友		

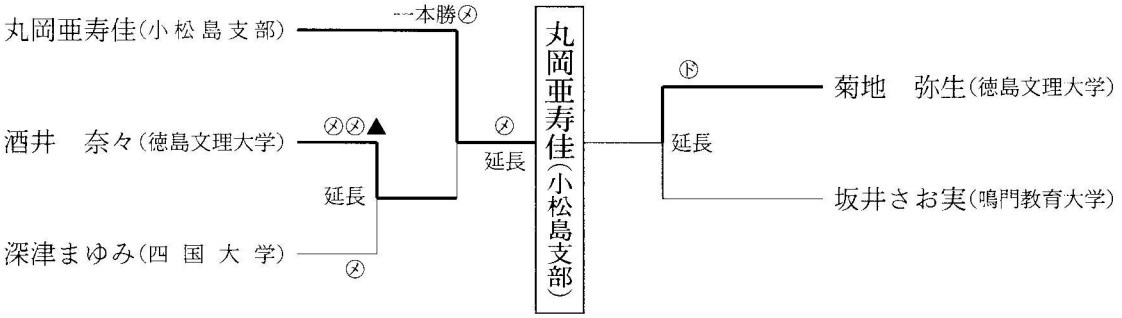
準決勝

	先鋒	中堅	大将		
徳島剣友会	美馬真	北村	平野		2/1
	㊙㊙	▲			
徳島支部		一本勝㊙			1/1
	豊田	美馬敦	岩見		

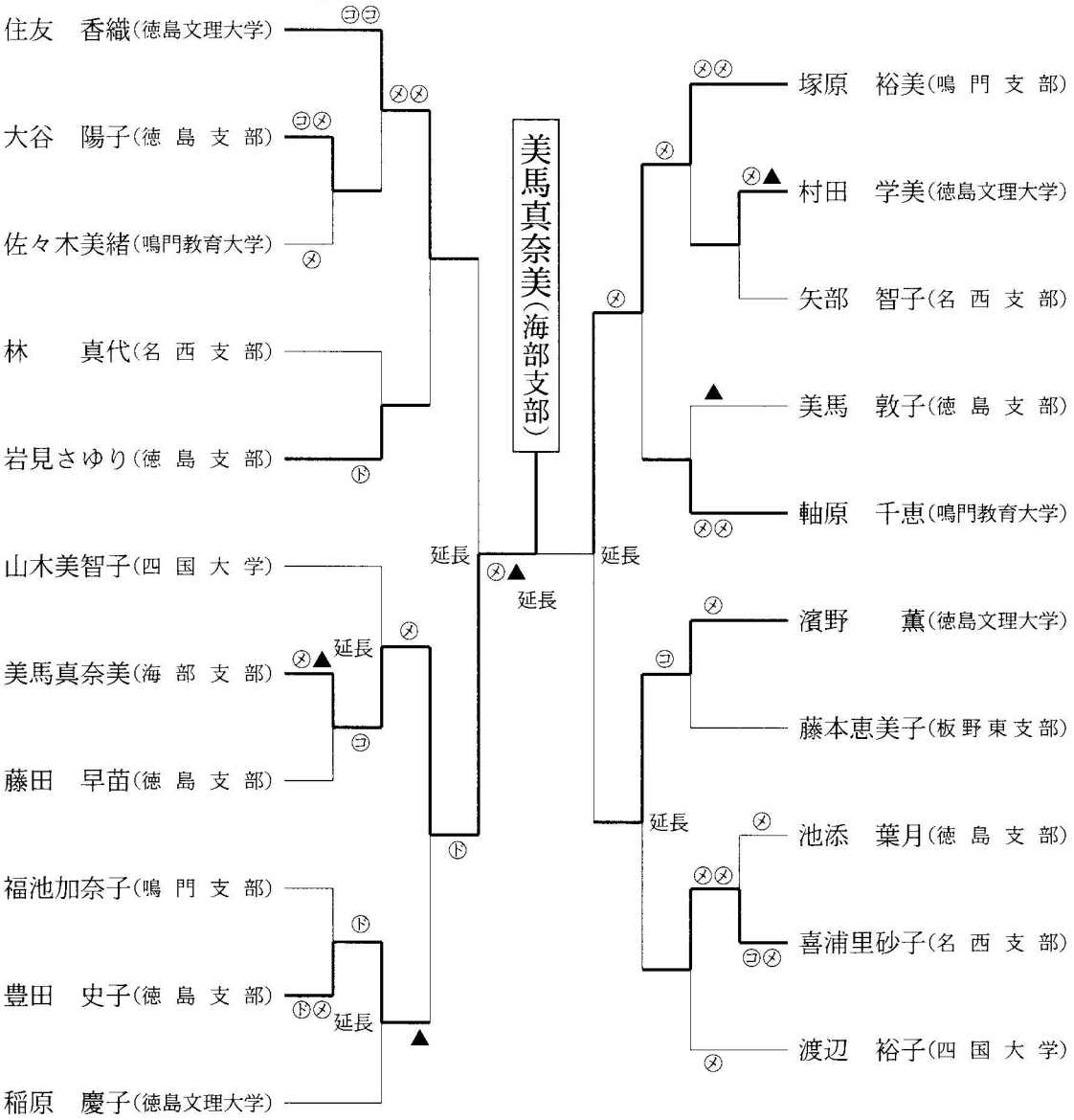
準決勝

	先鋒	中堅	大将		
徳島文理大A	酒井	村田	住友		5/3
	㊙㊐延長	㊙㊦	㊙一本勝		
鳴門教育大	㊙				1/0
	坂井	佐々木	軸原		

個人戦 〈二段以下の部〉



個人戦 〈三段以上の部〉



第18回 徳島県剣道選手権大会並びに 第54回 全日本剣道選手権大会県予選会

優　　勝　近藤正章（警察支部）　日　時　平成18年7月9日(日) 午前9時30分
準優勝　山室雅幹（警察支部）　場　所　鳴門武道館
第三位　川添義仁（警察支部）
第三位　小柏祐三（警察支部）

第９回 徳島県女子剣道選手権大会並びに
第45回 全日本女子選手権大会県予選会

優　　勝　美　馬　真奈美（海部支部）　日　時　平成18年７月９日(日) 午前９時30分
準 優 勝　中　山　希実子（阿南支部）　場　所　鳴　門　武　道　館
第 三 位　日和田　朗　子（麻植支部）
第 三 位　吉　岡　　穣（駒沢大学）

第60回 徳島県中学校夏季総合体育大会 剣道競技

（1日目）日　時　平成18年7月16日(日) 午前9時45分
　　場　所　松茂町総合体育館
（2日目）日　時　平成18年7月16日(日) 午前9時
　　場　所　鳴門武道館

	男子	女子
優勝	徳島文理中学校	阿南第一中学校
準優勝	鳴門第一中学校	那賀川中学校
第3位	鴨島第一中学校	北井上中学校
第3位	那賀川中学校	牟岐中学校

[男子決勝リーグ]

	徳島文理	鳴門第一	那賀川	鴨島第一	勝ち点	勝者数	本数	順位
徳島文理		○ 6/3	○ 6/4	○ 8/5	9	12	20	1
鳴門第一	△ 4/2		○ 3/2	○ 4/2	6	6	11	2
那賀川	△ 1/1	△ 2/1		△ 1/1	0	3	4	4
鴨島第一	△ 1/0	△ 3/1	○ 4/3		3	4	8	3

[女子決勝リーグ]

	北井上	那賀川	阿南第一	牟岐	勝ち点	勝者数	本数	順位
北井上		○ 3/3	△ 1/1	○ 3/3	6	7	7	3
那賀川	△ 1/1		○ 3/3	○ 9/5	6	9	13	2
阿南第一	○ 3/3	△ 3/2		○ 8/5	6	10	14	1
牟岐	△ 0/0	△ 0/0	△ 0/0		0	0	0	4

[個人戦]

順位	男子	学校名	順位	女子	学校名
優勝	湯浅翔平	徳島文理	優勝	近藤陽香	阿南第一
準優勝	藤本　稜	相生	準優勝	岩原紗也香	那賀川
第3位	鈴木智也	徳島文理	第3位	湊　友里	阿南第一
第3位	小西貴大	那賀川	第3位	仁木悠美	阿南第一

[女子決勝リーグ]

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
北井上	森本	井上	美馬	菊岡	加重	3
	延	延	㋝一本勝	延 ㋝	延 ㋝	
那賀川	長 ㋝	長		長	長	1
	岡内	栗野	岩原	原	市瀬	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
牟岐	福田	上田	浦岡	藤井	柳瀬	0
	延 ▲	延				
阿南第一	長 ㋝	長 ㋕	㋒㋒	㋝㋝	㋒㋒	5
	仁木	品川	湯浅	近藤	湊	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
北井上	森本	井上	美馬	菊岡	加重	1
	延	延 ㋝	延	延		
阿南第一	長	長	長 ㋒	長 ㋕	㋝一本勝	3
	仁木	品川	湯浅	近藤	湊	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
牟岐	福田	上田	浦岡	藤井	柳瀬	0
那賀川	㋝㋕	㋝㋝	㋕㋝	㋝㋒	㋕一本勝	5
	岡内	栗野	岩原	原	市瀬	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
北井上	森本	井上	美馬	菊岡	加重	3
	㋝一本勝	㋝一本勝	㋝一本勝			
牟岐						0
	福田	上田	浦岡	藤井	柳瀬	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
阿南第一	仁木	品川	湯浅	近藤	湊	2
		㋝一本勝		延	㋝㋝	
那賀川	㋒一本勝		㋒一本勝	長 ㋝		3
	岡内	栗野	岩原	原	市瀬	

[男子決勝リーグ]

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
徳島文理	松本	原	湯浅	岡田	鈴木	3
	延 ㊦	延 ㊧▲▲	▲㊧㊧	延 ㊧	㊧	
鳴門第一	長	長 ㊨㊥	▲	長	㊥㊧	2
	元木	福居	平野	小倉	川邉	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
鴨島第一	桑原	小倉	笠井	立石	河村	3
		延 ㊦	延	㊧㊧	㊦一本勝	
那賀川		長	長 ㊧			1
	松本	小濱	小西	谷口	山田	

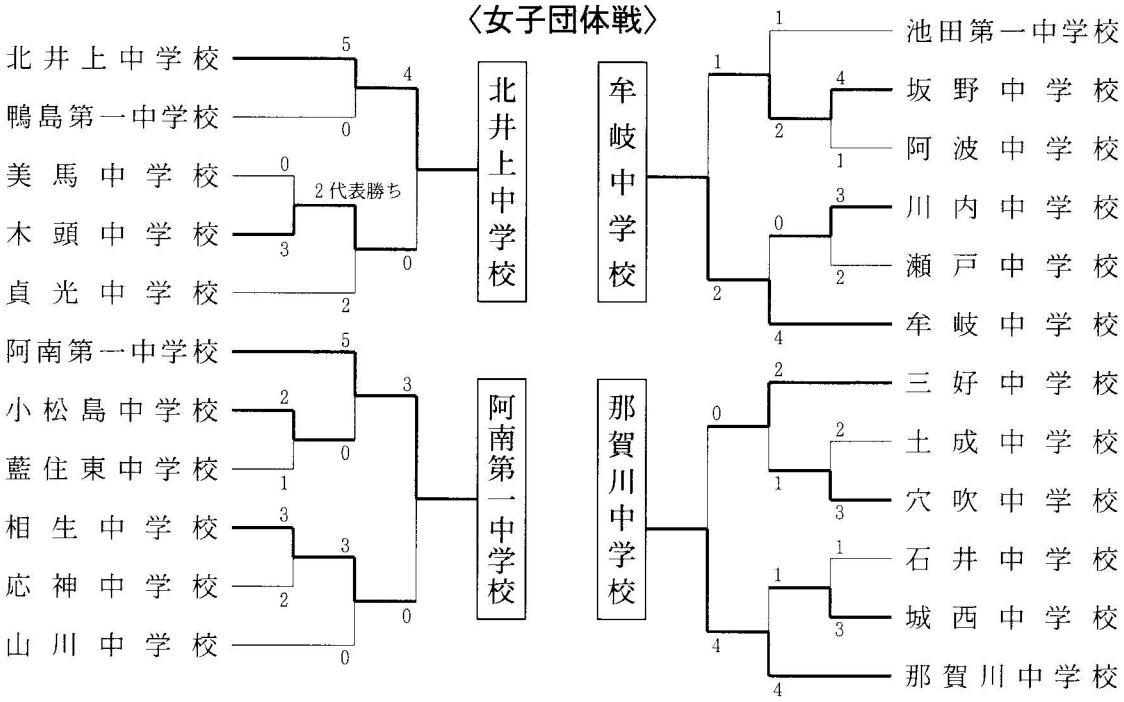
	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
徳島文理	松本	原	湯浅	岡田	鈴木	4
	㊧一本勝	㊧㊧		㊧一本勝	㊧㊦	
那賀川			㊧一本勝	▲		1
	松本	小濱	小西	谷口	山田	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
鴨島第一	桑原	小倉	笠井	立石	河村	1
	延 ㊧	延	延		㊥㊦	
鳴門第一	長 ㊧	長	長 ㊦	㊧㊧		2
	元木	福居	平野	小倉	川邉	

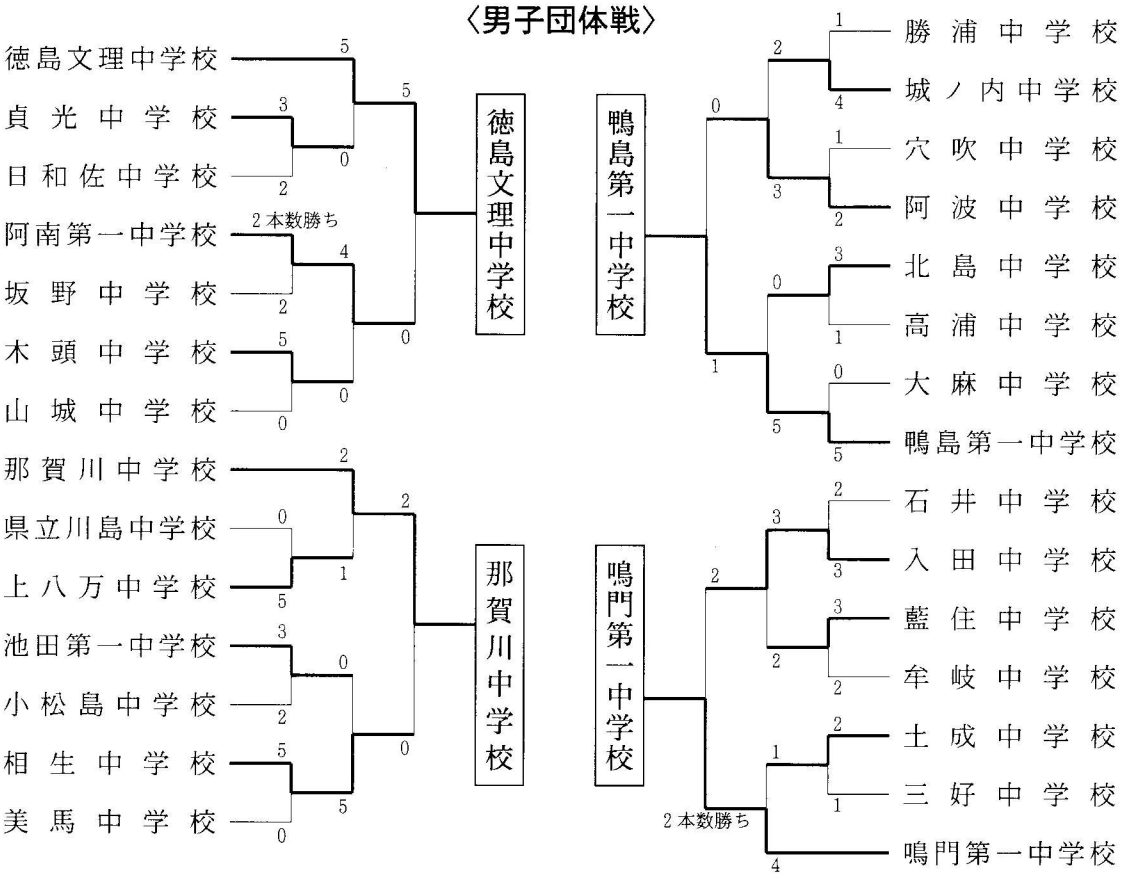
	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
徳島文理	松本	原	湯浅	岡田	鈴木	5
	㊦一本勝	㊦㊧	㊥一本勝	㊧㊧	㊧㊧	
鴨島第一					㊥	0
	桑原	小倉	笠井	立石	河村	

	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	
那賀川	松本	小濱	小西	谷口	山田	1
	延		延 ㊦	㊥一本勝	延	
鳴門第一	長	㊦一本勝	長 ㊦㊧		長	2
	元木	福居	平野	小倉	川邉	

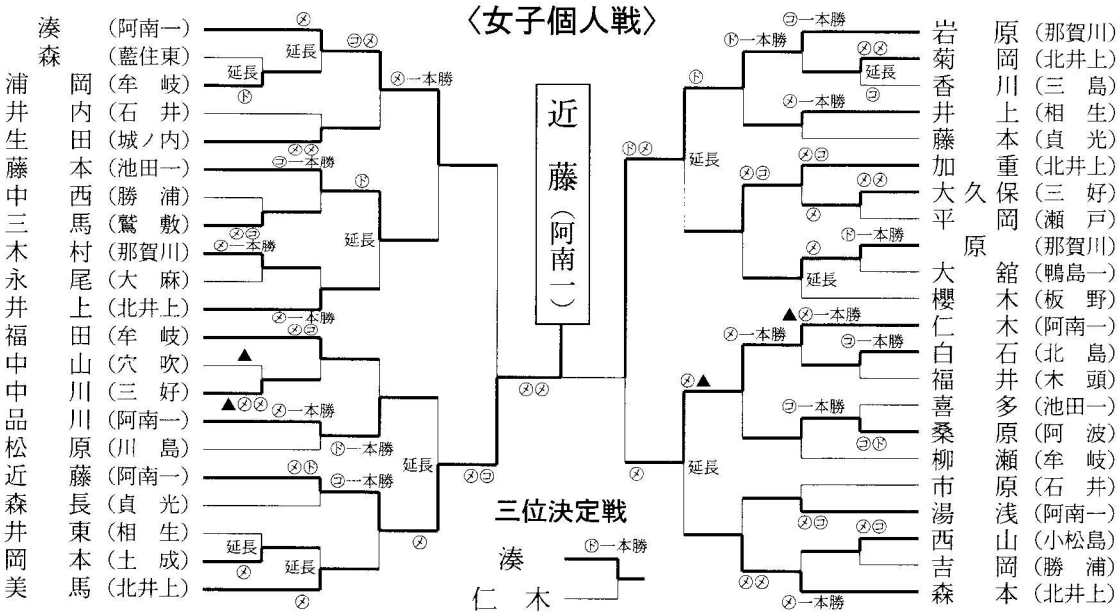
〈女子団体戦〉


北井上中学校
鴨島第一中学校
美馬中学校
木頭中学校
貞光中学校
阿南第一中学校
小松島中学校
藍住東中学校
相生中学校
応神中学校
山川中学校
2代表勝ち
北井上中学校
阿南第一中学校
牟岐中学校
那賀川中学校
池田第一中学校
坂野中学校
阿波中学校
川内中学校
瀬戸中学校
牟岐中学校
三好中学校
土成中学校
穴吹中学校
石井中学校
城西中学校
那賀川中学校

〈男子団体戦〉


徳島文理中学校
貞光中学校
日和佐中学校
阿南第一中学校
坂野中学校
木頭中学校
山城中学校
2本数勝ち
那賀川中学校
県立川島中学校
上八万中学校
池田第一中学校
小松島中学校
相生中学校
美馬中学校
徳島文理中学校
那賀川中学校
鴨島第一中学校
鳴門第一中学校
勝浦中学校
城ノ内中学校
穴吹中学校
阿波中学校
北島中学校
高浦中学校
大麻中学校
鴨島第一中学校
石井中学校
入田中学校
藍住中学校
牟岐中学校
土成中学校
三好中学校
鳴門第一中学校
2本数勝ち

〈女子個人戦〉


近藤（阿南一）
三位決定戦
湊 ㋒一本勝
仁木
湊（阿南一）
森（藍住東）
浦岡（牟岐）
井内（石井）
生田（城ノ内）
藤本（池田一）
中西（勝浦）
三馬（鷲敷）
木村（那賀川）
永尾（大麻）
井上（北井上）
福田（牟岐）
中山（穴吹）
中川（三好）
品川（阿南一）
松原（川島）
近藤（阿南一）
森長（貞光）
井東（相生）
岡本（土成）
美馬（北井上）
岩原（那賀川）
菊岡（北井上）
香川（三島）
井上（相生）
藤本（貞光）
加重（北井上）
大久保（三好）
平岡（瀬戸）
原（那賀川）
大舘（鴨島一）
櫻木（板野）
仁木（阿南一）
白石（北島）
福井（木頭）
喜多（池田一）
桑原（阿波）
柳瀬（牟岐）
市原（石井）
湯浅（阿南一）
西山（小松島）
吉岡（勝浦）
森本（北井上）

〈男子個人戦〉

湯浅（文理）
三位決定戦
鈴木
小西
湯浅（文理）
福（三好）
小野（木頭）
山口（石井）
山下（池田一）
上野（那賀川）
柴田（脇町）
酒巻（阿波）
津田（牟岐）
中西（勝浦）
長瀬（相生）
小倉（鳴門一）
安部（阿南一）
笠井（鴨島一）
松本（文理）
藤本哲（貞光）
朝井（北島）
坂本（板野）
河村（鴨島一）
山ノ井（阿南一）
元木（鳴門一）
上坂（池田一）
藤本康（貞光）
白石（北島）
鈴木（文理）
大泉（小松島）
幸木（由岐）
岡田（文理）
河野（石井）
樋本（勝浦）
佐藤（阿波）
西村（相生）
山田（穴吹）
植田（羽ノ浦）
安宅（三好）
川邉（鳴門一）
小西（那賀川）
小藪（木頭）
曽根（文理）
新宅（池田一）
立石（鴨島一）
定作（勝浦）
藤本奨（貞光）
皆谷（牟岐）
上田（三好）
平野（鳴門一）
入江（藍住）
臼木（羽ノ浦）
武市（城ノ内）
桑原（鴨島一）
清水（穴吹）
小林（阿波）
佐々木（板野）
白木（石井）
原（文理）
石川（池田一）
土井（阿南一）
安原（江原）
小倉（鴨島一）
小川（阿波）
小澤（牟岐）
中西（木頭）
福居（鳴門一）
山上（貞光）
大久保（三好）
岡（松茂）
久米（上八万）
山上（勝浦）
上田（坂野）
民（石井）
山田（那賀川）
藤本（相生）

第35回 徳島県社会人剣道大会

予選リーグ

日　時　平成18年10月15日(日) 午前9時30分
場　所　鳴　門　武　道　館

A	小松島(小)	板野東支部	徳島支部	阿南支部C	勝数	勝者数	勝本数	順位
小松島(小)		6/3	5/3	7/4	3	10	18	1
板野東支部	△0/0		△2/1	△2/1	0	2	4	4
徳島支部	△2/1	4/2		△3/1	1	4	9	3
阿南支部C	△1/1	7/4	4/2		2	7	12	2

B	鳴門支部A	吉野川	阿波支部D	勝数	勝者数	勝本数	順位
鳴門支部A		3/2	6/3	2	5	9	1
吉野川	△2/1		△4/1	0	2	6	3
阿波支部D	△3/1	5/3		1	4	8	2

C	小松島(松)	海部支部B	美馬支部C	勝数	勝者数	勝本数	順位
小松島(松)		8/4	8/4	2	8	16	1
海部支部B	△3/0		△4/2	0	2	7	3
美馬支部C	△2/0	7/3		1	3	9	2

D	徳島少剣	阿南支部D	上那賀竹友館A	勝数	勝者数	勝本数	順位
徳島少剣		7/4	4/2	2	6	11	1
阿南支部D	△2/1		△2/0	0	1	4	3
上那賀竹友館A	△3/2	10/5		1	7	13	2

E	振武館A	阿南支部B	阿波支部B	勝数	勝者数	勝本数	順位
振武館A		8/4	3/1	2	5	11	1
阿南支部B	△1/0		4/2	1	2	5	2
阿波支部B	△1/0	△3/1		0	1	4	3

F	鳴門支部B	三好支部	板野西支部	勝数	勝者数	勝本数	順位
鳴門支部B		△3/1	△2/1	0	2	5	3
三好支部	6/3		8/4	2	7	14	1
板野西支部	4/2	△3/1		1	3	7	2

予選リーグ

G	刑務所支部A	阿波支部A	麻植支部B	勝数	勝者数	勝本数	順位
刑務所支部A		6/4	7/4	2	8	13	1
阿波支部A	0/0		8/4	1	4	8	2
麻植支部B	2/1	0/0		0	1	2	3

H	名西支部	阿波支部E	振武館B	勝数	勝者数	勝本数	順位
名西支部		8/4	3/2	1	6	11	2
阿波支部E	1/0		1/0	0	0	2	3
振武館B	4/2	9/4		2	6	13	1

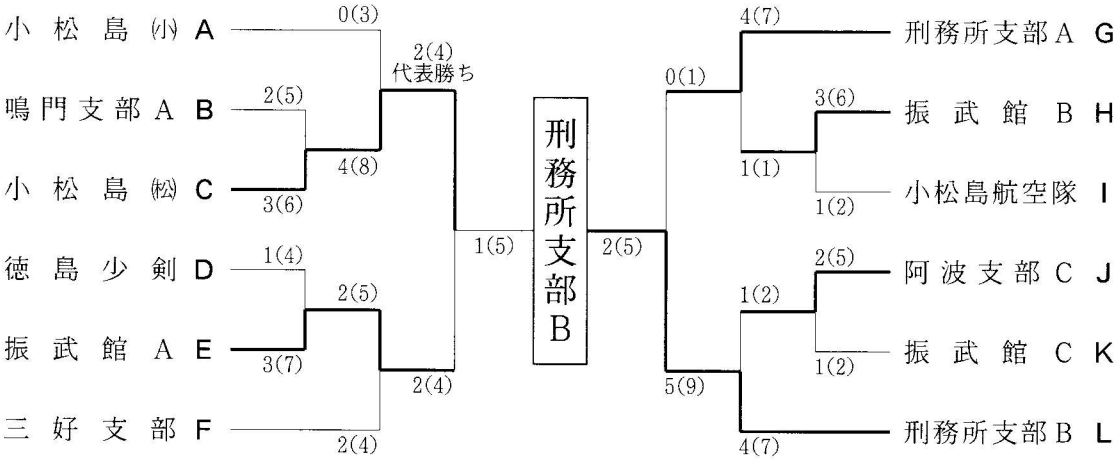
I	美馬支部B	小松島航空隊	右武館	勝数	勝者数	勝本数	順位
美馬支部B		0/0	2/1	0	1	2	3
小松島航空隊	8/5		4/2	2	7	12	1
右武館	6/4	3/2		1	6	9	2

J	麻植支部A	阿波支部C	上那賀竹友館B	勝数	勝者数	勝本数	順位
麻植支部A		1/1	3/2	0	3	4	2
阿波支部C	4/2		6/4	2	6	10	1
上那賀竹友館B	3/2	1/0		0	2	4	3

K	美馬支部A	小松島(島)	振武館C	勝数	勝者数	勝本数	順位
美馬支部A		3/1	1/1	0	2	4	3
小松島(島)	7/3		4/2	1	5	11	2
振武館C	6/4	7/3		2	7	13	1

L	海部支部A	阿南支部A	徳島錬心館	刑務所支部B	勝数	勝者数	勝本数	順位
海部支部A		6/3	6/4	1/0	2	7	13	2
阿南支部A	5/2		8/4	2/0	1	6	15	3
徳島錬心館	0/0	1/1		2/1	0	2	3	4
刑務所支部B	10/5	8/4	8/4		3	13	26	1

決勝トーナメント



準決勝戦

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点	代表
小松島(松)	原	切中	呉羽	西山	沢井	4	沢井
	㊦㊦			㊧㊧		2	㊧
振武館 A		一本㊐勝			㊧㊐	4	
	元木	松本	福多	上田	西谷	2	西谷

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
刑務所A	高橋	金野	鳴川	片山	中村	1
		㊧				0
刑務所B	㊐㊧	㊧㊐	一本㊧勝	㊧㊐	㊦㊧	9
	秋山	前田	北村	猪野	鈴木	5

決　勝　戦

優　勝　刑務所支部B

準優勝　小　松　島（松）

第3位　振　武　館　A

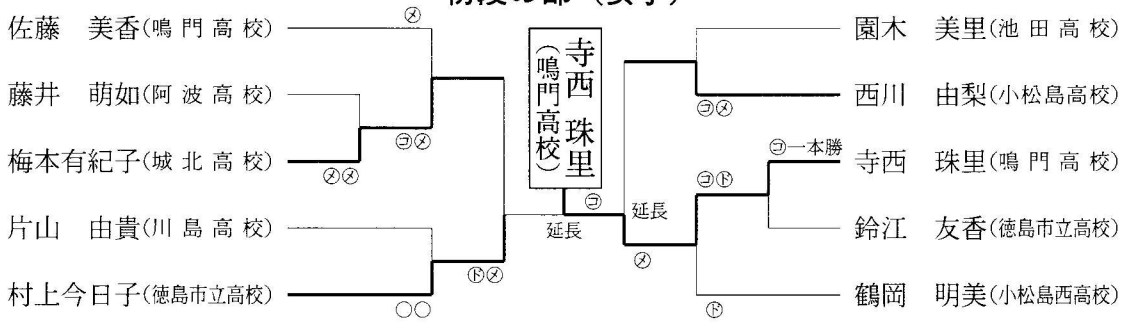
第3位　刑務所支部A

チーム名	先鋒	次鋒	中堅	副将	大将	得点
小松島(松)	原	切中	呉羽	西山	沢井	5
	㊧	㊧	㊐	㊐㊐		1
刑務所B	㊧㊐	㊐	㊦		一本㊐勝	5
	秋山	前田	北村	猪野	鈴木	2

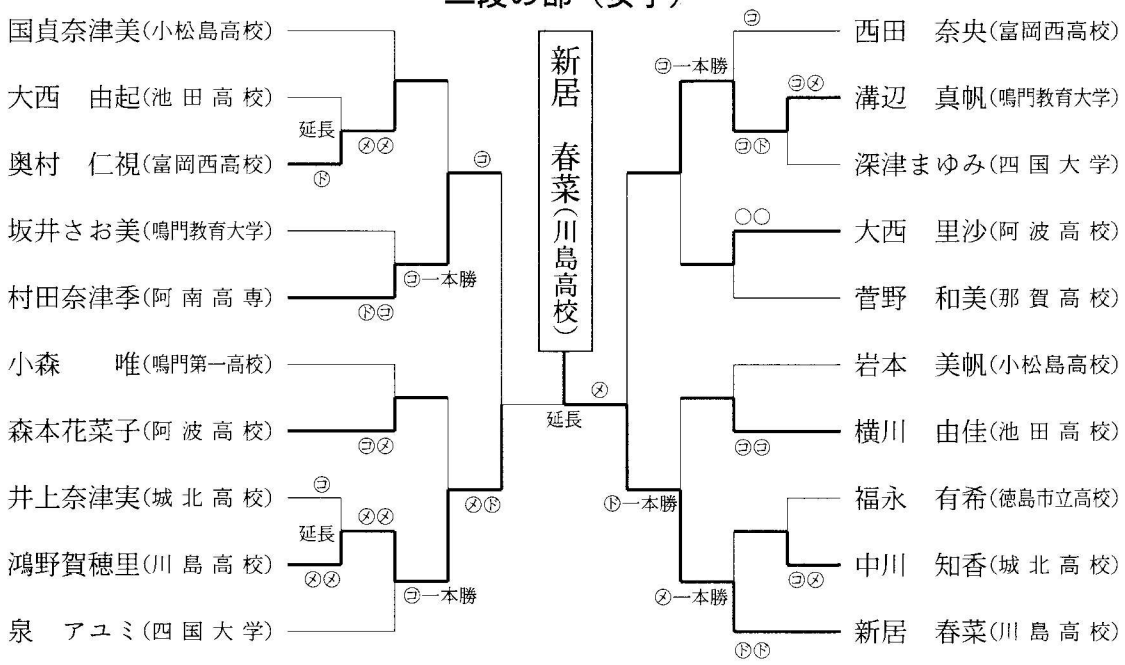
第30回　徳島県剣道段別選手権大会

日　時　平成18年11月5日(日) 午前9時30分
場　所　県立鳴門武道館

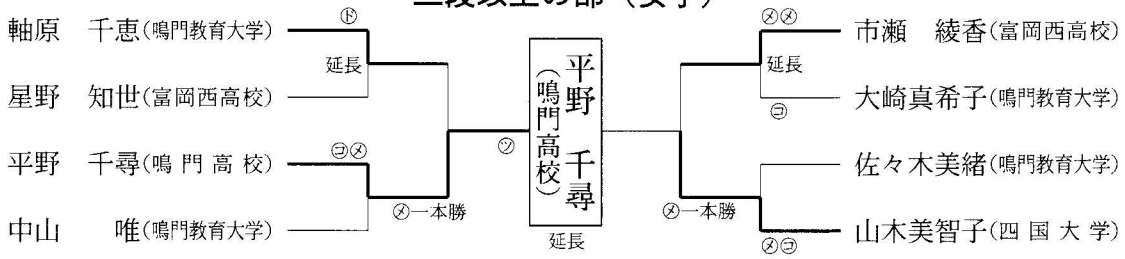
初段の部（女子）



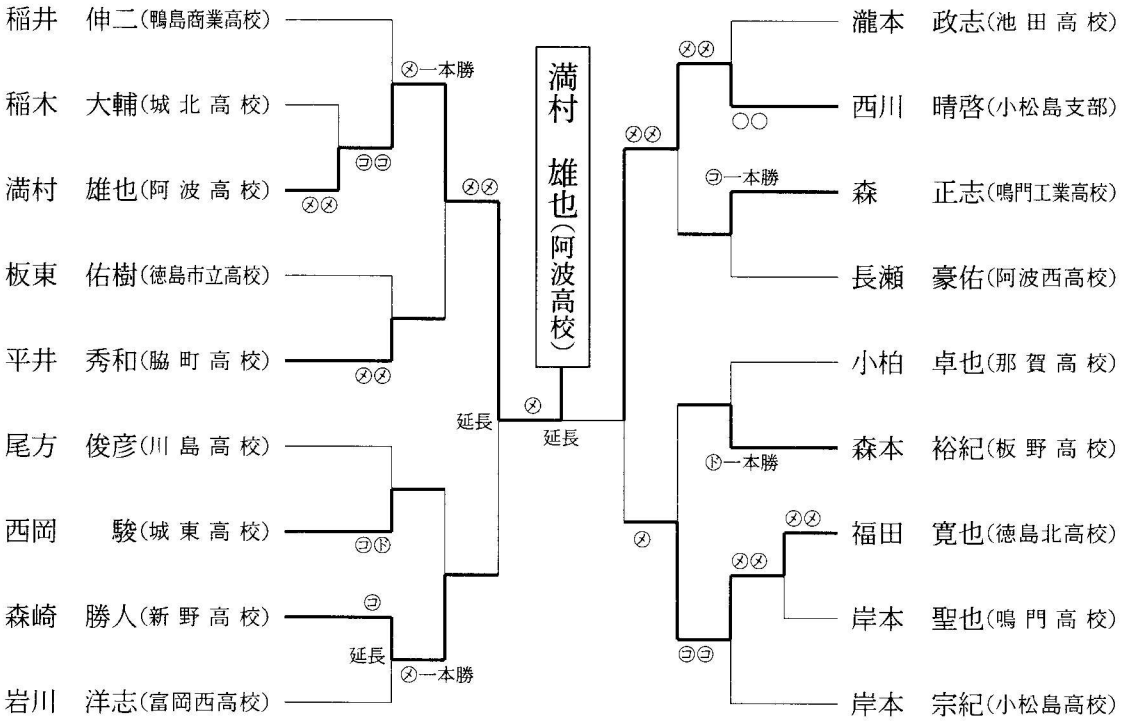
二段の部（女子）



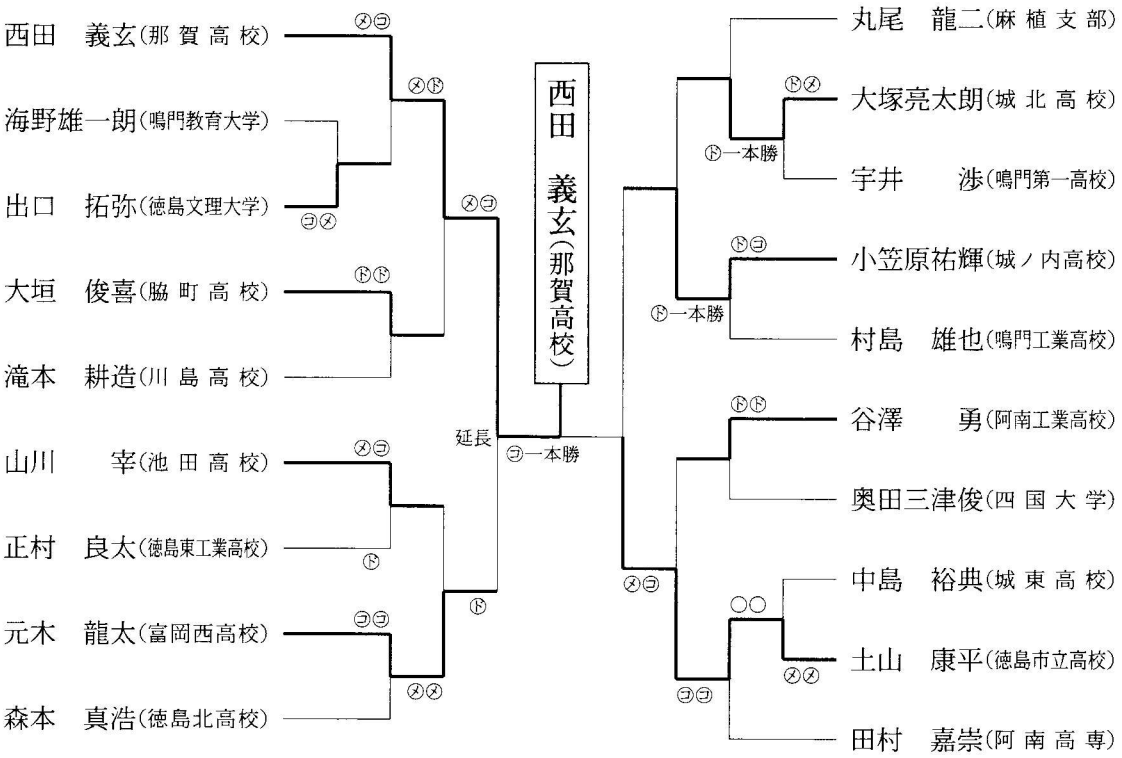
三段以上の部（女子）



初段の部（男子）

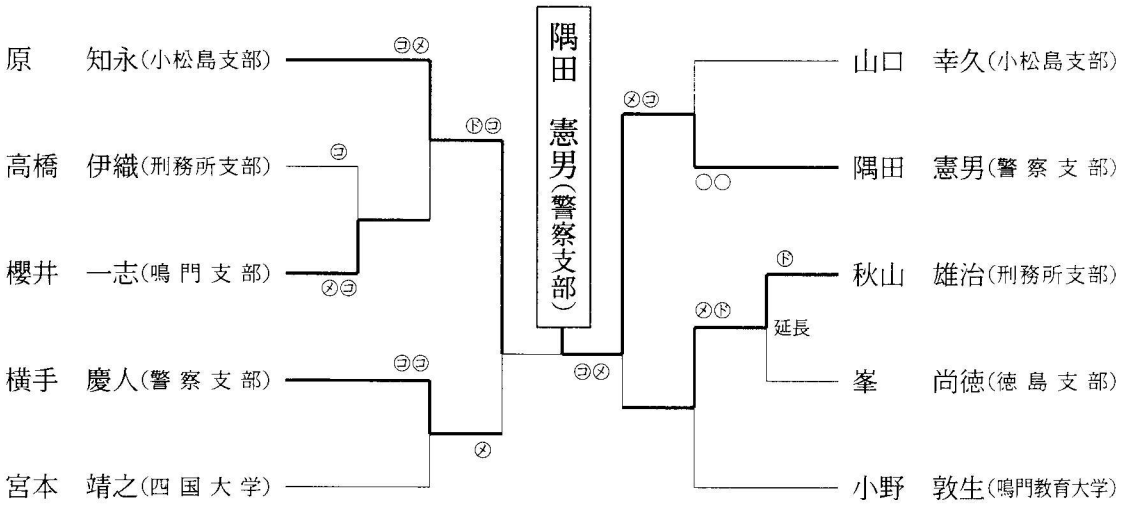


二段の部（男子）

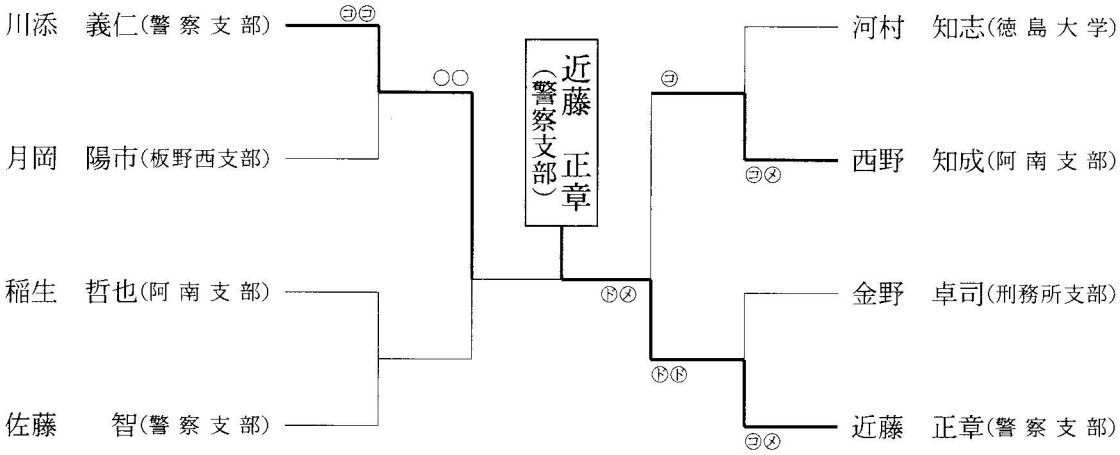

西田　義玄（那賀高校）
海野雄一朗（鳴門教育大学）
出口　拓弥（徳島文理大学）
大垣　俊喜（脇町高校）
滝本　耕造（川島高校）
山川　宰（池田高校）
正村　良太（徳島東工業高校）
元木　龍太（富岡西高校）
森本　真浩（徳島北高校）
㋝㋝
㋝㋝
㋝㋝
㋝㋝
㋝㋝
㋝㋝

三段の部（男子）

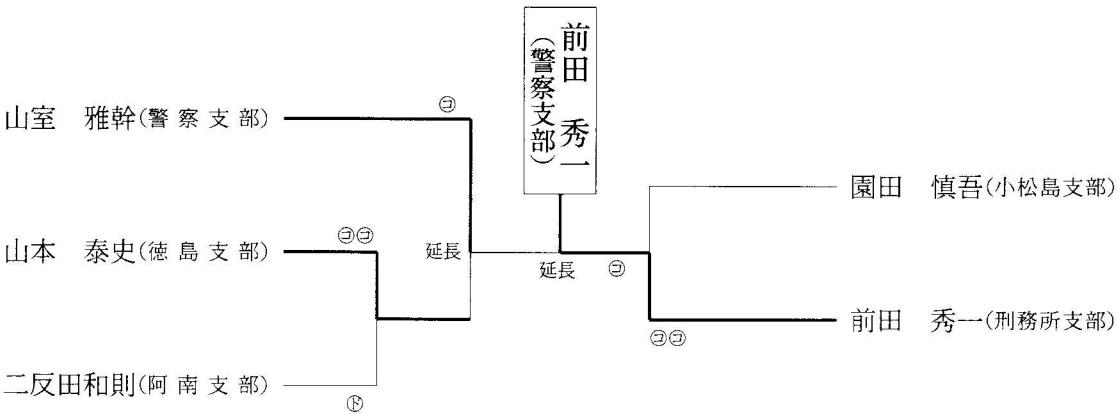
四段の部（男子）



五段の部（男子）



六段の部（男子）

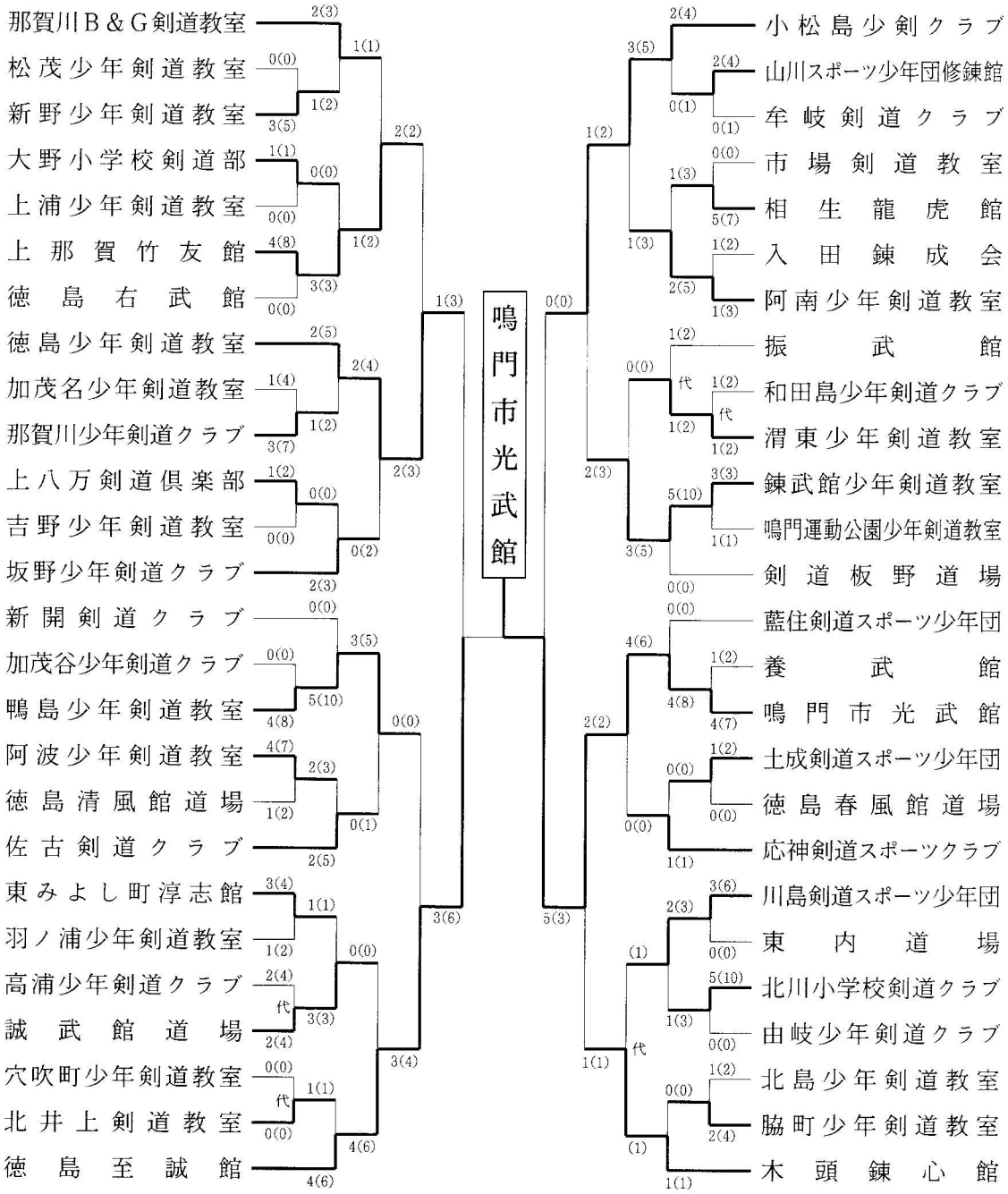


第17回　徳島県小・中学校剣道強化錬成大会

少年の部（52チーム）

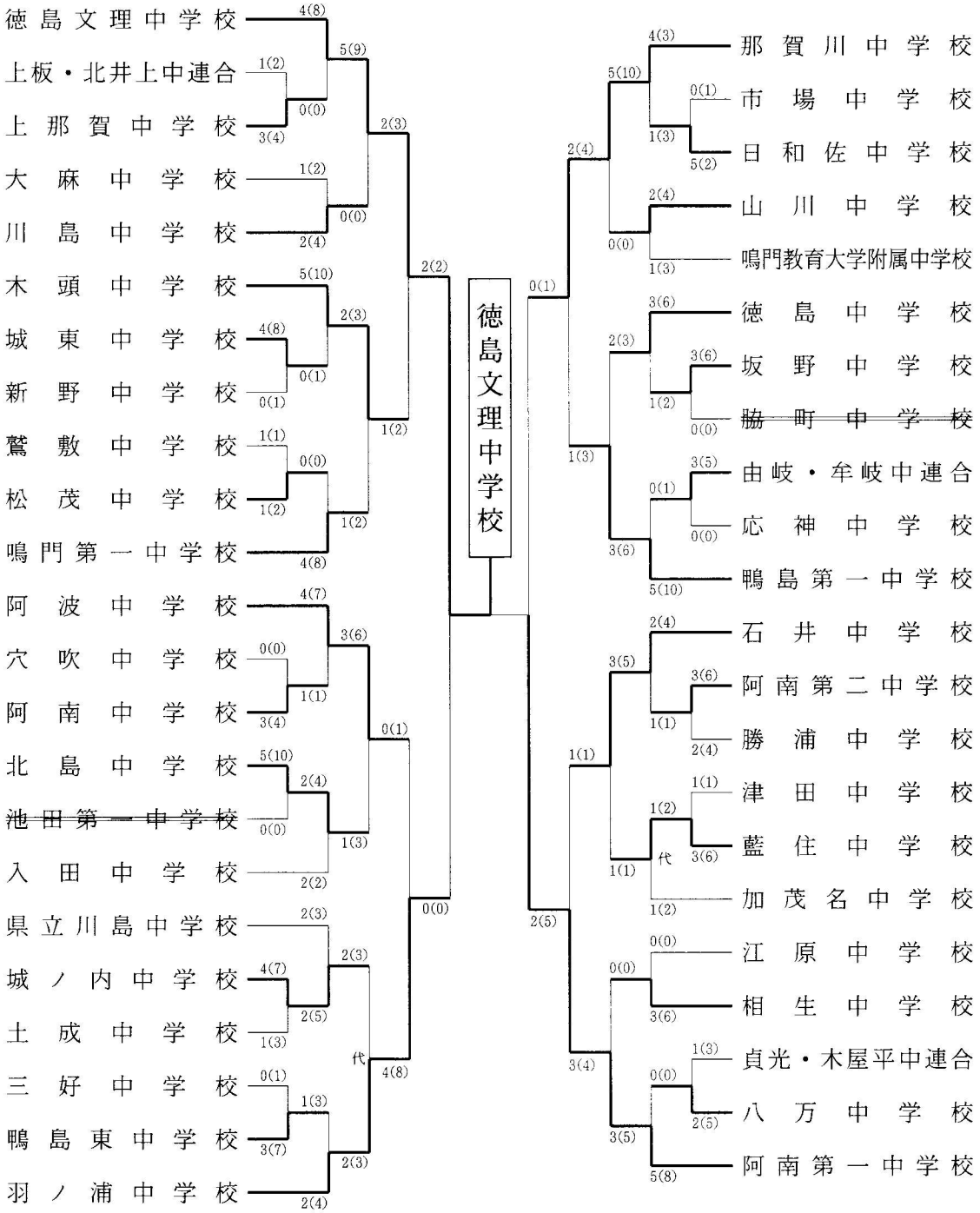
日　時　平成19年1月21日(日) 午前9時30分
場　所　鳴門県民体育館

優　勝　鳴門市光武館
準優勝　徳島至誠館
第3位　徳島少年剣道教室
第3位　錬武館



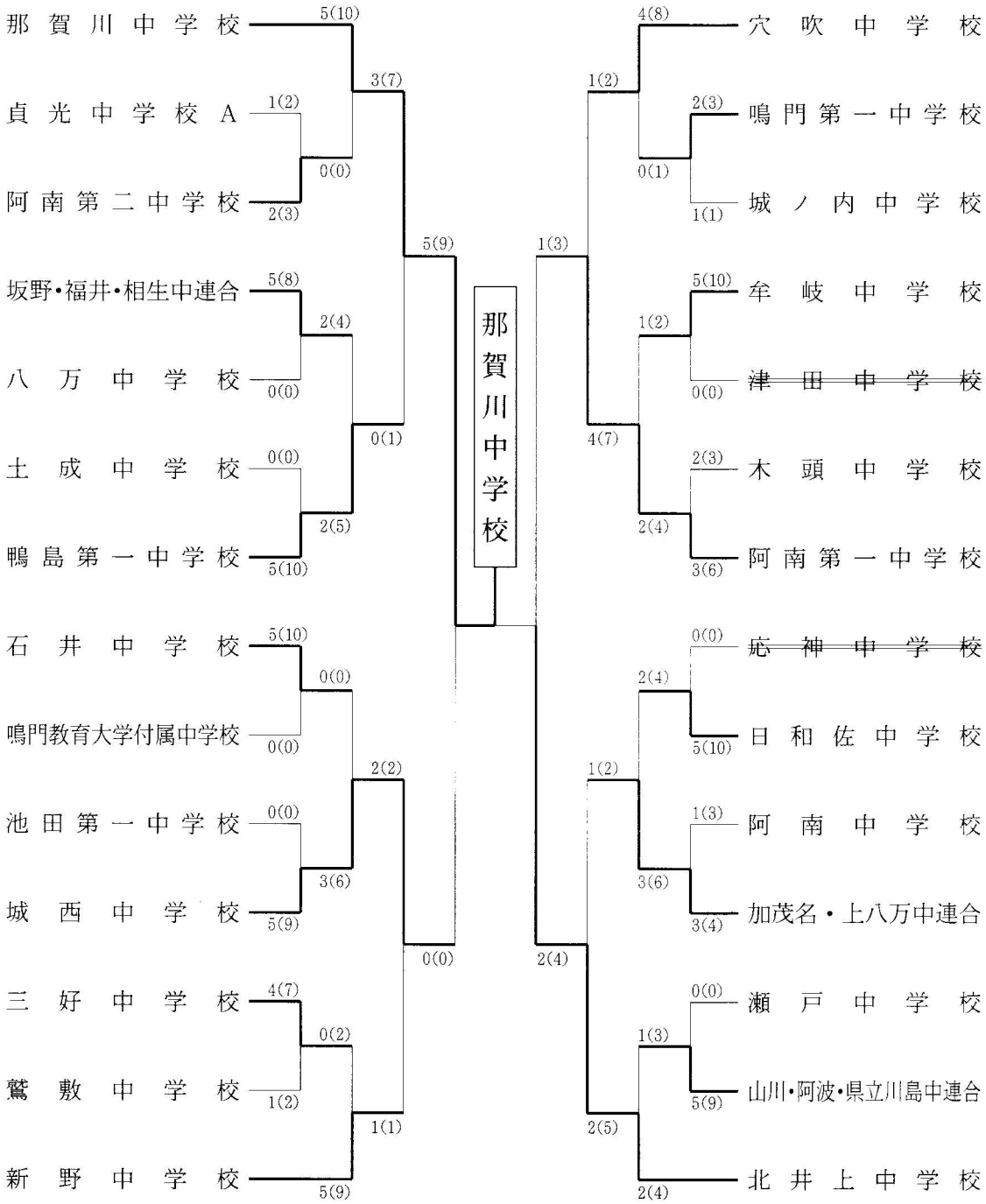
中学校男子（45チーム）

優　勝　徳島文理中学校
準優勝　阿南第一中学校
第3位　羽ノ浦中学校
第3位　那賀川中学校



中学校女子（28チーム）

優　勝　那賀川中学校
準優勝　北井上中学校
第3位　城西中学校
第3位　阿南第一中学校



準決勝戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島少年剣道教室	佐賀	西田	山中	山田	岩木	
		㊁㊁	㊋			
徳島至誠館	㊋㊁		㊋	一本勝㊃	㊋㊋	
	久保	玉田	湯浅	岩原	久保	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
錬武館少年剣道教室	岩佐	西野	松本	土井	野村	
	㊋㊁					
鳴門市光武館				㊋㊁	一本勝㊋	
	山本	平野	竹内	黒木	宇井	

準決勝戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島文理中学校	青木	篠原	田中	福田	松本	
		㊋一本勝			㊋一本勝	
羽ノ浦中学校						
	山西	生島	谷	瀬川	上田	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川中学校	谷口	井上	小濱	金久	上野	
				㊋		
阿南第一中学校	㊋㊋			㊁	㊃㊃	
	安部	住友	西岡	賀上	土井	

準決勝戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川中学校	栗野	市瀬	原	木村	岩原	
	㊁㊋	㊁一本勝	㊋㊃	㊋㊋	㊃㊁	
城西中学校						
	谷澤	安藤	福田	東内	谷脇	

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
阿南第一中学校	藤本	工藤	佐藤	小川	品川	
		○○			㊁	
北井上中学校	㊋			㊃㊁	㊃	
	井上		吉川	三島	井上	

決　勝　戦（少年の部）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
徳島至誠館	久保	玉田	湯浅	岩原	久保	
	㊐				㊍㊍	
鳴門市光武館	▲㊍	㊐㊐			㊍	
	山本	平野	竹内	黒木	宇井	

決　勝　戦（中学男子）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	代表戦
徳島文理中学校	青木	篠原	田中	福田	松本	松本
				㊍	㊍一本勝	㊦
阿南第一中学校		一本勝㊦		㊐		
	安部	住友	西岡	賀上	土井	土井

決　勝　戦（中学女子）

チーム名	先鋒	次員	中堅	副将	大将	
那賀川中学校	栗野	市瀬	原	木村	岩原	
	㊐	○○	㊦㊍			
北井上中学校	㊐			㊍㊍	一本勝㊍	
	井上		吉川	三島	井上	

徳島新聞に見る戦いの跡

3月6日

男子 鳴門一
女子 阿南一 V

四国中学強化練成剣道

剣道の四国中学校強化練成大会は4、5の両日、阿波中体育館で40校が参加して団体戦が行われ、男子は鳴門一、女子は阿南一の徳島県勢がアベック優勝した。

〈決勝と徳島県関係の成績〉

【男子】団体予選1位トーナメント1回戦 徳島文理4—1桜雲（香川）▽準決勝 野市（高知）1（代表勝ち）1徳島文理、鳴門一4—0阿波

▽決勝

鳴門一 2—0 野市

▽同2位トーナメント準決勝

山田（香川）3—1鴨島一、明徳義塾（高知）2—1連合A（徳島）▽決勝 明徳義塾4—1山田

▽同3位トーナメント1回戦

那賀川3—2日吉（愛媛）▽準決勝

那賀川4—1吉高松（香川）、土庄（香川）2—1連合B（徳島）

▽決勝

土庄 2—2 那賀川（代表勝ち）

▽同4位トーナメント準決勝

上八万1（本数勝ち）1小田（愛媛）

▽決勝

上八万 1—0 久万（愛媛）

【女子】団体予選1位トーナメント1回戦 阿南一2—0那賀川、山田（香川）1（本数勝ち）1坂野▽準決勝 阿南一1（代表勝ち）1北井上

▽決勝

阿南一 2—2 東予西（愛媛）（本数勝ち）

▽同2位トーナメント1回戦

城辺（愛媛）2—1連合B（徳島）▽準決勝 城辺2—0連合A（徳島）▽決勝 城辺1（本数勝ち）1土庄（香川）

▽同3位トーナメント準決勝

土佐町（高知）4—1金岐▽決勝

土佐町3—1小田（愛媛）

春にチャレンジ

2006年全国高校選抜大会

□1□

高校野球の選抜大会より一足早く、他27競技の全国高校選抜大会が19日から全国各地で順次開かれ、徳島県勢は20競技に出場する。県予選や四国地区予選などを勝ち抜き〝春の全国切符〟をつかんだ中から有望校、選手を紹介する。

剣道

徳島文理男子

予選突破へ 充実の戦力

2年連続2度目の出場。昨年の主力が全員残っている上、1年生も力をつけ、レギュラー争いはし烈。九州など県外遠征での戦績も良く、2月の四国新人大会は準優勝。玉田監督は「強さとうまさがかみ合えば楽し み」と期待を寄せる。

中堅西岡、副将片山、大将玉田は同中時代に全国大会団体で3位に入っており、経験豊富。特に、片山は攻め時、守り時を心得た戦いができ、信頼は厚い。先ぽう、次ほうは成長株の松本、川人、地力のある鎌田、松田が争う。

予選リーグは東海大四（北海道）、新潟商と同組になった。タイプは違うが力は接近している。16校による決勝トーナメントに進めるのは1校のみ。玉田主将は「恐れずに向かっていき、予選を突破して勢いに乗りたい」と意気込んでいる。

決勝トーナメント進出を目指し、けいこに励む徳島文理男子の選手たち＝同校柔剣道場

3月14日

剣道

◆阿南支部少年大会（2月26日・阿南市武道館）

【団体】予選リーグA組①至誠館②那賀川③羽ノ浦④新野▽予選リーグB組①B&G②阿南③錬武館④大野▽決勝①至誠館

【個人】小学1年①湯浅滉平（至誠館）②柳沢悠真（錬武館）③朝田智輝（至誠館）③武蔵晴香（同）▽2年①福田峻斗（至誠館）②玉田真子（同）③庄野智（B&G）③松本高史（錬武館）▽3年①朝田大樹（至誠館）②佐々木南波（同）③馬見範子（新野）③江川美郷（同）▽4年①上田雅大（至誠館）②玉田理沙子（同）③松本美紗樹（錬武館）③高木勝己（至誠館）▽5年①澤田くるみ（B&G）②中村亜梨沙（同）③山川翔大（阿南）③味間修一（至誠館）▽6年①若江倫生（桑野川）②藤田大地（阿南）③藤本あみ（錬武館）③藤坂拓道（B&G）

4月19日

ロシアから剣道修行

愛好家ら8人、鳴門入り

29日に2人が昇段試験挑戦

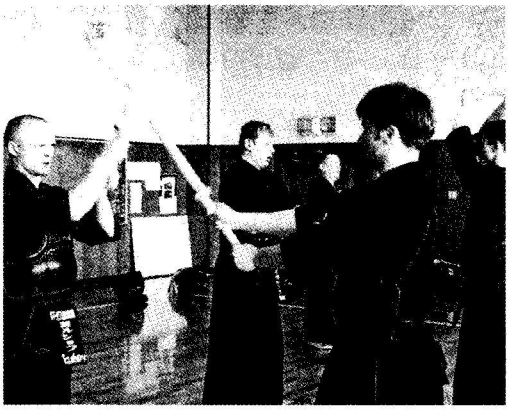
ロシア第二の都市サンクトペテルブルク市の剣道愛好家ら八人が十九日、剣道修行のため鳴門市に入った。鳴門教育大学の元留学生で徳島新聞カルチャーセンターのロシア語講師セルゲイ・ヴァルラーモフさん(三三)＝鳴門町高島、サンクトペテルブルク市出身＝が呼び掛け、実現した。三十日までの滞在中、同大などでけいこをするほか、二人が昇段試験にも挑戦する。

来日したのは、剣道二段のイーゴリ・カラシニコフさん(五三)を団長に、初段三人、一級二人、二級一人とマネージャー一人の計八人。このうち、剣道歴五年のユーリ・イェルショフさん(三九)と同三年のビクトール・トロフィモフさん(二九)＝とも＝は、二十九日に鳴門市総合運動公園で開かれる段位審査を受ける予定。

一行は早速、同大剣道部の木原資裕助教授らと練習を重ね、二十五日からは奈良市の天理大学体育学部などでも、けいこするという。

来日を勧めたヴァルラーモフさんは、テコンドーなどに精通した武道家で、一九九五年にはサバット（フランス式キックボクシング）世界選手権銅メダルの実績がある。二〇〇三年、同大に留学。武道と格闘技について比較研究した修士論文の調査で昨年、サンクトペテルブルク市に帰省した際、イーゴリさんらと会ったという。

昇段試験を受けるイェルショフさんらは「剣道を通じて人生を切り開いていくすべを学んだ。自信はないが、受かれば誇りに思う」と話している。



けいこを始めるサンクトペテルブルク市の剣道修行団一行＝鳴門教育大学剣道場

4月21日

中学男子 入田が制す

小学校団体は鴨島教室

剣道

◆第24回徳農城西剣友会少年錬成大会兼第10回勝浦杯争奪大会（3月26日・城西高体育館）

【小学校】団体①鴨島教室②徳島至誠館③加茂名教室③入田錬成会

▼個人1年①湯浅滉平（至誠館）②朝田智輝（同）③樋田和泉（蔵本）③坂野弘気（北島）▽2年①福田峻斗（至誠館）②上田真奈（鴨島）③住友海斗（至誠館）③田中皓己（同）▽3年①朝田大樹（至誠館）②谷本晃佑（佐古）③小出洋史（入田錬成）③川原眞実（小松島）▽4年①岩原将平（至誠館）②佐賀誠典（徳島少年）③田村隆晟（至誠館）③玉田理沙子（同）▽5年①湯浅絵里加（至誠館）②松原弘明（川島）③中川由美子（北井上）③岩木佑都（徳島少年）▽6年①秋田卓哉（徳島少年）②生田真大（同）③山西浩平（至誠館）③生島大空（同）

【中学校】団体男子①入田②石井③城ノ内③加茂名▽女子①混成（城ノ内、小松島、八万）②藍住東

▼個人男子①東川宏樹（徳島少年）②佐藤勝哉（城ノ内中）③白木恒二郎（石井中）③奥村誠人（津田中）▽女子①西山史織（小松島中）②生田圭（城ノ内中）③松原加奈（川島）③白石けい子（北島中）

4月30日

剣道初段の認定試験に合格したイェルショフさん㊨とトロフィモフさん＝鳴門総合運動公園武道場

ロシア剣道修業団の2人

初段審査に合格

鳴門

ロシア・サンクトペテルブルク市から来日中の剣道修業団一行八人のうちの二人が二十九日、鳴門総合運動公園武道場（撫養町立岩）で開かれた剣道の昇段審査を受け、二人とも合格した。

審査を受けたのは、剣道歴五年のユーリ・イェルショフさん(三九)と同三年のビクトール・トロフィモフさん(二九)。ともに一級で、今回初めて初段の認定審査に挑戦した。

審査は学科と立ち合い形式の実技、形（かた）からなり、県剣道連盟によると、二人とも非常に優秀な成績だったという。初段審査には県内の五十五人が挑んだ。

一行はこれで日本での剣道修行をすべて終了、二日に帰国する。団長のイーゴリ・カラシニコフさん(五三)は「剣道の母国・日本で、その精神や伝統、試合の雰囲気などに実際に触れることができた。今回の修行で得たものをロシアで広めていきたい」と振り返った。

5月1日

徳島、熊本に0—3で敗退

都道府県対抗剣道

剣道の第54回全日本都道府県対抗大会は29日、大阪市立中央体育館で男女混合団体（男子5人、女子2人）で競い、徳島は2回戦で強豪の熊本に0—3で敗れた。

優勝は東京で、4年ぶり8度目。準決勝で3連覇を目指す岡山を下し、決勝は大阪に3—2で競り勝った。

▽2回戦

熊本 3—0 徳島

浜田 — 伊藤

○諏訪元 コメ— 原

○大島 ドー 平野悦

原川 — 磯部

有働 — 佐野

○九谷 ドー 山本

宮上 メーツ 平野誠

先鋒（せんぽう）と3番目の五将は女子、次鋒、中堅、三将、副将、大将は男子。所属は伊藤（富岡東高講師）、原（明石商事石油）、平野悦（主婦）、磯部（徳島中央高教）、佐野（県警）、山本（日亜化学）、平野誠（県警）。

▽決勝

東京 3—2 大阪

4月30日

徳島剣友会V2

団体

県女子剣道

剣道の2006年度徳島県女子大会は7日、中央武道館であり、団体は徳島剣友会が2年連続2度目の優勝を果たした。個人二段以下の部は丸岡（小松島支部）が、三段以上の部は美馬（海部支部）が栄冠を獲得した。

【団体】1回戦 剣心会2—1城ノ内、川島剣友会2—0四国大学▽2回戦 徳島剣友会2—1剣心会、徳島支部1（代表勝ち）1徳島文理大B、徳島文理大A3—0石井、鳴門教育大2—1川島剣友会▽準決勝 徳島剣友会1（本数勝ち）1徳島支部、徳島文理大A3—0鳴門教育大

▽決勝

○美馬 コメ— 酒井

○北村 コー 村田

○平野 メー 住友

【個人】二段以下の部準決勝 丸岡（小松島支部）メー 酒井（徳島文理大）、菊池（徳島文理大）ドー 坂井（鳴門教育大）

▽決勝

団体決勝・徳島剣友会対徳島文理大A 巧みな竹刀さばきを見せた徳島剣友会の平野㊨＝中央武道館

丸岡 メー 菊池

▽三段以上の部準決勝 美馬（海部支部）ドー 住友（徳島文理大）、塚原（鳴門教育大）メー 浜野（徳島文理大）

▽決勝

美馬 メー 塚原

「最高のチーム」

○…2連覇した徳島剣友会は、小学校時代から剣道を続けている20—40代の主婦や教員らで昨年結成したばかり。

22歳の先鋒（せんぽう）・美馬（傘鼓少年自然の家高等職員）が奮戦、決勝ともに2本勝ちするなどチームを勢いづけ、35歳の中堅・北村（阿波西高教）、41歳の大将・平野（主婦）も冷静な竹刀さばきをみせた。

平野は「最高のチーム。国体出場の夢に向かって、もっとけいこに励みたい」と意欲をみせた。

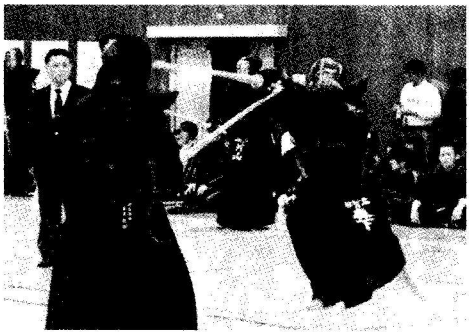
5月8日

剣道

徳島文理A（高校）と入田（中学）V

男子

女子 富岡東A（高校）、阿南（中学）



練習の成果を披露し、鋭い打ち込みをみせる剣士

◆第31回山家旗争奪県下大会（4月23日・那賀町B&G海洋センター体育館）

中学の部に33団体（男22、女11）、高校の部に35団体（男22、女13）が参加。中学は男子が入田、女子は阿南が優勝し、高校は男子が徳島文理A、女子は富岡東Aが栄冠を獲得した。

高校女子の河田紋さん（富岡東A）が11人を勝ち抜く奮闘をみせた。

【男子】中学校①入田（板東武志、河野卓也、木下裕貴、坂東剛、篠原寛弥）②徳島文理③上八万▽高校①徳島文理A（玉田赳大、松田昂也、西岡敬太、松本明真、片山将志）②富岡西A③川島A

【女子】中学校①阿南（打樋佳奈、福島果歩、吉岡真衣、竹内奈々恵、佐野未幸）②城西③鷲敷・相生▽高校①富岡東A（河田紋、元木綾子、田村菜津季、中野加菜、細川美幸）②富岡西A③富岡東B

【個人賞】10人以上勝ち抜き＝河田紋▽5人以上勝ち抜き＝村田奈津季、坂本鮎美、横手隆介、西田義広、濱航介、玉田赳大、平野千尋、岩雲大樹、峰本直季、松本明真

◆第21回県高齢者交流大会（4月23日・中央武道館）

【団体】順位①阿南支部A（先鋒＝北條憲治、中堅＝有賀秀敏、大将＝遠藤一美）②徳島支部A③阿南支部B③徳島支部B

【個人】特組①一村喜佐男▽A組①遠藤一美（阿南）②高田豊（板野）③南充美（徳島）③糸谷文雄（麻植）▽B組①川田武志（板野）②中山啓男（阿南）③有賀秀敏（阿南）③松村克隆（徳島）▽C組①北條憲治（阿南）②中村稔裕（徳島）③谷博（鳴門）③出葉成一（阿南）

【親善交流】①全日本・新潟高齢剣友会2勝②土佐生涯剣友会1勝1敗③徳島県高齢剣友会2敗

剣道

木頭錬心館V 小学校

練習の成果を披露する剣士たち

◆第44回那賀町防犯少年大会（13日・鷲敷B&G海洋センター体育館）

▼小学校団体①木頭錬心館（福井則夫、岡田脊希、武岡正悟、小川虎太郎、秋月翔太、久保達也、岩佐壱誠）②相生龍虎館③北川剣道クラブ④上那賀竹友館⑤鷲敷振武館▽同個人3・4年①河田佳輝（鷲敷振武館）②三馬（同）③田村（同）④助道（同）▽同5・6年①久保達也（木頭錬心館）②岡田（同）③小川（同）④西田（相生龍虎館）

▼中学校団体①相生（元木覚、長瀬一人、藤崎利樹、西村光司、岩佐貴仁、藤本稜、岩谷恒治）②木頭③鷲敷▽同個人1・2年①小藪京蔵（木頭）②小野（同）③岡田（同）▽同3年①藤本稜（相生）②神余（木頭）③仁木（鷲敷）

小学校5・6年の上位4人、中学校1・2年の上位3人は県防犯少年大会に出場する。

5月24日

第46回 県高校総体

6月6日

最終日

剣道

【男子】1回戦
城北4－0鳴工　東工5－0穴吹
城内3－2鳴一　阿波4－0海部
池田5－0松高　那賀3－2城東
鳴門3－2徳工　城南4－1阿西
▽2回戦
阿工3－0城北　市立5－0東工
徳北4－0城内　川島3－2池田
那賀4－0高専　脇町2－0鳴門
文理5－0城南
富西2（代表勝ち）2阿波
▽準々決勝
阿工3－1市立　富西3－1徳北
川島4－0那賀　文理5－0脇町
【女子】1回戦
鳴門4－0松西　池田2－1徳北
城北3－1松高　阿波2－1市立
辻3－1海部
▽準々決勝
富東4－0鳴門　城北3－0池田
川島4－0阿波　富西5－0辻

剣道

【男子】個人準々決勝　松田（文理）メメ－　桜木雄（阿工）、玉田（文理）メメ－　神元（阿工）、片山（文理）メ－　西田（那賀）、松本（阿工）メメ－　松本（文理）
【女子】個人準々決勝　隅田（川島）メメ－　永浦（富西）、坂本（富西）メ－　横山（富東）、細川幸（富東）メ－　元木（富東）、平野（鳴門）メ－　細川波（富東）

川島4年ぶり頂点

女子は富岡東が15年連続

剣道

【男子】団体準決勝
阿工2－1富西　川島3－2文理
▽3位決定戦　文理3－0富西
▽決勝　川島2－2阿工（本数勝ち）
○鈴木コメ－桜木
岩霊メ－メ福川
○峰本ド－神元
林－メ松本○
森本メ－メ美馬○
▽個人決勝リーグ①片山将志（文理）3勝②玉田（文理）2勝1敗③松本（阿工）1勝2敗④松田（文理）3敗
【女子】団体準決勝
富東4－1城北　富西2－1川島
▽3位決定戦　城北2－1川島
▽決勝　富東3－0富西
○横山メ－山崎
○河田メコ－星野
中野－池田
○河井メ－長地
細川－坂本
▽個人決勝リーグ①細川美幸（富東）3勝②平野（鳴門）2勝1敗③坂本（富西）1勝2敗④隅田（川島）3敗

剣道男子団体決勝・阿南工対川島　中堅戦で引きドウを決める川島の峰本㊨＝城西高体育館

富岡東・河田（女子団体決勝の次ほう戦で2本勝ち）「タイミングよく打つことができた。これまで負けていた相手に勝ててうれしい」

期待に応えた島2人の2年生

川島の大将・森本がメンを決めた瞬間、チームメートの表情が緩んだ。大将戦での勝利はならなかったが、この1本が勝ち本数で阿南工を上回るものとなり、男子24校の頂点に立った。

森本は「1本取れば勝利が決まる有利な状況だったので、焦らないようにした。1本取ることに集中した」と、笑顔で一打を振り返った。

しかし、この日の勝利の立役者は2年生の2人だろう。先鋒（せんぽう）の鈴木は、相手の動きを見逃さず、すきを突いてコテ、メンの2本勝ち。「理想的な試合運びだった」と満面に笑み。中堅の峰本も「タイミングよく仕掛けられた」と見事な引きドウで、期待に応えた。

チームに飛び抜けた選手はいないが、年間30回以上の遠征を重ねながらレベルアップを図ってきた。試合後のミーティングで、長井監督の「全国もみんなで力を合わせて戦おう」との言葉に、うなずいた選手たち。徳島文理、阿南工の2強を連破した勢いを、全国舞台にも持ち込むつもりだ。（斎藤）

北井上初の栄冠

男子は徳島文理2年ぶり

県中学剣道

剣道の2006年度徳島県中学校選手権大会は10日、鳴門武道館に男子53校、女子33校が出場して団体戦を行い、男子は徳島文理が2年ぶり2度目の頂点に立ち、女子は北井上が初優勝した。

【男子】1回戦 大麻2―1八万、石井2（本数勝ち）2入田、城西4―1勝浦、松茂3―0山城、川島2―1由岐、徳島2―0鷲住、土成2―1美馬、川内2―0三好、阿波3―0牟岐、小松島4―1上那賀、付属3―1江原、穴吹2（本数勝ち）2貞光、相生3―0日和佐、阿南2―1木頭、北島4―1山川、城ノ内1（代表勝ち）1鷲敷、上八万3―0鴨島東、坂野5―0国府、加茂名3―0県立川島、鷲住東4―1脇町、池田1―4―0阿南二▽2回戦 徳島文理5―0大麻、石井1（本数勝ち）1城西、松茂1（代表勝ち）1川島、徳島4―0高浦、阿南1―4―0土成、川内2―0市場、阿波4―1小松島、鴨島1―4―0付属、那賀川5―0穴吹、相生2―1阿南、羽ノ浦3―0北島、城ノ内4―1津田、上八万3―1城東、坂野5―0応神、加茂名2―1鷲住東、鳴門1―4―1池田一▽3回戦 徳島文理4―0石井、徳島2―1松茂、阿南1―3―0川内、鴨島1―3―1阿波、那賀川2―1相生、羽ノ浦2―1城ノ内、坂野2―1上八万、鳴門1―4―1加茂名▽準々決勝 徳島文理4―0徳島、鴨島1―2―0阿南一、那賀川2―0羽ノ浦、鳴門1―2―1坂野▽準決勝 徳島文理4―0鴨島一、鳴門1―1（代表勝ち）1那賀川▽決勝

徳島文理 2―1 鳴門一
○松本メ―元木
原ドーコメ福居○
湯浅反―メ平野
岡田―小倉
○鈴木メメ―川辺

【女子】1回戦 木頭0（代表勝ち）0新野▽2回戦 阿南1―5―0木頭、石井2―1城ノ内、池田1―2―1鷲住東、八万2―0鷲敷、三好3―0津田、貞光2―0上八万、山川2―1美馬、牟岐4―0土成、北井上3―0阿波、付属3―2日和佐、城西3―1穴吹、鴨島1―2―0川内、加茂名3―2瀬戸、阿南3―1小松島、坂野3―1応神、那賀川4―0相生▽3回戦 阿南1―5―0石井、池田1―4―1八万、三好3―0貞光、牟岐5―0山川、北井上5―0付属、城西2（本数勝ち）2鴨島一、阿南2（本数勝ち）2加茂名、那賀川4―0坂野▽準々決勝 阿南1―4―1池田一、牟岐3―0三好、北井上2―0城西、那賀川3―0阿南▽準決勝 阿南一3―0牟岐、北井上2―0那賀川▽決勝

北井上 2―1 阿南一
森本ドドー木○
井上メ―メ湯浅
美馬―湊
○菊岡メ―品川
○加重メ―近藤

攻めの気持ち持続

○…男子の優勝を決めたのは大将戦だった。徳島文理の鈴木は、相手が下がった瞬間に飛び込んで2本目の鮮やかなメン。「緊張したけど、攻めの気持ちは忘れなかった」と胸を張った。

3年前に全中3位の実績をもつ同校だけに、今年8月、徳島県で開催される全中では「3年前以上の成績を」との思いが強い。原主将＝写真＝は「まずは県総体で上位2校に入り、出場権を得る」と足元を見詰めつつも「地元での全中で大暴れしたい」と意気込んでいる。

練習が支えた勝利

○…北井上が接戦の女子決勝を制した。昨秋の新人大会決勝で敗れた阿南一を下しての価値ある勝利で、7月の県総体連覇へ弾みをつけた。

1―1で迎えた大将戦。コテ、メンの連続技で1本勝ちした主将の加重は「とっさに体が反応したのは毎日の練習のおかげ」と手応え十分だ。

5人のうち3人が昨年の全国大会を経験。緊張から力が出せず予選敗退した悔しさをばねに、足腰強化や面打ちなどの基本を鍛え直してきた。

加重は「必ず県代表になり全国1勝を果たす」。頑張り屋たちがリベンジの夏を迎える。

女子決勝・北井上対阿南一　大将戦で北井上の加重㊨がメンを決める＝鳴門武道館

6月11日

県外大会で大活躍

徳島至誠館 頂点に

小学校 低学年の部

剣道

◆第4回東かがわ市武道大会・第65回白鳥神社奉納演武大会（5月5日・東かがわ市白鳥神社境内）＝徳島県関係の記録。

徳島至誠館が小学校低学年の部で参加41チームの頂点に立った。また同クラスで鳴門市光武館、高学年の部（参加45チーム）では徳島至誠館がいずれも3位と健闘した。

【小学校低学年の部】▽準々決勝　徳島至誠館3―0亀阜剣道スポ少（香川）、鳴門市光武館3―1本町剣道スポ少（香川）▽準決勝　徳島至誠館2―0屋島剣道スポ少A（香川）、光龍館（香川）3―0鳴門市光武館▽決勝　徳島至誠館（先鋒＝福田峻斗、次鋒＝田中皓己、中堅＝佐々木南波、副将＝玉田真子、大将＝朝田大樹）3―1光龍館

【小学校高学年の部】▽準々決勝　徳島至誠館3―1林剣道スポ少（香川）▽準決勝　光龍館2（代表勝ち）2徳島至誠館

小学校低学年の部で参加41チームの頂点に立った徳島至誠館

6月7日

剣道

◆第2回マルナカ少年大会（5月4日・高松市民文化センター）＝徳島県関係の記録。

徳島至誠館が小学校低学年の部（参加57チーム）で3位に入賞した。

【小学校低学年の部】▽準々決勝　徳島至誠館3―1神戸枝吉己勝館（兵庫）▽準決勝　養徳館道場（岡山）3―1徳島至誠館

6月14日

2006年度四国高校選手権前期大会第３日は18日、四国４県で27競技が行われ、剣道男子団体で徳島文理が初優勝した。ライフル射撃の男子エア、女子ビーム両団体は、小松島が２年連続でアベック優勝を達成。登山は男子池田、女子城ノ内が頂点に立った。池田は４年ぶり、城ノ内は初優勝。ウエイトリフティング53*。級の浜岡晃弘（鳴門工）は四国高校新記録となるトータル188*。を挙げたが、体重差で惜しくも２位となった。テニスは男子の一宮拓（城南）が単複を制し、前日の団体とあわせて３冠を獲得した。最終日の19日は陸上とサッカーの２競技が香川、高知両県で行われる。（記録は決勝、１位と徳島県関係）

徳島文理が初優勝

男子団体

四国高校選手権 前期

第３日

剣道

女子は富岡東が2位

徳島文理が代表戦までもつれ込んだ男子決勝を、大接戦の末に制した。苦しかった練習、優勝候補に挙がりながら準決勝で敗退した県総体の悔しさを思い返すと、うれしくて涙が止まらない。試合後、選手と玉田監督は会場の片隅で肩を寄せ合って喜びを分かち合った。

相手の帝京第五は昨春の全国選抜大会チャンピオン。１―１で迎えた代表戦、優勝メンバーの木谷からメンを奪って勝利を決めたのは監督のおい、玉田主将だった。「最後は、今しかないという直感だった。みんなの励ましが背中を押してくれた」と満面に笑みを浮かべた。

副将の片山も活躍した。予選リーグ、準決勝と要所で一本を決め、チームの危機を何度も救った。決勝は引き分け「大将に迷惑をかけた」と振り返ったものの、同校念願の四国初制覇に「玉田についてきてよかった。悔いはない」とすっきりした表情。

「夢をかなえてくれてありがとう！」。玉田監督は、目を赤くしながら選手たちの前で何度も繰り返した。（中野）

【男子】団体リーグ戦A組③高岡西1勝2敗▽B組②川島1勝1分1敗▽C組②阿南1勝1敗▽D組①徳島文理3勝▽決勝トーナメント1回戦 徳島文理3―1明徳義塾▽決勝 徳島文理 1―1 帝京五（代表勝ち）

鎌田	酒井
松田	尾崎
高市	桑原
片山	松本
玉田	木谷

（代表戦）

（玉田 メー 木谷）

徳島文理は初優勝。

【女子】団体リーグ戦A組①富岡東2勝1分▽B組④川島1勝1分2敗▽C組②高岡西2勝1敗▽D組④城北3敗▽決勝トーナメント1回戦 高岡東1―0帝京五▽決勝 丹原 2―1 富岡東（宮川 メー 横山 谷口 ―コテ 河田）（百見田 ドー 中野 玉井 ― 河井 佐伯 ― 細川）

丹原は2年連続2度目の優勝。

大激戦制し満面の笑み

徳島文理

男子団体決勝・徳島文理対帝京五　代表戦で相手を攻める徳島文理の大将・玉田㊨＝香川県琴平高体育館

6月19日

剣道

平野・鳴門2位 女子

【男子】個人1回戦 山神（高松西）メー 松本（徳島文理）、松本（阿南工）メー 高市（帝京五）、清水（松山城陵）コー 桜木（阿南工）、片山（徳島文理）メー 富田（土佐）、山下（高知）ドー 神元（阿南工）、木下（新田）メー 玉田（徳島文理）、西田（那賀）メー 佐伯（丹原）、松田（徳島文理）メー 喜多（尽誠学園）▽2回戦 近藤（尽誠学園）コー 松本、片山 メー 伊東（丹原）、西田ドー 上岡（明徳義塾）、西村（明徳義塾）コー 松田▽準々決勝 石井（明徳義塾）メー 片山、西村（明徳義塾）コー 西田▽決勝 西村コドー 山神

【女子】個人1回戦 内田（済美）コー 細川波（富岡東）、隅田（川島）メー 中島（高知）、立仙（高知）コー 永浦（富岡西）、細川幸（富岡東）メー 紙本（高松北）、横山（富岡東）メー 木村（高松桜井）、平野（鳴門）メー 馬渕（明徳義塾）、山口（高知学芸）メー 元木（富岡東）、坂本（富岡西）コー 宮川（丹原）▽2回戦 隅田コー 白井（帝京五）、佐伯（丹原）メー 細川幸、門屋（済美）メー 横山、平野メー 鴨宮（帝京五）、藤井（丸亀）メー 坂本▽準々決勝 内田（済美）メドー 隅田、平野コー 門屋▽準決勝 平野メー 藤井▽決勝 内田 ドー 平野

剣道

7月5日

◆川崎少年大会（4日・三好市川崎小体育館）

【小学生】2年①岡本航輝（淳志館）②山下英寿（佐馬地）③向井舜（同）▽3年①福洸志郎（淳志館）②新宅美佳（川崎）③山口徳士（同）③西原恋（同）▽4年①垂水明日真（淳志館）②峰本勝也（佐馬地）③川人俊二（川崎）③重田舞（淳志館）▽5年①西川航平（川崎）②住友皓紀（淳志館）③大西直樹（同）③前川真里奈（川崎）▽6年①井添竜志（淳志館）②田岡佐智世（剣正童）③西川知見（川崎）③前川大和（同）▽防犯代表者①井添竜志②田岡佐智世③西川航平③住友皓紀

【中学生】男子1・2年①大久保理樹（三好）②重田正輝（同）③黒川光平（池田第一）▽3年①上坂忠（池田一）②石川喜基（同）③安宅誠季②中川笑美③大久保理樹（池田一）②喜多あゆみ（同）③山邨恵美（同）▽団体①三好②池田第一▽防犯代表者①大西佐季②中川笑美③大久保理樹

熱戦が繰り広げられた川崎少年剣道大会

◆第6回堀金旗争奪少年大会（11日・小松島市立体育館）

【団体】①徳島至誠館（高木、上田、岩原、玉田、湯浅）②鳴門市光武館③北井上教室③木頭錬心館

【個人】小学校1・2年①丸岡由理奈（坂野）②朝田智輝（至誠館）③柳沢悠真（錬武館）③長谷川瑞実（小松島）▽3年①玉田真子（至誠館）②福田崚斗（同）③上田真奈（鴨島）③田中皓己（至誠館）▽4年①馬見範子（新野）②住友健人（那賀川B&G）③江川美郷（新野）③藤坂直道（那賀川B&G）▽5年生①山本大介（光武館）②井内達也（小松島）③工藤貴仁（徳島）③杉本純（清風館）▽6年①安部晋太朗（大野）②ムニオス尚見（徳島）③寺井惇（蔵本）③西岡昌哉（大野）

【敢闘賞】小学校1・2年　宮城佑季（和田島）白木利幸（鴨島）福崎ひかり（坂野）福良海都（同）▽3年　竹原桃香（那賀川）多田加奈子（鴨島）南谷飛鳥（小松島）山岡大雅（蔵本）▽4年　瀬川雄也（吉野）川原真美（小松島）吉屋海歩（同）樋富沙弥（阿南）▽5年　福田篤己（至誠館）樋田小百合（蔵本）田村隆晟（至誠館）橋本隆宏（吉野）▽6年　浅川伊織（立江）斎藤春佳（北井上）藤井萌（徳島）東川里穂子（同）

小中学生43人が参加した第19回阿波署管内防犯剣道錬成会

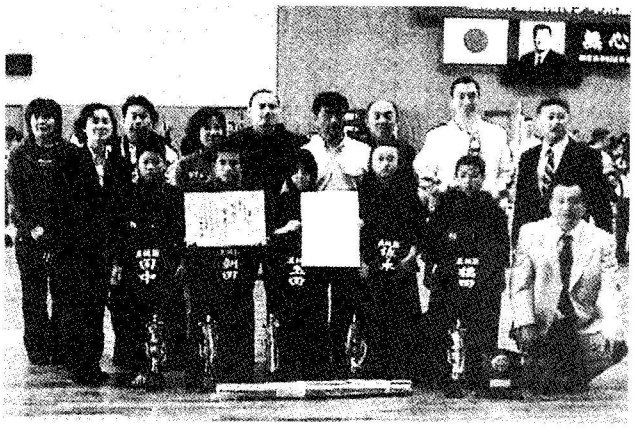
小中学生入賞者　県下防犯大会へ

◆第19回阿波署管内防犯錬成会（17日・市場武道館）

阿波市内の小学生21人と中学生22人が参加し竹刀さばきや技を競った。小中学生とも入賞者が7月29日に開かれる県下防犯少年剣道大会の阿波市代表として出場する。

【小学生の部】①工藤康祐（阿波剣道）②松村俊孝（吉野剣道）③山本航太郎（土成剣道）④寺井大地（阿波剣道）

【中学生の部】①稲井奨太（土成）②尾花佳彦（阿波）③工藤洋平（阿波）



三浦旗全国招待少年剣道大会で３位入賞を果たした徳島至誠館

剣道

◆第26回三浦旗全国招待少年大会（5月14日・新居浜市民体育館）＝徳島県関係の記録。

西日本の小中学生307チームが参加。県勢は、小学校低学年の部で徳島至誠館、中学生の部で徳島文理中が3位入賞を果たした。

【小学校低学年の部】

▽準々決勝　徳島至誠館（先鋒＝福田峻斗、次鋒＝田中皓己、中堅＝佐々木南波、副将＝玉田真子、大将＝朝田大樹）3―1久米剣道会（愛媛）

▽準決勝　養徳館道場（岡山）3―0徳島至誠館

【中学生の部】

▽準々決勝　徳島文理中（先鋒＝原悠介、次鋒＝松本好史、中堅＝湯浅翔平、副将＝岡田紘平、大将＝鈴木智也）5―0壬生川剣道会（愛媛）

▽準決勝　太秦少年剣道部（京都）2―1徳島文理中

◆第16回北島ライオンズクラブ少年大会（5月21日・北島北公園総合体育館）

【団体】小学生①藍住剣道スポ少②誠武館▽中学男子①川内②藍住▽同女子①応神②藍住東

【個人】小学3年以下①志磨雄大（吉野）②玉川貴文（藍住）③玉川博文（同）③深見桃子（同）▽4年①永濱大智（応神）②高橋遼（吉野）③春藤里帆（松茂）③瀬川雄也（吉野）▽5年①白石鎌丈（誠武館）②金川京平（松茂）③三好湧也（藍住）③坂野晃太（北島）▽6年①田中理称（誠武館）②山本航太郎（土成）③中上凌汰（藍住）③阿部隼人（誠武館）▽中学男子①松田直樹（藍住）②矢野優貴（松茂）③中野高志（北島）③入江健太（藍住）▽同女子①大田紗耶加（応神）②山本瑞穂（土成）③白石けい子（北島）③岡本真実子（土成）

◆第13回板野防犯少年大会（3日・藍住町武道館）

【小学生】①前田啓吾（藍住西）②三好湧也（藍住南）③市川燿（藍住北）④松田歩美（藍住南）

【中学生】①東條慎仁（藍住）②小西澪（板野）③岡田紘樹（藍住東）　小学生の部上位4人と中学生の部上位3人は、県大会に出場する。

◆2006年度海部郡防犯少年錬成美波大会（5月21日・美波町B&G海洋センター体育館）

【団体】①日和佐スポ少②由岐ク③牟岐ク

【個人】小学3・4年①近藤亜寿香（日和佐スポ少）②篠原聡（同）③小畠汰一（由岐ク）▽同5年①篠原遙（日和佐スポ少）②勝浦さとみ（同）③北川峻基（海部川教室）③近藤恭平（日和佐スポ少）▽同6年①藤井理央（牟岐ク）②山本真生（由岐ク）③小畠祐司（同）③原郷瑞希（同）

6月21日

鳴門市光武館3位

小学校高学年の部

剣道

◆第38回植田平太郎範士争奪少年大会（6月18日・高松市総合体育館）＝徳島県関係の記録。

四国4県をはじめ近畿、中国から小中学校合わせて238チームが参加。小学校高学年の部では、鳴門市光武館が準決勝へ進出。惜しくも林剣道スポーツ少年団（香川）に2―1で敗れたものの、参加89チーム中3位に入る健闘を見せた。

【小学校高学年】

▽2回戦 鳴門市光武館5―0長尾少年剣友会（香川）▽3回戦 鳴門市光武館2―0自習館（香川）▽4回戦 鳴門市光武館2―1和歌山武道館▽準々決勝 鳴門市光武館1―0新居浜剣道連盟（愛媛）▽準決勝 林剣道スポ少（香川）2―1鳴門市光武館（先鋒＝福居周平、次鋒＝山本大介、中堅＝平野智将、副将＝黒木景太、大将＝宇井友隆、補＝竹内直生）

◆美馬西部防犯少年剣道大会（6月17日・美馬市重清東小体育館）

【小学4年生以下の部】①井関良介（芝坂）②久保田涼介（重清北）③藤田維新（重清東）③広岡里菜（郡里）

【小学5年生以上の部】①藤田稔貴（重清西）②内藤洋介（重清東）③堀勇貴（重清西）③城尾佳孝（重清東）

小学校高学年の部で3位入賞を果たした鳴門市光武館

ムニオスさんV

小学生の部

中学生の部は松本さん

気迫を前面に竹刀を打ち込む少年剣士

◆第9回徳島東防犯少年剣道大会（6月24日、徳島東署武道場）

徳島東署管内の小学生12人、中学生22人が参加。小、中学生の部に分かれてトーナメント形式で個人戦を行い、小学生の部はムニオス尚見さん（徳島少年剣道教室）、中学生の部は松本好史さん（徳島文理中）が優勝した。

小学生の部上位4人と中学生の部上位3人は第19回県防犯少年柔道剣道大会（7月29日、鳴門武道館）に出場する。

【小学生】①ムニオス尚見（徳島少年剣道教室）②岩原祥馬（養武館）③東川理穂子（徳島少年剣道教室）③大塚那央（上八万剣道倶楽部）

【中学生】①松本好史（徳島文理中）②青木大将（徳島文理中）③村島智也（徳島中）

7月12日

剣道

◆第3回鳴門防犯少年大会（6月17日・鳴門市光武館道場）

【小学生】①山本大介（光武館）②福居周平（同）③黒木景太（同）③宇井友隆（同）

【中学生】①福居壮太（鳴門一）②高瀬悟志（同）③宮本雄太朗（城ノ内）③山本次郎（鳴門一）

小学生の上位4人と中学生の上位3人は、29日に開催される県大会に鳴門警察署チームとして出場する。

6月28日

阿南一 8度目の栄冠

男子は徳島文理が4度目

県中学校 総合体育大会 第3日

第60回徳島県中学校総合体育大会（県中体連、県教委、徳島新聞社主催）第3日は17日、県内各地で6競技が行われ、ソフトボール男子は鳴門一が29年ぶり3度目、女子は岩倉が2年連続3度目の優勝を飾った。バレーボール男子は岩倉が4年ぶり4度目、女子は南部が53年ぶり2度目の栄冠を手にした。バスケットボール男子は津田が4年ぶり2度目、女子は八万が55年ぶり2度目、剣道男子は徳島文理が3年ぶり4度目、女子は阿南一が4年ぶり8度目の頂点に立った。8月の全国中学校体育大会が県内で開催されるバレーボールと剣道は開催地枠が男女それぞれ1枠あり、優勝校の出場が決まった。四国予選のない剣道は準優勝校（男子鳴門一、女子那賀川）も県代表として出場できる。県総体は18―20日の3日間休み、第4日は21日に軟式野球、サッカー、ソフトテニスの3競技が行われる。

輝く優勝校（丸数字は回数）

◇ソフトボール
- 【男　子】鳴門一　29年ぶり③
- 【女　子】岩倉　2年連続③

◇バレーボール
- 【男　子】岩倉　4年ぶり④
- 【女　子】南部　53年ぶり②

◇バスケットボール
- 【男　子】津田　4年ぶり②
- 【女　子】八万　55年ぶり②

◇剣道
- 【男　子】徳島文理　3年ぶり④
- 【女　子】阿南一　4年ぶり⑧

剣道　鳴門武道館

【男子】団体予選トーナメント
A組1回戦　真光3―2日和佐、阿南一2（本数勝ち）2城野、木頭5―0城ノ2回戦　徳島文理5―0真光、阿南一4―0木頭▽代表決定戦　徳島文理5―0阿南一
▽B組1回戦　城内4―1勝浦、阿波2―1六吹、北島3―1高浦、鴨島1―5―0大麻▽2回戦　阿波3―2城ノ内、鴨島1―5―0北島▽代表決定戦　鴨島1―1―0阿波
▽C組1回戦　上八万5―0鳴門、池田1―3―2小松島、相生5―0美馬▽2回戦　那賀川2―1上八万、相生5―0池田1▽代表決定戦　那賀川2―0相生
▽D組1回戦　入田3―2石井、藍住3―2牟岐、土成2―1三好▽2回戦　入田3―2藍住、鳴門一4―1土成▽代表決定戦　②鳴門一2勝1敗③鴨島一1勝2敗③那賀川3敗
▽決勝リーグ①徳島文理（松本、原、湯浅、岡田、鈴木）3勝②鳴門一2勝1敗③鴨島一1勝2敗③那賀川2勝1敗④北井上2勝1敗④牟岐3敗＝1―3位は勝者数による。

「全国制覇が目標」

○…男子決勝リーグを危なげなく3戦全勝し、3年ぶりの優勝を飾った徳島文理だが、「全国制覇が目標」の選手たちの喜びは控えめだった。

新チーム結成後、県新人大会、県選手権を制するなど無敗を続ける。今大会も前日の個人戦で湯浅が優勝したのをはじめ、レギュラー5人全員がベスト8に入って四国大会出場を決めるなど、チーム力は頭一つ抜けていた。

3年前には全中で3位に入った徳島文理。現在、高3になった先輩たちの胸を借りて、日ごろから練習に励んでいる原主将らは「頂点に立って恩返ししたい」と気合を入れ直した。

剣道　松茂町総合体育館

【男子】個人準々決勝　湯浅（徳島文理）メー　松本（徳島文理）、鈴木（徳島文理）メメー　岡田（徳島文理）、小西（那賀川）メー　日本（羽ノ浦）、藤本（相生）メコーメ　原（徳島文理）▽準決勝　湯浅　メー　鈴木、藤本　メー　小西
▽決勝　湯浅　コメー　藤本
▽シード決定戦　鈴木　メメー　小西
【女子】個人準々決勝　湊（阿南一）メー　藤本（池田一）、近藤（阿南一）メー　品川（阿南一）、岩原（那賀川）ドー　加賀（北井上）、仁木（阿南一）メー　森本（北井上）▽準決勝　近藤　メコー　湊、岩原　ドメメー　仁木
▽決勝　近藤　メメー　岩原
▽シード決定戦　湊　ドー　仁木

7月17日

剣道

【女子】団体予選トーナメント
A組1回戦　木頭3―0美馬▽2回戦　北井上5―0鴨島一、木頭2（代表勝ち）2真光▽代表決定戦　北井上4―0木頭
▽B組1回戦　坂野4―1阿波、川内3―2瀬戸▽2回戦　坂野2―1池田一、牟岐4―0川内▽代表決定戦　牟岐2―1坂野
▽C組1回戦　小松島2―1藍住東、相生3―2応神▽2回戦　阿南一5―0小松島、相生3―0山川▽代表決定戦　阿南一3―0相生
▽D組1回戦　穴吹3―2土成、城西3―1石井▽2回戦　三好2―1穴吹、那賀川4―1城西▽代表決定戦　那賀川4―0三好
▽決勝リーグ①阿南一（仁木、品川、湯浅、近藤、湊）2勝1敗②那賀川2勝1敗③北井上2勝1敗④牟岐3敗＝1―3位は勝者数による。

「あきらめないこと」の大切さ

控え席の選手たちが手を合わせて見守る中、試合半ばに阿南一の大将・湊の1本目のドウが鮮やかに決まった。「県内一」をほぼ手中に収めた瞬間。選手たちに笑顔がはじけた。

1勝1敗で迎えた女子決勝リーグ最終戦。首位に立つライバル那賀川は2勝1敗（勝者数9、本数13）で終えていた。阿南一にとって5人全員が勝つか、4人が勝って8本以上取らなければ、優勝に手が届かないことを選手たちは知っていた。

牟岐を相手に副将を終わり4―0。本数は6本取った。「私が勝ては優勝」と竹刀を構えた湊。しかし、気負いはなかった。思い切って打ったドウが決まり「やった」。さらにもう1本ドウを打ち込み、優勝を決めた。

試合後「ありがとう」を連発する村井監督を囲み、涙をあふれさせた選手たち。近藤主将は「決勝リーグ初戦で那賀川に敗れて苦しかったが、最後の最後に力が出し切れた。最高です」。

この日の決勝リーグは阿南一にとって「あきらめないことの大切さ」を学ぶ戦いとなった。

ドウ1本 はじける笑顔

女子　阿南一

女子団体決勝リーグ・阿南一対牟岐　大将戦で阿南一の湊㊫のドウが決まり、優勝をほぼ決定づけた＝鳴門武道館

7月18日

近藤（警察支部）延長制し初V 男子

女子 美馬（海部支部）も激戦制す

全日本剣道県予選

剣道の全日本選手権大会徳島県予選会を兼ねた2006年度県選手権は9日、鳴門武道館に男子36人、女子21人が参加して行われ、男子は近藤正章（警察支部）、女子は美馬真奈美（海部支部）が初優勝を果たした。決勝は男女とも延長にもつれ込む熱戦だった。

近藤は全日本選手権大会（11月3日・日本武道館）、美馬は全日本女子選手権大会（9月3日・日和田、美馬コー吉岡▽決勝

【男子】準々決勝 川添（警察支部）ドー 数賀（警察支部）、山室（警察支部）コー 佐野（警察支部）、近藤（警察支部）メー 小柏（警察支部）ドー 日和田（麻植支部）メー 山名（警察支部）▽準決勝 山室コー 川添 近藤ドー 小柏 ▽決勝 近藤ツー 山室

【女子】準々決勝 中山（阿南支部）メー 篠原（鳴門支部）、日和田（麻植支部）メー 石本（徳大医歯薬）、美馬（海部支部）反メーコ 佐々木（鳴教大）、吉岡（鳴大）メー 仁科（徳島支部）▽準決勝 中山コー 日和田、美馬コー 吉岡 ▽決勝 美馬メー 中山

男子決勝で、もろ手突きを決める近藤㊨＝鳴門武道館

「最後は気力で」

○…審判の旗が近藤＝写真＝の白2本、山室（県警支部）の赤1本に分かれるほど際どい判定だった男子決勝。近藤のもろ手突きが、面打ちにきた山室ののど元に一瞬早く決まった。

5分間の試合時間で決まらず、延長戦に突入。勝負が決するまで、約30分にも及ぶ戦いだった。

「最後は気力で突いた。小学生からの夢だった全日本選手権に出場できることを誇りに思う」と近藤。山室は警察支部の3年先輩で、日ごろも竹刀を交えている。「いつも負けている。胸を借りるつもりで攻めに徹したのがよかった」と会心の笑みを浮かべた。

「消耗戦でした」

○…女子決勝も男子同様、約30分に及ぶ戦いとなった。緊迫したつばぜり合いから美馬＝写真＝が引きメンを決め、初の栄冠を手にした。

序盤は接近戦からの離れ際を狙う中山（阿南支部）のペースだったが、決定打を奪うことができず、次第にタイミングよく得意のメンを繰り出す美馬の流れになった。美馬は「苦しかった。消耗戦でした」と振り返る。

大体大に進学していたため、同大会は富岡東高3年以来5年ぶり。高校時代の河田監督（現水産高教頭）が見守る中で頂点に立ち「先生の前で負けたらしかられます」と笑った。

7月10日

遠藤さん（阿南81歳）日本一

高齢者武道大会 剣道の部

5年ぶり3度目「魅力伝えたい」

徳島県剣道連盟会長で県議の遠藤一美さん（八一）＝阿南市下大野町畑田＝が、東京の日本武道館で開かれた第二十八回全日本高齢者武道大会（全国老人福祉助成会主催）の剣道の部で、五年ぶり三度目の優勝を果たした。

遠藤さんは四十九人が出場した八十―八十四歳の部に出場。予選リーグ、決勝トーナメントと勝ち進み、決勝では静岡県の選手と対戦。コテとメンを見事に決めて、七戦全勝で優勝した。

剣道七段の遠藤さんは、同大会にほぼ毎回出場。一九九五年に七十―七十四歳の部、二〇〇一年に七五―七十九歳の部でも優勝した。

二十八歳で剣道を始めた遠藤さん。「礼儀に始まり、礼儀に終わる」魅力にひかれ、自身の修練だけでなく、同市内各地に少年剣道教室を開いて子供たちの指導と健全育成に力を注いできた。

現在は新野剣道教室の室長を務めながら、週二回程度の定期練習に加え、同市を中心に県内各地の中学校や高校に足を運んで若い剣士と竹刀を交えている。

同大会は八十五歳以上の部が最高齢部門となる。遠藤さんは「健康管理に努めて次の部でも優勝を狙う。生涯現役でやっていける剣道の素晴らしさをこれからも伝えたい」と意気込んでいる。

全日本高齢者武道大会の剣道の部で5年ぶり3度目の優勝を果たした遠藤さん＝阿南市宝田町の阿南工業高校武道場

7月18日

大阪インターハイの顔 ⑥

剣道女子 富岡東

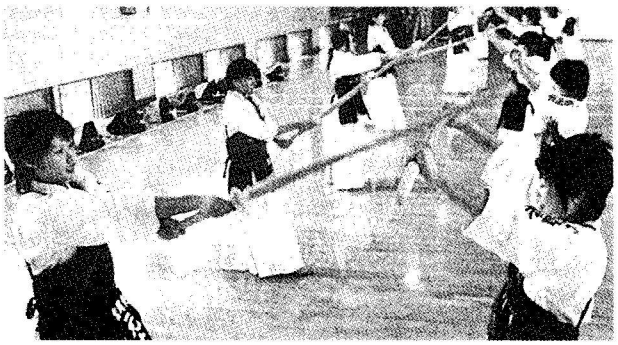
5年ぶり決勝T狙う

飛び抜けた選手はいないが旧チームからのレギュラーが4人残り、6月の四国選手権で準優勝した。5年ぶりの決勝トーナメント進出を目指す。

中心選手は大将・細川と次ほう・河田。細川は駆け引きがうまく、主将としてチームの精神的な柱にもなっている。河田はつばぜり合いからの引き技が得意。先ぽう・横山、中堅・中野、副将・河井も調子を上げ、飯田監督は「全員が実力を出し切ればひと暴れできる」と期待を寄せる。

予選リーグの相手は、淑徳与野（埼玉）と盛岡南（青森）。淑徳与野は強豪で、富岡東同様に次ほうの曽根がポイントゲッターとして試合の流れをつくる。河田も一歩も後に引かない構えだ。

（おわり）



決勝トーナメント進出を目指し練習に励む富岡東の選手たち＝同校

7月31日

那賀川5度目の∨

男子は徳島文理が準優勝

女子団体

第44回 四国中学総体

第3日

2006年度の四国中学校総合体育大会第3日は7日、鳴門県民体育館で剣道が行われ、女子団体決勝で那賀川が阿南一との県勢対決を制し、2年ぶり5度目の頂点に立った。男子は徳島文理が決勝で明徳義塾（高知）に敗れた。個人は女子の近藤陽香（阿南一）が準優勝した。8日は愛媛県で軟式野球とソフトテニスが行われる。

8月8日

剣道　鳴門県民体育館

【男子】団体本選リーグA組①徳島文理（徳島）2勝1分け②今治南（愛媛）2勝1分け③丸亀（香川）1勝2敗④檮原（高知）3敗―1、2位は勝者数による。B組①明徳義塾（高知）3勝②久万（愛媛）1勝2敗③大川（香川）1勝2敗④鳴門（徳島）1勝2敗―2、4位は勝者数による。各組1、2位が決勝トーナメントへ。▽決勝トーナメント1回戦　徳島文理4―1久万、明徳義塾3―1今治南▽決勝　明徳義塾2―1徳島文理（宮本大ドコーコ　松本コーメ　原コー　森本―岡田　和田コーメ　鈴木）明徳義塾が2年連続2度目の優勝。

【女子】団体本選リーグA組①阿南一（徳島）2勝1分け②鳴和（愛媛）1勝1分け1敗③東予西（愛媛）1勝1分け1敗④高知（高知）3敗―B組①那賀川（徳島）3勝②土佐女子（高知）2勝1敗③山田（香川）1勝2敗④城辺（愛媛）3敗―各組1、2位が決勝トーナメントへ。▽決勝トーナメント1回戦　阿南一3―1土佐女子、那賀川2（本数勝ち）2鳴和▽決勝　那賀川3―2阿南一（○岡内メー　仁木　○今川コー　品川　楽野―コ　近藤○　原―ド　湯浅○）○岩原ドー　湊　那賀川は2年ぶり5度目の優勝。▽個人決勝　和田（高知・明徳義塾）メー　宇賀（高知・野市）▽個人準々決勝　近藤（徳島・阿南一）メー　黒川（香川・龍雲）▽個人準決勝　近藤メー　倉本（愛媛・付属）▽決勝　河田メー　近藤（愛媛・城辺）

ライバル下し四国一

那賀川

ライバル対決となった女子団体決勝。県総体2位の那賀川が、1位の阿南一を大将戦で退け、2年ぶりに四国の頂点に立った。高監督は喜ぶ選手らに「団体戦に主役はいない。優勝は部員みんなが普段取り組んでいる練習の成果だ」と祝福の言葉をかけた。

女子剣道団体決勝・那賀川対阿南一　大将戦で返しドウを決める那賀川の岩原㊤＝鳴門県民体育館

那賀川は阿南一に市総一体、県総体のリーグ戦と、先よく、先ぼうの岡内と一ちゃ。しかし、中堅戦、副将戦と連敗し、勝負は最後の大将戦にもつれ込んだ。

試合中盤。那賀川の大将・岩原は、阿南一の湊の面打ちを竹刀で受け、素早く切り返してドウを決めた。「勝敗の行方を任された」とのプレッシャーから解放された岩原は、周囲を気にせずに立ちじゃくった。

那賀川は18日から鳴門県民体育館である全中に、地元枠で出場する。初戦の相手は、5月の全国選抜大会で8チームメートとともに強入りした京都の久御山。この日は欠場し、応援に回った主将の市瀬は「強敵だが、持っている力を出し切り、四国1位に恥じない戦いをする」と言い切った。（滝川）

悔しさを全中に

○…県総体を制し、全中での活躍が期待される男子徳島文理、女子阿南一がともに準優勝に終わった。

徳島文理は前年と同じく明徳義塾に敗れた。原主将は「負けた悔しさを全中にぶつける」。大将の鈴木も「充制されたと逆に盛り返す精神力が欠けていた。全中までに鍛え直したい」。

那賀川に競り負けた阿南一の近藤主将は「一本の大切さを痛感した」。「この悔しさをばねに、全中で上位を目指したい」と話した。

第4日（8日）の日程

軟式野球　13・00　愛媛・坊っちゃんスタジアム
　　マドンナスタジアム
ソフトテニス　11・30　松山中央公園コート

鳴門署チーム初V

剣道

柔道 板野署チームが連覇

【個人】準決勝　田中理弥（誠武館）メー　竹内直生（鳴門市光武館）、山中光悦（徳島少年教室）ドメーコ工藤貴仁（同）▽決勝　田中理弥メー　山中光悦

総合

第19回徳島県防犯少年柔道剣道大会が29日、鳴門総合運動公園武道館であり、県内の警察署管内で選抜された剣道15チーム、柔道10チームの小中学生が熱戦を展開した。柔道は板野署チームが連覇。剣道は鳴門署チームが初優勝した。

【柔道】①板野署チーム②石井署チーム③三好署チーム▽特別賞　鳴門署チーム

熱戦を繰り広げる小中学生

剣道

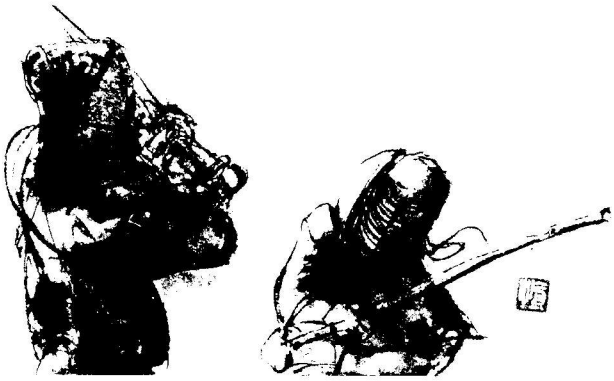
【剣道】①鳴門署チーム②阿南署チーム③那賀署チーム▽特別賞　阿波署、徳島西署両チーム

◆第37回県少年錬成大会（7月30日・鳴門武道館）

【団体】準々決勝　徳島少年教室3－2入田錬成会、徳島至誠館1（代表勝ち）1鳴門市光武館、北井上教室2－1加茂名少年教室、那賀川少年ク2（代表勝ち）2錬武館少年教室▽準決勝　徳島至誠館3－0徳島少年教室、那賀川少年ク3－0北井上教室

▽決勝　徳島至誠館（先鋒＝高木、次鋒＝上田、中堅＝岩原、副将＝玉田、大将＝湯浅）3－1那賀川少年ク（先鋒＝菱本、次鋒＝吉野、中堅＝濱田、副将＝中村、大将＝蘆田）

8月16日



8月19日

全中開幕 県内で2競技開会式

日本一へ高ぶる闘志

きょうから熱戦

剣道の開会式で行進する徳島県の選手たち＝鳴門県民体育館

【上】バドミントンの開会式で息の合った選手宣誓をする金森（川内、㊧）と松友（徳島）＝徳島市立体育館【下】剣道の開会式で、力強く選手宣誓する原（徳島文理、㊧）と近藤（阿南一）＝鳴門県民体育館

8月20日

徳島文理が準優勝

女子の阿南一は4強逃す

男子決勝・徳島文理対明徳義塾　次ぼう戦でメンを決める徳島文理の原㊧＝鳴門県民体育館

逆転負けにも満足感

徳島文理

初の〝全国制覇〟は届きそうで届かなかった。四国勢対決となった男子団体決勝。3年前の4強入りを越えた徳島文理だったが、同じく初優勝を目指した明徳義塾（高知）にまさかの逆転負け。中山監督は「序盤から主導権を握るうちのペースだったが…」と残念そうに振り返った。

先ぼうの松本、次ぼうの原が連続して勝利を収めた。だが中盤以降は失速して2―2。勝負は大将戦に持ち込まれた。この時点では勝ち本数（3―2）で相手を上回っていたため、引き分けでも優勝と有利な立場。

こんな状況の中、大将の鈴木が試合開始5秒でドウを決めて、完全に相手を追い詰めた。しかし、その直後にメンとコテを許して試合終了。鈴木は「あんなにプレッシャーがかかったのは初めて。最後の打ち合いで得意のメンを出せず、勝負に負けたのが悔しい」と唇をかんだ。

チームは昨秋、鳴門工高野球部の高橋監督から紹介を受け、本格的なメンタルトレーニングを始めた。各選手が一週間単位で目標を定め、それらを達成することで自信につなげていったという。

次ぼう戦で2本勝ちした原主将は「準優勝でも、優勝に等しい価値があると思う」。その表情には悔しさよりも、むしろ満足感が漂っていた。（斎藤）

4人が引き分け

○…女子団体の阿南一は、準優勝した阿見（茨城）に敗れ、準々決勝で姿を消した。

5人中、4人が引き分けての惜敗。試合を押し気味に進めながらも、決め手を欠いた中堅の近藤主将は「何度かチャンスはあった。しかし、相手の巧みな試合運びで生かすことができなかった」と悔しそうだった。

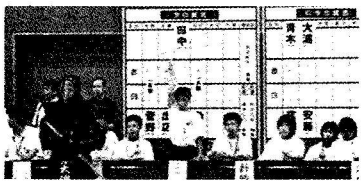
試合後のミーティングで選手たちにねぎらいの言葉をかけた村井監督は「ここまで本当によく頑張ってくれた」と健闘をたたえた。

全中広場

▽…約800人の選手が熱戦を繰り広げた徳島開催の剣道競技（鳴門県民体育館）は、総勢約500人が裏方として大会を支えた＝写真。

▽…県中体連剣道専門部の教員や中高校生らが受付・接待部、召集・誘導部、会場部、式典部、競技部、記録部などに分かれて仕事を分担した。

▽…鳴門一中の中村和美教諭は剣道の経験もないが、ボランティアで受付・接待を担当。「受け付けで徳島の印象が決まるから」と、毎朝6時半集合というハードスケジュールにも嫌な顔一つせず、さわやかな接待を3日間続けた。



9月5日

居合道の腕磨く

四国4県 有段者が合同けいこ

美馬市

真剣な表情でけいこに取り組む参加者＝美馬市脇町のうだつアリーナ

四国四県の居合道の有段者が集まった合同けいこ（催）が、美馬市脇町新町のうだつアリーナで開かれた。四国の居合道のレベルアップを目的に昨年秋から実施しており、徳島県で開催されるのは初めて。

二段から七段までの百八人が参加。各段に分かれて教士・範士八段の講師陣から指導を受けながら、鞘（さや）から日本刀を抜き、また納刀するまでの一連の流れを繰り返し練習した。静まった会場には、日本刀が空を切る音が響き渡った。

徳島県剣道連盟副会長で居合道藩士八段の平尾勝美さん（八三）＝吉野川市鴨島町知恵島＝は「鞘を抜かずに、人柄と気迫でいかに相手を圧倒するかが居合道の本質。礼儀作法など人格の形成につながる」と話していた。

9月15日

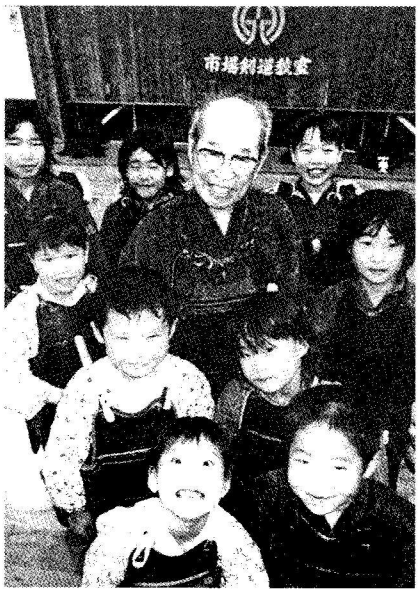
心技体

今も充実

傘寿、卒寿を超えてもなお現役でスポーツに励む人は少なくない。地元の子供たちと触れ合いながら、竹刀の素振りを欠かさない剣士、満足する一本を射るまで弓を引き続ける主婦。そんな元気な二人にスポットを当てた。

一村喜佐男さん(94) 阿波市市場

県内最高齢の現役剣士



市場剣道教室の子供たちに囲まれて笑顔を見せる一村さん＝阿波市北分の市場武道館

一村喜佐男さん（九四）＝阿波市市場岸ノ下＝は、県内最高齢の現役剣士。七段の腕前で週二回、地元の剣道教室で子供たちを指導している。毎日続けている二十分間の竹刀の素振りが、健康維持の秘けつだ。

剣道は十一歳で始めたが、その後は出征や運送業に明け暮れていたため遠ざかっていた。再開したのは自動車教習所に就職した四十四年前の一九六二年。休憩時間に練習を重ね、七六年には地元の剣道愛好家とともに市場剣道教室を開いた。

七十歳で教士七段を取得。教え子は約三百五十人に上り、現在、指導者として活躍する弟子も。

年齢を感じさせないほど背筋がぴんと伸び病気知らずに見えるが、七十四歳と八十三歳のときに喉頭（こうとう）がんやリンパ腫（しゅ）が見つかった。医師から余命を告げられたが、放射線治療や手術で克服。リハビリには素振りを繰り返し「剣道で培った精神力と体力、子供たちへの指導を続けたいという希望や自分を信じる強い思いを持ち続けたことで、がんに勝てた」と話す。

健康そのもので、四月の県高齢者交流大会八十五歳以上の部で初優勝。六月に東京・日本武道館であった全日本高齢者武道大会では、出場者五百五十四人の中の最高齢として選手宣誓した。

今年で現役は引退するつもりだが「教室を見に行ったり、素振りを続けたりして健康維持のための剣道は続けます」。

剣道野試合 少年ら熱戦 阿波・八幡神社

運動靴姿で熱戦を展開する少年剣士＝阿波市町屋敷の八幡神社

阿波市町屋敷の八幡神社境内で九日、奉納演武大会（同神社剣道同志会主催）があり、地元の少年少女剣士が野外の特設道場で戦いを繰り広げた。今年で四回目。

大会は、神社前に設けた二面の試合場で阿波市、吉野川市、上板町の小中学生約百二十人が出場。家族や剣道愛好家らが見守る中、土ぼこりを巻き上げながら汗びっしょりで「メーン」「ドー」と鮮やかな剣さばきを披露した。途中で転んで泥だらけになる子もいたがすぐに立ち上がり、観戦者は大きな拍手と声援を送った。

市場小学校二年生の島村裕人君は「外で試合をするのは初めて。緊張したけど力を出し切った。練習を積んで来年も出場したい」。三年前に野試合を復活させた同志会の木村秀正会長(六三)＝阿波市御所ノ原、食品会社経営＝は「伝統を継承して地域の行事として定着させたい」と話していた。

10月10日

刑務所支部Bが38チームの頂点

県社会人剣道

剣道の2006年度徳島県社会人大会は15日、鳴門武道館で38チームが参加して行われ、決勝で刑務所支部Bが2―1で小松島・松を下し、優勝した。

▽決勝トーナメント1回戦 小松島・松3―2鳴門支部A、振武館A3―1徳島少剣、振武館B3―1小松島航空隊、阿波支部C2―1振武館C▽準々決勝 小松島・松4―0小松島・小、振武館A2（本数勝ち）2三好支部、刑務所支部A4―1振武館B、刑務所支部B4―1阿波支部C▽準決勝 小松島・松2（代表勝ち）2振武館A、刑務所支部B5―0刑務所支部A

▽決勝

刑務所支部B 2―1 小松島・松

○秋山 メコーメ 原
前田 コーメ 切中
北村 ドーコ 呉羽
猪野 ―ココ 西山○
○鈴木 コー 沢井

10月16日

徳島至誠館が優勝 小学生の部

宮窪剣道大会を制した徳島至誠館の（左から）岩原将平、玉田理沙子、湯浅絵里加、久保孝緒、久保公緒各選手

剣道

◆第51回宮窪大会（9月23日・今治市宮窪石文化運動公園）＝徳島県関係の記録。

50チームが参加。小学生の部で、徳島至誠館が栄冠を手にした。

【小学生の部】準々決勝　徳島至誠館（先鋒＝岩原将平、次鋒＝玉田理沙子、中堅＝久保孝緒、副将＝湯浅絵里加、大将＝久保公緒）3－0武揚会（愛媛）▽準決勝　徳島至誠館4－0愛媛建武館（愛媛）▽決勝　徳島至誠館3－2金栄剣道会（愛媛）

◇剣道・第53回丹生谷大会（10月22日・鷲敷B&G海洋センター体育館）

【団体】小学校の部①木頭錬心館②北川小③上那賀竹友館▽敢闘賞　相生竜虎館▼中学校の部①鷲敷A②相生A③木頭B▽敢闘賞　木頭A▼一般の部①鷲敷振武館②相生体協③上那賀竹友館

【個人】小学3年①田村敢太（振武館）②福田睦（竜虎館）③岩佐壱誠（錬心館）▽4年①助道郁海（振武館）②大城和哉（北川小）③奥田紋子（振武館）▽5年①岡田春希（錬心館）②小川虎太郎（同）③西田和弘（竜虎館）▽6年①久保達也（錬心館）②岩佐航太（竜虎館）③谷澤慶彦（北川小）▼中学1年①小藪京蔵（木頭）②小野竜弥（同）③延清実（鷲敷）▽2年①岡田恭平（木頭）②井上彩（相生）③谷澤茜（木頭）

11月1日

徳島至誠館が準優勝 小学校高学年

黒瀬杯争奪剣道大会で準優勝した（左から2人目より）高木勝己、玉田理沙子、久保孝緒、湯浅絵里加、久保公緒各選手

剣道

◆第18回黒瀬杯争奪大会（10月8日・広島県東広島市呉武田学園体育館）＝徳島県関係の記録。

59チームが参加。小学校高学年の部で徳島至誠館が決勝へ進出。惜しくも岡山武徳館に敗れたが準優勝を果たした。

【小学校高学年の部】決勝トーナメント準々決勝　徳島至誠館（先鋒＝久保孝緒、次鋒＝高木勝己、中堅＝湯浅絵里加、副将＝玉田理沙子、大将＝久保公緒）1（本数勝ち）1西大寺道場（岡山）▽準決勝　徳島至誠館3－1双龍館教室（愛知）▽決勝　岡山武徳館（岡山）3－1徳島至誠館

11月4日

鳴門市光武館3位

小学校団体

剣道

◆第46回近畿少年錬成大会（11月12日・和歌山県御坊市体育館）＝徳島県関係の記録。

13府県から小学校96チーム、中学校72チームが参加。鳴門市光武館は先鋒の山本君が左手親指を骨折するアクシデントに見舞われながらも、チームの励ましで最後まで戦い抜き、小学校団体戦で3位入賞を果たした。

▼小学校団体戦1回戦 鳴門市光武館（先鋒＝山本大介、次鋒＝平野智将、中堅＝竹内直生、副将＝黒木景太、大将＝宇井友隆）4－0紫雲館（和歌山）▽2回戦 鳴門市光武館5－0日高武道館（和歌山）▽3回戦 鳴門市光武館3－1京都一龍館（京都）▽4回戦 鳴門市光武館1－0竹の子ク（大阪）▽準々決勝 鳴門市光武館2（本数勝ち）2弘武館（和歌山）▽準決勝 小曽根剣友会（大阪）1－0鳴門市光武館

近畿少年剣道錬成大会で3位入賞した鳴門市光武館の（左から）竹内直生、平野智将、黒木景太、宇井友隆、山本大介各選手

12月13日

剣道

◆第9回寺西杯争奪四国選抜少年大会（11月19日・鳴門県民体育館）＝徳島県関係の記録。

【小学校】団体①徳島至誠館A（朝田、福田、久保孝、湯浅、久保公）②鳴門市光武館A▽敢闘賞 小松島少年▼1・2年②樋田和泉（蔵本）③丸岡由理奈（坂野）③長谷川瑞実（小松島）▽3・4年③川邊智樹（鳴門市光武館）▽5・6年③久保達也（木頭）③宇井友隆（鳴門市光武館）▽敢闘賞 湯浅滉平（徳島至誠館）丸岡勇斗（坂野）福崎泰樹（坂野）

【中学校】男子①白木恒二郎（石井）②松本好史（徳島文理）▽女子②井上亜美（北井上）▽敢闘賞 笠井栄一（鴨島一）上田勇輝（坂野）土井翔吾（阿南一）青木大将（徳島文理）▽同女子 井上愛理（北井上）迎美棒（鴨島一）中山美紀（穴吹）

▽監督賞 高木壽史（徳島至誠館）

12月20日

剣道

◆第34回B&G杯・磯部旗・読売杯争奪那賀川大会（11月23日・那賀川スポーツセンター）

【小学校】団体低学年①徳島至誠館②小松島少剣ク③新野教室③那賀川B&Gわかあゆ会▽高学年①鳴門市光武館②徳島至誠館③鴨島教室③那賀川少剣ク

▼個人1年①朝田智輝（徳島至誠館）②藤田智樹（那賀川少剣ク）③吉田亮介（徳島教室）③西名晴輝（徳島至誠館）▽2年①樋田和泉（蔵本少剣ク）②長谷川瑞実（小松島少剣ク）③秋田修平（徳島教室）③福良海都（坂野少剣ク）▽3年①中瀬知勇（鳴門市光武館）②濱田諒（那賀川少剣ク）③桝山広大（阿南教室）③田中皓己（徳島至誠館）▽4年①佐々木南波（徳島至誠館）②田中直人（阿南教室）③林文武（同）③岩木里穂（徳島教室）▽5年①田村隆晟（徳島至誠館）②工藤貴仁（徳島教室）③福田篤己（徳島至誠館）③竹原慎弥（那賀川少剣ク）▽6年①久保公緒（徳島至誠館）②久保孝緒（同）③山川翔大（阿南教室）③藤野嘉春（那賀川少剣ク）

【中学校】団体男子①那賀川②鳴門一③徳島③阿南一▽女子①那賀川②加茂名③鴨島一③石井

▼個人男子①上田勇輝（坂野）②松村拓矢（同）③宮浦慎治（鳴門一）③森本翔次（川島）▽女子①岡内拓未（那賀川）②西柚衣（同）③木村奈々美（同）③原麻由香（同）

【高校】団体男子①徳島文理②川島③阿南工③城北▽女子①富岡東②富岡西③鳴門③川島

12月21日

12月29日

剣道

◆第24回県スポーツ少年団交流大会兼第29回全国大会県予選（3日・鳴門武道館）

【小学校】4年①庄村莉緒（川島スポ少）②朝田大樹（徳島至誠館）③野口一（坂野少剣ク）③松尾悠佑（脇町スポ少）▼5・6年男子①久保公景太（鳴門市光武館）②黒木景太（木頭錬心館）③久保達也（木頭錬心館）③新居航平（鴨島教室）▽同女子①岡田春希（木頭錬心館）②片岡茉莉（鴨島教室）③松尾歩実（小松島少剣ク）③山本悠（阿南教室）

【中学】男子①松本好史（徳島至誠館）②小濱紘通（那賀川B&G教室）③安部晃太朗（大野城山）③山川優大（阿南教室）▽同女子①長谷川愛美（小松島少剣ク）②西柚衣（鴨島教室）③那佐萌（那賀川B&G教室）③岩原紗也香（徳島至誠館）

【全国大会（3月27―29日・岡山県体育館）出場者】団体の部　先鋒＝庄村莉緒、次鋒＝岡田春希、中堅＝黒木景太、副将＝片岡茉莉、大将＝久保公緒▼個人中学生男子　松本好史▽女子　長谷川愛美

1月8日

◆剣道　中学校近県練成大会（6日・高知県青少年センター）

◇徳島県関係の成績

【男子】団体1回戦　木頭5―0赤岡（高知）、東予東（愛媛）5―0日和佐、新居浜南（愛媛）1―0相生、阿波2―1大枥（高知）、坂野4―1大豊（高知）、徳島文理3―0余土（愛媛）▽2回戦　今治西（愛媛）3―0木頭、須崎（福岡）4―0牟岐、阿波4―0滝尾（大分）、大方（高知）2―1阿南一、赤穂東（兵庫）4―1阿南、大蔵（兵庫）1（本数勝ち）1坂野、徳島文理4―0横浜（高知）▽3回戦　平岡（兵庫）3―2阿波、徳島文理2―0赤穂西（兵庫）▽4回戦　上宮（大阪）2―0徳島文理

【女子】団体1回戦　拓南（愛媛）2（代表戦勝ち）2坂野▽2回戦　日吉（愛媛）5―0牟岐、阿南一4―0清水（高知）、北井上5―0神吉（兵庫）、木頭3―0土居（愛媛）、新居浜南（愛媛）3―1阿南▽3回戦　阿南一3―0東予西（愛媛）、山田（香川）2―1北井上、木頭1（代表戦勝ち）1城辺（愛媛）▽4回戦　阿南一2（代表戦勝ち）2土佐町（高知）、協和（香川）3―1木頭▽準々決勝　赤穂西（兵庫）2―0阿南一

1月11日

剣道

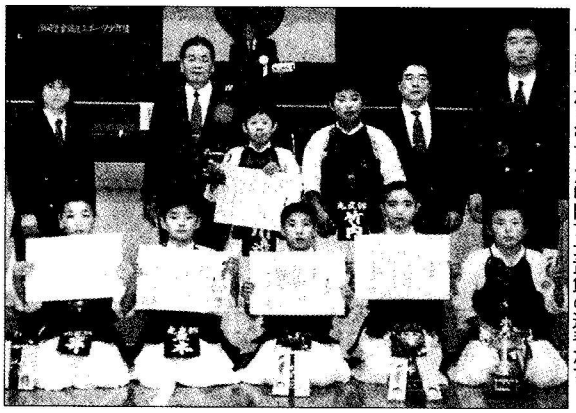
鳴門市光武館　高学年の部V

◆2006年度渕崎警察署長杯少年大会（12月10日・小豆島フレトピアホール）＝徳島県関係の記録

鳴門市光武館が高学年の部で団体優勝したほか、個人戦は平野智将君が6年生の部で頂点に立った。

【小学校団体戦】高学年の部1回戦　鳴門市光武館（徳島）1―0津山会（岡山）▽2回戦　鳴門市光武館2―0揚武館（香川）▽準々決勝　鳴門市光武館4―0渕崎警察スポーツ（香川）▽準決勝　鳴門市光武館4―1四海教室（香川）▽決勝　鳴門市光武館（先鋒＝山本大介、次鋒＝平野智将、中堅＝福居周平、副将＝黒木景太、大将＝宇井友隆）2―1十河スポ少（香川）

【小学校個人戦】4年③川邉智樹▽5年①平野智将②山本大介▽6年①平野智将②宇井友隆（いずれも鳴門市光武館）



渕崎警察署長杯少年剣道大会で、団体優勝と個人戦上位入賞した鳴門市光武館の選手たち

富岡東 15連覇

女子

男子 阿南工 8度目の栄冠

県高校新人剣道

剣道の全国高校選抜大会徳島県予選を兼ねた2006年度県新人大会は14日、城西高体育館に男子16校、女子9校が参加して熱戦を展開。男子は阿南工が17年ぶり8度目の栄冠に輝き、女子は富岡東が21度目の優勝を15連覇で飾った。両校は全国大会（3月27、28日・愛知県春日井市総合体育館）に出場する。また男女とも上位4校は四国大会（2月11日・愛媛県新居浜東高）への出場権を得た。

攻めの剣道貫く

○…攻めの剣道を貫き阿南工が混戦の男子を制した。準決勝で3連覇を狙う徳島文理に代表勝ちすると、富岡西との決勝は桜木、久米、福井が立て続けに勝って早々と優勝を決めた。残る岡田、福川も白星を挙げ「完封勝ち」。佐々木監督は「挑戦者として気持ちがまとまっていた」と喜んだ。

【男子】1回戦 川島5－0城東、城北5－0鳴門一、那賀4－1池田、富岡西4－1脇町、徳島文理5－0徳島工、徳島市立2－0徳島北、徳島東工3－0海部、阿南工4－0鳴門工▽準々決勝 川島3－1城北、富岡西1－0那賀、徳島文理3－0徳島市立、阿南工3－1徳島東工▽準決勝 富岡西3－1川島、阿南工2（代表勝ち）2徳島文理▽3位決定戦 川島2－1徳島文理

▽決勝

阿南工 5－0 富岡西

○桜木 コード－ 松本
○久米 ドコー 福永
○福井 メー 平井
○岡田 メドー 那佐
○福川 メメー 元木

【女子】1回戦 鳴門2（代表勝ち）2徳島市立▽準々決勝 富岡東4－0鳴門、川島3－1阿波、城北3－0池田、富岡西5－0小松島▽準決勝 富岡東2－0川島、富岡西5－1城北▽3位決定戦 城北2（本数勝ち）2川島

▽決勝

富岡東 3－1 富岡西

○横山 メー 西田
○藤井 メメー 星野
細川 メー 奥村○
河井 ー 市瀬
○中野 メドー 永浦

今春で16回目の開催と場は初めて。岡田主将は「なる全国選抜大会への出た先輩たちへの感謝を忘れず、力を出し切りたい」と抱負を語った。

男子決勝・阿南工対富岡西　大将戦でメンを決める阿南工の福川（左）＝城西高体育館

「目標は全国制覇」

○…15連覇した女子の富岡東。富岡西との決勝は先ぽうの横山＝写真＝が反則を取られた直後のメンで先勝し、次ほうの藤井はメン2本で逆転勝ち。大将中野も引きメンとドウを決めるなど地力の差をみせた。

チームに流れを引き寄せた主将の横山は「後につなぐためにも自分の気持ちを集中させて戦った」と連覇の重圧から解かれ、表情はさわやか。前回は予選リーグで敗退した全国大会に向け「目標は全国制覇です」と健闘を誓った。

1月15日

1月15日

徳島、高知両県の少年少女剣士が交流する阿土少年剣道錬成大会＝那賀町木頭和無田の木頭体育館

徳島・高知の小中学生300人
剣道通じ交流深める
木頭で大会

那賀町木頭和無田の木頭体育館で十四日、第三十四回阿土少年剣道錬成大会（町教委など主催）が開かれ、徳島、高知両県から小中学生約三百人が参加した。今回は十日にしゅん工式をした同体育館の落成記念に合わせて開催。三十年以上の歴史を持つ大会で、両県の少年少女剣士の交流の場として定着している。

大会には、徳島県から那賀町など二市一町の二百四十人、高知県からは香美市など二市一町の六十二人が参加。個人戦と団体戦で競った。

大会は、徳島県の那賀川流域と高知県東部を流れる物部川流域の小中学生が剣道を通じ親睦（しんぼく）を深めることを目的に、旧木頭村教委が第一回大会を開催。両地域は地理的に近く、ともに剣道が盛んでもあり、毎年大会を開いている。

高知県香美市で毎年春に開催される大会には、木頭地区の選手が招かれて出場するなど、両県の子供たちは剣道を通して交流を深めている。

木頭小の十人が通う木頭錬心館の岡田豊監督（五三）＝木頭西宇、郵便局員＝は「他県選手との交流は子供たちの成長にプラス。大会は今後も続けてほしい」と話している。

1月18日

団体戦

鳴門市光武館A初V
女子 10年ぶり徳島至誠館

◆第23回新野少年錬成大会兼県スポレク祭（12月23日・新野中体育館）

16チーム231人が参加。団体戦男子は鳴門市光武館Aが初優勝、女子は徳島至誠館が10年ぶり4度目の栄冠を手にした。

【団体】

▽男子①鳴門市光武館A（先鋒＝平野智将、中堅＝黒木景太、大将＝宇井友隆）②那賀川少剣クA③鳴門市光武館B

▽女子①徳島至誠館（先鋒＝玉田理沙子、中堅＝佐々木南波、大将＝湯浅絵理加）②那賀川B&G教室わかあゆ会③相生龍虎館

【個人】

▽小学1年①朝田智輝（至誠館）②武蔵晴香（同）③藤田智樹（那賀川）③坪井香歩（わかあゆ）▽同2年①丸岡由理奈（坂野）②湯浅滉平（至誠館）③柳沢悠真（錬武館）③川田将也（至誠館）▽同3年①田中皓己（至誠館）②田村敬太（振武館）③玉田真子（至誠館）③福田峻斗（同）▽同4年①馬見範子（新野）②朝田大樹（至誠館）③川原眞実（小松島）③井形優（光武館）▽同5年①田村隆晟（至誠館）②福田篤己（同）③上田雅大（同）③高木勝己（同）▽同6年①山本慎也（錬武館）②中川椋太（新野）③味間修一（至誠館）③藤井理央（牟岐）

新野少年剣道錬成大会で熱戦を繰り広げる選手

私の指導術

県内 監督らの極意紹介

▶10

剣道・徳島文理中監督 中山 繁輝(49)

「求める練習」こそ身に

高い目標とプラス思考を持たせる

技術的な欠点を直すため、選手にアドバイスすることはあっても、しかることはしない。練習や試合でしかるのは声が出ていないなど、気力不足の場合だけ。「技術的な欠点をしかり続ければ、消極的な気持ちが植え付けられる。それよりも、長所を伸ばす指導で積極性を持たせるように努めている」と強調する。

日体大を卒業して教師になるとき、恩師から贈られた「3つしかって、7つ褒め」という言葉を実践する。

監督になった20代は、厳しい練習を長時間すれば、結果がついてくると思っていた。しかし、今は違う。「短時間集中で最大限の効果を上げる」を目標に掲げる。平日の放課後は午後4時からの2時間。全国強豪チームとしては決して長くない。試合、遠征のない日曜日は練習もしない。

「指導者から与えられる練習だけでは駄目だ。高い目標に向かって自分で求める練習をしなくては」。500回の素振りをするにしても、心の中で日本一を目指した練習をしていると思っているのと、単に竹刀を振っているのではおのずと成果が違ってくるという。

愛媛県の新田高校に入学したとき、後に世界チャンピオンとなる松山市出身の大城戸功が3年生にいた。大城戸は全体練習後に「メンを打たせてくれ」と、後輩たちに毎日のように要求。自分の納得が得られるまで打ち続けていた。「本当に自分で求める練習だった」と振り返る。

選手が自分から求めて練習するときは、どんな場合か。「試合で負けた直後が指導者として腕の見せどころ」と言い切った。試合でなぜ負けたかを技術、精神の両面から指導すれば、素直な気持ちで吸収していくという。

2003年の全国中学校体育大会で県勢初の4強入りを果たし、昨夏は準優勝した。四国大会は01年以降、2度の優勝と3度の準優勝を誇る。

「選手には日本一を目指して練習していることを自覚させている。高い目標とプラス思考を持たせることは、選手としてだけでなく、人間としても成長させるという信念で指導している」。目指すは全国制覇だ。

高い目標を持って練習することの重要性を説く中山監督＝徳島文理中・高武道館

1月29日

大野小剣道部（阿南）誠武館道場（北島）

少年剣道奨励賞に

全日本連盟

阿南市の大野小学校剣道部（西岡直彦監督）と北島町の誠武館道場剣道部（亀田秀雄監督）が、全日本剣道連盟の本年度少年剣道教育奨励賞を受賞した。

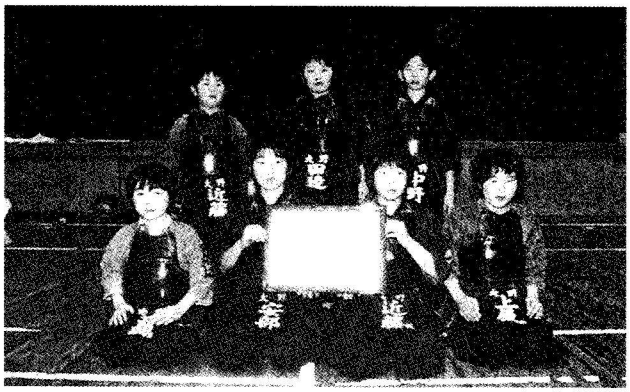
大野小剣道部は一九七一年に発足。「心身の鍛錬と仲間のきずなを大切にする」を合言葉に、県内の大会では団体戦で八十九回の優勝を数える。部員は七人と少ないが、厳しさの中にも和気あいあいとした雰囲気で週四回の練習に励んでいる。

六年の安倍晋太朗君（一二）は「先輩たちが積み重ねてきた成果で、受賞できたことはうれしい。これを励みにこれからも頑張りたい」と意気込む。

誠武館剣道部は六九年に発足。北島町内外の小学生十五人が、強い意志と正しい判断力を身につけることを目標に週三回の練習を行っている。

一月上旬、十九年にわたり指導してきた大野義則前監督が七十五歳で亡くなった。昨年十二月末まで指導を続け、受賞を喜んでいただけに、部員らは大きな衝撃を受けた。北島小六年の田中理称さん（一二）は「前監督は熱心に指導してくれた。自分たちは遺志を継いでこれからの練習に励んでいきたい」と話している。

同賞は少年剣道の普及に長年、功績があった団体や個人を表彰しようと、二〇〇四年度に創設。県内では昨年度、那賀町の木頭錬心館が受賞。今年は全国で三百五団体・個人が受賞した。



賞状を手にする【上】大野小学校剣道部員と【下】誠武館道場剣道部の部員たち

2月7日

女子の富岡西・東 決勝進出ならず

四国高校新人剣道

剣道の2006年度四国高校新人大会は11日、愛媛県の新居浜東高であり、4県から男女各4校が参加して行われた。徳島県勢は女子の富岡西、富岡東が上位4校で争う決勝トーナメントに進出したが、決勝進出はならなかった。

◇徳島県関係の成績

【男子】予選リーグA組③富岡西1勝1分け1敗▽B組③川島1勝2敗▽C組②阿南工1勝1分け1敗▽D組③徳島文理1勝2敗

【女子】予選リーグA組①富岡西2勝1分け▽B組③城北1勝2敗▽C組④川島3敗▽D組①富岡東3勝

▽決勝トーナメント準決勝　丹原（愛媛）3―0富岡西、帝京五（愛媛）2―1富岡東

2月13日

平成十九年度 剣道・居合道昇段審査 学科試験問題・解答例

※平成十九年度は、以下の問題より各段二問出題されます。

この試験問題と解答例は、あくまで自分の剣道修行の参考のために記述したものである。名称等、正確に記憶しておかねばならない事柄もあるが、試験問題の多くは、今の自分のレベルで考え、自分の言葉で表現することを求めている。決して、試験のためだけに丸暗記して、こと足りえたと思わないでもらいたい。

学科問題においても、正々堂々、真剣勝負の気迫で取り組み、今の自分のありのままを表現すべきである。また、そのことが採点者の高い評価を受けることにつながることも付記しておく。

【剣　道】

※　初段の部

①　剣道と礼儀についてのべなさい。

礼儀は人間として社会生活をしてゆく上で、最も大切なことの一つである。ことに剣道では昔から〝礼に始まって礼に終わる〟といわれているように、きわめて大切なものとされている。

いいかえれば、より深い礼の道を身につけることが、剣道の根本精神である。どのように技が上達していても、品格や人柄が欠けているようでは本当の剣道を行っているとはいえない。このことは今も昔も変わらないのである。

剣道はいろいろの運動の中でも、最もはげしい性格を持っているため、少しあやまると荒っぽい行動に走りやすい。これを未然に防ぎ、行為に品位を持たすようにするのが礼である。この礼はあくまでも形式に流されたものではなく、常に真心から出たものでなければならない。

道場だけではなく、家庭でもどこでも、どのようなことがあっても、他人をあなどったり、礼を失するようなことがあってはならない。どのような人に対しても、敬い尊び、礼をつくして、和を愛し、お互いの理解と協力の中で定められた競技規則を守り、秩序を保ち、剣道のより高い技術を自分から求めて、精神と身体を練磨し、お互いに敬愛の心を尽くしてこそ、剣道は成り立つものである。

②　練習上の注意点をかきなさい。

剣道の練習の効果をあげるには、いろいろな注意が必要である。

その主なものをあげると、以下のようになる。

(1) 礼儀作法を重んじること。
(2) 正しい姿勢、構え、打突方法を心がけること。
(3) 攻撃技を主とすること。
(4) 工夫と研究を怠らないこと。
(5) 竹刀の破損その他危害防止に留意すること。
(6) 着具、服装を正しくすること。
(7) 打たれて、数多く練習すること。
(8) 見学の効用について認識すること。
(9) 準備運動、整理運動を必ず実施すること。
(10) 保健衛生について注意すること。

③　剣道を学ぶ方法についてのべよ。

(1) 剣道を学ぶ方法には次の三つがある。

(イ) 体で学ぶ。
実際に剣道の練習を行って学ぶ。頭で憶えるのではなく体で憶える。

(ロ) 目で学ぶ。
他の人の練習を見て学ぶ。又書物を読んで学ぶ。

(ハ) 耳で学ぶ。
先生や先輩の話をよく聞いて学ぶ。

※　二段の部

①　足さばきの種類をあげてそれぞれの要領を説

明しなさい。

足さばきとは、身体の移動や打つ時の足の運び方であって、歩み足、送り足、開き足、つぎ足などがある。歩み足は前後に大幅に速く移動する場合、送り足はいろいろの方向に小幅に速く移動する場合や打突の場合に用い、開き足は、身体をかわしながら相手を打突したり、防いだりする場合、つぎ足は遠い間合い（相手との距離）から打突する場合に用いる。

(1) 歩　み　足

平常の歩行と同じ方法で進んだり、退いたりする。

(イ) 足をあまり上げないように、すり足で行う。

(ロ) 腰を中心に重心をできるだけ水平に移動させる。

(ハ) 上体や竹刀を動揺させたり、構えをくずしたりしないように移動する。

(2) 送　り　足

移動する方向に近いほうの足から踏み出し、他の足を直ちに送り込むように引きつける。

(イ) 送り込むほうの足がおそかったり、残ったりしないように早く正しい足の位置が取れるようにする。

(ロ) 後退の際、後足のかかとが床につかないようにする。

(ハ) その他は、歩み足に準じて行う。

(3) 開　き　足

右（左）前に開く場合は、右（左）足を相手の方向に向けながら右（左）斜め前に出し、左（右）足を右（左）足に引きよせ、左（右）腰を左（右）後方にひねって相手の方向に正しく向ける。右（左）後方に開く場合も、右（左）前に開く場合に準じて行う。

② 打ち返し（切り返し）の要領を説明し、その効果をあげ、注意事項をかきなさい。

剣道上達の近道は打ち返しを十分練習することである。また、基礎を養うにも有効な方法である。

(1) 打ち返しの方法

(イ) その場、連続左右面打ち。

(ロ) 前進連続左右面打ち。

(ハ) 後退連続左右面打ち。

(ニ) 正面－前進連続左右面打ち。

(ホ) 正面－後退連続左右面打ち。

(ヘ) 正面－前進連続左右面打ち－後退連続左右面打ち－正面。

(2) 打ち返しの効果

(イ) 体制を整え身体を柔軟にし、手足の力を増す。

(ロ) 身体を強くし、間合いを知り、打突を正確にする。

(ハ) 両手の腕力を平均にし、前後左右身体の動作を敏捷にする。

(3) 打ち返しの注意事項

(イ) 両肩、両腕を柔かく力を抜く。

(ロ) 動作は大きく正確にする。

(ハ) 左拳は体の中心線からはずれないようにする。

(ニ) 刃筋を正しくする。

(ホ) 両拳のしばりと足の運びを一致させる。

③ 掛け声の大切さと効果についてかきなさい。

掛け声は、気合いが身体の中に充実してくると、ますます勇気を奮い起こし相手をひるませ、行動もおさえ制するものであるから、腹の底から発する重みのある気合いとともにその時に応じて大きく力強いものでなければならない。口先だけの軽い声（犬の遠ぼえのような声）は、かえって逆効果となる。要するに掛け声も一つの立派な技であるから、無用な掛け声や野卑な掛け声は、慎まなければならない。掛け声の効果を短くまとめると、次のようなものである。

(1) 意志が集中して元気を増し、気力を養成する。

(2) 相手に威圧感を感じさせる。

(3) 心気力が充実一致する。

(4) 体の進退の自由を助ける。

(5) 打突が容易に、しかも鋭くなる。

以上が掛け声によって効果を現す利点である。

※ 三段の部

① 打突の機会はどんなときですか。

打つべき機会は、いくつもあるが、その主なものは、おおむね次の七つであろう。

(1) 出頭（起こり頭）

相手が動作を起こそうとするところを打つ。

(2) 受け止めたところ

相手の打突に対して受け止めることは、打たれないが、また打つこともできない。相手に受け止められたとき、次に変化して、あくまで打

突してゆく。

(3) 尽きたところ

尽きるとは、体力又は気力が尽きるとか、技が尽きることをいう。その尽きたところを打つ。

(4) 実を避けて虚を打つ

相手が注意を払っているところは実で、強いところであり、これを避けて、虚である弱いところを打つ。

(5) 急がせて打つ

(6) 居付いたところ

心の働きが一時停止して臨機応変の活動を失い、動かぬところを打つ。

(7) 狐疑心が生じた瞬間

狐疑心とは疑惑する心をいう。その心が生じた瞬間を打つ。

なお、(1)・(2)・(3)は最もよい機会であるので「三つの許さぬところ」と言われている。

② 有効な打突の条件をあげなさい。

有効な打突とは、真剣勝負において、相手の抵抗を抑圧するに足る打突であればよいと解するものであるが、しかし、現在の剣道上の有効な打突とは、次の要件が具備した場合に認められるものである。

(1) 充実した気勢、適法な姿勢での打突であること。(気剣体の一致した打突)

(2) 「竹刀」の物打ち(弦の反対側)で打ち、又は剣先で突くこと。(物打ちでの打ち、剣先での突)

(3) 打突の部位を、それぞれ正確に打突すること。(指定された部位の打突)

また片手の打突は、特に確実なもののみ認められる。

※ なお、試合の場合次の状況における正確な打突も有効となる。

(1) 「竹刀」をはなし、又は倒れた者に、直ちに加えた打突。

(2) 場外に出ると同時に行われた打突。

(3) 試合時間終了の合図と同時に行われた打突。

③ 体当たりの方法と効果をのべなさい。

(1) 体当たりの方法

普通、打ち込み又は突っ込むと同時に、竹刀をやや右斜めに傾けて、左手を自分の腹部に当て、脇をしめ、手許を確実にし、相手の体に突き当たるのである。その時は下腹に力を入れて腰を据え、体をやや落とし、相手の体を腕と腹の力で、下から上に突き上げるように当たるのである。また体の小さい者が、大きい者に突き当たる時は、両拳をもって強く相手の腰に向かって、下から掬い上げるようにして突き当たるのである。普通、体当りは正面からするが、相手の力が強くて動かぬ場合には、相手の右から、やや斜めに押し、あるいは左から斜めに押して行うと良い。

体当たりの際に、自分の頭を前に出し、或いは、腰を退き両手のみを伸ばして、相手に当たるのは良くない。

(2) 体当たりの効果

(イ) 姿勢を整え、体力を練る。

(ロ) 勇気と果断の気力を養う。

(ハ) 足の踏み切りを良くし、身体の動作を自由軽快にする。

(ニ) 腰のすわりを良くする。

(ホ) 相手の気勢をくじく。

(ヘ) 相手の体勢をくずして隙を作る。

(ト) 相手を圧倒して反撃を許さない。

※ 四段の部

① 稽古と試合の意義をのべなさい。

稽古とは、古きを稽えることで、繰り返し習うことを意味する。稽古の目的は、今まで練習した基本動作の技術を活用し、また応用動作により修得した技を磨き、相手の意志動作を判断し、常に攻勢を主として動作を正確敏速にし、打突が自由自在にできるようにして、終局的には試合の基礎をつくることである。基本動作の心技両面にわたる練磨が、稽古の核心である。

主なものとして、

(1) 打込み稽古

(2) かかり稽古

(3) 互角稽古

の三種がある。

試合は稽古により修得した技術を活用し、互いに全力をつくして勝敗を決し、ますます技術を習熟し、精神と身体を鍛錬することを目的とするものである。剣道の第一目的である精神の鍛錬は試合によって、最もよく達成されるものであるから、適宜これを実施することが望ましいのである。

② 初心者に対する指導の手順、留意点をのべよ。

(1) 剣道の目的と精神を把握し、それをよく理解させること。

(2) 基本動作
姿勢、礼、目付、足の踏み方など教える。

(3) 竹刀の持ち方、抜き方、納め方、扱い方を細かく教える。

(4) 足の使い方
とくに送り足の使い方から教える。

(5) 基本の打ち方
とくに正面打ちから教えるが、振りかぶることに留意して、大きく打つことを主眼にする。

(6) 打ち込み、切り返し
とくに踏み込み足に留意する。

(7) かかり稽古

(8) お互い稽古

(9) 剣道形
この剣道形を練習することによって、剣道の基本となる手足のさばき方、気合、間合、呼吸、打突の機会を修得することができるのである。剣道練習に際しては、つとめて剣道形を実施し、剣道の練習や試合に応用できるよう、心掛けることが肝要である。

③ 審判員についてのべなさい。

剣道試合の審判とは、両者の勝敗を裁決することである。剣道の試合は、剣道発展のための方法であり手段である。従ってその審判は、剣道の正しい発展に沿ったものであり、その発展に役立つように実施されなければならない。

(1) 審判の意義とは
審判とは「審(つまび)らかに判定する」ということである。何を審らかに判定するかといえば、次の六つの内容である。

(イ) 打突部位 (ロ) 問合 (ハ) 理合 (ニ) 強度
(ホ) 刃筋 (ヘ) 残心
以上六つの要素・条件を瞬息の間に審らかに判定するのが審判である。従って審判員は心技ともに卓越した者でなくてはならない。そのためには、

(2) 審判員の資質として
(イ) 公正無私の人であること。
(ロ) 冷徹・果断・信念の人であること。
(ハ) 中正で一貫性を持続できる人であること。
(ニ) 剣理に精通していること。
(ホ) 審判規則を熟知し、いかなる事態も一瞬に解決できる能力を持つこと。
(ヘ) 十分な修練をつみ、豊かな経験をもっている。
(ト) 肢体健全で体力十分なこと。
(チ) 正視・正聴であること。
(リ) 言語明晰であること。

(3) 審判員の使命として
剣道審判の適否は、剣道の興隆発展につながると同時に、また逆に剣道の混乱、堕落を惹起(じゃっき)するものである。従って審判員の審判は、常に日本剣道の命運がかかっているという使命感に徹し、その自覚のもとに厳しく自己を律しなければならない。

(イ) 審判員は試合者の生命をあずかる者であることを自覚すること。
(ロ) 剣道審判の困難性を自覚すること。
(ハ) 審判修練の必要性を自覚すること。

(4) 審判員の権利と義務を遂行すること。
審判員に対しては、何人であっても異議を申し立てることは許されない。従って審判員は、その権利を正しく行使するとともに、その義務を完全に遂行しなければならない。審判は絶対であると、その権利を主張するならば、その絶対に値するだけの義務の遂行、つまり審判員としての資質を養う努力と研究をすることである。

(5) 審判の権威を示すために。
(イ) 服装が端正であること。
(ロ) 態度が厳正であること。
(ハ) 裁決が果断であること。
(ニ) 審判員の礼法を厳正に実践示範すること。

※ 五段の部

① 剣道指導者としての心得を述べよ。

(1) 剣道の意義、目的など、その本質をよく理解し、それに合った指導を行うこと。

(2) 自己の人格の完成を目指し、常に技量の向上を心がけること。

(3) 指導目標を立てて、指導を受ける者にとって最もふさわしい方法により組織的に指導すること。

(4) 初心者に対しては、正しい剣道を身につけさせるよう留意するとともに、興味を失わせない

ようにすること。

(5) 上位者に対しては、技と理論を併行して指導し、真の剣道を理解させること。

(6) 日頃から剣道に関する書物を読むなど、剣道に関する研究を怠らないこと。

② 事理一致（技理一致）ということを説明しなさい。

字句の解釈では、事とは「事実」である。剣道においては技であり、動作であり形である。即ち（手、足、剣）の働きである。また、理とは「理論」であり「筋道」である。剣道では気であり理合である。即ち心（精神）の働きである。

剣道は事理一致の修行であるといわれる。理合と動作、心と技の一致した剣道、即ち無理のない理にかなった、正しい心技一体の剣道の修練が必要である。

剣道でいう技とは、大、強、速、軽の活動（動作）である。この技だけが如何に上達しても気や理合等、体内体外における精神的な活動が働かなければ心技一体の活動ができず、心技に隙（虚）を生じ、相手に打たれる。また理合や気ばかり如何に精進されても、技が伴わなければ、動作に隙を生じて相手に打たれる。

故に剣道では、心技一致とか、事理一致（技理一致）と言うように、何れも精神的活動（心、気、理）と剣体の活動（技、手足の動作）が、常に一体として修練されるべきである。また事と理は、車の車輪、鳥の両翼の如きもので何れも共に平均して備わって始めて、そのものの円滑な働きができるのと同様に、事理が併行した修練の蓄積が、要求されるのである。剣道の進歩の面から見ても、事理併行して修練することが、最も上達が早いことになるのである。

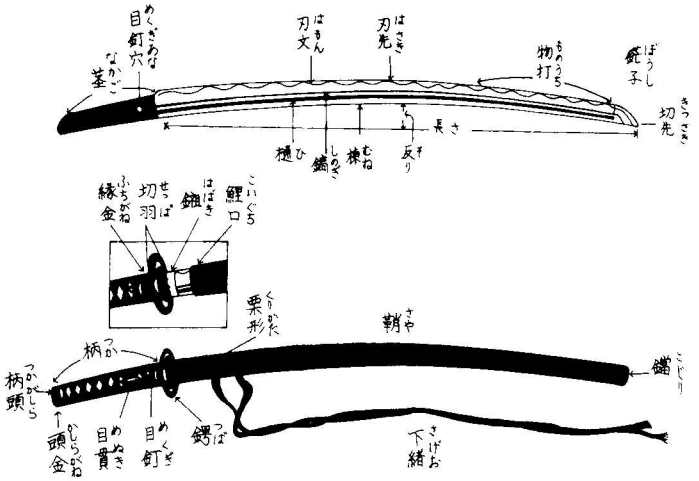
③ 気位（きくらい）についてのべなさい

気位とは、自信から生ずる気品、威厳である。技術が円熟し、精神が鍛錬された結果、自然に備わるものである。

竹刀を構え合わせた時、驚懼疑惑（きょうぐぎわく）の念を生じて恐れちぢこまり、戦わないうちに負けた気持ちになるのは、相手の気位に押されて、位負けした結果である。このような気位を故意に真似しようとしても技術、精神が円熟していない限り、かえって隙を生じて、打ち込まれることになり、見苦しい結果になる。技術の進歩、精神の鍛錬の度合いは、当然と気位に現われるので、一朝一夕に備わるものではない。なお自信と慢心（或は自負心）とは大いに違うもので、慢心は剣道で最も戒むべきものである。

【居合道】

① 刀と拵（外装）の略図を書き、各部の名称を書きなさい。



② 刀の取り扱いについて注意すべき点を述べなさい。

日本刀は、古来より武器としては当然の事ながら日本人の精神的なよりどころとして尊ばれている。いやしくも日本刀によって修行しようとする者が軽率に扱ってはならず、そのために礼法の中に「刀に対する礼」が取り入れられている所以である。みだりに抜刀したり他人に刃先を向けない事は云うまでもなく演武に際しては十分目釘を点検する等の心構えが必要である。

③ 居合の始祖について知る所をかきなさい。

居合の始祖は、林崎甚助重信。生まれは奥州、出羽の国、現在の山形県村山市楯岡町で、今から約四百五十年前、親の仇討ちのために居合を極め、この道の始祖となる。現在、その生地には林崎居合神社があり、始祖神として祀られている。

④ 居合の流派五つをあげなさい。

夢想神伝流、無双直伝英信流、大森流、田宮流、伯耆流、無外流、新薩流、水鶏流、関口流。

⑤ 居合道修行の目的についてかきなさい。

居合は始め一種の刀法として始まったが、その目的は精神の鍛練が第一で、身体の練磨、技術の訓練という順になる。心身の鍛練は剣道と同じだが、その技術は剣道の根本となるものである。つまり刀の運用や礼儀など、すべてが剣居一体のものであり、この修行をすることは、自分自身の鍛練、人格向上につながるものである。

⑥ 居合道の呼吸についてかきなさい。

静かに腹式呼吸をする。一つの技を終えて次の技に移るときは、ゆっくりと二回呼吸して息を整え、三回目の息を吸い終わる頃に刀を抜き始める。そして、吸い込んだ息は技が終わるまで吐かず、一気に行い、納刀してから軽く吐く。長い技の時はどうしても途中で息をつぐ必要が出てくるが、いつ、息をついだかわからないようにする。

⑦ 居合の目付についてかきなさい。

座ったときの着眼は四〜五メートル先の床とし、一点を見つめるのではなく、遠くの山全体を眺める気持ちで八方に心眼を開き、眼は半眼、動作中の着眼は仮想敵の面又は中心点とする。切りおろしたときは切先のあとを追うようにして倒れた仮想敵を見越した所とする。眼はいつも平静で、まばたきしたり、目を凝らしたりしてはいけない。

⑧ 刀の握り方（手の内）についてかきなさい。

柄の握りは、右手は人差し指が柄の縁金にかからないようにし、左手は柄頭を余し、両手の握りの間は指二本位（約三〜四センチ）で、握る力は小指、薬指、中指の順で強く握り、人差し指と親指には力を入れず、切る瞬間前にぐっと握りしめる。茶巾絞りの要領である。

⑨ 全日本剣道連盟居合一本目「前」について説明しなさい。以下十二本目まで各技について……。

解答については、全日本剣道連盟居合解説書（全日本剣道連盟発行）を熟読のこと。

例

六本目「諸手突き」

我、前進中に前後三人の敵の殺気を感じ、まず左足を踏み出した時に刀に両手をかけ、右足を踏み込むと同時に正面の敵の右斜め面に抜打ちし、直ちに後ろ足を前足近くに送りながら刀を中断に下ろしつつ、諸手となってさらにその「水月」を突き刺す。次に後ろの敵に振り向き、右足を軸に左回りに回って刀を引き抜きながら左足を左に踏みかえ受流しに振りかぶり後ろの敵に向き直ると同時に右足を踏み込んで真っ向から切り下ろす。続いて正面からくる他の敵に向き直ると同時に右足を踏み込んで真っ向から切り下ろす。そのままの姿勢で「右に開いての血振るい」の後、納刀する。

⑩ 抜きつけ、切り下ろしについて述べよ。

抜きつけは居合の生命であり、相対した敵の殺気を感じて先または後の先に刀を抜き始め、「徐破急」の速さで横一文字に抜き放す一刀であり、一旦刀を抜くや必殺の気構えが必要である。但し刀を抜く前の心構え即ち刀が「鞘の内」に在る時に敵を制し、抜かずに勝ちを納める心こそ大事で

ある。

切り下ろしは抜きつけ、また受流して後のとどめの一刀であり頭上に振りかぶると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく真っ向から又袈裟に左手七分、右手三分の力配分によって敵に切り込むものであり、この時の両の手は「茶巾絞り」の要領である。同時に体は「丹田」に気力を充満させ、腰で切るよう心掛ければ「物打ち」に力が入り、充分に切り込む事ができる。

⑪ 残心についてかきなさい。

常に油断しない心のことで、敵を倒したあとも気をゆるめない心をいう。これは居合でも剣道でも大切なもので、一動作ごとに気も心も充実させていることが大事である。居合の修練によって、この隙のない身がまえ、心がまえが養われる。

⑫ 間合・間について述べよ。

「一足一刀の間」、「近間」、「遠間」などと云われ、空間的な距離として重要な要素であると同時に居合では〝常に居て急に合わす〟事からして、その空間的な「間合」に加えて想定した敵に対して抜きつけ、切りつけ、受け流し等、敵の動勢に応じての時間的な「間」が必要である。それには形だけに囚われる事なく、形を打って実戦的に敵との間合と間を知り、常に仮想敵を想定して理に適った稽古の中でその心構えが養われていくのである。

⑬ 気位について述べよ。

語義的には「自己の品位を保とうとする心の持ち方」であるが、それを教えて、又教わって理解できるものではない。自己がたゆまない修行を積んで、技量が円熟し、精神が鍛練された結果自ずと備わるものであり、延いては社会生活に貢献できる人間形成となるものである。

⑭ 気剣体の一致についてかきなさい。

気とは、意志とか心の精神作用を言うのであって、心の判断によって動作を起こそうとする決心を指す。剣とは、刀の働く作用を指す。体とは、体勢で、身体の力、四肢の働きを指す。気剣体の三つが一致して初めて有効適切に正確な技を出すことができる。常にこの気剣体が一致して斬り、又は突くことが出来るように心がけ、修練することが肝心である。古くから心気力の一致、心形力の一致、心眼足の一致と言われている言葉はみな同じ意味内容を持っているもので、大切な教えの一つである。

⑮ 居合と礼儀についてかきなさい。

礼儀は人間として、また平和な社会生活をする上でも大切であるが、ことに剣の道では昔から「礼に始まり礼に終わる」といわれているように、きわめて大切なものとされてきた。どのように技が上達しても、品位や人柄が欠けているようでは、ほんとうの居合を習ったとはいえない。ことに居合は日本刀を使っての運動である関係上、万が一にもその使用法をあやまるようなことがあってはならない。これを未然に防ぎ、正しい居合を修得するためにも礼儀や作法が、やかましく言われるのである。道場だけでなく、日常生活の中でも常に真心をもって礼儀正しく立派な人格と精神を養うように心がけねばならない。

⑯ 自信と慢心についてかきなさい。

修練を重ねた結果、正しく立派な居合を行ずる事が出来るようになると、自ずから自信がついてくる。自信を持つことにより平常心をたもつことが出来、如何なる場合に於いても心の落ちつきと確かな技前を発揮することが出来、そこには気位もそなわってくるものである。しかし心の修行が不十分な者が軽々しく自信を持つことは、これが自負心となり、いわゆる慢心となる。自信と慢心とは大いに違うもので、慢心は修行の道で最も戒むべきものである。

⑰ 居合道と剣道の関係について述べよ。

居合道は日本刀を用いてその刀法、手の内を修練するものであり、仮想する前後、左右ないし斜方の敵に対して、鞘放れの一瞬に抜きつけあるいは抜き打ち、又受け流して後切り下ろして勝ちを納めるもので所謂そこに居て、敵に合わすものである。

剣道は一人の敵に相対し、互いに抜きあわせて

後、勝負を決するものであり、竹刀を用いて敵との間合い、打突の機会を実戦的に体得しようとするもので、その打突個所は至難な個所を定めて制限されており押し打つ事が基本である。

然るに居合道と剣道は古来より一流派の中に双方があって表裏一体、車の両輪の如くその理合、目的とする処は一つであって、両道を併せ修行することによって相乗的にその効果が高められるのである。

⑱ 居合道指導上の注意についてかきなさい。

居合道修行で最も大切なことは礼儀である。神前、恩師、先輩、刀、相互に対しての始礼と終礼である。これを真心をこめて行う。これが自然に身につくと、自らの人格も向上することとなる。また、技は正確に大きく強く行うということから、まず「全日本剣道連盟居合」を居合の基本技として、時間をかけ修行するように指導し、これが正しくできるようになってから、古流の修行へと進むように指導するとよい。

制定居合受審心得

礼　法

定められた礼法どおり行っているか。

一本目（前）

(1) 抜き付けのとき、十分に鞘引きをしているか。

(2) 左の耳にそって、後ろを突く気持ちで振りかぶっているか。

(3) 振りかぶった切っ先が水平より下がっていないか。

(4) 間をおくことなく切り下ろしているか。

(5) 切り下ろした切っ先は、わずかに下がっているか。

(6) 血振りの体勢は正しいか。

(7) 正しく納刀しているか。

二本目（後ろ）

(1) 刀を抜きながら、向き直ると同時に、左足をやや左寄りに踏み込んでいるか。

(2) 敵のこめかみに正しく抜き付けているか。

三本目（受け流し）

(1) 受け流しの体勢にて、上体をかばった姿勢になっているか。

(2) 左足を右足後方に引き、袈裟切りになっているか。

(3) 左こぶしはへそまえで止め、切っ先がわずかに下がっているか。

四本目（柄当て）

(1) 柄頭が敵の水月に確実に当たっているか。鯉口を握ったまま。

(2) 後ろの敵に対し、左手は鯉口を握ったまま、しぼり込むようにへそまえにおくり、右肘を伸ばして突いているか。

(3) 前の敵に対しては、刀を引きながら、頭上に振りかぶり、真っ向から切り下ろしているか。

五本目（袈裟切り）

(1) 逆袈裟に切り上げたとき、刀をかえした右こぶしは右肩の上方になっているか。

(2) 左足を引きながら左手は鯉口を握ると同時に刀を袈裟に血振りをしているか。

六本目（諸手突き）

(1) 敵の右斜め面を抜打ちしたとき、あごまで切り下ろしているか。

(2) 中段になりながら後ろ足を前足に送り込んで確実に水月を突き刺しているか。

(3) 刀を引きながら受け流しに振りかぶっているか。

七本目（三方切り）

(1) 右の敵に抜き打ちしたとき、あごまで切り下ろしているか。

(2) 左の敵に向き直り、間をおくことなく真っ向から切り下ろしているか。

(3) 受け流しに振りかぶり、切り下ろした刀は水平になっているか。

八本目（顔面当て）

(1) 柄頭で両眼の間を正しく突いているか。

(2) 後ろの敵に対し右こぶしを正しく右上腰にとっているか。

(3) 後ろの敵に完全に向き、かかとをわずかに上げて突いているか。

(4) かぎ足で突いていないか。

九本目（添え手突き）

(1) 右袈裟に抜き打ちしたとき、右こぶしはへその高さとなり、切っ先は右こぶしよりわずかに上がっているか。

(2) 左手が刀身の中程を親指と人差し指の間で確実にはさみ、右こぶしは右上腰に当てているか。

(3) 腹部を突き刺すとき、右こぶしの移動はへそまでに納まっているか。

(4) 残心のとき、右ひじが曲がったり、右こぶしが右乳の高さより上がっていないか。

十本目（四方切り）

(1) 柄当のとき、強く確実に柄の平で打っているか。
(2) 鞘引きしたとき、物打付近の棟を左乳に当て右手が体より離れているか。
(3) 突いたとき、左手は鯉口を握ったままへそまえにおくり、左右のしぼり込みができているか。
(4) 脇構えを取ってからでなく、脇構えになりながら振りかぶっているか。

十一本目（総切り）
(1) 刀を抜くとき、受け流しに振りかぶっているか。
(2) 切るとき、送り足になっているか。
(3) 腰腹部を切るとき、刃筋正しく水平に切っているか。

十二本目（抜き打ち）
(1) 刀を抜き上げたとき、左足を十分に引いているか。
(2) 刀を抜き上げたときの、右手の位置は正中線になっているか。

※ 平成十二年十一月二日、十一本目・十二本追加

日本剣道形受審心得

1 立会前後の作法、立会の所作、刀の取扱いを適切に行っているか。
2 五つの構え、小太刀の形における半身の構え、入身の所作を正しく行っているか。
3 目付け、呼吸法等を心得、終始充実した気勢、気迫をもって合気で行い、段位にふさわしい迫真性、重厚性が見受けられるか。
4 打太刀、仕太刀の関係を理解し、原則として仕太刀は打太刀に従って始動しているか。
5 太刀の形においては、「機を見て」小太刀の形においては「入身になろうとするところを」とある打突の時機は適切であるか。
6 各本ごとの理合を熟知し、技に応じた打突の度合い、緩急強弱を心得一拍子で行っているか。
7 打太刀は、一足一刀の間合から打突部位を打突し、仕太刀は物打ちで打突部位を確実に打突しているか。
8 太刀を振りかぶる度合いを心得、振りかぶり過ぎて剣先が両拳の高さより下がってはいないか。
9 足さばきはすり足で行い、打突した時、後ろ足を残さず前足に伴って引きつけているか。
10 仕太刀は打突後、十分な気位で、残心を示しているか。仕太刀は仕太刀の十分な残心を見届けてから始動しているか。

編集後記

早いもので、私（木原）がこの『徳島の剣道』の編集を担当して、十二年を迎えました。この間、校正段階で誤字を見落としたり、編集作業の手間取りで発行時期が大幅に遅れたり、様々な冷や汗をかいてきました。また、編集作業にはかなりの精神の集中と時間が必要であり、最近はもうそろそろ編集者を交代すべき時期ではないかと思っているところです。三木理事長に交代のお願いしたところ、「後継者をちゃんと作ってからにして下さい」とかわされてしまいました。私が入院か転勤になれば、必然的に後継者が誕生してくれるものと思いますが、今のところ、私の入院も転勤もありそうにありません。もし、『徳島の剣道』の編集に興味や関心をお持ちの方、あるいはそのような人材をお知りの方は、ぜひ事務局までご連絡下さい。

毎年、できあがった『徳島の剣道』を手にする時、また一人自分の子どもが誕生したような編集者としての感慨があります。年ごとに徳島の剣道の歴史を文字として残す作業は地道ではありますが、意義のある大事な仕事だと思います。私は、そのような仕事させていただいていることに誇りを持ちつつ、後継者の登場を待っています。よろしくお願いします。

『徳島の剣道』第二十三号

編集委員会

木原資裕
三木毅
藤本雅史
手塚十三子
中村稔裕
有賀秀敏
福多雅英
福多博史
本村賢二
美馬和義
上田宏司
増田和広
山田耕司

『徳島の剣道』第23号

平成19年4月30日発行

編集・発行　徳島県剣道連盟

代表者　遠藤一美

〒770-0853　徳島市中徳島町2丁目96

TEL 088－652－2337

FAX 088－652－2360